田原本町文化財調査年報 2019年度 28

田原本町教育委員会

例　　言

1．本書は、田原本町教育委員会が 2019 年度（平成 31・令和元年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。

2．埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。

3．本書の執筆は、Ⅰを各調査担当者等、Ⅱ・Ⅲを奥谷知日朗・西岡成晃、Ⅳを奥山誠義・小倉頌子（奈良県立橿原考古学研究所）・藤田三郎（田原本町）・青野圭（総合研究大学院大学）・丸山真史（東海大学）の各氏が執筆した。Ⅰ掲載の遺物実測は江浦至希子および各担当者・清水琢哉がおこなった。編集は清水琢哉がおこなった。

目　　次

Ⅰ．田原本町の埋蔵文化財

１．町内における開発と遺跡の異動

（１）町内における開発と発掘調査……1

（２）遺跡の異動……2

２．埋蔵文化財の調査

（１）発掘調査の概要 ……4

1．唐古・鍵遺跡 第 127 次調査……6

2．唐古・鍵遺跡 第 128 次調査 ……10

3．清水風遺跡 第７次調査 ……13

4．保津・宮古遺跡 第 52 次調査……19

5．保津・宮古遺跡 第 53 次調査……22

6．十六面・薬王寺遺跡 第 40 次調査（試掘調査 S-201902） ……33

7．十六面・薬王寺遺跡 第 41 次調査……43

8．十六面・薬王寺遺跡 第 42 次調査……52

9．十六面・薬王寺遺跡 第 43 次調査……63

10．阪手遺跡 第６次調査（試掘調査 S-201901） ……68

11．秦庄遺跡 第８次調査 ……81

12．黒田遺跡 第４次調査 ……84

13．筋違道　第５次調査……86

14．宮森遺跡　第２次調査 ……88

15．保津・宮古遺跡試掘調査（S-201903）……91

16．十六面・薬王寺遺跡試掘調査（S-201904） ……98

（２）工事立会の概要 ……103

（３）その他の調査……106

３．文化財資料の整理・保管

（１）発掘調査に伴う埋蔵文化財の整理・保管……112

（２）唐古・鍵遺跡出土遺物の再整理……113

（３）木製品の樹種同定と保存処理……114

（４）写真撮影・デジタル化と写真の保管……115

Ⅱ．唐古・鍵考古学ミュージアムと唐古・鍵遺跡史跡公園

１．唐古・鍵考古学ミュージアム

（１）入館者 ……119

（２）田原本ギャラリー　今回の逸品……120

（３）企画展……120
（４）講座・イベント……123
（５）入館者アンケート……124
（６）視察・研修・学校等からの利用……124
（７）ホームページ……124
２．唐古・鍵遺跡史跡公園
（１）来園者数……125
（２）公園利用・イベント……125
３．ボランティア活動
（１）史跡公園ボランティア……128
（２）唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会……128
（３）ミュージアムボランティア……128

Ⅲ．文化財の保護と活用
１．文化財の保護と活用
（１）町指定文化財……131
（２）刊行物……134
（３）資料の貸出……134
（４）資料特別利用……135
（５）総合的な学習の時間及び展示会……136
（６）中学生職場体験学習……136

Ⅳ．資料の報告
１．唐古・鍵遺跡出土の板状鉄斧（藤田三郎・奥山誠義・小倉頌子）…… 139
２．唐古・鍵遺跡第３次・第５次調査出土の動物遺存体（青野圭・丸山真史）…… 148

Ⅰ．田原本町の埋蔵文化財

１．町内における開発と遺跡の異動

（１）町内における開発と発掘調査

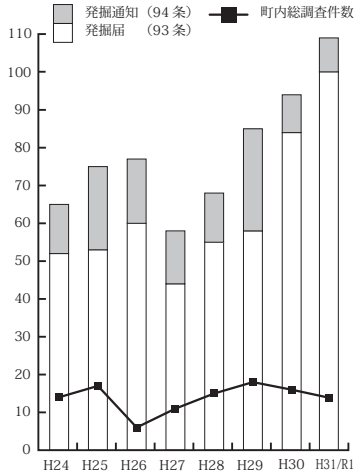
本町における平成 31･令和元年度（2019 年度）の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届（第 93 条）は 100 件、地方公共団体等による通知（第 94 条）は７件で、計 107 件を数える。

平成 31・令和元年度の発掘調査は 14 件である。内訳は、個人住宅の建築５件、公共事業５件、民間開発４件である。また、試掘調査は民間開発に伴い４件を実施し、うち２件は令和元年度中に本調査を実施し、残る２件は次年度に本調査を実施した。なお、試掘を含む調査面積は 1,519 ㎡、出土遺物量は遺物箱 123 箱相当である。

第１表　田原本町における平成 31・令和元年度の発掘届・通知件数一覧

発掘届 93 条	発掘通知 94 条		発掘調査	工事立会	慎重工事	先行工事
100	7	通知内容	13	43	44	7
		実施分	町　14 県　0	42	－	－

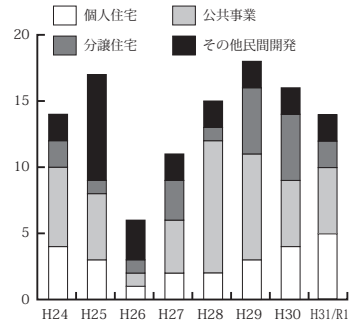
※通知から実施までに年度をまたぐ場合がある為、件数は一致しない



第１図　発掘届・通知と調査件数の推移

第２表　田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

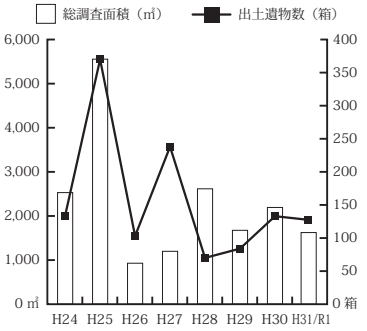
		H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1
発掘届（93 条）		52	53	60	44	55	58	84	100
発掘通知（94 条）		13	22	17	14	13	27	10	7
計		65	75	77	58	68	85	94	107
発掘件数	町	14	17	6	11	15	18	16	14
	県	0	0	0	0	0	0	0	0
町内総調査件数		14	17	6	11	15	18	16	14



第２図　発掘調査原因の推移

第３表　町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

		H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1
範囲確認		0	0	0	0	0	0	0	0
個人住宅		4	3	1	2	2	3	4	5
公共事業		6	5	1	4	10	8	5	5
民間開発	分譲	2	1	1	3	1	5	5	2
	その他	2	8	3	2	2	2	2	2
計		14	17	6	11	15	18	16	14



第３図　調査面積と出土遺物数の推移

第４表　町教育委員会による調査の面積及び出土遺物数の推移

	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1
総調査面積（㎡）	2,530	5,555	929	1,199	2,616	1,675	2,193	1,519
出土遺物数（箱）	134	370	103	238	70	84	133	123

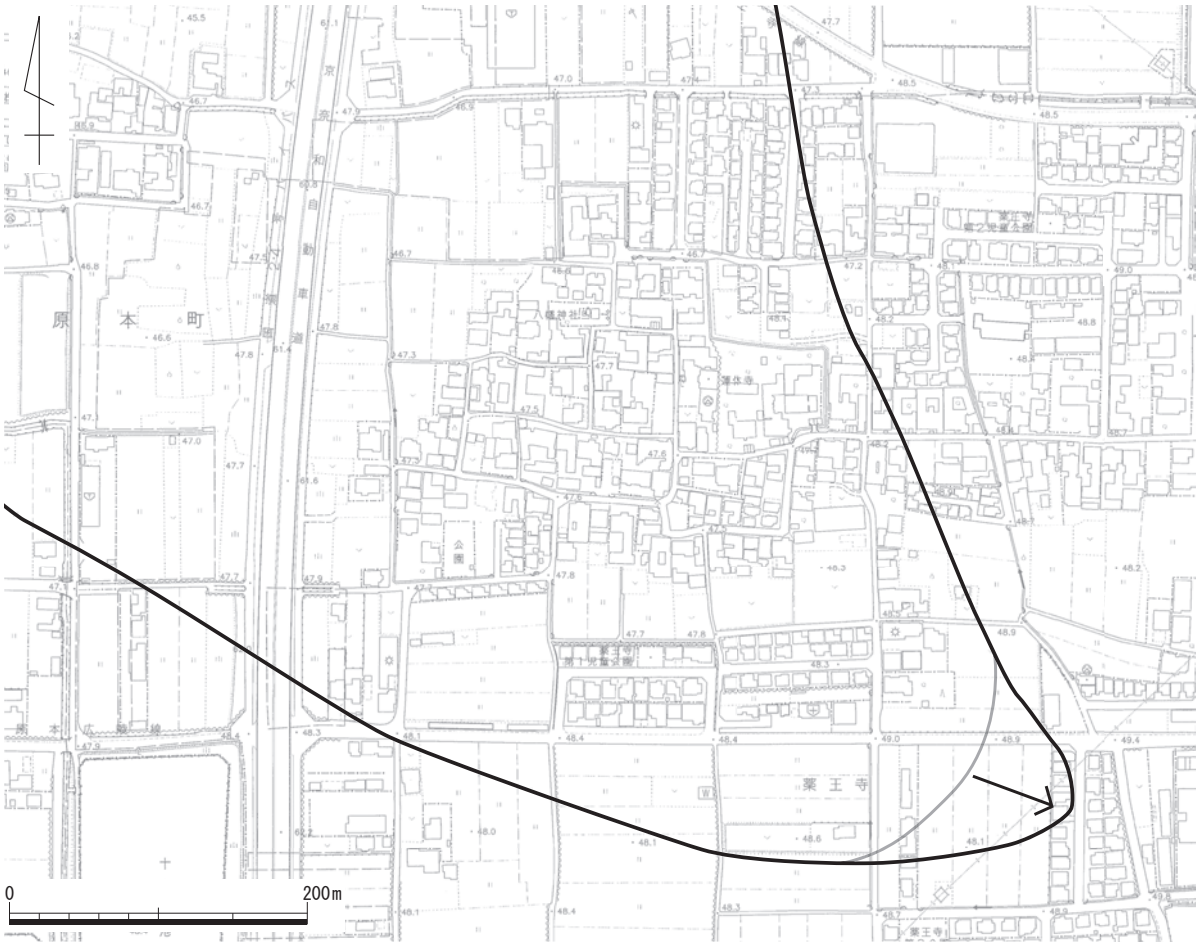
（２）遺跡の異動

平成 31・令和元年度は、２件の異動があった。

唐古・鍵遺跡　　田原本町の北部、大字唐古および鍵に拡がる弥生時代の集落遺跡である。その中央部 10ha は国史跡に指定されている。平成 28 年度に遺跡北西端で実施した第 119 次調査の結果、弥生時代後期の環濠が遺跡外にも拡がることを確認したこと、平成 29 年度に遺跡東端で実施した第 122 次調査の結果、古墳時代後期～古代の河跡を確認したことから、遺跡の範囲を北西および東側への拡大をおこなった。

第４図　唐古・鍵遺跡の異動（Ｓ＝1/5,000）

十六面・薬王寺遺跡　　弥生時代～古墳時代の集落、埋没古墳、中世の居館等から成る複合遺跡である。遺跡南東端での宅地分譲計画に基づき試掘調査（平成 30 年度 S-201801 試掘）を実施した結果、遺跡外にも集落遺構の拡がりが認められたため、発掘調査（平成 30 年度　第 39 次調査、令和元年度　第 41 次調査）で対応するとともに、遺跡の異動をおこなった。なお、発掘調査では、遺跡南東端に古墳時代初頭頃の集落が拡がること、古墳時代後期頃には滑石・碧玉を素材とする玉製作をおこなっていたことなどが確認された。同時期の墓域が第 11 次調査･第 24 次調査などで検出されており、この時期の集落と墓域の関係が判る貴重な成果となった。



第５図　十六面・薬王寺遺跡の異動（Ｓ＝1/5,000）

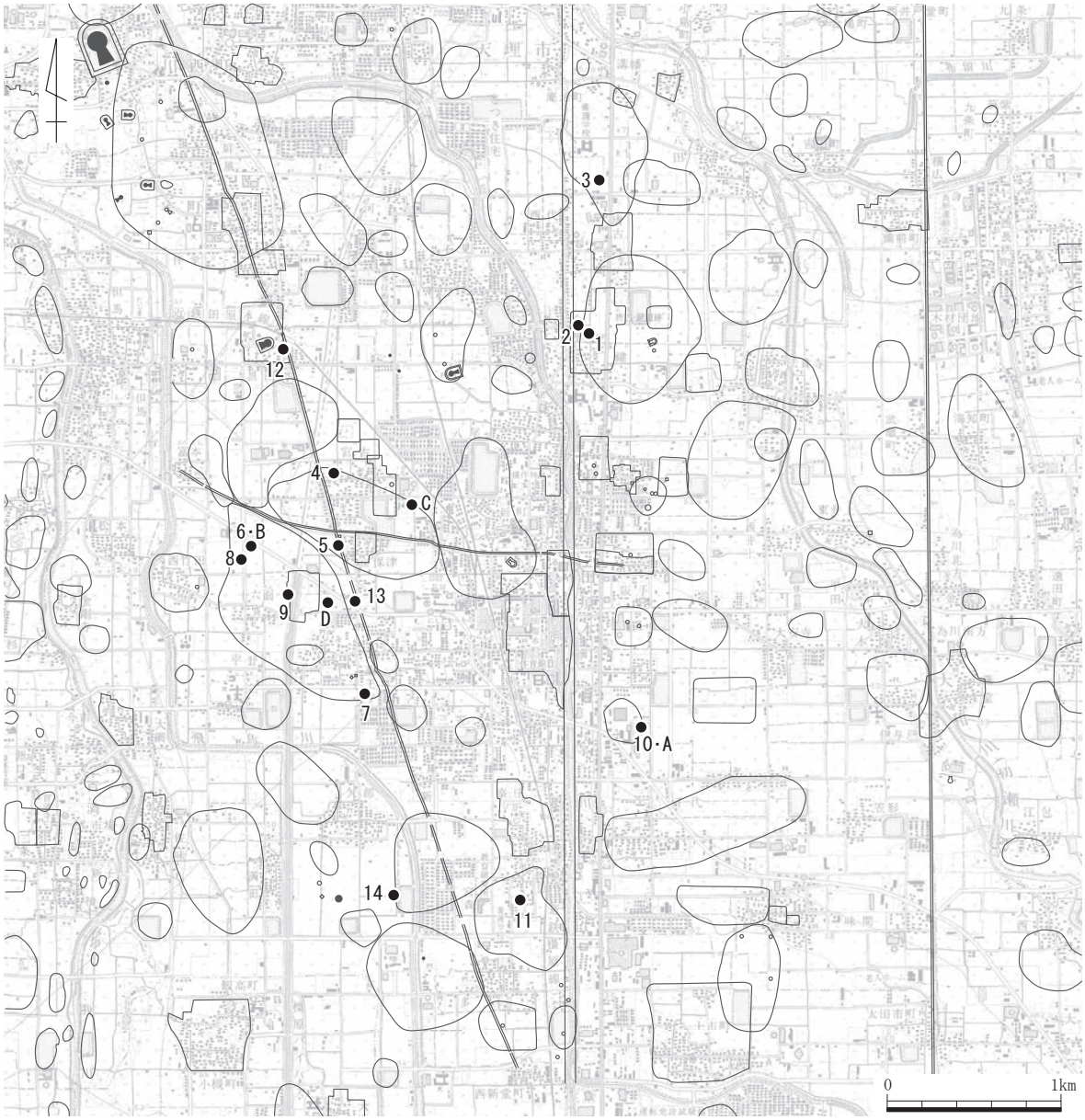
第５表　遺跡の異動一覧

	遺跡番号	遺　跡　名	異動内容	異動原因	遺跡概要	報告	通知	施行日
	11-C-0032	唐古・鍵遺跡	範囲拡大	発掘調査	遺跡東端および北西端で遺構を検出	R. 1. 5. 7 田教文第 55 号	R. 1. 9. 10 文保第 7002 号	R. 1. 9.17
	11-A-0066	十六面・薬王寺遺跡	範囲拡大	発掘調査	遺跡南東端で集落遺構を検出、遺物多数出土	R. 1. 5. 14 田教文第 69 号	R. 1. 9. 10 文保第 7003 号	R. 1. 9.17

２．埋蔵文化財の調査

（１）発掘調査の概要

本年度は 14 件の発掘調査を実施した。弥生時代～古墳時代では、清水風遺跡第７次調査で弥生時代中期の河跡を確認し、両手を広げた女性とみられる人物の絵画土器等が出土した。また、阪手遺跡第６次調査では古墳時代前期の耕地への灌漑に伴うとみられる堰を検出した。このほか、十六面・薬王寺遺跡第 41 次調査で井戸から多数の製塩土器と碧玉・滑石の薄片等が出土した。古代～中世では、保津・宮古遺跡第 53 次調査で筋違道と交差する河跡に架かる橋脚を確認した。また、十六面・薬王寺遺跡第 43 次調査では鎌倉時代頃の井戸と居館を囲んだとみられる大溝を確認した。



第６図　田原本町の遺跡と調査地点（Ｓ＝1/40,000）

第６表　2019 年度　発掘調査一覧表

	遺跡名 次数	調査地 検出遺構	原因者	原因	期間 出土遺物	面積	担当	備考 遺物量（箱）
1	唐古・鍵 第127次	田原本町大字鍵小字垣内389番１・389番8の各一部、389番9	個人	個人住宅建築	2019.10. 7 ～10.10	7㎡	西岡成晃・藤田三郎	国庫補助事業
		弥生時代　：大溝１条 近世～近代：土坑３基、大溝１条			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、瓦、木製品、石器、土製品、獣骨等			３箱
2	唐古・鍵 第128次	田原本町大字鍵小字垣内395番3	個人	個人住宅建築	2019.10.31 ～11.11	20㎡	柴田将幹	国庫補助事業
		弥生時代後期：大溝１条 中　　世　　：大溝１条			弥生土器、土師器、瓦器等			１箱
3	清水風 第７次	田原本町大字唐古小字八領363番１	（株）トヨペット オートクラフト	ガソリンタンク設置	2019.5.23 ～6.12	37㎡	柴田	受託事業
		弥生時代中期後半：小穴５基、河跡１条			弥生土器、石器等			20箱
4	保津・宮古 第52次	田原本町大字宮古小字西幸波329番・330番合併の一部	個人	個人住宅建築	2019. 7.24 ～ 7.25	10㎡	柴田	国庫補助事業
		古代～中世：土坑１基、大溝１条			土師器、須恵器等			３袋（小）
5	保津・宮古 第53次	田原本町大字保津小字南岩田186番西側水路外	田原本町長	水路改修	2019.12. 9 ～2020. 1.13	272㎡	柴田	まちづくり 建設課
		弥生時代：大溝１条 古　　代：土坑８基、小穴14基、大溝８条、小溝１条、河跡１条 中　　世：土坑１基			土器、木製品			27箱
6	十六面・ 薬王寺 第40次	田原本町大字十六面小字カンデン81番2外	岡田自動車販売	店舗兼工場建築	2019. 9. 9 ～10.11	352㎡	柴田・ 渡瀬加奈子	受託事業
		弥生時代：土坑９基、小穴５基、溝４条 古墳時代：溝２条 中　　世：小溝群			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器、銭貨			13箱
7	十六面・ 薬王寺 第41次	田原本町大字薬王寺小字蔵ケ町124番1	㈱ティーズ コーポレーション	宅地造成	2020. 1.14 ～ 3. 6	128㎡	柴田	受託事業
		古墳時代前期：土坑５基、小穴13基、溝１条、落ち込み１基 古墳時代中期：土坑13基、小穴28基、大溝１条 古墳時代後期：土坑６基、小穴７基、落ち込み１基 中～近世　　：小溝３条			弥生土器、土師器、須恵器、木製品、玉製品、製塩土器			28箱
8	十六面・ 薬王寺 第42次	田原本町大字十六面小字瀬中田109番５外	田原本町長	道路拡幅	2020. 2.16 ～ 3.16	148㎡	西岡	まちづくり 建設課
		弥生時代：溝５条 中　　世：井戸１基 近・現代：井戸１基			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器			３箱
9	十六面・ 薬王寺 第43次	田原本町大字十六面小字宮ノ池175番４外	田原本町長	道路拡幅	2020. 3. 6 ～ 3.26	85㎡	柴田	まちづくり 建設課
		古　　代：溝６条、足跡群 鎌倉時代：土坑２基、大溝１条、溝８条			土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入磁器、中世陶器、木製品			５箱
10	阪手 第６次	田原本町大字阪手小字エノコ田756番、757番１	㈱ティーズ コーポレーション	宅地造成	2019. 6.12 ～ 6.28	104㎡	渡瀬・ 西岡	受託事業
		古墳時代前期：大溝３条、溝１条 中　　世：小溝３条			土師器、須恵器、瓦、石器、木製品等			17箱
11	秦庄 第８次	田原本町大字宮森小字垣ノ内247番11	個人	個人住宅建築	2019. 4. 4 ～ 4. 5	4㎡	柴田・渡瀬 西岡	国庫補助事業
		古代？：土坑２基、小溝３条 中　世：小溝４条			土師器、須恵器、瓦器等			１箱
12	黒田 第４次	田原本町大字黒田小字北マへ291番	個人	個人住宅建築	2019. 6.18 ～ 6.19	6㎡	柴田	国庫補助事業
		中世？：大溝１条			なし			０箱
13	筋違道 第５次	田原本町大字保津小字橘森212番5	田原本町長	道路拡幅	2019. 9.24	2㎡	清水琢哉	まちづくり 建設課
		古墳時代？：落ち込み１基 中　　世：小溝５条			土師器、須恵器、瓦器等			５袋（小）
14	宮森 第２次	田原本町大字矢部小字東亀田437番1外東側道路	田原本町長	道路改良	2020. 1. 6 ・ 1.15	78㎡	西岡	まちづくり 建設課
		弥生時代？：落ち込み？１基 古　　代：土坑１基、落ち込み２基 中　　世：小溝４条			土器			１箱

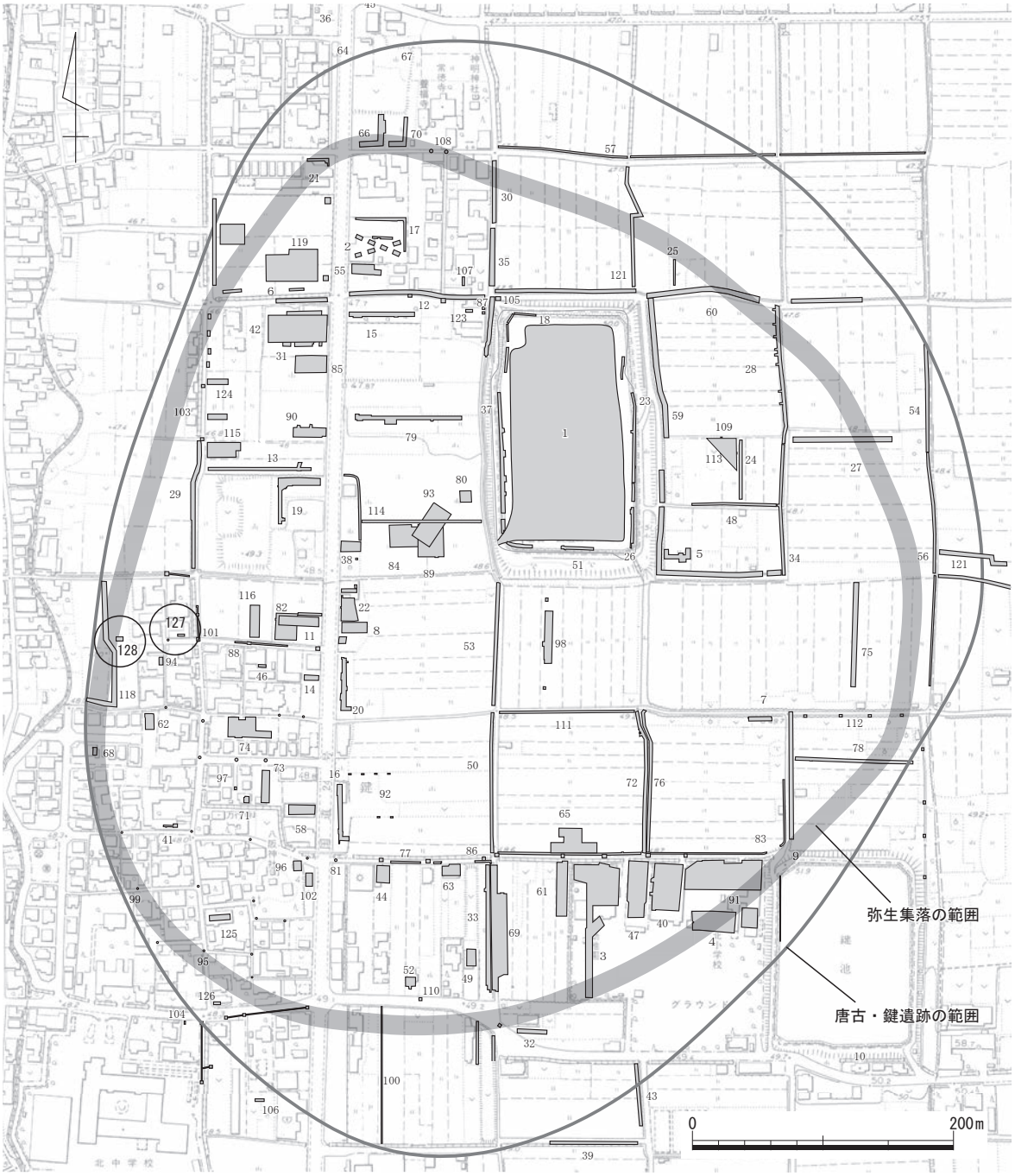
第７表　2019 年度　試掘調査一覧表

	遺跡名	調査地 検出遺構	原因者	原因	期間 出土遺物	面積	担当	備考 遺物量（箱）
A	阪手 S-201901	田原本町大字阪手小字エノコ田756番１、757番１	㈱ティーズ コーポレーション	宅地分譲	2019. 5.29 ～ 5.31	80㎡	渡瀬・西岡	国庫補助事業
		中世以前：河跡４条 中　　世：小溝			土師器、須恵器等			１箱
B	十六面・ 薬王寺 S-201902	田原本町大字十六面小字カンデン81番２外	岡田自動車販売	店舗兼工場建築	2019. 8. 7 ・ 8. 9	89㎡	清水・柴田 ・西岡	国庫補助事業
		弥生時代：溝１条 古　　代：水田跡？ 中　　世：河跡１条、小溝群			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等			１箱
C	保津・宮古 S-201903	田原本町大字新町小字寺東138番１外	㈱品川工業所	工場建築	2019.10.15 ・10.17	40㎡	渡瀬・西岡	国庫補助事業
		中世以前：溝１条、河跡１条 中　　世：小溝３条			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等			１袋（中）
D	十六面 ・薬王寺 S-201904	田原本町大字保津小字姫森222番２ほか	㈱ティーズ コーポレーション	宅地分譲	2019.11.19 ～11.21	57㎡	柴田・渡瀬 ・西岡	国庫補助事業
		中世以前：小穴１基、小溝３条 中　　世：小溝５条			土器			２袋（小）

１．唐古・鍵遺跡　第 127 次調査

１．遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、標高 47 ～ 48 mの沖積地に立地する弥生時代の環濠集落遺跡である。今回の調査地は遺跡の西端にあたる場所で、これまでの調査成果から環濠帯部分に想定される。本調査地の東側隣接地（第 101 次）では弥生時代中期初頭の環濠、南西 20 mの第 94 次調査では後期の環濠が検出されている。



第1-1図　唐古・鍵遺跡の範囲と調査地の位置（S=1/5,000）

２．調査の成果

（１）層序

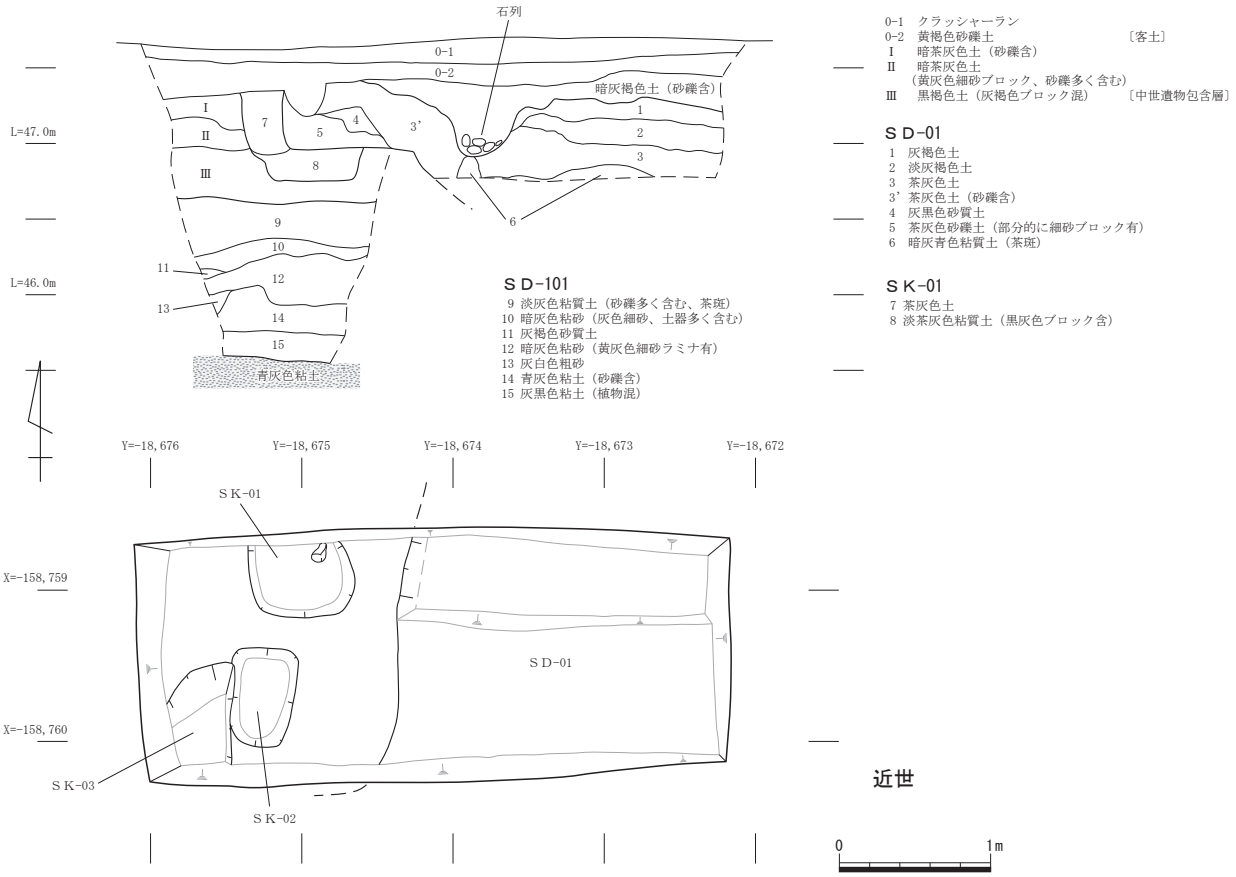
個人住宅に伴う調査で、建築予定地の南端に東西４ｍ、南北２ｍの調査区を設定した。調査地はほぼ全面が遺構内となるため、基本層序になるものは遺構の上部（第Ⅰ～Ⅲ層）と最下部（第Ⅳ層）のみで、本来、第Ⅲ層と第Ⅳ層の間には３層分ほどの基本土層があると考えられる。第Ⅰ層：茶灰色土［検出標高 47.3 ｍ、以下数値のみ記載］、第Ⅱ層：暗茶色土［47.2 ｍ］、第Ⅲ層：黒褐色土［47.1 ｍ］、第Ⅳ層：青灰色粘土［45.6 ｍ］である。

調査地の現状は宅地で、既存建物を解体した後に 0.3 ｍのクラッシャーラン等（0 層）で整地されていた。第Ⅰ層は旧表土、第Ⅱ層は近世の遺物包含層、第Ⅲ層は中世遺物包含層である。調査は第Ⅱ層上面まで重機により掘削し、以下は人力によって調査をおこなった。ただし、調査地は狭小であり、かつ調査地東半が近世の大溝であったため、近世大溝は一部の調査とし、西半の弥生時代の大溝を主としておこなった。

（２）遺構と遺物

弥生時代

ＳＤ－101　調査地西半で検出した大溝である。東半は近世大溝によって切られているため、調査区では大溝内の堆積土（西半）のみで、深さ１ｍ分を確認した。堆積土は、大きく３層で構成され、下層は第Ⅲ－２様式含みながらも大和第Ⅲ－３・４様式が主体、中層（取上第２層）



第 1-2 図　北壁断面図・遺構平面図（Ｓ＝1/40）

は大和第Ⅲ－３・４様式（第 1-4 図１～７）、上層（取上第１層）は大和第Ⅳ様式（第 1-4 図８～ 15）である。中層からは、本遺跡で 20 例目となる銅鐸形土製品の鈕部分の破片（第 1-4 図 16）が出土した。なお、上層では杭（第 1-3 図）が打ち込まれていたが、隣接する近世のＳＤ -01 に関連する可能性がある。本溝は、他の大溝との位置関係から大環濠に相当すると考えられる。

近世

ＳＫ -01　調査区西半北で検出した土坑である。北端は調査区外になり、また、東半は近世大溝（ＳＤ -01）に切られる。長軸 0.8 ｍ、深さ 0.6 ｍを測る。遺物は弥生土器・近世土器がわずかである。

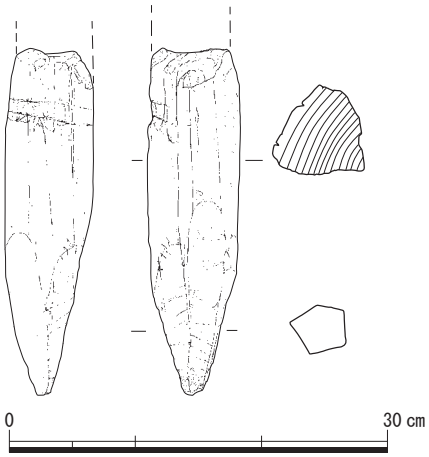
ＳＫ -02・03　調査区西南端で検出した土坑である。ＳＫ -03 がＳＫ -02 を切るが、堆積土の状況からほぼ同時期の遺構と考えられる。遺物は土師器小皿など近世遺物がわずかである。

ＳＤ -01　調査区東半で検出した南北方向の大溝である。西肩を検出し、溝幅３ｍ以上ある。近世大溝であり、狭小なため、上層（0.6 ｍ）のみの調査とした。近世土器がわずかに出土している。なお、大溝埋没後に大溝走行方向に合わせた石列が設置されており、近現代まで大溝の区画が生きていたことがわかる。

３．まとめ

今回の調査地は唐古・鍵弥生集落の西端に位置し、想定していたように環濠の一部を検出した。本環濠の東側隣接地の第 101 次調査では、大和第Ⅱ -3 様式の大溝（ＳＤ -101）を検出しており、大環濠掘削以前の環濠と推定されることが周辺の調査から判明している。これらの位置関係から本環濠はこれまで検出されてきた大環濠になると考えられる。

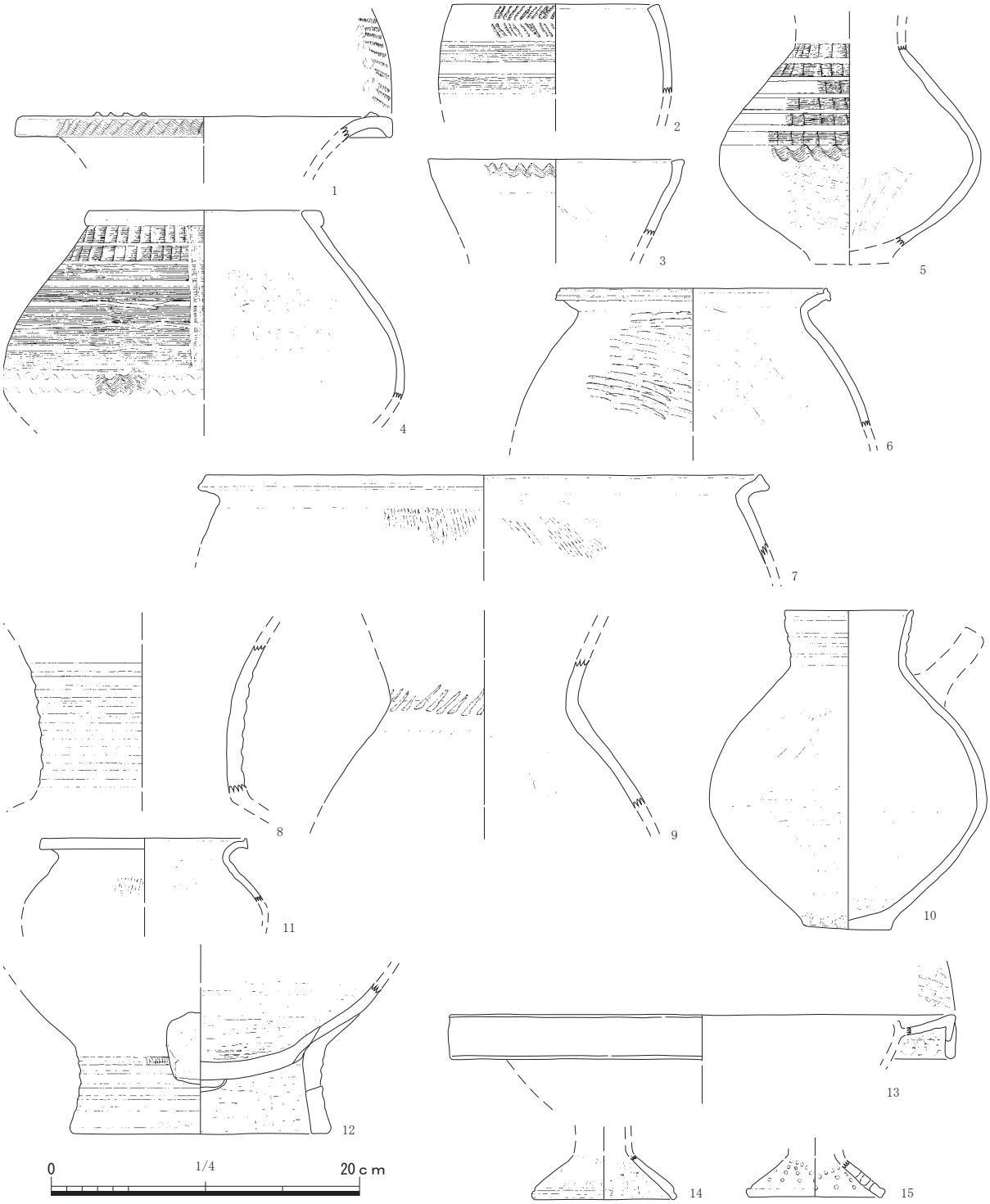
近世の大溝は、近世鍵集落に伴うことは確実であるが、下層を調査していないことから中世まで遡るか判断できない。

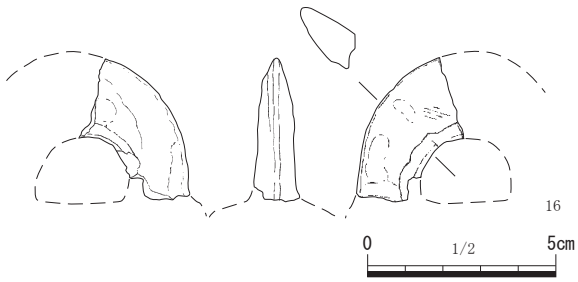


第 1-3 図　ＳＤ-101 出土杭（S=1/6）

写真 1-1　調査区全景（東から）

写真 1-2　ＳＤ -101 層序





1：広口長頸壷
2・3：細頸壷
4：無頸壷
5・10：水差形土器
6・7・11：甕
8：広口壷
9：短頸壷
12：台付無頸壷
13～15：高坏
16：銅鐸形土製品

1～7・16：第2層、8～15：第1層

第1-4図　SD-101出土遺物

２．唐古・鍵遺跡　第 128 次調査

１．遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、田原本町北部の大字唐古から鍵に所在する弥生時代～中世の複合遺跡である。遺跡の全体面積は 42ha に及び、その中心約 10ha は国指定史跡となっている。

今回の調査は、遺跡西端での個人住宅建築に伴って実施した。建物北半に東西８m、南北 2.5 mの調査区を設定し、調査をおこなった。その結果、弥生時代・中世の遺構を確認することができた。

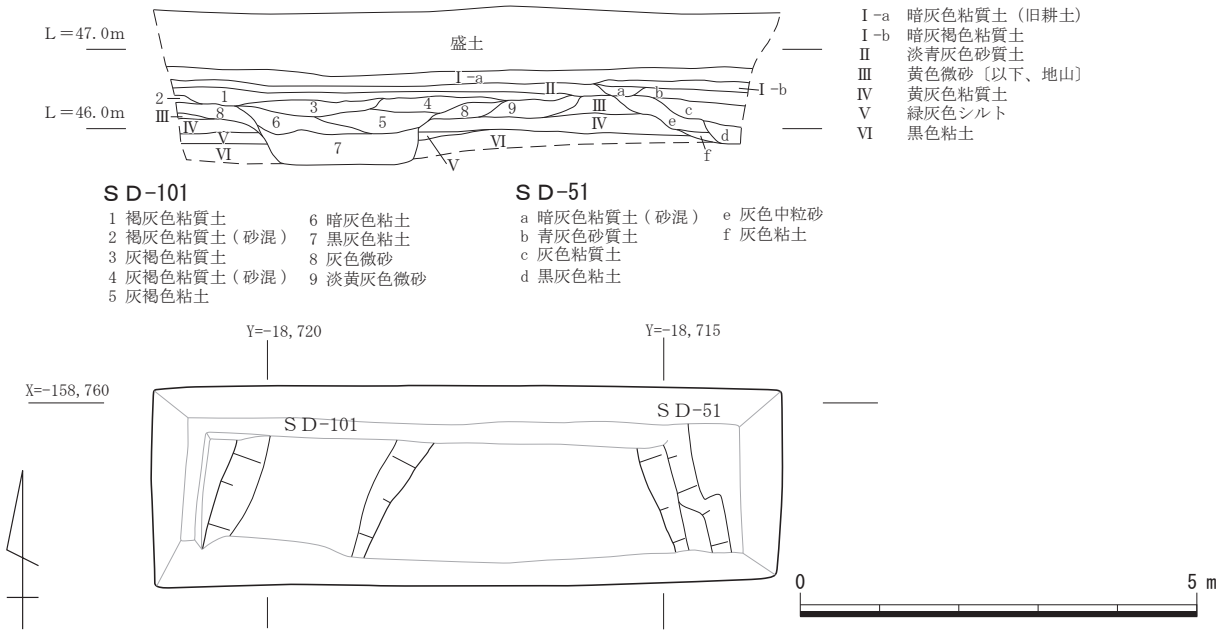
２．調査の成果

（１）層序

Ⅰ：茶灰色砂礫土（暗青褐色土ブロック混）〔検出標高 47.5 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗灰色粘質土〔46.7 m〕、Ⅲ：淡青灰色砂質土〔46.5 m〕、Ⅳ：黄色微砂〔46.4 m〕、Ⅴ：黄灰色砂質土〔46.2 m〕、Ⅵ：黒色粘土〔46.0 m〕

調査地の現状は宅地である。調査地は、造成時に耕作土の土壌改良をおこなったため、旧水田に伴う層はみられない。第Ⅱ層は中世遺物包含層とみられる。第Ⅲ層は中世以前の洪水堆積層の可能性がある。第Ⅴ・Ⅵ層は弥生時代後期よりも古い砂質土堆積で、ベースの可能性がある。

中世遺構は第Ⅲ層上面で検出できるが、調査では第Ⅳ層まで重機により除去したため、弥生時代の遺構上面を一部削った状態で検出をおこない、以下を人力で調査した。

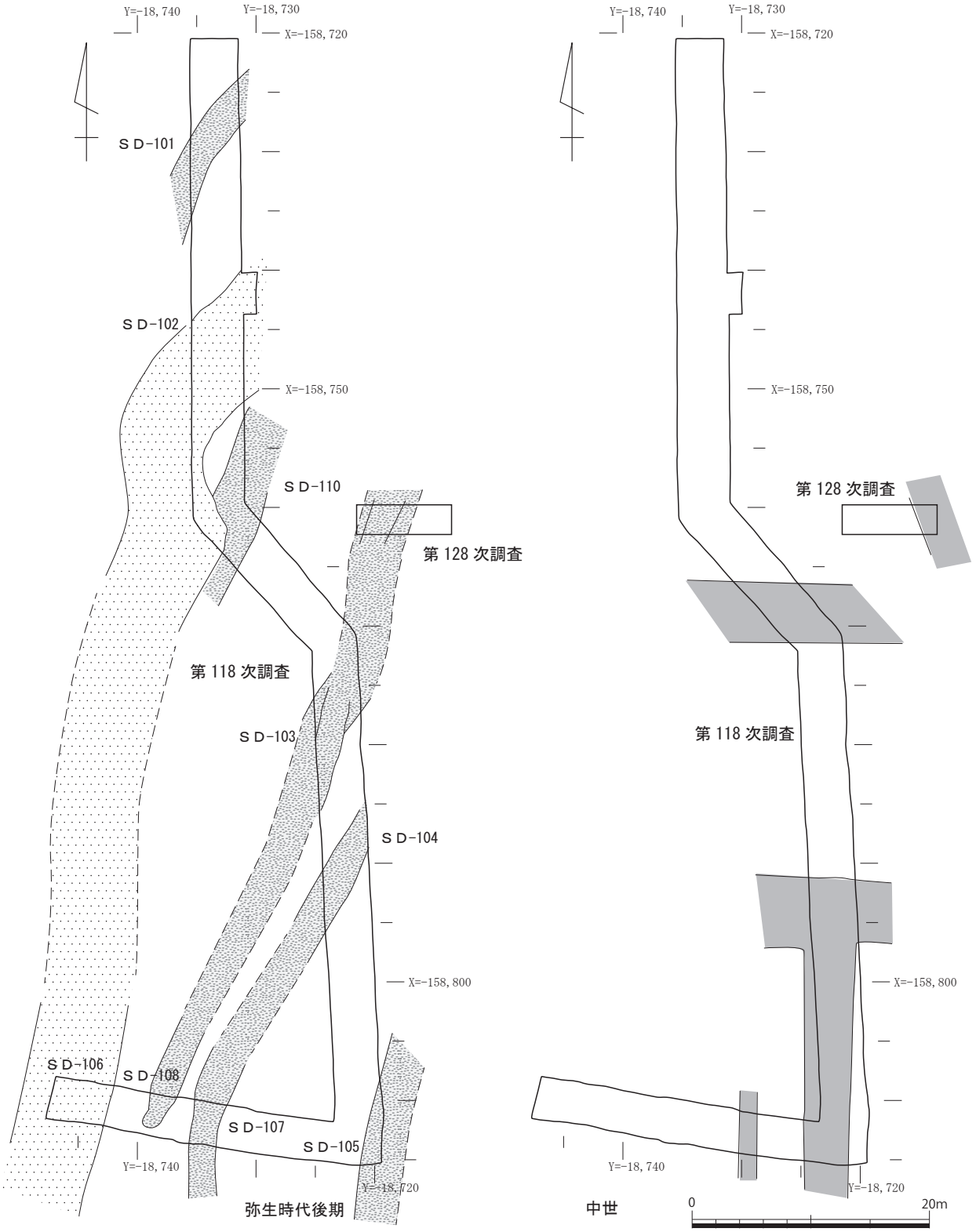


第 2-1 図　北壁断面図・遺構平面図（S=1/100）

（２）遺構と遺物

弥生時代

ＳＤ－101　調査区西側で検出した北北東－南南西方向の大溝である。検出時の遺構規模は幅２ｍを測るが、断面から本来は幅５ｍ前後の２段掘削の遺構であった可能性がある。北壁で確



第 2-2 図　第 118 次調査の成果との関係

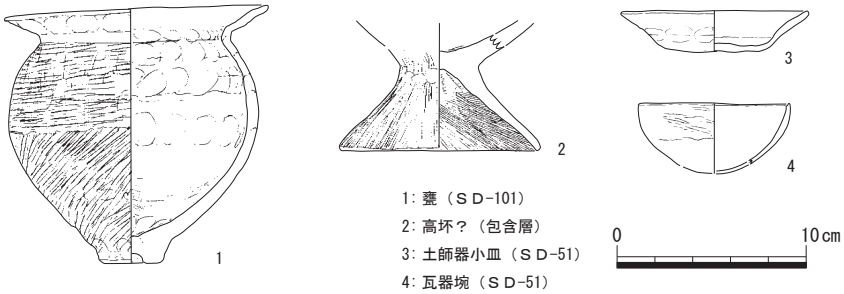
認した深さは0.8ｍとなる。下層から完形に復元できた甕１点などが出土した。遺物より、弥生時代後期後半の遺構と考えられる。

中世

ＳＤ-51　調査区東端で検出した北北西－南南東方向の大溝である。西肩のみの検出であるため、本来の遺構規模は明らかでない。北壁で確認した深さは0.8ｍを測る。14世紀頃の瓦器埦等が出土していることから、室町時代前半の遺構と考えられる。

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半および14世紀頃の遺構を検出することができた。調査地付近は宅地造成時に開発道路部分を発掘調査しており（第118次調査）、その結果、弥生時代後期の環濠６条前後を確認しているほか、中世の城館跡「唐古南氏居館跡推定地」に関連する石組み井戸や大溝等を確認している。



第2-3図　出土した遺物（S=1/4）

今回検出した弥生時代後期後半の大溝は、第118次調査のＳＤ-103と同一の遺構となるとみられる。出土遺物が僅少な中で完形土器が少量出土する状況も同じである。なお、第118次調査ＳＤ-103では後期後半の長頸壷１点が出土しているが、今回出土したSD-101の甕は弥生時代後期末の様相を示しており、環濠の埋没に要した期間を示していると考えられる。

今回の調査で検出した室町時代の溝は、同時期の遺構を隣接する第118次調査でも検出している。いずれも唐古南氏居館跡推定地の西部に掘削された区画溝とみられる。不明な点の多い中世城館遺構の構造を復元する上で重要な成果であったと考えられる。

写真2-1　調査区全景（西から）

写真2-2　ＳＤ-101土器出土状況

３．清水風遺跡　第７次調査

１．遺跡・既調査の概要

清水風遺跡は、標高 47 m前後の沖積地に位置する、田原本町と天理市にまたがる弥生時代中～後期の遺跡である。南に位置する唐古・鍵遺跡とは約 600 m離れている。弥生時代の拠点集落である唐古・鍵遺跡に対して、清水風遺跡は衛星集落または墓域と想定されており、その周辺遺跡を含めて「唐古・鍵遺跡群」として評価することができる。

清水風遺跡中央部を流れる弥生時代中期後半の自然河道は、唐古・鍵遺跡第１次調査（末永雅雄ほか 1943）で報告された「北方砂層」と同一の流路と考えられており、唐古・鍵遺跡第 12・18・23・34・56・59・67・70・87・123 次調査及び清水風遺跡第１・２次調査によって、その流路が確認されている。清水風遺跡第７次調査地は、第２次調査で検出された自然河道の南延長上に位置することから、一連の遺構が検出される可能性が考えられた。なお、第１・２次調査ではこの自然河道から多数の絵画土器が出土していることから、関連遺物の出土も期待された。

２．調査の成果

（１）層序

Ⅰ:淡灰色砂礫土（現代造成土）〔検出標高 46.7 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:暗青灰色粘土（水田床土層）〔45.5 m〕、Ⅲ:灰色粘土〔45.2 m〕、Ⅳ:暗灰～暗灰褐色粘質土〔45.0 m〕、Ⅴ:黄褐色粘質土（以下ベース）〔44.7 m〕、Ⅵ:灰色シルト〔44.4 m〕

調査地の現状は工場で、過去の造成により水田面＋ 1.0 m程度の盛土およびアスファルト舗装がされている。調査では、第Ⅰ層及び第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層を機械力で除去し、第Ⅴ層上面で遺構を検出した。

（２）遺構

弥生時代中期後半

ＳＲ-101　調査区西端を北北西－南南東に流れる河跡（本流）と、それに合流（分流）する東北東－西南西に流れる河跡である。北北西－南南東方向の河跡は、「北方砂層」と一連の河跡と推定される。調査区中央の分流部分は、幅 2.15 m、深さ 0.55 mで、河底は凸凹になっており、激しい流水があったことがわかる。この河跡は、自然流路の可能性が高いが、走向方向から人為的に手が加えられていることも考えられる。

この河跡から出土した特徴的な遺物として、絵画土器 24 点や広片口鉢（朱精製土器）片２点、赤色顔料付着土器片約 55 点、銅鐸形土製品２点などがある。遺物から、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

第3-1図　調査地の位置（S=1/2,500）

（３）遺物

絵画土器

清水風遺跡の特徴として、絵画土器の出土数が全国の弥生時代遺跡の中でも群を抜いて多い点が挙げられる。第１次調査で 50 点以上、第２次調査で 33 点が出土し、今回の 24 点を合わせると 100 点以上になる。特に、「鳥装の人物」（第１次）や、「盾と戈を持つ人物」（第２次）は、当時の精神世界を物語る重要遺物となっている。

第７次調査では、「両手を広げた人物」、建物、魚、鹿の絵画土器 24 点が出土した。「両手を広げた人物」は、大形甕の上胴部（横 16.3cm、縦 12.0cm、復元口径約 34cm、復元高約 47cm）に描かれている。人物の左腕および下半身を欠失しているが、ほぼ全体像を推測できる。顔は逆Ｕ字形で、眉・目・鼻の輪郭・口が描かれている。胴体胸には太描で乳房が描かれている。腕部分、右袖は縦方向、左袖は左上がりの斜線が充填された衣の袖が描かれ、残存する右手には五本の指が表現されている。また、上半身と下半身を区切る横線の下は、縦線があり、女性器が描かれていた可能性がある。以上のことから、この人物は女性と判断できる重要な絵画資料である。

「両手を広げた（挙げた）人物」のモチーフは、本例を含め全国で 20 例確認されており、先行研究では女性を描いたものと推定されてきた。本例は乳房表現があり、女性を描いたと積極的に判断できる例といえる。

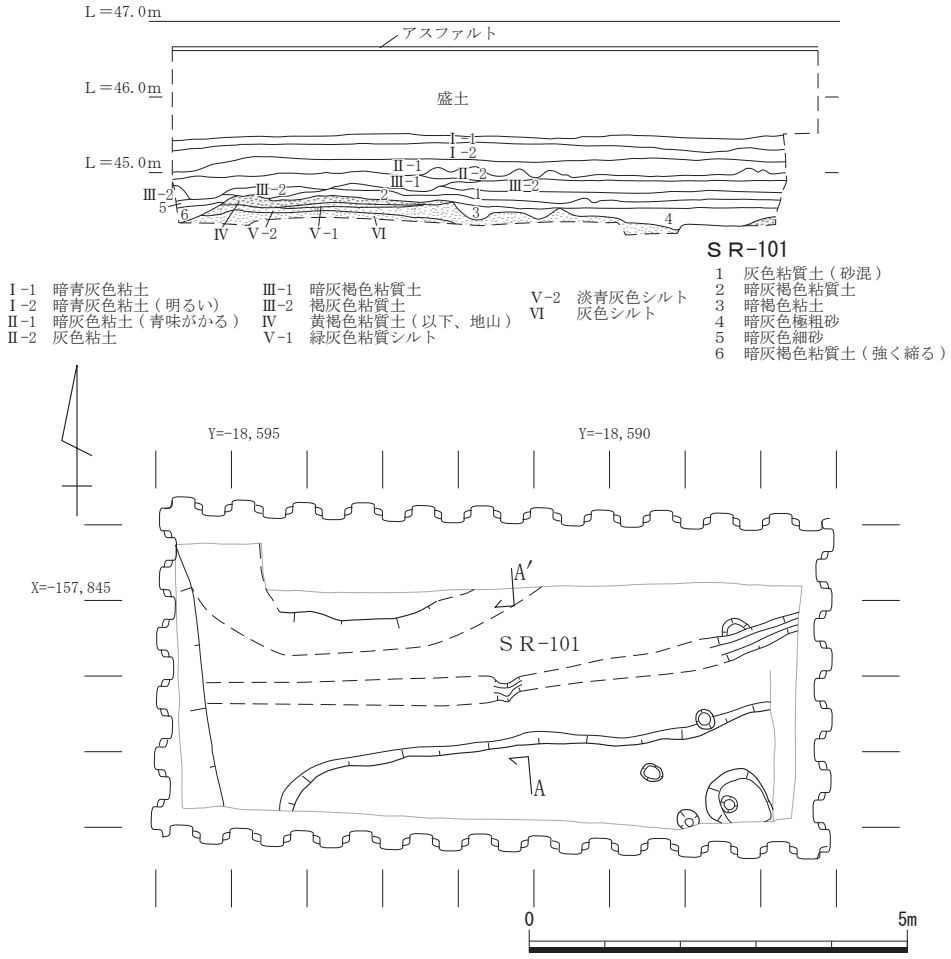
水銀朱関連遺物

清水風遺跡の２つ目の特徴は、水銀朱の付着した遺物が大量に出土することである。第７次調査では、広片口鉢の尾部２点が出土したほか、無頸壷・鉢・台付鉢など、内面に赤色物が付着した破片が 55 点出土した。このうちの 11 点を南武志氏（近畿大学）が蛍光Ｘ線分析で分析したところ、土器内面に付着していた赤色物は水銀朱であることが明らかになった。

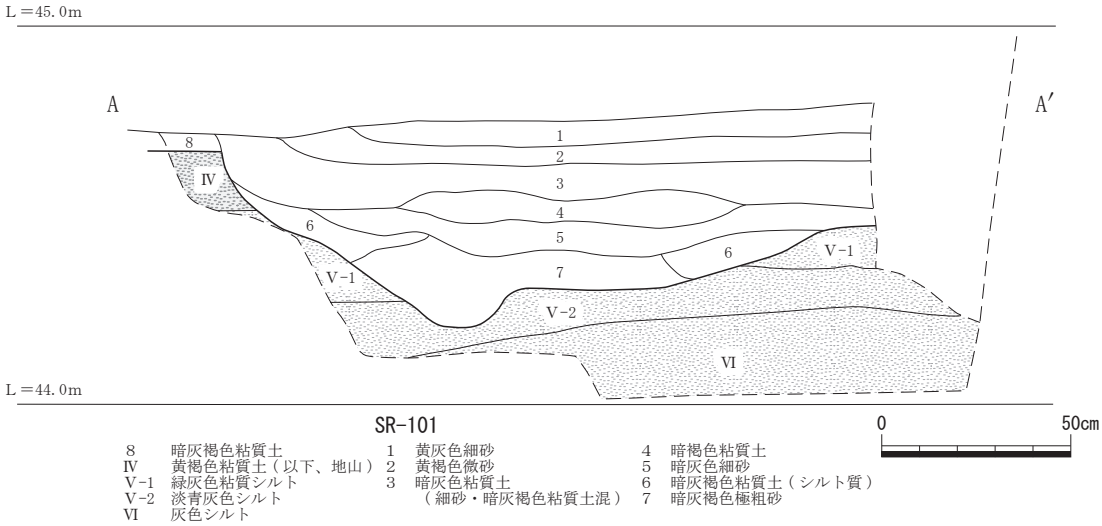
さらに、第２次調査で朱が付着した磨石が出土し、第７次調査でも敲石が出土しており、清水風遺跡内で朱の精製から使用までおこなわれていたと推定できる。精製された水銀朱の最終的な用途は不明だが、マツリに必須の要素として使用されたと考えたい。朱精製土器である広片口鉢は、唐古・鍵遺跡第 40・61・65 次調査で出土している。これら３件の調査は、いずれも青銅器鋳造などもおこなわれた集落の南部に位置する。

３．まとめ

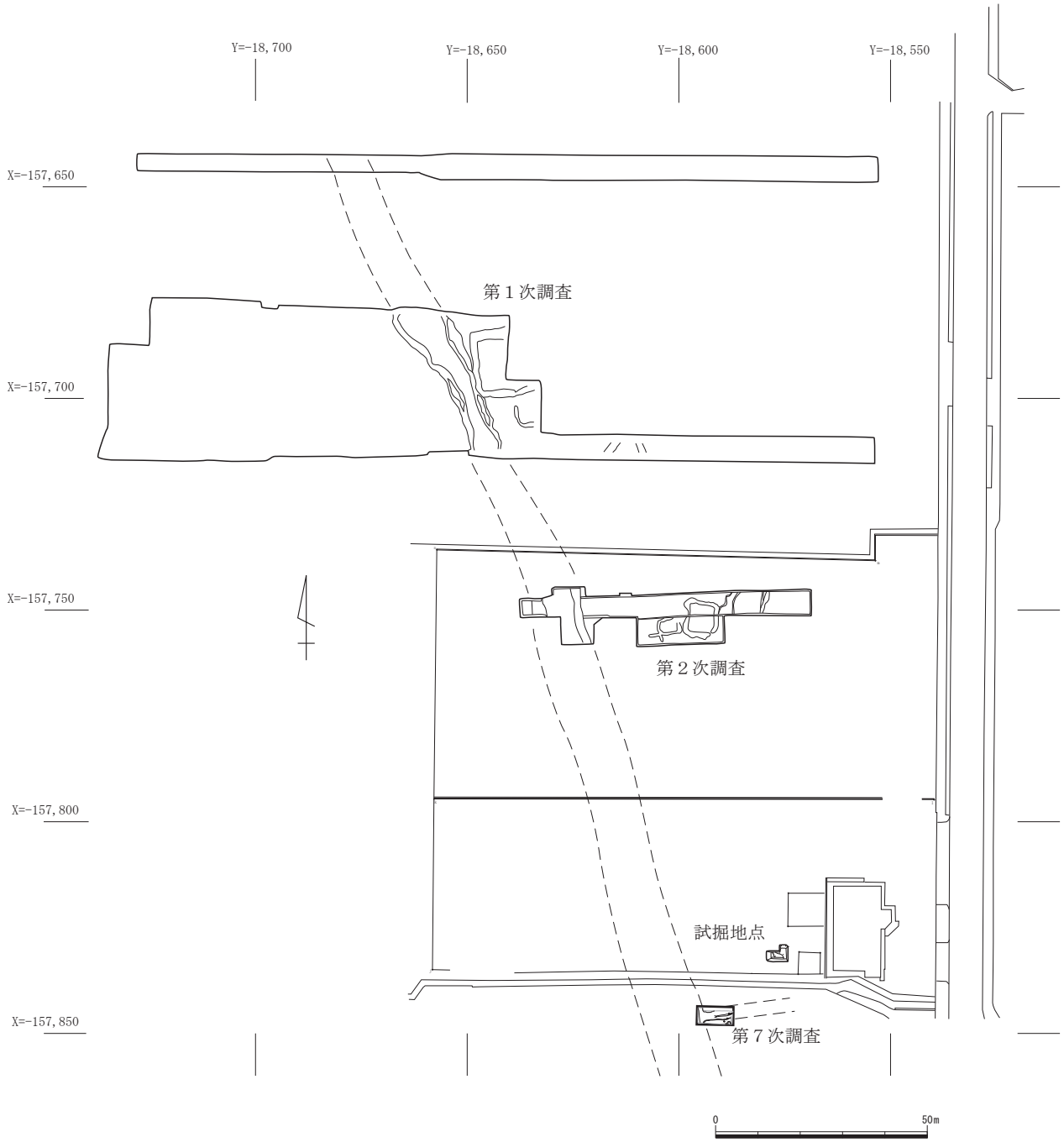
本調査で検出した東北東－西南西方向の河跡は、走向から人工的な溝の可能性が残される。既往の調査成果によると、北方砂層の東側に集落が展開していたことが想定され、集落の南限を区画する溝となる可能性がある。また、「両手を広げた人物」モチーフの絵画が女性を描いていたことをほぼ確定させる絵画土器が出土した。清水風遺跡第１次調査で出土した「盾と戈を持つ人物」の絵画土器が男性司祭者を描いていたとすると、女性司祭者と男性司祭者でマツリの内容が異なっていたことを示唆している。



第3-2図　北壁断面図・遺構平面図（S=1/100）



第3-3図　ＳＲ-101断面図（S=1/20）



第 3-4 図　弥生時代中期の河跡（S=1/1,500）

写真 3-1　調査区全景（東から）

写真 3-2　遺物出土状況（南から）

写真 3-3　出土した絵画土器

４．保津・宮古遺跡　第 52 次調査

１．遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、田原本町北西部の大字宮古および保津に所在する弥生時代～近世の集落跡である。遺跡中央を古代の道路跡「筋違道」が縦断し、「保津・阪手道」が横断しており、両者の交差する地点付近では古代の遺構・遺物が多数確認されている。また、遺跡西側には飛鳥～奈良時代の建物群をはじめとした古代の遺構が比較的濃密に分布し、官衙的な性格の遺跡である可能性も考えられている。遺跡中央～南部では、弥生時代前期・中期・後期の遺構が散在的に確認されているほか、鎌倉時代～室町時代頃の井戸や溝などが濃密に分布する。一方、遺跡北端および北西部は、比較的遺構密度が低く、北西に隣接する宮古北遺跡との間に谷地形の拡がりがあったと考えられる。

今回の調査は、遺跡北端での個人住宅新築に伴うもので、平成 30 年度に宅地分譲の造成工事に伴って道路部分の一部を発掘調査(第 51 次調査)で対応した地点の北側隣接地に位置する。

２．調査の成果

（１）層序

調査地の現状は宅地である。調査では、建築予定範囲の南端に東西７ｍ、幅 1.5 ｍの調査区を設定した。基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ：茶灰色砂礫土〔検出標高 46.3 ｍ、以下数値のみ記入〕、Ⅱ：暗青灰色粘土〔45.8 ｍ〕、Ⅲ：茶灰色土〔45.6 ｍ〕、Ⅳ：暗褐色土〔45.5 ｍ〕

第Ⅰ層は現代造成層、第Ⅱ層は旧水田耕土、第Ⅲ層は水田床土、第Ⅳ層は弥生時代以前の堆積層で固く締まる。調査では、第Ⅳ層上面まで重機により除去し、以下を人力で調査した。

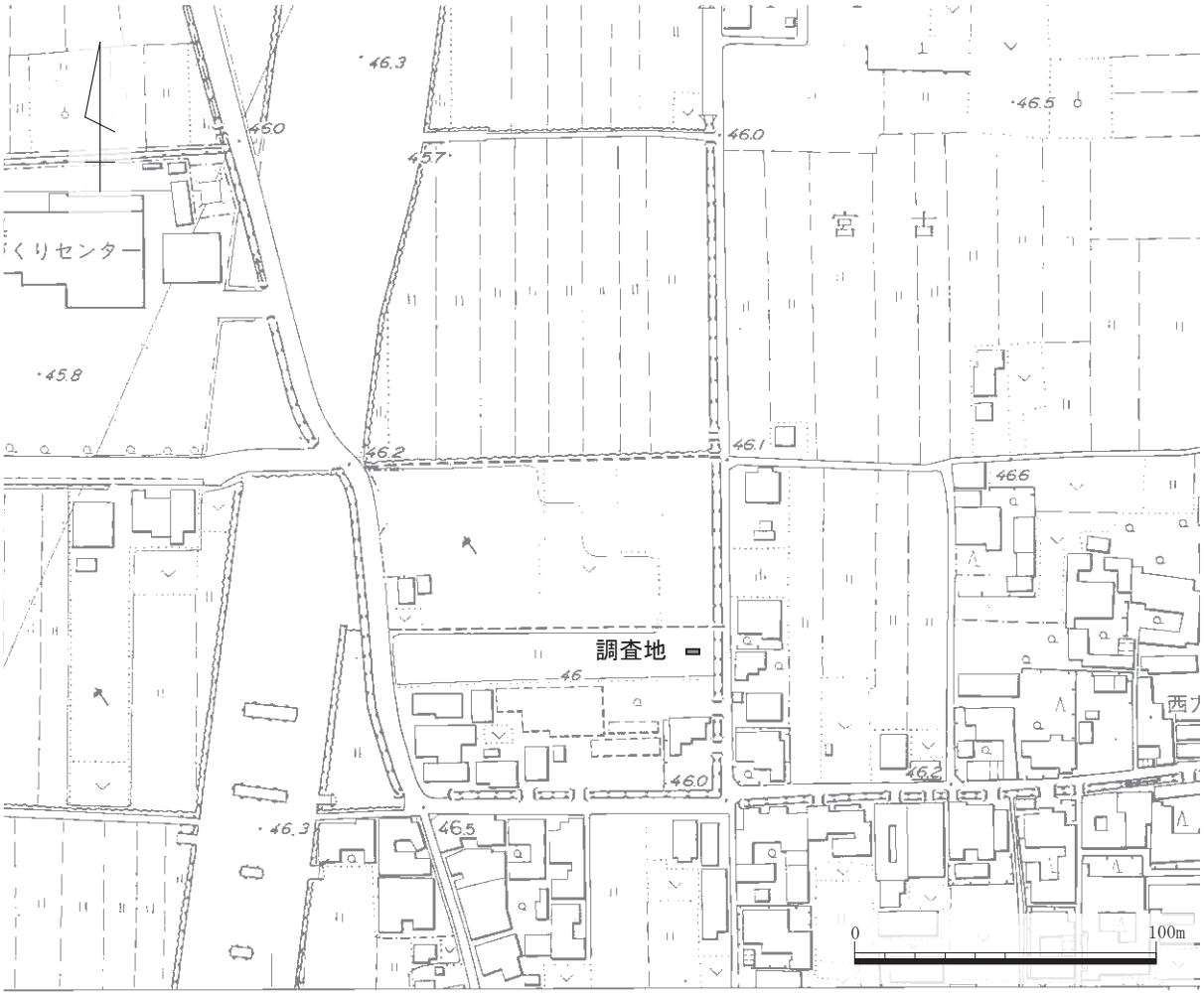
（２）遺構と遺物

古代～中世

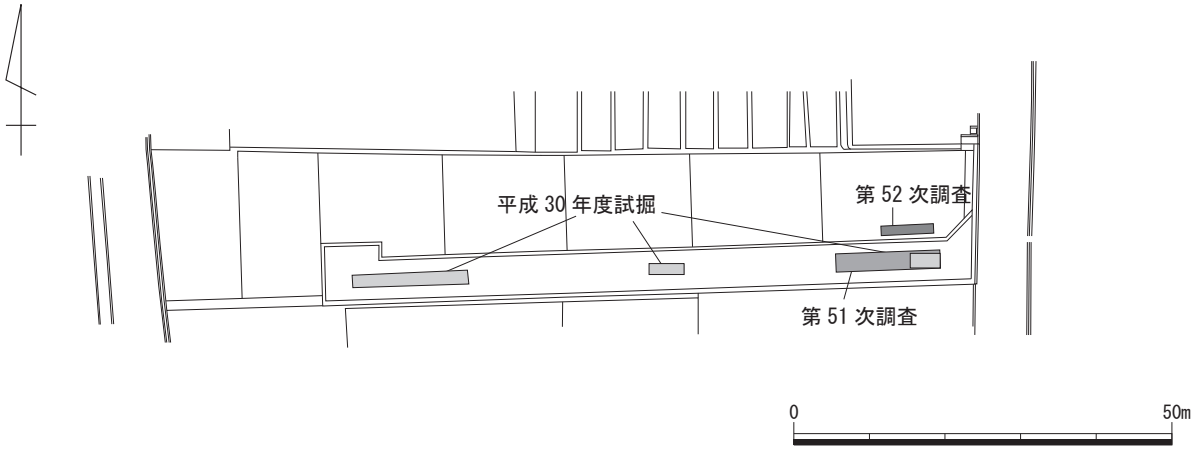
ＳＤ-51　調査区東半で確認した北北西－南南東方向の溝である。幅 1.5 ｍ、深さ 0.1 ｍ前後の１条の溝として検出・調査したが、北壁層序から、幅 0.3 ｍ前後の複数の小溝が同一箇所で重複して掘削された結果１条の溝のようにみえた可能性が高い。遺物が僅少で詳細な時期は不明である。堆積土から中世頃の遺構とみられる。

Pit-51　調査区北西部で検出した、直径 0.5 ｍ前後、深さ 0.15 ｍの円形の小土坑である。顕著な遺物が出土していないため、時期は明らかでない。

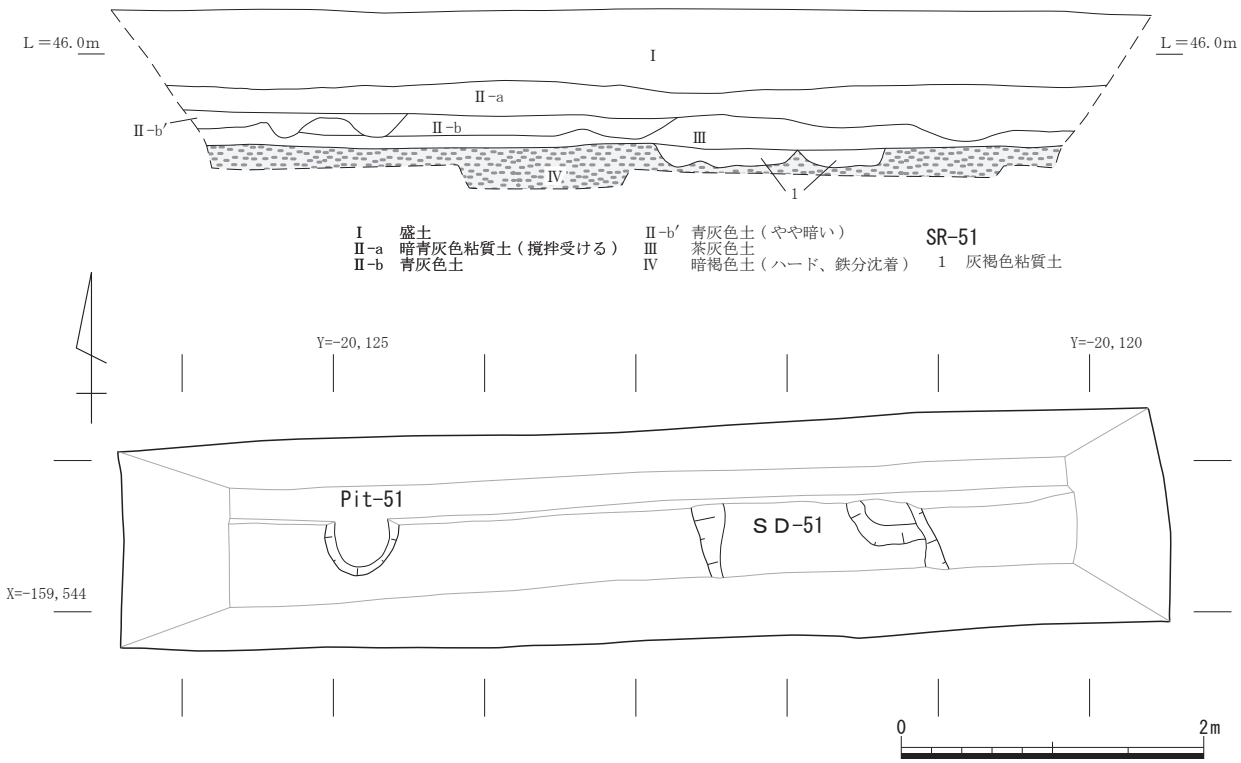
写真 4-1　調査区全景（西から）



第 4-1 図　調査地の位置（S=1/2,500）



第 4-2 図　調査区の設定（S=1/1,000）



第 4-3 図　北壁断面図・遺構平面図（S=1/50）

３．まとめ

今回の調査の結果、古代～中世頃の遺構を検出した。南側隣接地の第 51 次調査では、中世とみられる大溝、古代頃の柱穴とみられる小土坑等を検出しており、散漫ながらも集落関連遺構の拡がる地区であることが確認できた。ただし、出土遺物が僅少であることから、集落域の縁辺部であると考えられる。

なお、調査で検出した北北西－南南東方向の溝は、中世頃の耕作に伴う小溝群である可能性が高いが、この段階でも西側 100 ｍを通る筋違道に地割のうえで影響を受けていたとみられることは、中世段階の本地域の条里制地割の施行状況を考える上で興味深い。

５．保津・宮古遺跡　第 53 次調査

１．遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、田原本町中央の大字宮古および保津に所在する弥生時代～中世の複合遺跡である。これまでの発掘調査で、遺跡全体に弥生時代前後の遺構が点在する状況が確認されているほか、現宮古集落と保津集落の地区に鎌倉時代～室町時代頃の遺構が濃密に分布することも判明している。また、遺跡内を北北西－南南東方向の古代道路「筋違道」が縦断し、西北西－東南東報告の古代道路「保津・阪手道」が横断し、その交差する地点周辺に古代の遺構が分布する。

今回の調査は、遺跡南端での農業用水路改修工事に伴い、幅２ｍ前後、延長約 150 ｍの範囲を発掘調査で対応した。調査区は東西 82 ｍ、南北 68 ｍの逆Ｌ字形で、北側の東西調査区を第１トレンチ、東側の南北調査区を第２トレンチとした。調査区付近を筋違道が縦断するとみられることから、これに関連する道路側溝等が検出されることが予想された。

２．調査の成果

（１）層序

調査地の現状は水路である。延長距離が長いため、地点によって基本層序が若干異なる。ここでは、第１トレンチ東半の層序を示す。

Ⅰ:暗褐色土（畑耕作土）〔検出標高 46.6 ｍ〕、Ⅱ:茶灰色土（近世遺物包含層）〔46.3 ｍ〕、Ⅲ:灰色粘土（中世遺物包含層）〔46.2 ｍ〕、Ⅳ：黄褐色粘質土（以下ベース）〔46.1 ｍ〕、Ⅴ：淡青灰色粘土〔45.5 ｍ〕、Ⅵ：淡青灰色細砂〔45.4 ｍ〕

第Ⅳ層以下がベースとみられ、古代以前の遺構は第Ⅳ層上面で検出される。また、中世遺構の一部は第Ⅲ層上面が検出面となるが、調査では第Ⅳ層上面まで重機により掘削し、遺構検出後人力により調査をおこなった。

（２）遺構と遺物

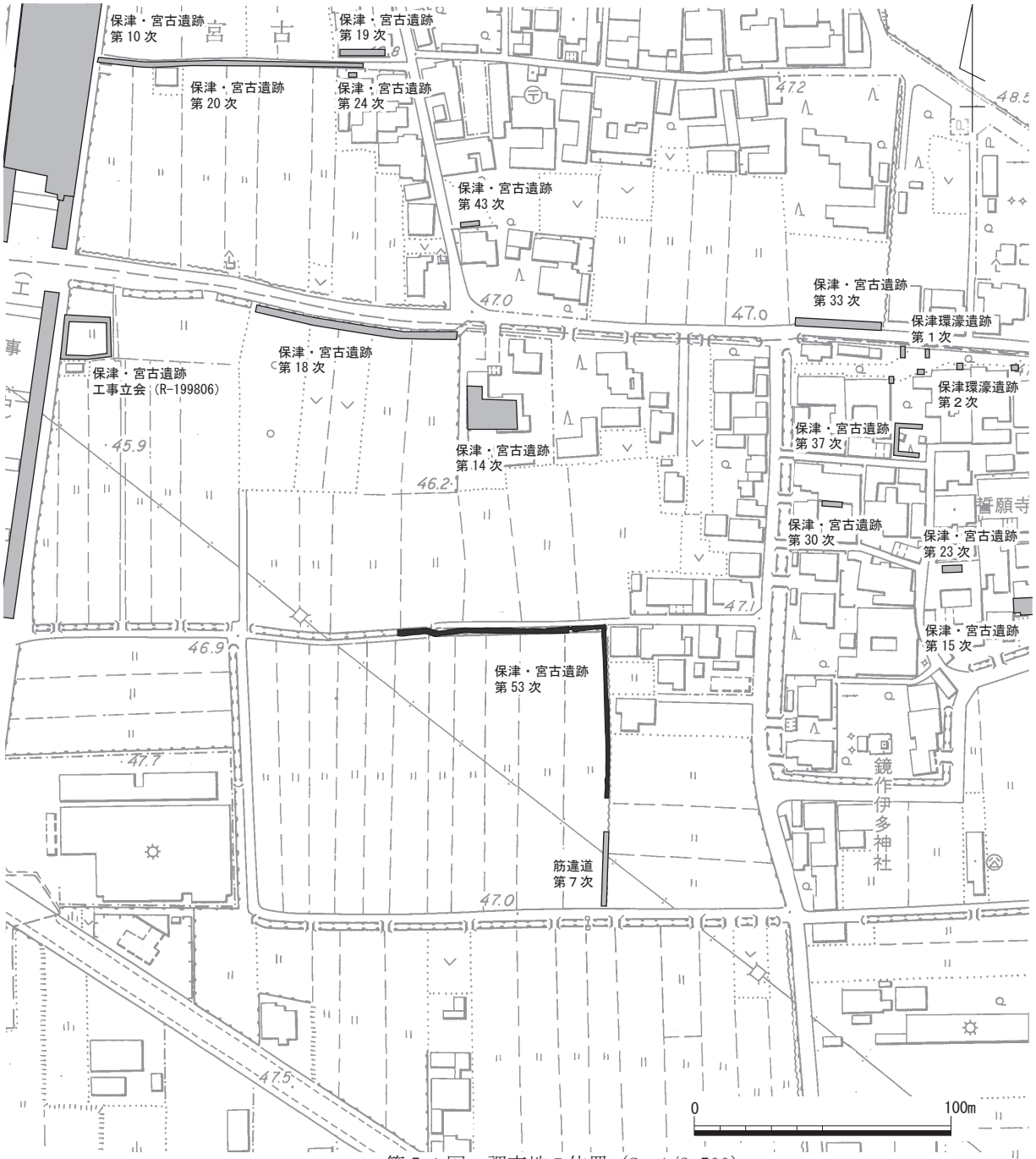
弥生時代後期

ＳＤ－1104　第１トレンチ中央付近で検出した幅２ｍ、深さ 0.8 ｍの南北方向の溝である。遺物は僅少であるが、弥生時代後期の土器片が出土したことから、弥生時代後期の遺構となる可能性が高い。

古墳時代後期～古代

ＳＫ－1101　第１トレンチ中央で検出した、東西 1.6 ｍ前後、深さ 0.4 ｍ前後の不整形の土坑である。南半が調査区外となるため、正確な規模は明らかでない。須恵器片等が少量出土しており、古墳時代後期～古代頃の遺構とみられる。

ＳＫ－1102　ＳＫ－1101 の東側で検出した、東西 1.3 ｍ、深さ 0.3 ｍ前後の不整形の土坑である。

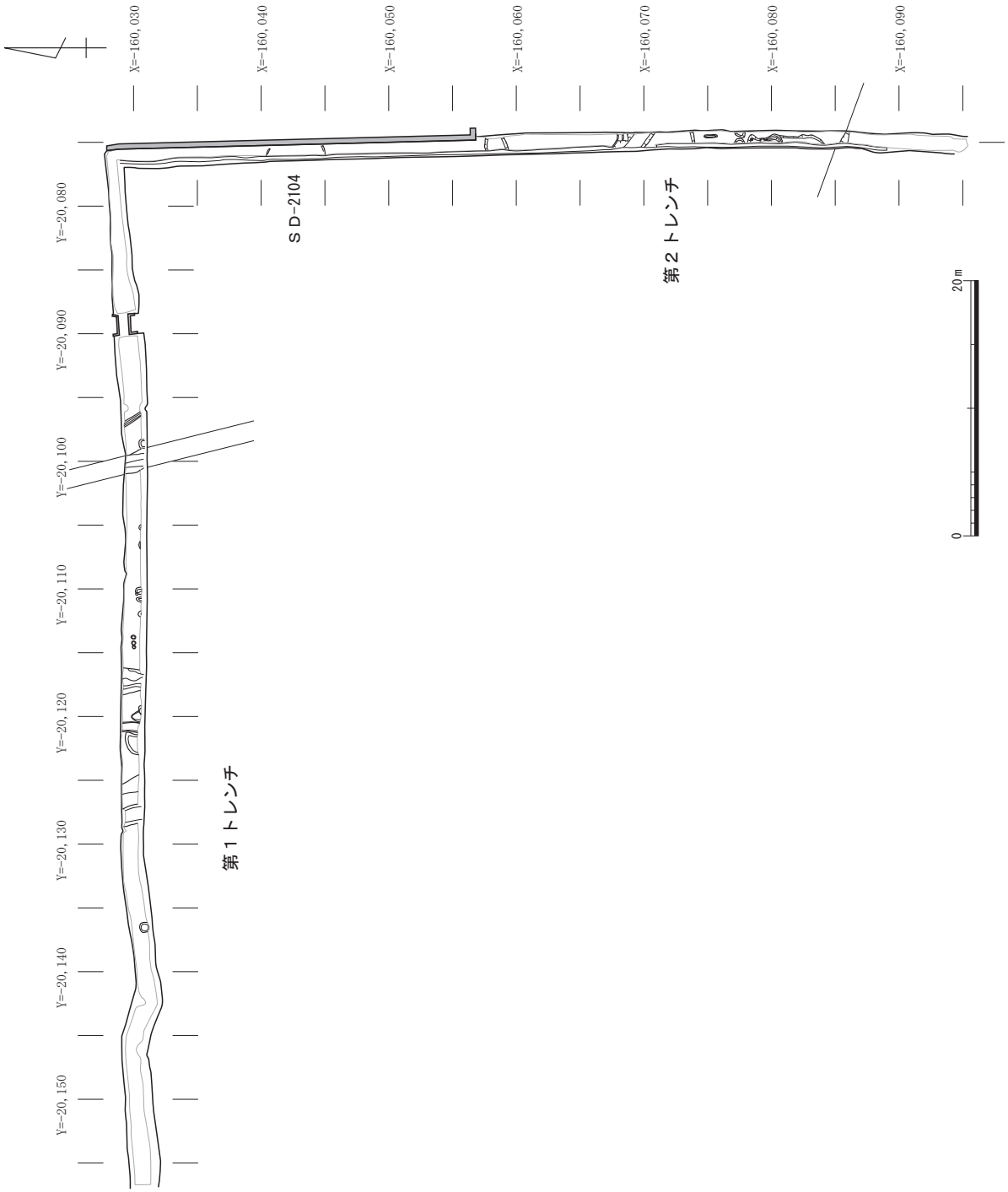


第 5-1 図　調査地の位置（S＝1/2,500）

南半が調査区外となるため、正確な規模は明らかでない。遺物は、須恵器片等が少量出土しており、古墳時代後期～古代頃の遺構とみられる。

ＳＫ-2101　第２トレンチ南半で検出した土坑である。南北 3.7 m、深さ 0.2 mで、東肩付近のみの検出であるため正確な規模は明らかでない。須恵器等が出土した。遺物から、古墳時代後期の遺構とみられる。

ＳＫ-2102　ＳＫ-2101 の南側で検出した土坑である。ＳＫ-2101 に切られるが、層序からは両者が同一遺構の一部である可能性も考えられる。須恵器等が出土した。遺物から、古墳時代後期の遺構とみられる。

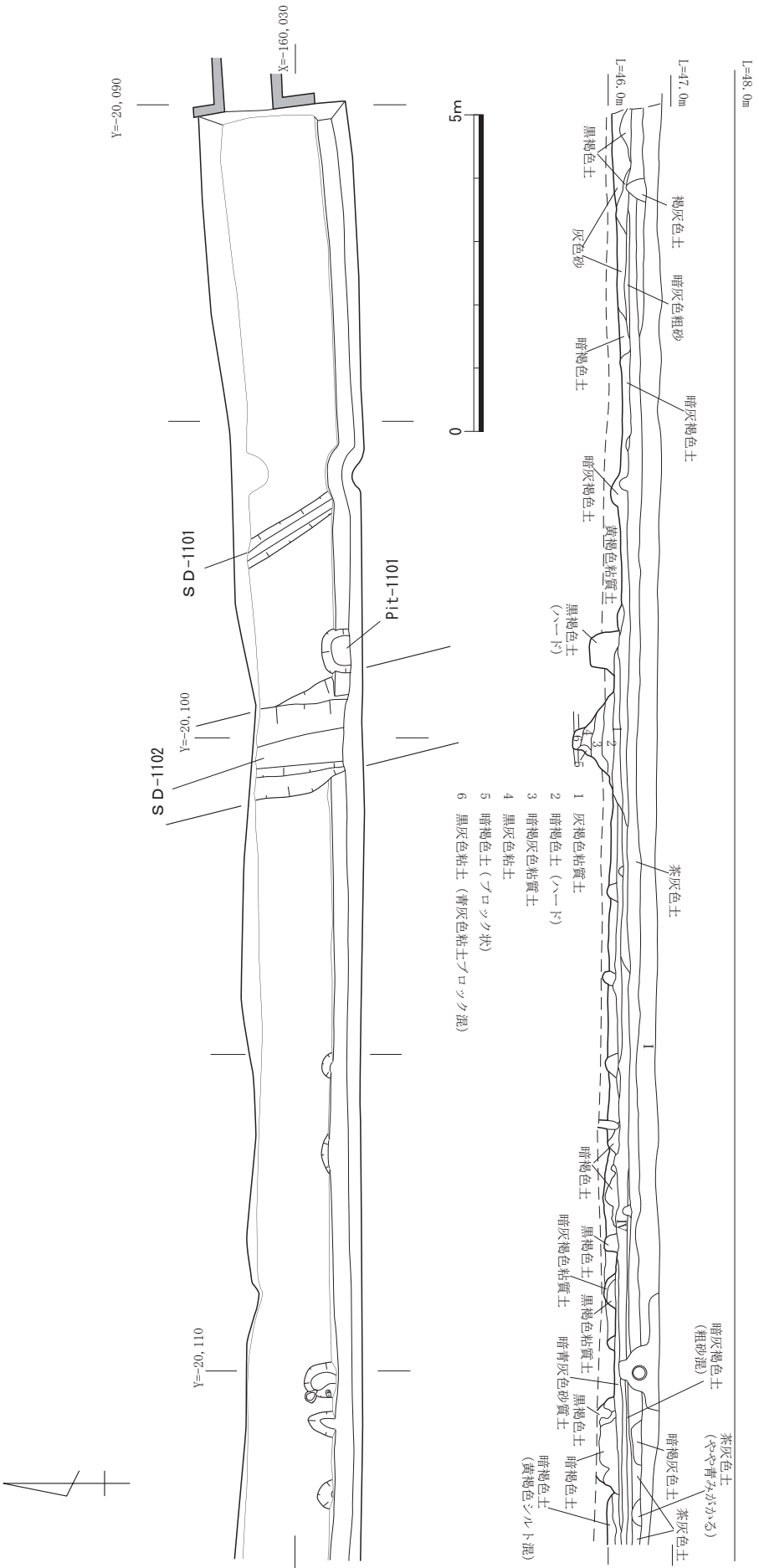


第 5-2 図　調査区平面図（S=1/500）

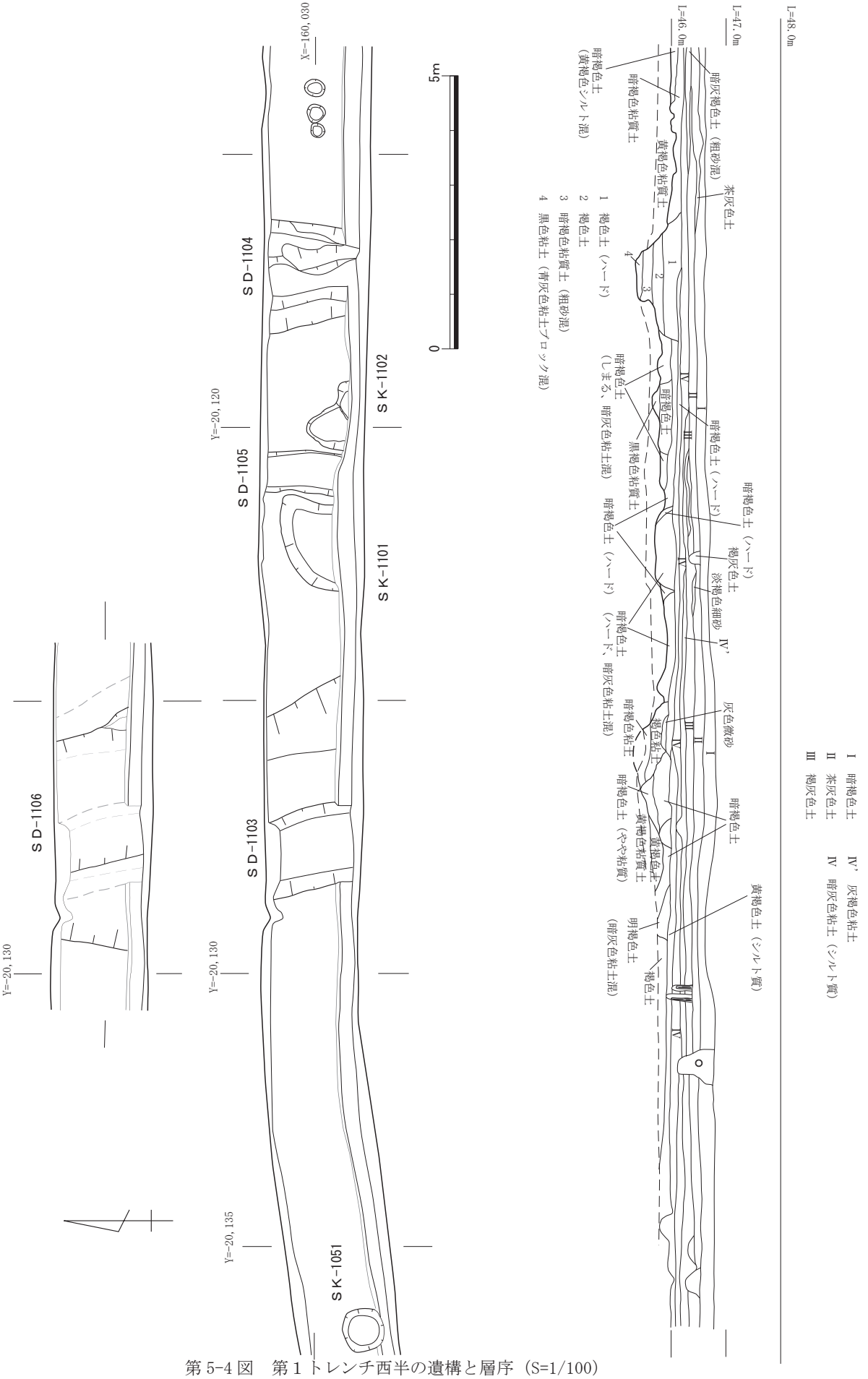
ＳＫ-2103　ＳＫ-2101 の北側東壁側で検出した、南北 0.8 ｍ、深さ 0.3 ｍの小規模な土坑である。古墳時代後期頃の須恵器や製塩土器片などが出土した。

ＳＫ-2104　ＳＫ-2103 の西側に隣接して検出した、南北 0.8 ｍ、深さ 0.4 ｍの小規模な土坑である。古墳時代後期頃の須恵器や製塩土器片などが出土した。

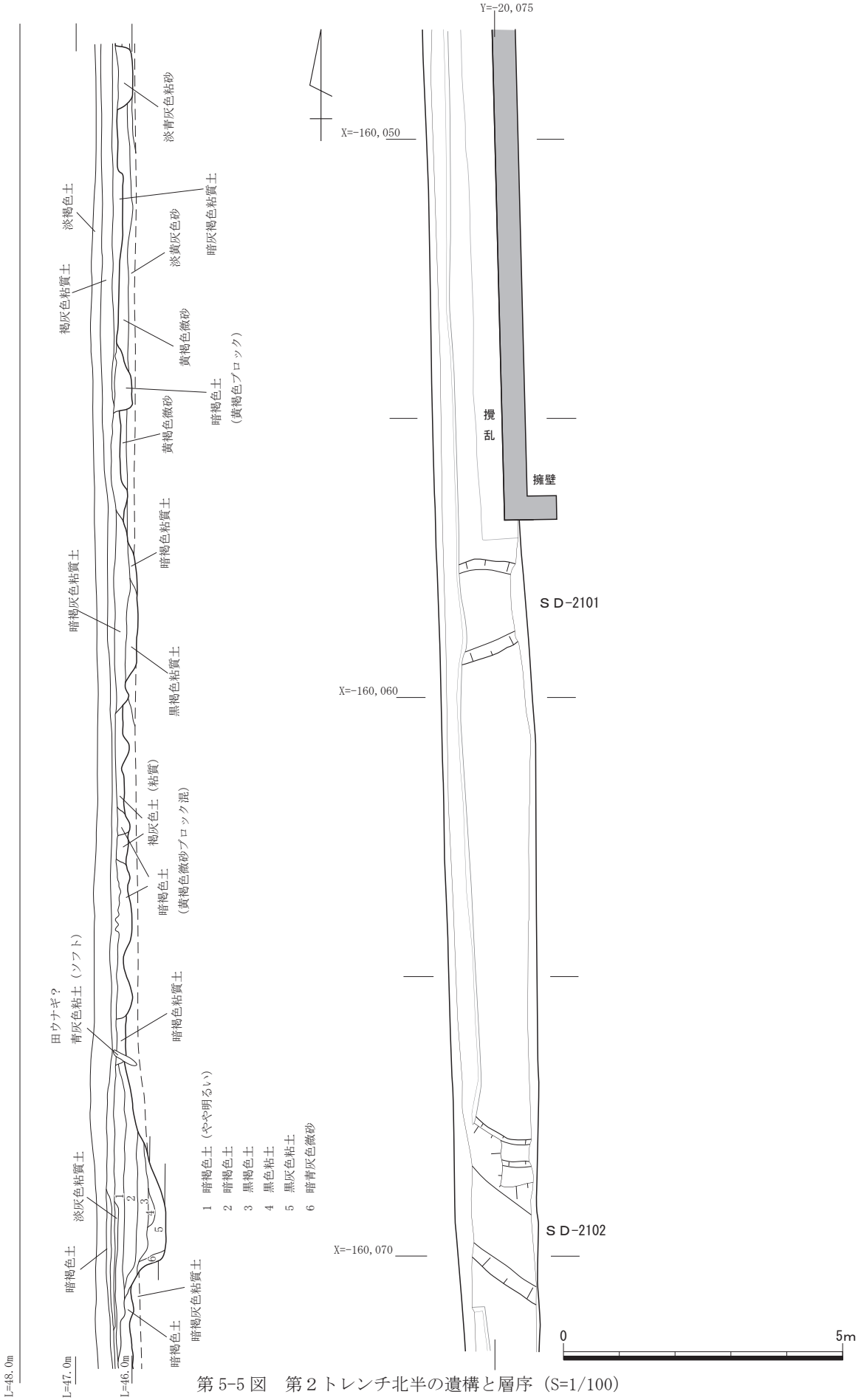
Pit-1101　第１トレンチ東半で検出した、東西 0.7 ｍ、深さ 0.5 ｍの小規模な土坑である。平面形は隅丸方形とみられるが、南半は調査区外となる。古墳時代後期頃の半完形の瑕や土師器坏などが出土した。土坑の中央付近からの出土であり、少なくとも柱根を抜き取った後に埋め



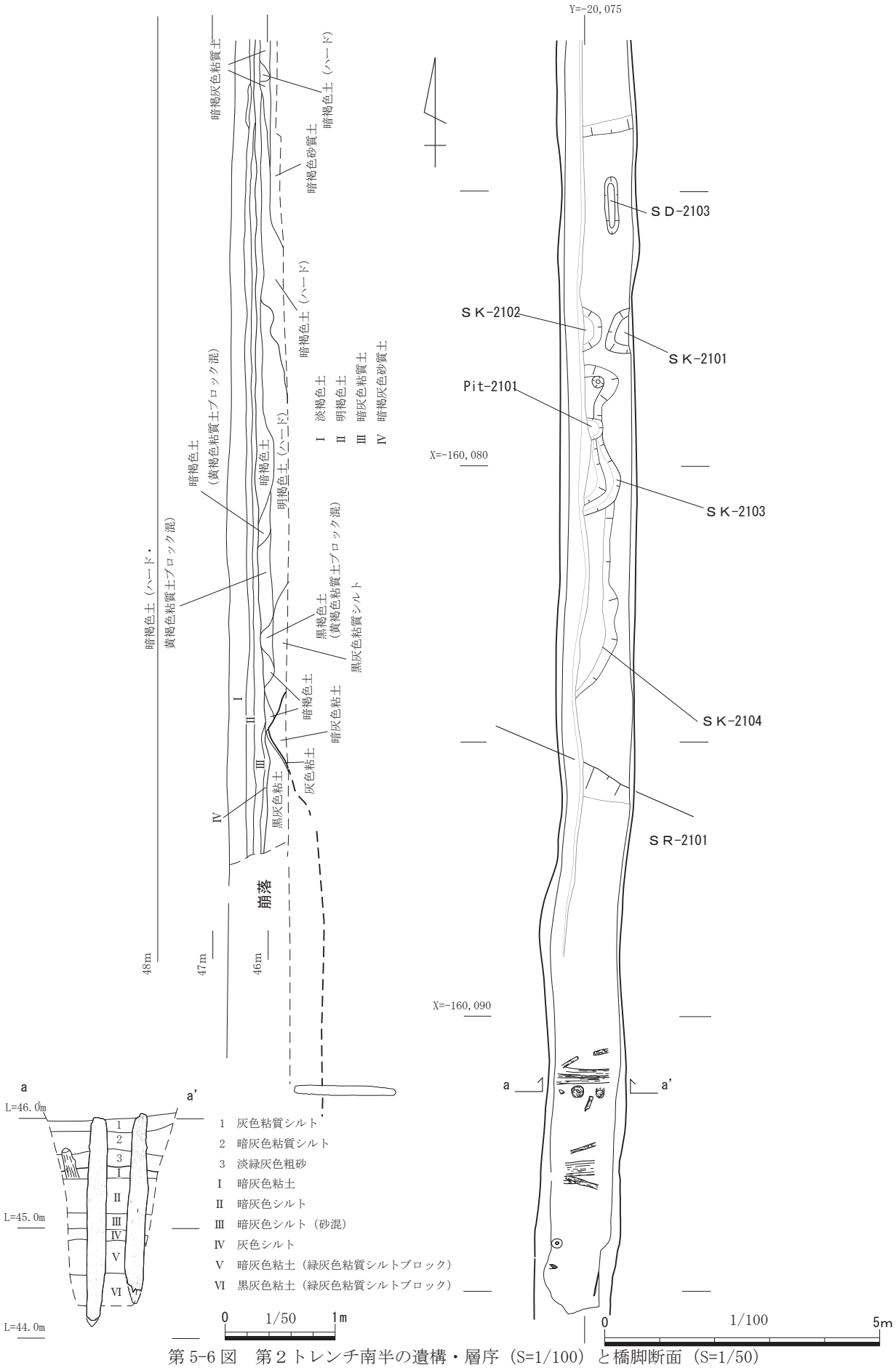
第5-3図　第1トレンチ東半の遺構と層序（S=1/100）



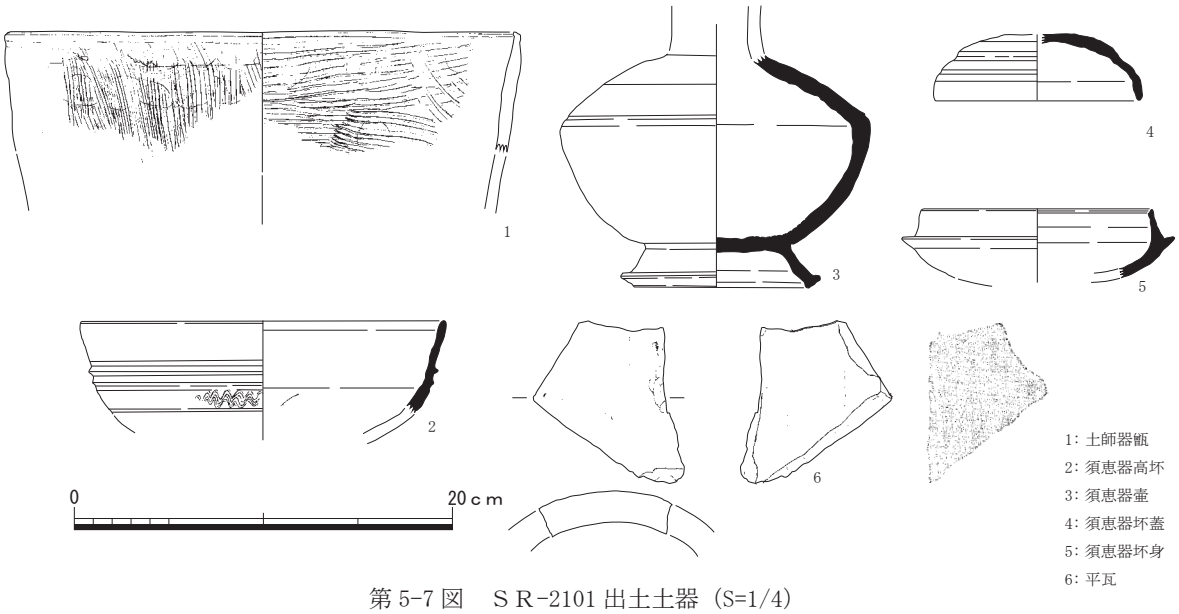
第5-4図　第1トレンチ西半の遺構と層序（S=1/100）



第5-5図　第２トレンチ北半の遺構と層序（S=1/100）



第5-6図　第2トレンチ南半の遺構・層序（S=1/100）と橋脚断面（S=1/50）



第5-7図　ＳＲ-2101出土土器（S=1/4）

られた可能性があるが、堆積からは抜き取りの痕跡が確認できないことから、そもそも本遺構が柱穴ではない可能性も考えられる。なお、この遺構の西肩はＳＤ-1102に切られているが、ＳＤ-1102は後述するように筋違道の西側側溝となる可能性があり、本遺構の位置づけについては慎重に検討する必要がある。

ＳＤ-1101　ＳＤ-1102の東側２ｍで検出した、北北西－南南東方向の小溝である。幅0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。遺物が僅少であるため詳細な時期は明らかでない。

ＳＤ-1102　第１トレンチ東半で検出した、北北西－南南東方向の溝である。幅1.5ｍ、深さ0.75ｍを測る。遺物は僅少であり、詳細な時期は明らかでない。その位置から、筋違道の西側側溝となる可能性が考えられる。ただし、北側200ｍで検出した第14次調査の筋違道西側側溝とは断面形状と溝幅が異なるため、今後の検証が必要である。

ＳＤ-1103　第１トレンチ中央で検出した、北北西－南南東方向の大溝である。重複するＳＤ-1106との切り合いがやや不明瞭であるが、調査時の溝幅は3.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。出土遺物は僅少であるが、古墳時代後期の須恵器等が出土していることから、古墳時代後期頃の遺構とみられる。

ＳＤ-1105　第１トレンチ中央で検出した、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍの南北方向の小溝である。遺物が僅少であるため詳細な時期は不明であるが、ＳＫ-1101、ＳＫ-1102に切られることから、古墳時代頃の遺構となる可能性がある。

ＳＤ-1106　ＳＤ-1103の下層で検出した、南北方向の大溝である。幅4.2ｍ、深さ0.7ｍを測る。面的な掘り下げをおこなっていないため、詳細な時期は明らかでない。

ＳＤ-2101　第２トレンチ北半で検出した東西方向の溝である。幅２ｍ、深さ0.4ｍを測る。顕著な遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでない。堆積土から、古墳時代後期～古代頃の遺構とみられる。

ＳＤ-2102　第２トレンチ北半で検出した北西－南東方向の溝である。幅2.3ｍ、深さ0.8ｍ

を測る。出土遺物は僅少であるが、古墳時代後期～古代頃の遺構とみられる。

ＳＲ-2101　第１トレンチ南端で検出した河跡である。北肩のみの確認であり、幅 10 m分を調査したが、南肩を確認していない。本調査地の南側で令和２年度に実施した筋違道第７次調査では、本遺構が拡がっていないことが確認された。両調査区の間には 10 mの未調査部分があるため、河跡の幅は 10 m以上 20 m以下ということになる。なお、狭小な調査区のうえ、壁の崩落が相次ぎ、層序をきちんと確認することができなかったため、遺構の深さは不明である。出土遺物は、古墳時代後期の土器を多く含むが、中層では７世紀後半頃の須恵器壷１点が口頸部を欠損した状態で出土しているほか、古代の瓦片の出土もあることから、飛鳥～奈良時代が主要な時期とみられるが(第 5-7 図)、開口していた期間が長い遺構であったと考えられる。また、遺構の走向がほぼ東西方向であることから、人工的な水路だった可能性も考えたい。

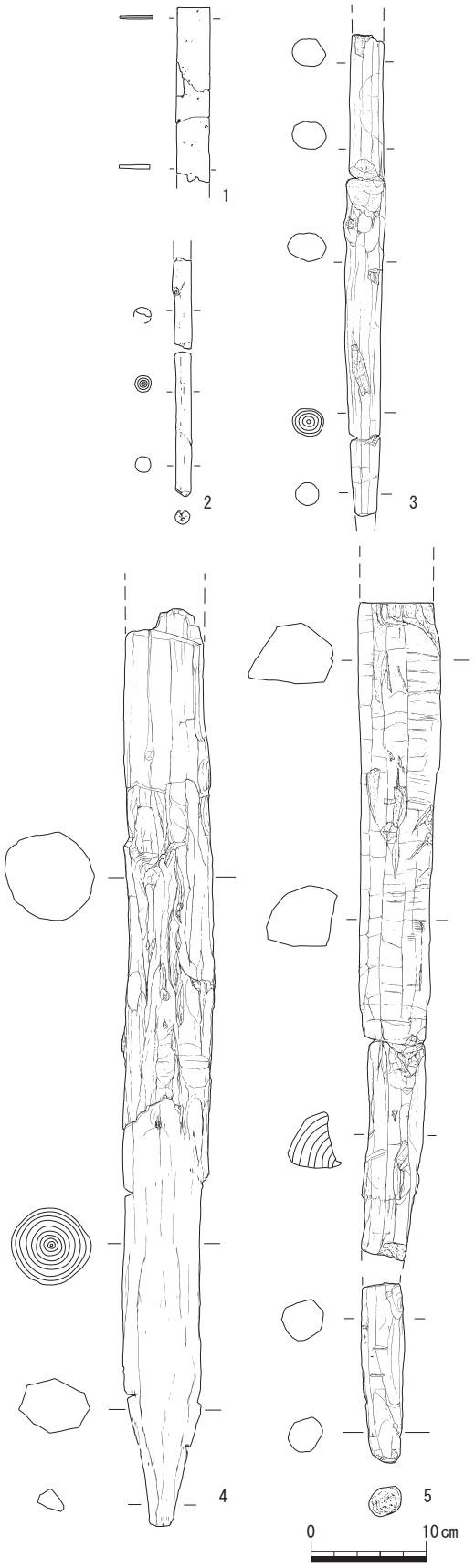
出土した橋脚のうち、工事により破壊される恐れのある２本を取り上げた（第 5-9 図)。いずれも打ち込んだ際に先端が潰れたためか、先端を欠損する。１は残存長 231cm、直径 27.5cm のマツ材で、側面全体が丁寧に加工されていた。２は残存長 204cm、直径 21.5cm のクリ材で、こちらも側面全体が丁寧に加工されていた。

中世

ＳＫ-2051　第２トレンチ西端で検出した円形の土坑である。直径 0.7 m、深さ 0.5 mを測る。遺物が僅少であるため詳細な時期は明らかでない。堆積土から、中世頃の遺構と考えられる。

３．まとめ

今回の調査の結果、筋違道の西側側溝とみられる溝１条を確認することができた。また、第１ト

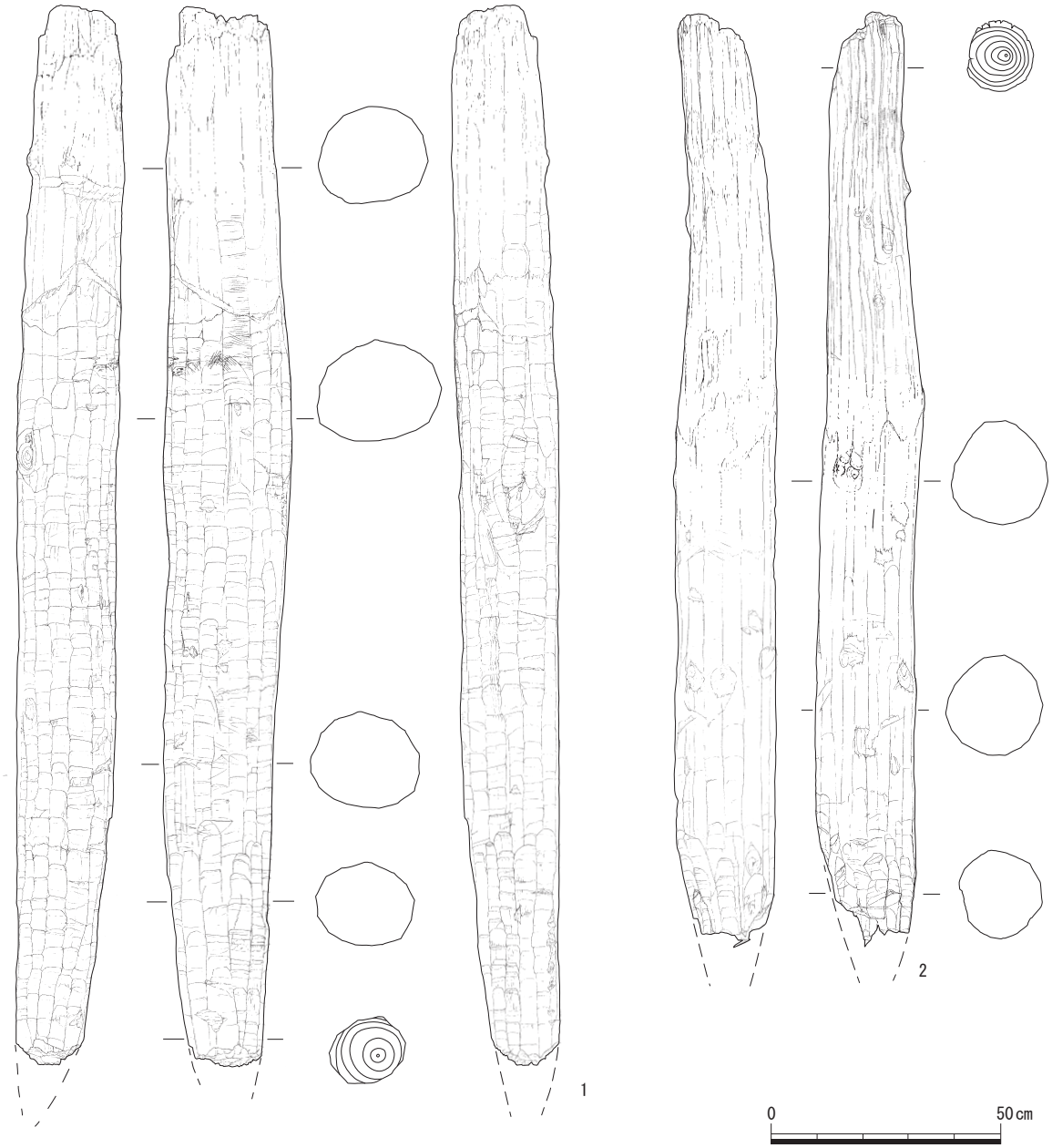


1：板　　3・4：丸太杭
2：用途不明品　　5：板杭

第 5-8 図　ＳＲ-2101 出土木製品（１）(S=1/6)

レンチ南端で古代頃の河跡状の堆積を確認したが、この遺構には橋脚などが遺存していた。筋違道の延長上に相当する地点での橋脚検出であり、古代道路跡を復元する上で重要な成果であったと考えられる。

なお、遺物包含層から縄文時代後期の土器片１点が出土している。保津・宮古遺跡中央～南部にかけて縄文時代後期の遺構・遺物が確認されており、本調査地付近にもその散布範囲が拡がることが確認できた。



第 5-9 図　ＳＲ-2101 出土木製品（２）(S=1/15)

写真 5-1　第１トレンチ全景（西から）

写真 5-2　ＳＤ-2101 検出状況（南から）

写真 5-3　ＳＤ-2101 完掘状況（北から）

写真 5-4　第２トレンチ全景（南から）

写真 5-5　ＳＲ-1101 橋脚検出状況（南から）

６.十六面・薬王寺遺跡　第 40 次調査（試掘調査 S-201902）

１．遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、田原本町西部の標高 47 m前後の沖積地に立地する。西側には飛鳥川が北流する。遺跡中央を南北に縦断する京奈和自動車道(国道 24 号線バイパス)の開発に伴って第１次調査がおこなわれ、古墳時代の集落遺構や中世の城館跡などを確認している。令和４年時点で 49 次調査までがおこなわれており、遺跡北部と南部に弥生時代末～古墳時代前期の集落遺構と墓域が拡がることが判明しているほか、遺跡中央部で古墳時代中・後期の集落遺構と古墳時代末頃の水田遺構を確認している。さらに、中世には保津氏の居館跡と推定される城館跡を確認しており、本遺跡がこれら複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は、自動車修理工場兼事務所の建築に先立って実施した。北側隣接地で実施した第 30 次調査では遺構密度が南側で低かったこともあり、まずは試掘調査により遺構の拡がりを確認し、遺構が確認された範囲について本調査区を設定して調査をおこなった。

２．試掘調査の成果

（１）層序

調査地は、以前は水田であったが近年の造成により１m前後の盛土がなされていた。ここでは、試掘第１トレンチ北側の層序を示す。

Ⅰ：淡灰褐色砂礫土（改良土？）〔検出標高 46.8 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗青褐色土（旧水田耕土）〔45.8 m〕、Ⅲ：淡茶灰色土（水田床土）〔45.7 m〕、Ⅳ：淡灰褐色土（中世遺物包含層）〔45.5 m〕、Ⅴ：淡灰褐色細砂（古代？堆積層）〔45.35 m〕、Ⅵ：黒褐色土（弥生時代遺物包含層）〔45.2 m〕、Ⅶ：暗灰色砂質土（ベース）〔45.0 m〕

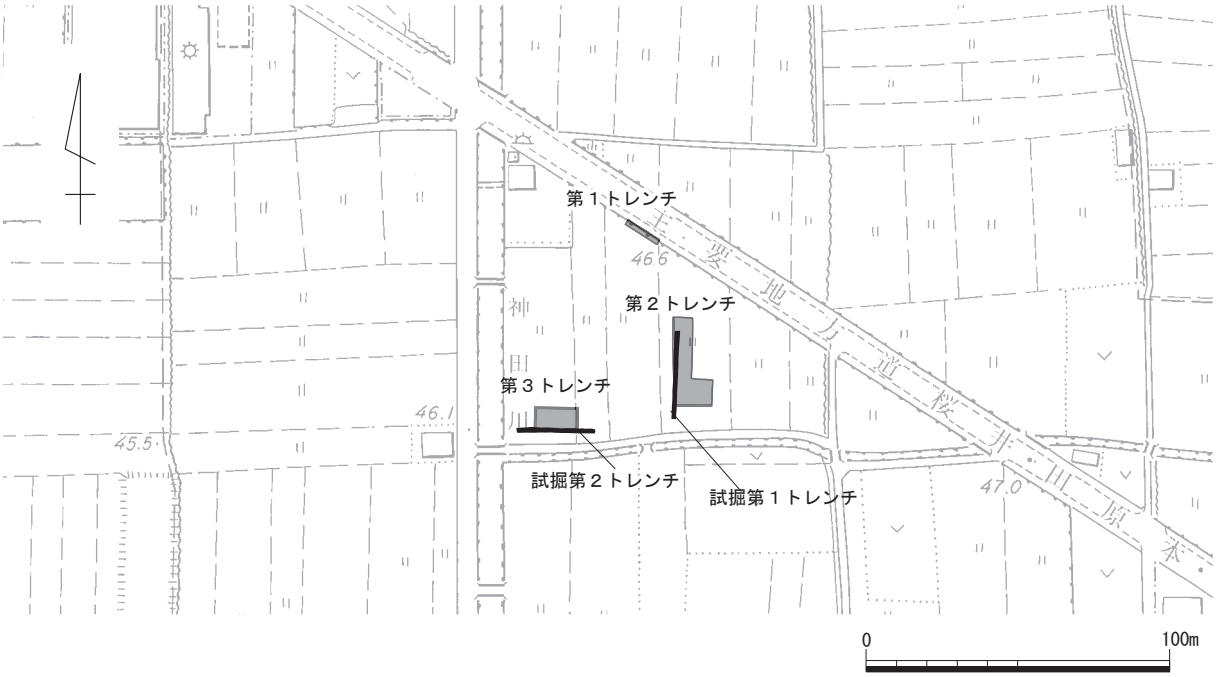
試掘第１トレンチ南半は第Ⅴ層に相当する河川状の堆積層が厚く拡がり、この状況は第２トレンチ全体でも同様である。試掘調査では、第Ⅴ層上面までを重機で除去し、遺構検出をおこなった。また、本調査でも第Ⅴ層上面までを重機で除去し、以下を人力で調査した。

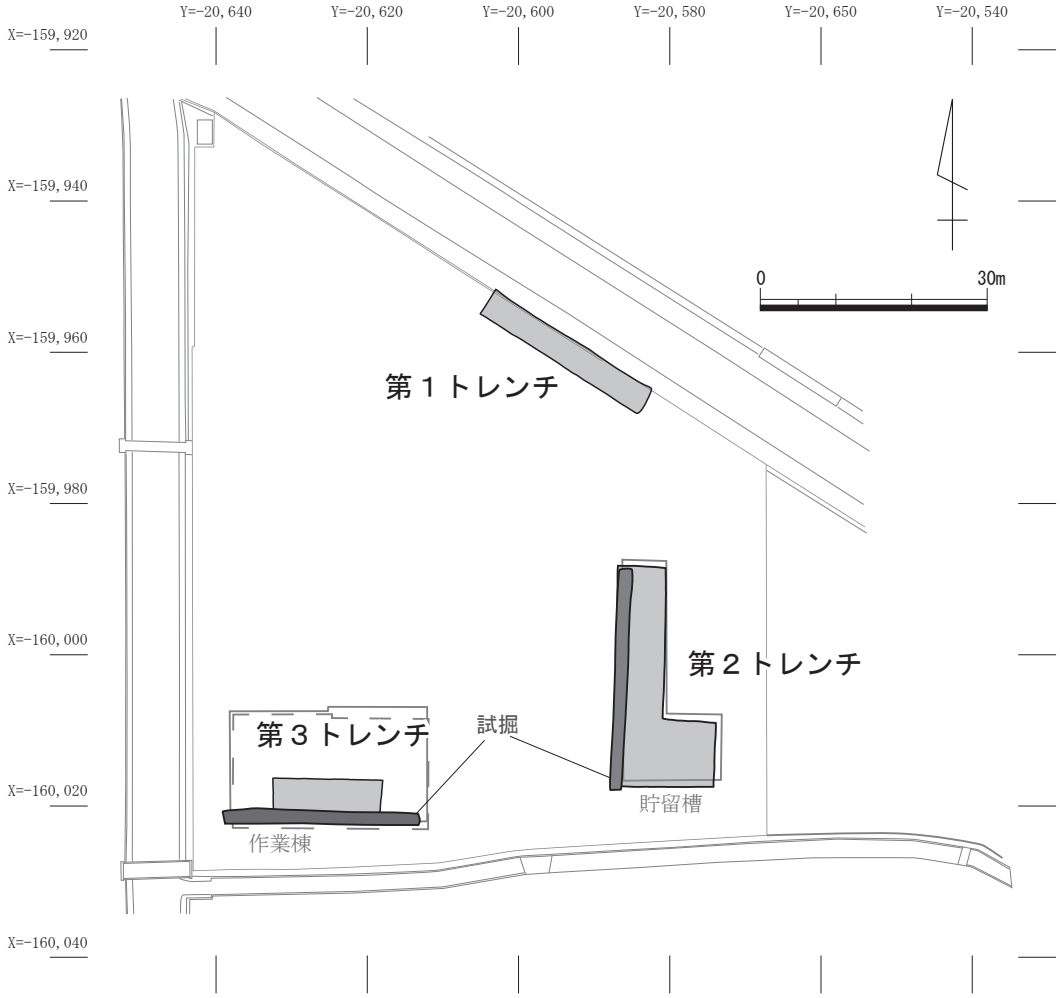
（２）調査の成果

試掘調査では、敷地東部の雨水貯留槽設置予定箇所に南北 29 m、幅 1.8 mの調査区（第１トレンチ）を設定し、敷地南西部の工場棟建築予定箇所に東西 26 m、幅 1.7 mの調査区（第２トレンチ）を設定した。

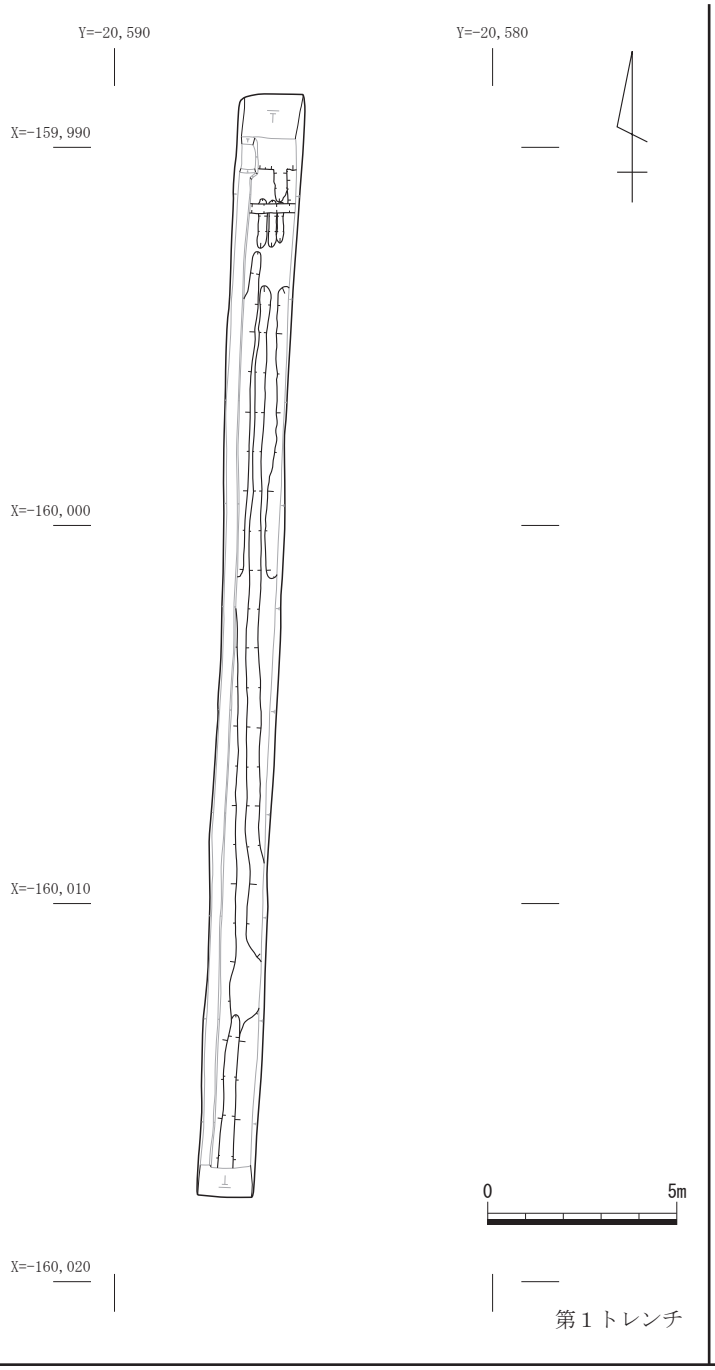
第１トレンチの成果

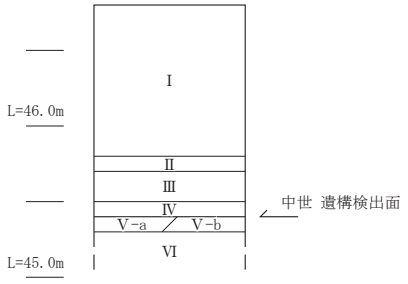
第１トレンチでは、調査区北半で黒褐色の堆積層を確認した。出土遺物等から、弥生時代後期の溝となる可能性が考えられた。また、中央～南半には砂質土で覆われる灰褐色粘質土層の拡がりが確認された。古代頃の水田遺構となる可能性が考えられた。これらの成果から、雨水貯留槽部分は本調査で対応することとなった。





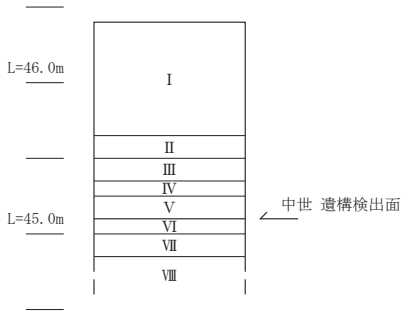
第 6-1 図　調査地の位置と調査区（上：S＝1/2, 500、下：S＝1/1, 000）





Ⅰ　淡灰褐色砂礫土　〔造成土〕
Ⅱ　暗青褐色土　〔旧水田耕土〕
Ⅲ　淡茶灰色土
Ⅳ　淡灰褐色土
Ⅴ-a　灰褐色粗砂　〔古代？洪水堆積層〕
Ⅴ-b　淡灰褐色細砂
（褐色シルトブロック）〔　〃　〕
Ⅵ　暗灰褐色土（粘砂質）

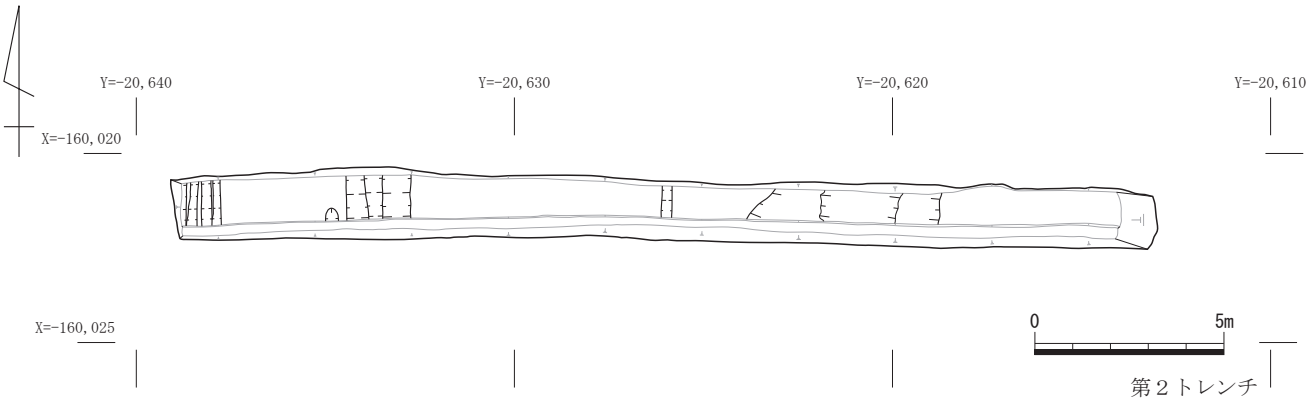
第１トレンチ　西壁北半



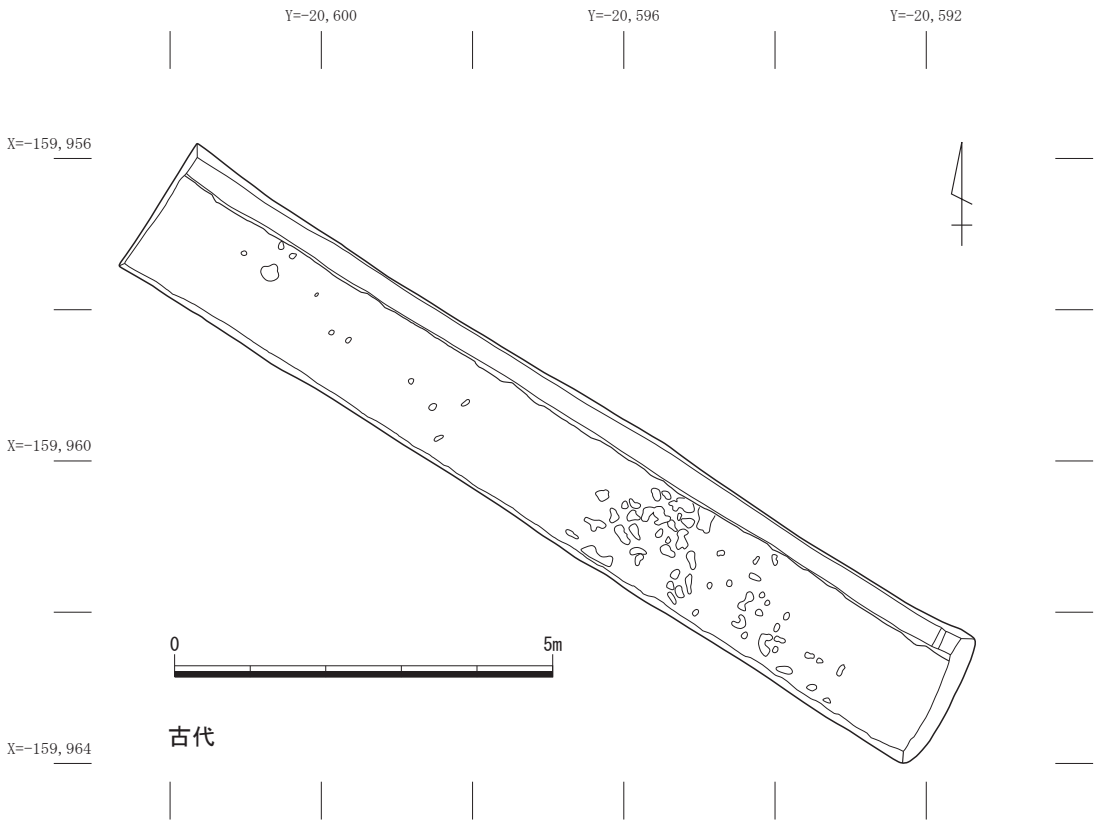
Ⅰ　淡灰褐色砂礫土　〔造成土〕
Ⅱ　暗青褐色土　〔旧水田耕土〕
Ⅲ　淡茶灰色土
Ⅳ　淡灰褐色土
Ⅴ　褐色土（シルト質、鉄分多し）
Ⅵ　淡灰色細砂
Ⅶ　暗灰褐色土（砂混）
Ⅷ　暗灰褐色粘質土（しまる）

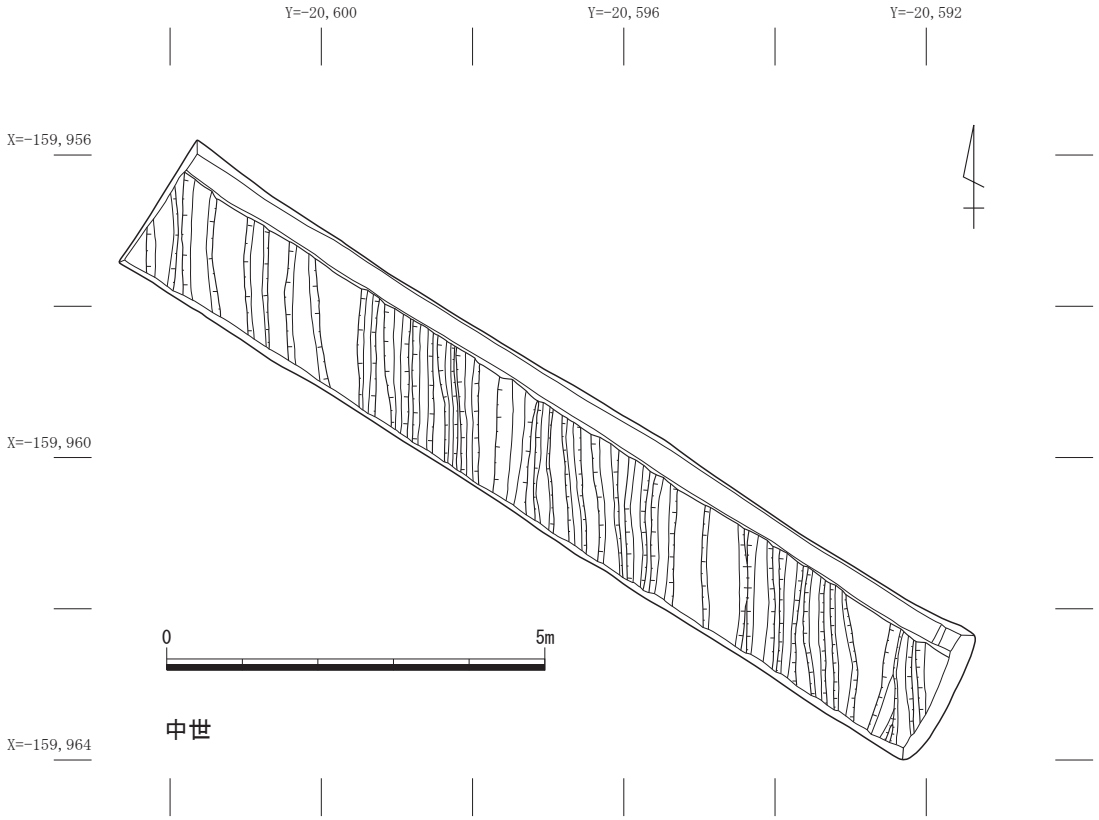
第２トレンチ　南壁西半

0　1m

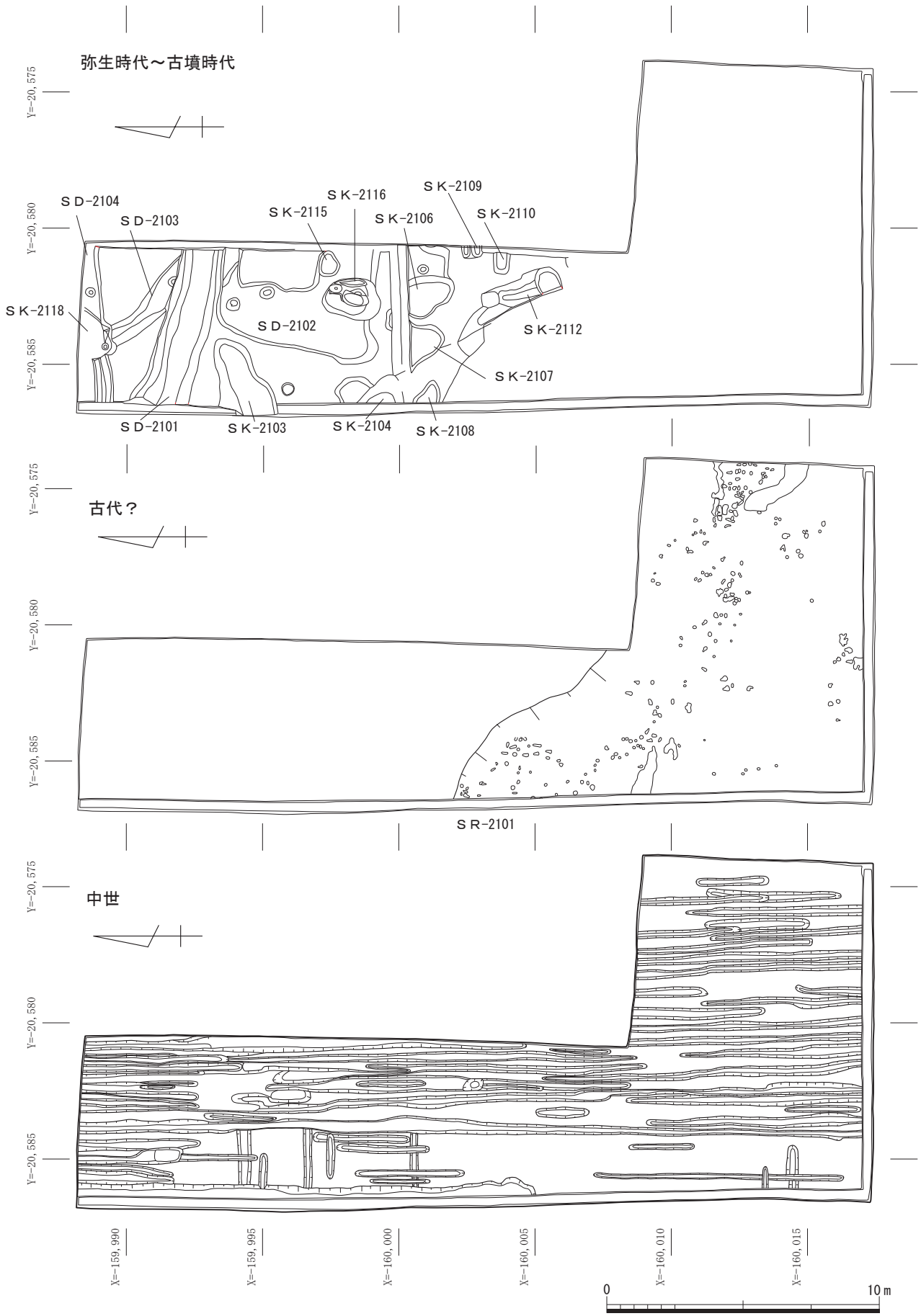


第６-2図　試掘調査区平面図（左上・下：S＝1/200）および土層柱状図（右上：S＝1/50）

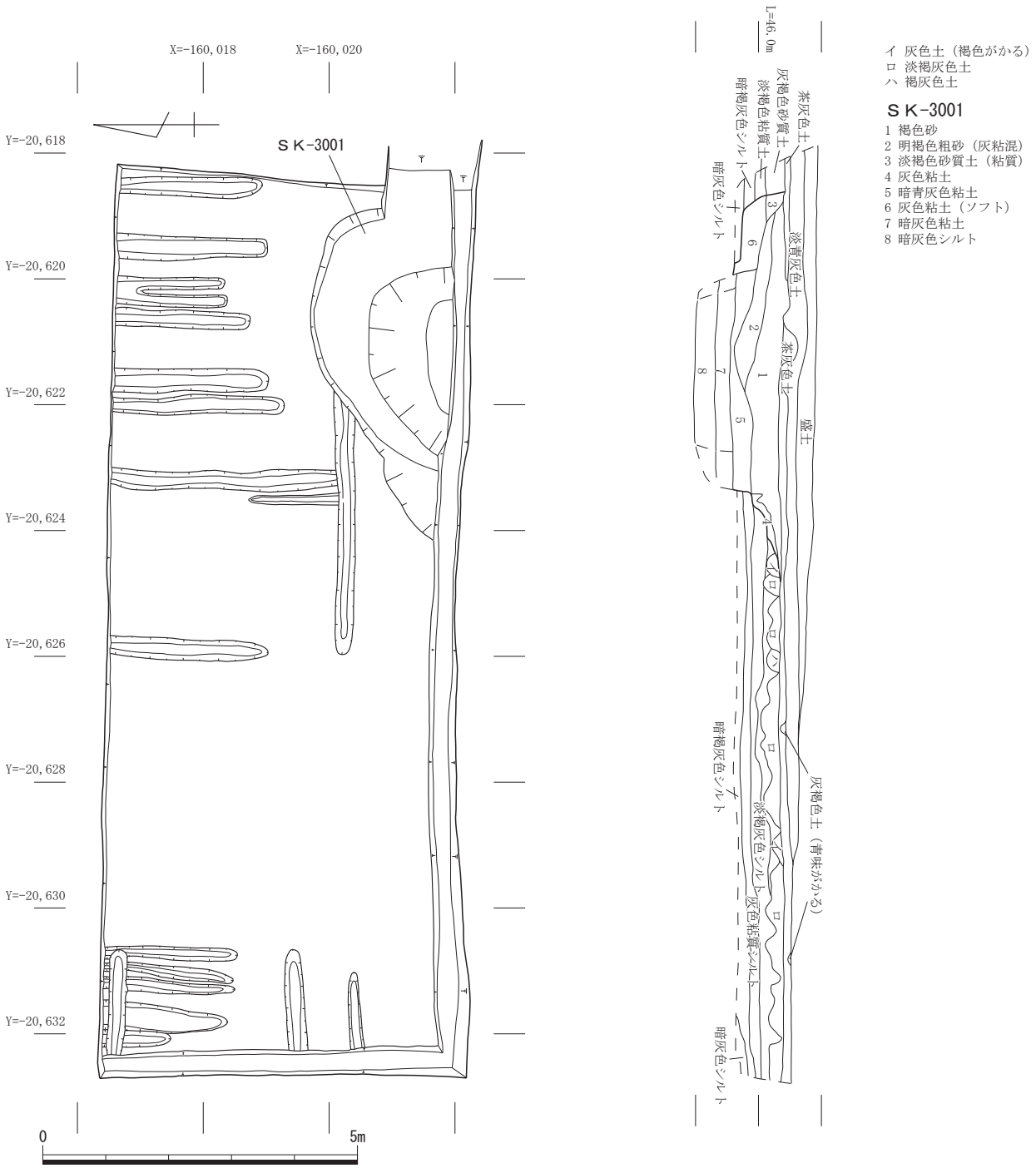




第 6-3 図　第 1 トレンチ平面図（S＝1/100）



第6-4図　第２トレンチ平面図（S=1/200）



第 6-5 図　第３トレンチ平面図・南壁断面図（Ｓ＝1/100）

第２トレンチの成果

調査区東半で中世頃の砂質土堆積を確認した。当初は中世頃の河跡の可能性を考えたが、本調査の結果中世の井戸であることが判明している。西半については第１トレンチと同様の砂質土堆積を確認した。これらの成果から、第２トレンチ部分は中世の堆積の性格を確認すること、水田の可能性がある粘質土堆積の確認の２点を目的に本調査で対応することとした。

３．第 40 次調査の成果

試掘調査の結果を受け、本調査を実施した。北側擁壁部分についても柱状改良が密におこなわれることとなったため、北側擁壁部分を第１トレンチ、雨水貯留層部分を第２トレンチ、工場棟部分を第３トレンチとして調査区を設定した。

弥生時代後期

ＳＫ－2103　第２トレンチ北西部で検出した土坑である。南北 3.3 ｍ、東西は西端が調査区外となるため不明、深さ 0.3 ｍを測る。弥生時代後期の遺構とみられる。

ＳＫ－2104　第２トレンチ中央西で検出した楕円形の土坑である。南北 2.6 ｍ、深さ 0.8 ｍを測る。弥生時代後期の遺構とみられる。

ＳＫ－2105　ＳＫ－2106 に西半を切られる隅丸方形の土坑である。南北約２ｍ、深さ 0.3 ｍ。弥生時代後期の遺構とみられる。

ＳＫ－2106　第２トレンチ中央で検出した楕円形の土坑である。長軸２ｍ、短軸 1.6 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。弥生時代後期の遺構とみられる。

ＳＫ－2107　ＳＫ－2106 の西側で検出した楕円形の土坑である。東西２ｍ、深さ２ｍを測る。弥生時代後期の遺構とみられる。

ＳＫ－2108　第２トレンチ中央西で検出した楕円形の土坑である。南北１ｍ、西側は調査区外となるため正確な規模は不明、深さ 0,.2 ｍを測る。弥生時代後期の遺構とみられる。

ＳＫ－2110　第２トレンチ中央東で検出した隅丸方形の土坑である。南北 0.6 ｍ、深さ 0.2 ｍ、東半が調査区外となるため正確な規模は不明。弥生時代後期の遺構とみられる。

ＳＫ－2112　第２トレンチ中央南で検出した土坑である。南西側が古代の河跡に切られるため正確な規模は不明。深さ 0.5 ｍを測る。完形の長頸壷等が出土した（第 6-6 図）。胴部と頸部の境界に粘土紐を貼付けて記号文としている。遺物より、弥生時代後期前半の遺構とみられる。

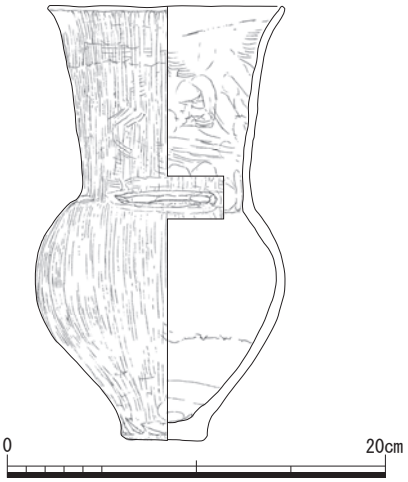
ＳＫ－2116　第２トレンチ中央北で検出した楕円形の土坑である。南北 2.2 ｍ、東西 1.6 ｍ、深さ 0.8 ｍを測る。弥生時代後期の高坏等が出土した。

ＳＤ－2102　第２トレンチ北半で検出した、平面コの字形の溝である。幅 2.2 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。弥生時代後期前半頃の土器が出土した。

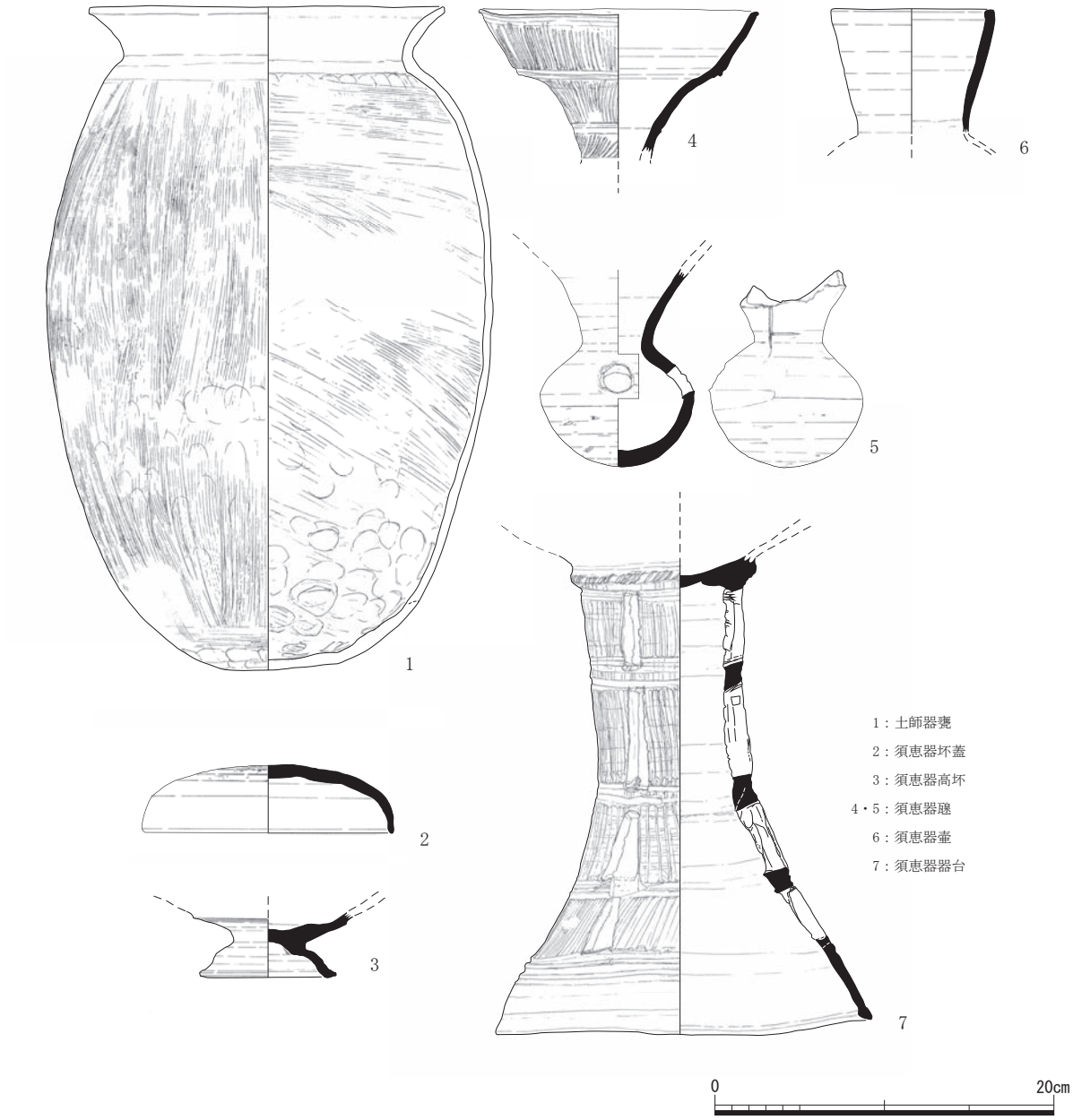
ＳＤ－2103　第２トレンチ北側で検出した、北西－南東方向の溝である。幅１ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。弥生時代後期の土器片等が出土した。

古墳時代

ＳＤ－2101　第２トレンチ北半で検出した西北西－東南東方向の溝である。幅 1.2 ｍ、深さ 0.4 を測る。6 世紀頃の遺物が出土した（第 6-7 図）。



第 6-6 図　ＳＫ-2112 出土遺物（Ｓ＝1/4）



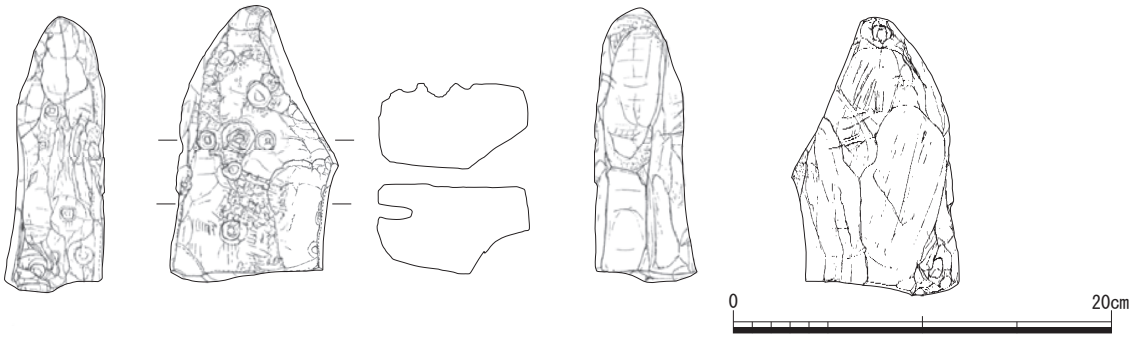
第 6-7 図　ＳＤ-2101 出土遺物（Ｓ＝1/4）

１は土師器甕で、外面に薄く煤が付着する。５の須恵器瓶は、頸部にヘラ記号を持つ。７の須恵器器台は脚部のみの出土で、上２段が方形、下２段が台形のスカシ４段が３方向に設けられている。

古代

ＳＲ-2101　第２トレンチ南半で検出した河跡である。北肩のみの検出であり、幅等の規模は明らかでない。なお、砂層の厚さは最大 0.4 ｍで、その下に灰褐色粘質土層が拡がる。この粘質土層上面で足跡状の遺構を多数確認した。

落ち込み１　第１トレンチの第２遺構面で、足跡状の遺構を検出した。古墳時代後期～古代頃の水田関連の遺構とみられる。



第 6-8 図　用途不明石製品（Ｓ＝1/4）

中世

ＳＫ -3001　第３トレンチ東南部で検出した井戸である。直径６ｍ前後、深さ 1.3 ｍを測る。北宋銭「元祐通宝」１点など中世の遺物が出土した。

小溝群　調査区全体で南北方向を主体とする小溝群を確認した。中世の耕作に伴うものと考えられる。

４．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期前半～後半の集落関連遺構と遺物を確認した。これまで十六面・薬王寺遺跡では、弥生時代後期後半からの集落遺構および墓は確認していたが、後期初頭に遡る遺構の確認は今回が初めてとなる。集落規模は小さいとみられるものの、本遺跡に当該時期の集落が存在することが確認できたことは、この地域の弥生時代の開発状況、特に唐古・鍵遺跡を中心とする集落群の動向を考える上で重要な成果と考えられる。

古墳時代後期の遺構としては溝１条などを確認した。この時期には北側隣接地の第 30 次調査で耕作に関連する可能性がある溝を検出しているが、今回検出した遺構もこれにちかい性格の遺構となる可能性がある。

古代頃の粗砂堆積下で足跡状の遺構を多数確認した。本調査地では一部弥生時代遺物包含層のある微高地部分を除き、洪水堆積下に耕地だった可能性のある粘質土層が拡がる状況であったと考えられる。

中世の遺構としては、素掘り小溝群を確認したほか、規模の大きな井戸１基を確認した。隣接する第 30 次調査地でも広い調査区内に１基のみ井戸が掘削されており、集村化する以前の小規模な居住単位の集落に伴う井戸であった可能性がある。

写真 6-1　第１トレンチ中世完掘全景（北西から）

写真 6-2　第１トレンチ古代検出状況（南東から）

写真 6-3　第２トレンチ古代遺構完掘（北西から）

写真 6-4　第２トレンチ全景（北から）

写真 6-5　ＳＤ -2103 弥生土器出土状況（西から）

写真 6-6　第３トレンチ全景（東から）

7. 十六面・薬王寺遺跡　第 41 次調査

1．遺跡・既調査の概要

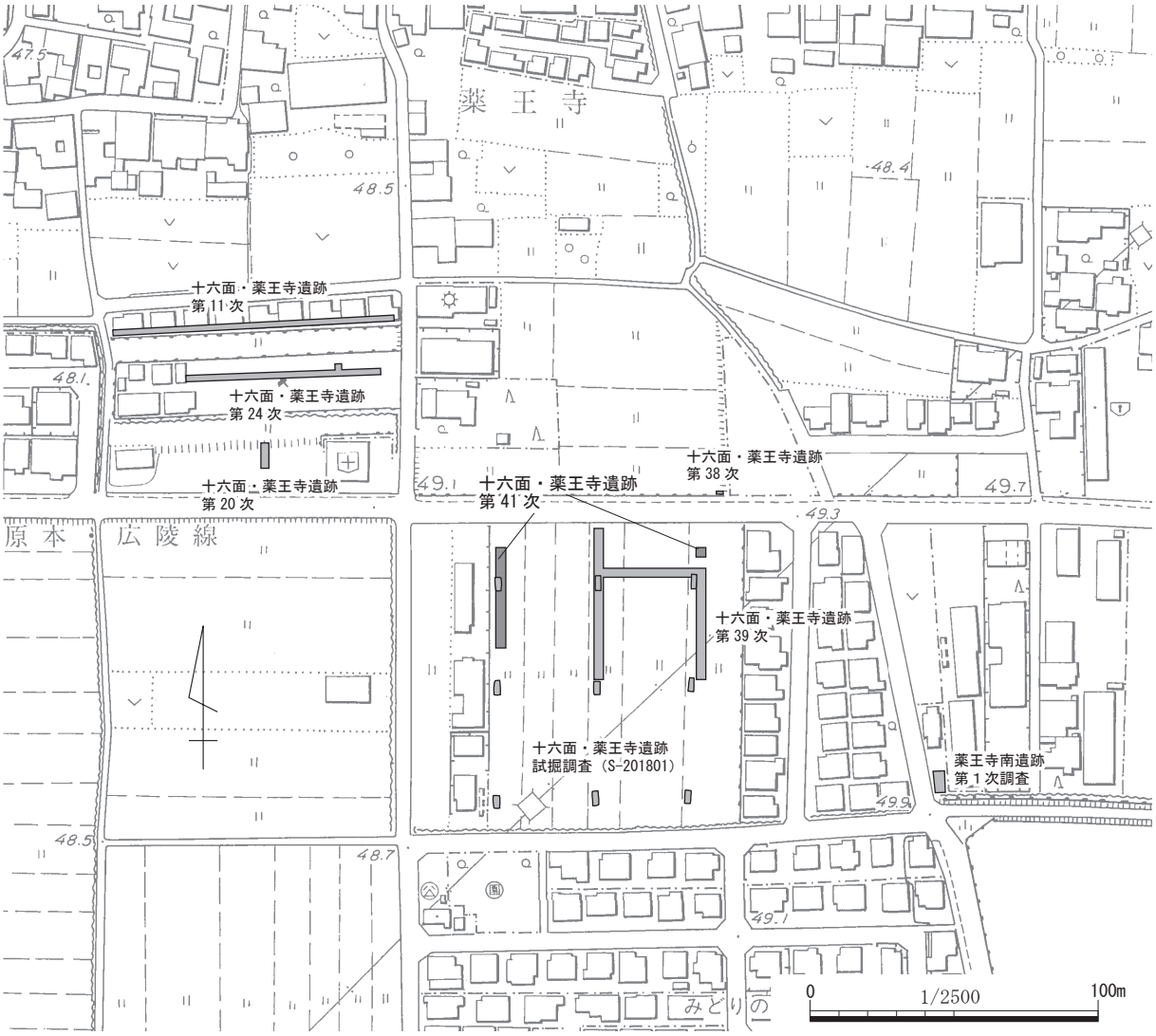
十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地のほぼ中央、飛鳥川東岸の沖積地に位置する。これまでの調査で、弥生時代～古墳時代の集落、中世の城館跡などからなる複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は、遺跡南東端付近での宅地造成に伴って実施した。平成 30 年度に開発計画地全体で試掘調査を実施した結果、敷地北半で遺構を確認したため、同年度中に第 1 期工事部分で第 39 次調査を実施し、令和元年度に第 2 期工事部分で第 41 次調査を実施した。

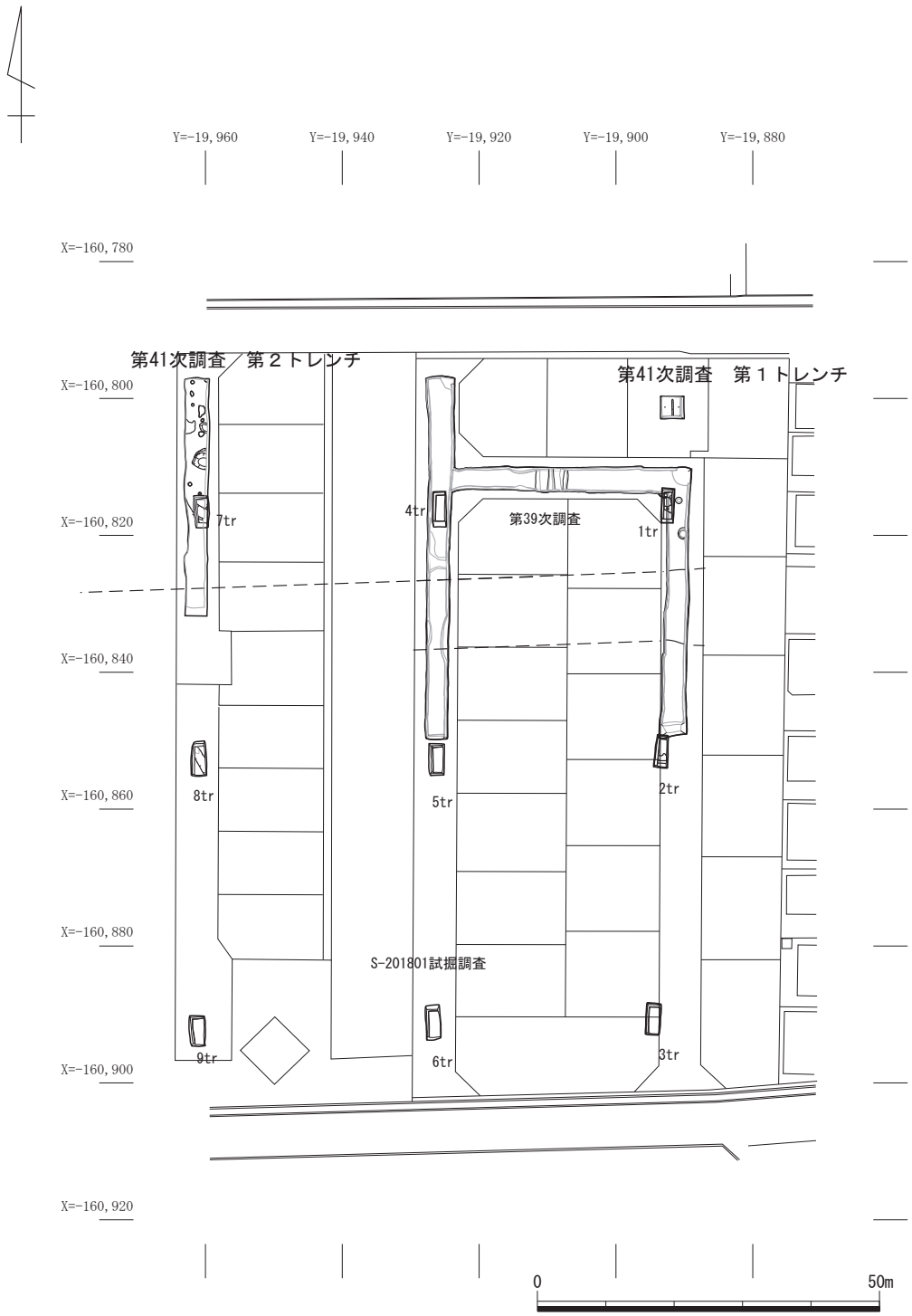
2．調査の成果

（1）層序

今回の調査地は、第 39 次調査の時点で厚さ 0.8 ～ 1 mの客土により造成されていた。ここ



第 7-1 図　調査地の位置（S=1/2,500）



第7-2図　調査区位置図（Ｓ＝1/1,000）

では遺構の集中する第２トレンチ北半の層序を示す。なお、第２トレンチ南半は落ち込み状の地形が拡がっていたほか、第１トレンチでは中世遺物包含層下が河跡状の堆積となっていた。

Ⅰ：黄褐色砂礫土（造成土）〔検出標高 49.1 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：淡青灰色粘質土（旧水田耕土）〔48.1 m〕、Ⅲ：茶灰色土（近世遺物包含層）〔47.9 m〕、Ⅳ：灰色粘土（中世遺物包含層）〔47.7 m〕、Ⅴ：暗灰褐色粘質土〔47.6 m〕、Ⅵ：暗褐灰色粘質土〔47.4 m〕、Ⅶ：黄褐色シルト（以下ベース）〔47.2 m〕、Ⅷ：淡緑灰色シルト〔46.8 m〕

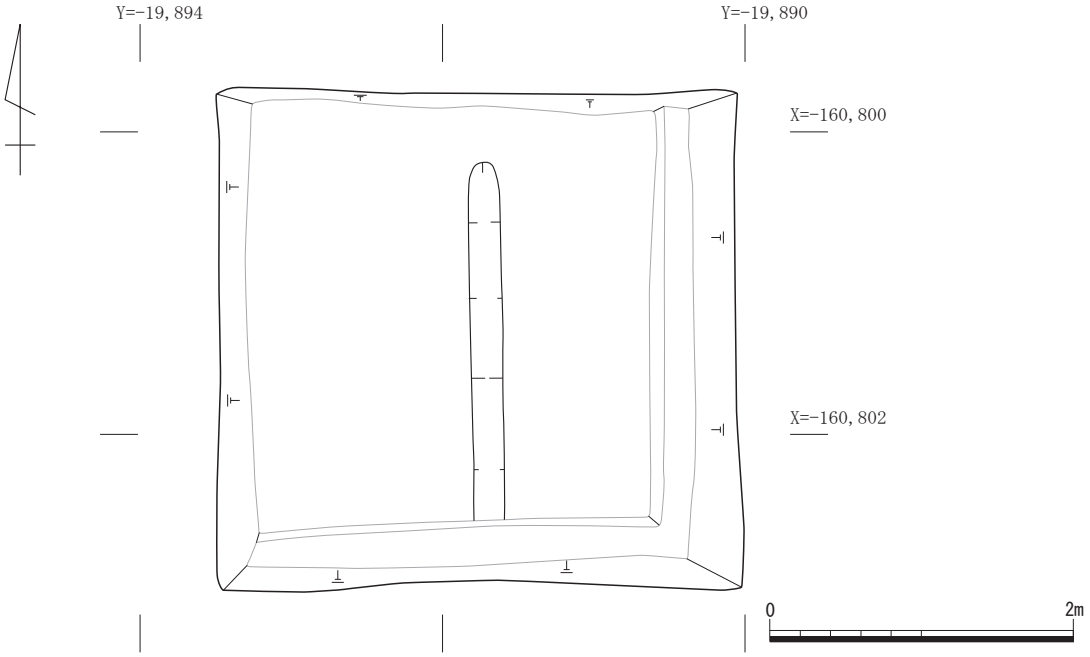
古墳時代後期～中世の遺構は第Ⅴ層上面で、古墳時代中期の遺構は第Ⅵ層上面で、古墳時代前期の遺構は第Ⅶ層上面でそれぞれ検出した。

（２）第１トレンチの成果

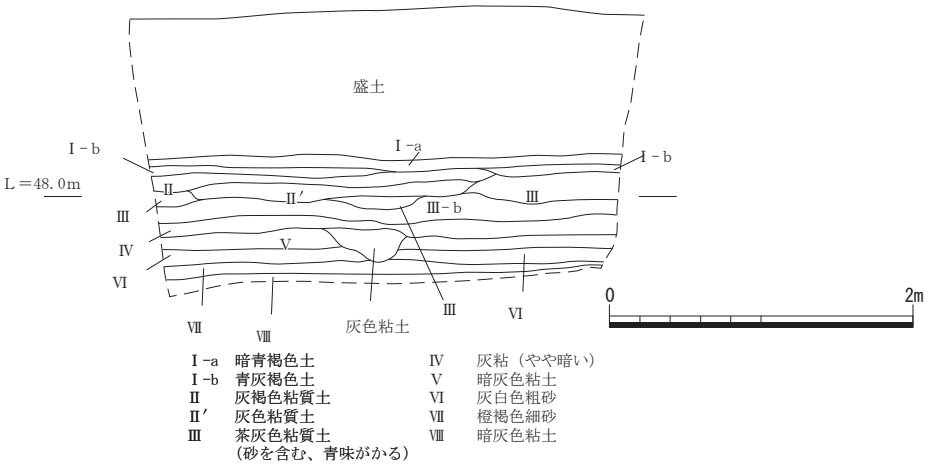
第１トレンチは第 39 次調査実施後の設計変更に対応して設定した 3.3 × 3.3 ｍの小規模なもので、第 39 次調査地の北東部に相当する。

河跡　調査区全体が河跡となっていた。調査区外に拡がるため、河跡の規模は明らかでない。掘削をおこなっていないため、深さも不明。第 39 次調査のＳＲ -3051 と同一の遺構となる可能性が高い。遺物は確認していないため時期は明らかでないが、中世以前の遺構とみられる。

ＳＤ -1001　調査区中央で確認した南北方向の小溝である。中世の耕作に伴うものと考えられる。



第7-3図　第１トレンチ平面図（Ｓ＝1/50）



第7-4図　第１トレンチ南壁断面図（Ｓ＝1/50）

（３）第２トレンチの成果

第２トレンチは、事前に実施した試掘調査成果から、敷地南半が遺跡外となることが判明していたため、敷地西側の道路設置予定箇所の北寄りに南北 35 m、幅 3.35 mで設定した。

古墳時代前期

ＳＫ -2170　調査区北西端で検出した平面不定形の土坑である。調査区外に拡がるため規模は明らかでない。深さ 0.1 mを測る。古墳時代前期頃の遺構とみられる。

ＳＫ -2171　調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑である。南北 1.8 m、東側は調査区外に拡がるため東西の規模は不明。深さ 0.2 mを測る。古墳時代前期頃の遺構とみられる。

ＳＫ -2172　調査区北西部で検出した楕円形の土坑である。長軸 1.4 m、短軸 0.7 m、深さ 0.1 mを測る。古墳時代前期頃の遺構とみられる。

ＳＫ -2173　調査区北東部で検出した土坑である。南北２m、深さ 0.4 mを測る。東半が調査区外に拡がるため平面形等は明らかでない。古墳時代前期頃の遺構とみられる。

ＳＫ -2174　調査区北部で検出した円形の土坑である。直径 1.3 m、深さ 0.1 mを測る。

ＳＤ -2170　調査区北部で検出した東西方向の小溝である。幅 0.6 m、深さ 0.5 mを測る。

古墳時代中期

ＳＫ -2151　調査区北端で検出した楕円形の土坑である。長軸 0.8、短軸 0.5 m、深さ 0.2 mを測る。土師器高坏等の古墳時代中期の土器が出土した（第 7-7 図１・２）。

ＳＫ -2162　調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長軸 1.1 m、短軸１m、深さ 0.4 mを測る。遺構面から、古墳時代中期頃の遺構とみられる。

Pit 群　調査区北半で、多数の Pit を確認した。建物に伴う柱穴とみられるが、全体に密集して検出したため、建物構造の復元には至っていない。遺構面から、古墳時代中期の遺構とみられる。

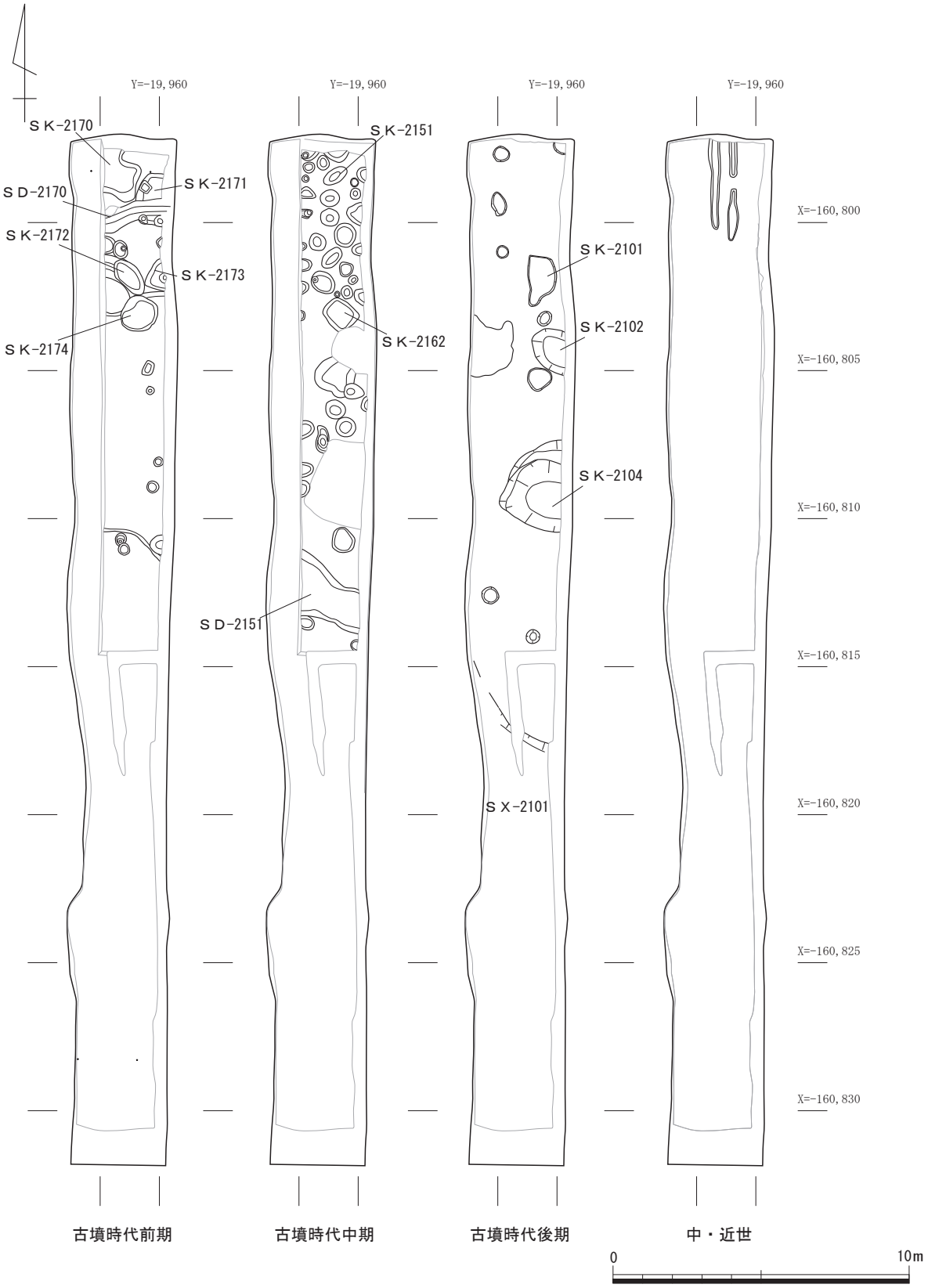
ＳＤ -2151　調査区中央で検出した西北西－東南東方向の溝である。幅 1.5 m、深さ 0.5 mを測る。遺構面から、古墳時代中期頃の遺構とみられる。

古墳時代後期

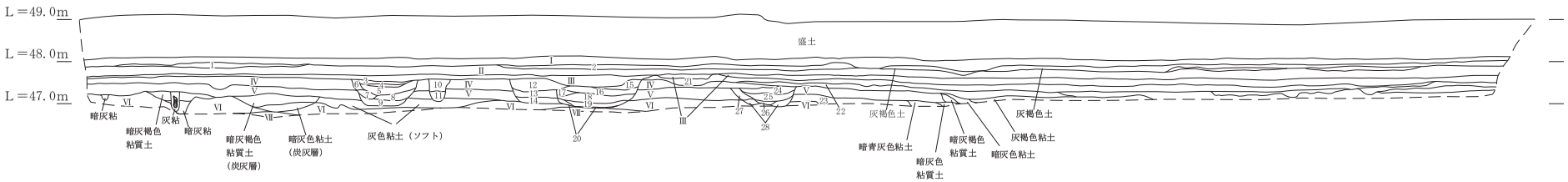
ＳＫ -2101　調査区北部で検出した不定形の土坑である。南北 1.7 m、東西１m、深さ 0.1 mを測る。遺構面から、古墳時代後期頃の遺構とみられる。

ＳＫ -2102　調査区北半東端で検出した土坑である。西半のみ検出した。直径 1.5 m､深さ 0.6 mを測る。埋土をふるいがけをしたところ、多量の炭灰とともに製塩土器や滑石製臼玉、碧玉剝片などが出土した。また、古墳時代後期の須恵器壷１点（第 7-7 図３）が出土した。

ＳＫ -2104　調査区中央で検出した大型の土坑である。東端は調査区外となるため正確な規模は明らかでない。土師器・須恵器等多数の土器が出土した（第 7-8 図）。また、埋土をふるいがけしたところ、多量の炭灰とともに製塩土器や滑石製臼玉や碧玉剝片が出土した。製塩土器は、コップ形でタタキがあるものが 33.56 ｇ、コップ形でタタキがないものが 1,621.03 ｇ、椀型ものが 13.85 ｇで合計 1,668.44 ｇであった。古墳時代中期後半～後期の遺構と考えられる。



第7-5図　第２トレンチ平面図（Ｓ＝1/200）



Ⅰ　淡青灰色粘質土（旧耕土）
Ⅱ　茶灰色土
Ⅲ　灰粘（黄斑）
Ⅳ　暗灰褐色粘質土
Ⅴ　暗褐灰色粘質土
Ⅵ　黄褐色シルト
Ⅶ　淡緑灰色シルト

1　淡青灰色土
2　淡褐色粘質土
21　暗灰褐色粘土（黄斑）
22　暗灰褐色粘質土
23　暗灰褐色土（粘質）

ＳＫ-2102

3　暗灰褐色粘質土
4　炭灰層
5　暗灰色粘土（ハード）
6　暗褐色土（灰味がかる）
7　暗灰褐色粘質土
8　暗灰色粘土（黄褐色シルトブロック）
9　灰色粘土（黄褐色シルトブロック）
10　暗灰色粘土（炭混じり）
11　暗灰色粘土

ＳＫ-2104

12　橙褐色土（炭少量混じり）
13　暗灰褐色粘質土
14　暗灰色粘土（ソフト）
15　灰褐色粘質土
16　暗灰褐色粘質土
17　炭灰層
18　暗灰色粘土
19　籾殻層
20　暗灰色粘土

ＳＤ-2151

24　暗褐灰色粘質土（炭混じり）
25　暗灰色粘土
26　灰色粘土（淡黄灰色シルトブロック）
27　暗灰色粘質土（淡黄灰色シルトブロック）
28　灰色粘土（黄褐色微砂ブロック）

第7-6図　第２トレンチ東壁断面図（Ｓ＝1/150）

0　10m

写真 7-1　ＳＫ -2102 完掘状況（西から）

写真 7-2　ＳＫ -2104 完掘状況（西から）

写真 7-3　第２トレンチ古墳時代中期の遺構（北から）

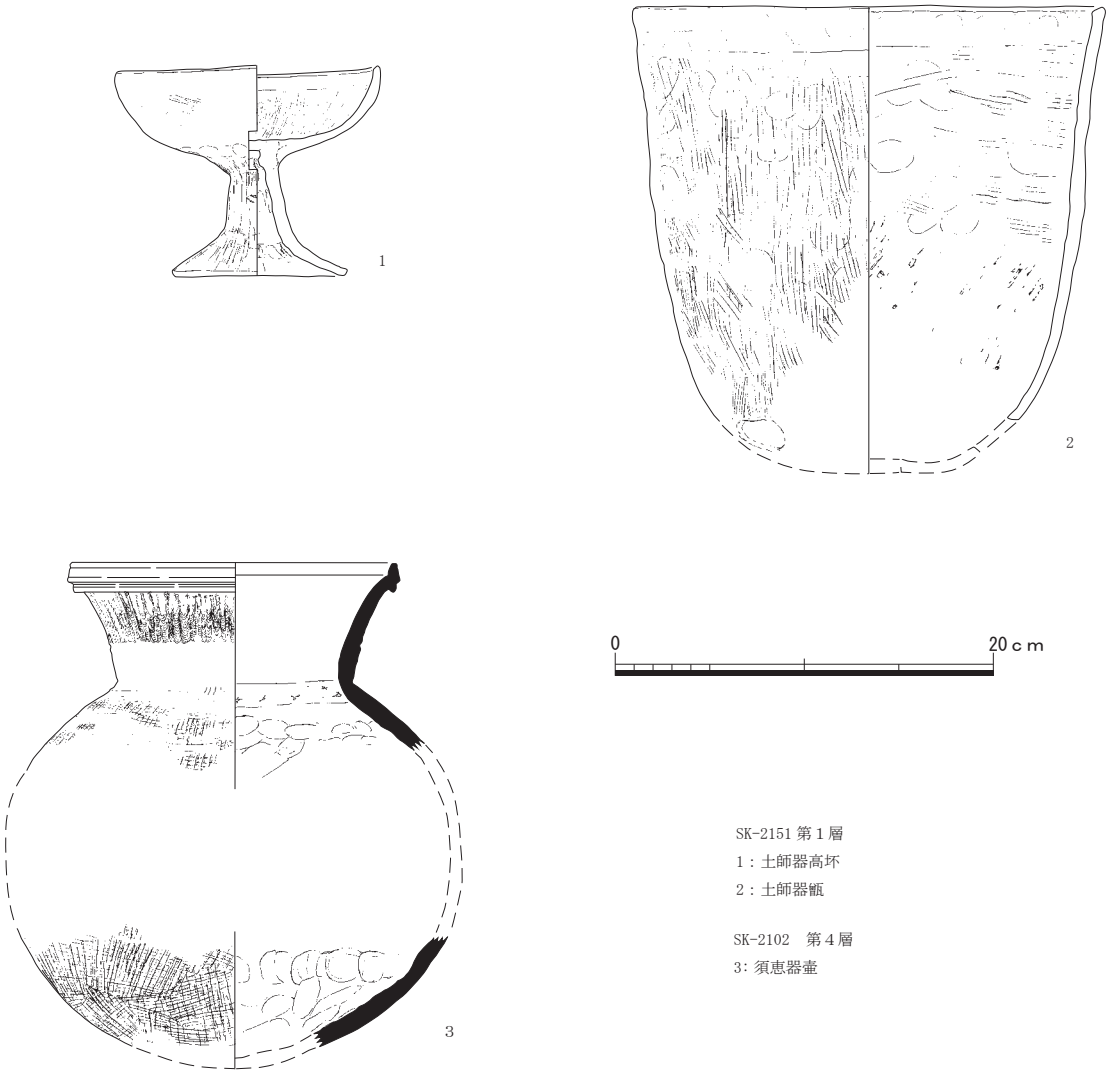
写真 7-4　第２トレンチ古墳時代前期の遺構（北から）

写真 7-5　第１トレンチ全景（西から）

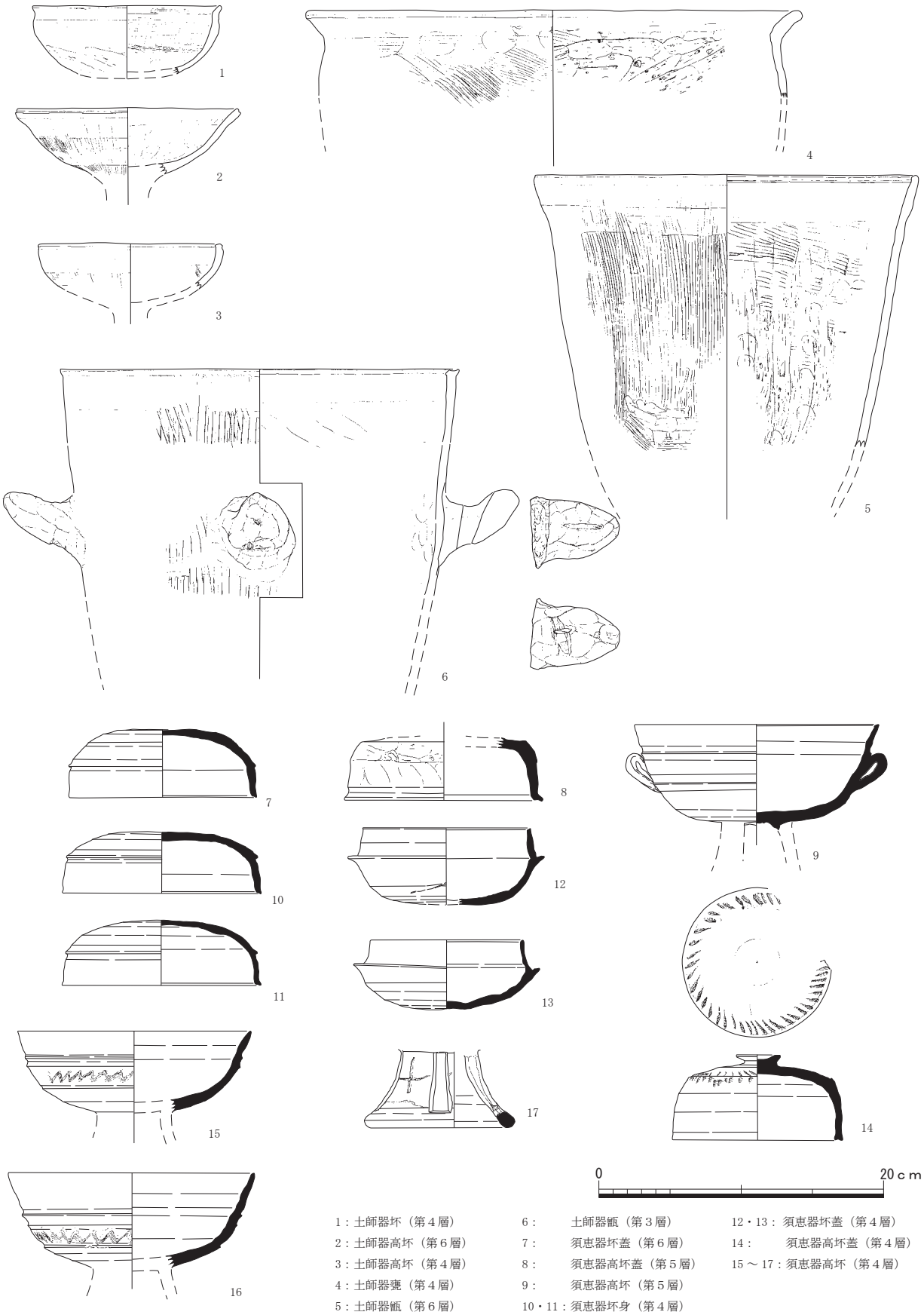
写真 7-6　ＳＫ -2014 出土遺物

３．まとめ

調査の結果、製塩土器を多量廃棄した古墳時代後期の土坑２基を確認した。また、古墳時代中期頃の Pit 群は隣接する第 39 次調査でも確認しており、本地区が濃密な居住域となっていたことを追認した。さらに、古墳時代前期の遺構面でも土坑等を確認しており、本調査地が古墳時代を通じて居住域として機能していたことが判明した。第 39 次調査の成果や周辺の調査成果を併せて考えると、南北 20 m程度の狭い範囲の比較的小規模な集落であったと考えられる。一方で、碧玉片や鉄片が出土することから、一定程度の手工業を担うような集団であった可能性が考えられる。また、製塩土器や馬歯の出土から、馬の飼育にも何らかの形で関与していたことも想定できる。北西隣接地の第 24 次調査では全長３ｍのコウヤマキ製木棺を用いた木棺墓や小規模な方墳（方形周溝墓？）を確認しているほか、本調査区の西側 100 ｍの第１次調査で木製鞍などが出土する集落域を確認していることから、古墳時代中～後期の在地有力者層の存在も想定される。十六面・薬王寺遺跡内の広い範囲に在地有力者層を含む小規模な居住域が点在して一つの集団を形成していた可能性がある。



第 7-7 図　ＳＫ-2151・ＳＫ-2102 出土遺物（S=1/4）



1：土師器坏（第４層）
2：土師器高坏（第６層）
3：土師器高坏（第４層）
4：土師器甕（第４層）
5：土師器甑（第６層）
6：　土師器甑（第３層）
7：　須恵器坏蓋（第６層）
8：　須恵器高坏蓋（第５層）
9：　須恵器高坏（第５層）
10・11：須恵器坏身（第４層）
12・13：須恵器坏蓋（第４層）
14：　須恵器高坏蓋（第４層）
15～17：須恵器高坏（第４層）

第 7-8 図　ＳＫ-2104 出土遺物（S=1/4）

８.十六面・薬王寺遺跡　第 42 次調査

１．遺跡・既調査の概要

第 42 次調査は、遺跡北西部での道路拡幅工事に伴い実施した。延長約 200 ｍの南北方向の道路を西側に約２ｍ拡幅する計画で、北半（第１～４トレンチ）で幅 1.5 ｍ、畑作物等の影響で調査面積が確保できなかった南半（第５～７トレンチ）で幅１ｍの調査区を設定した。調査区の総延長は 118 ｍである。

２．調査の成果

（１）層序

調査地の現況は水田または畑である。ここでは、第３トレンチの層序を示す。

Ⅰ:暗褐色土（水田耕土）〔検出標高 45.5 ｍ、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:茶灰色粘質土（床土）〔45.3 ｍ〕、Ⅲ:淡灰褐色土〔45.1 ｍ〕、Ⅳ:暗灰褐色土（やや粗砂混）〔45.0 ｍ〕、Ⅴ:暗褐色土〔44.9 ｍ〕、Ⅵ：暗灰色粘質シルト（以下ベース）〔44.7 ｍ〕、Ⅶ：黄褐色シルト〔44.5 ｍ〕、暗青灰色粘質シルト〔44.1 ｍ〕

古代～中世の遺構は第Ⅳ層上面、古墳時代の遺構は第Ⅴ層上面、弥生時代の遺構は第Ⅵ層上面が検出面となる。

（２）第１トレンチの遺構

北端に設定した第１トレンチ（南北 33 ｍ、幅 1.5 ｍ）では、調査区南半を中心に弥生時代～中世の遺構を確認した。

弥生時代～古墳時代

ＳＫ－1103　第１トレンチ中央で検出した土坑である。直径 0.7 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。

ＳＤ－1103　第１トレンチ南部で検出した東西方向の溝である。幅 1.8 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。ミニチュア台付無頸壷（第 8-7 図２）などが出土した。遺物より、弥生時代後期頃の遺構とみられる。

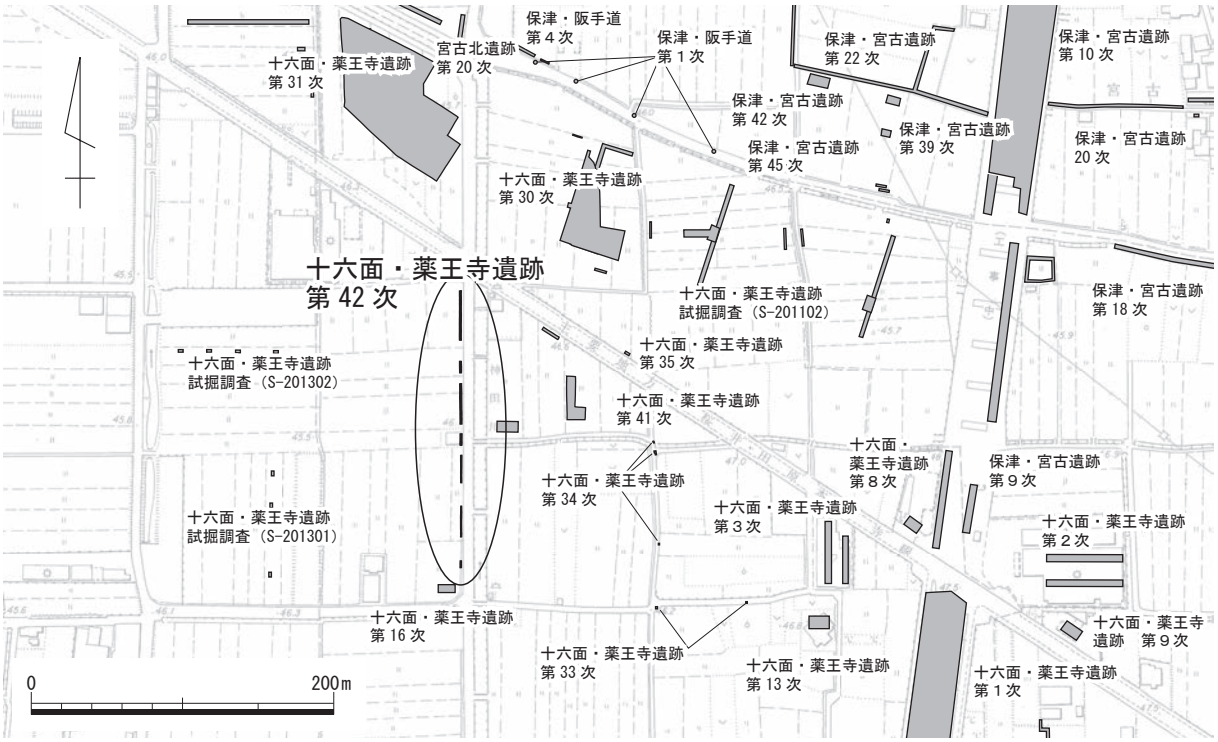
ＳＤ－1105　ＳＤ－1103 の南側に隣接して検出した、東北東－西南西方向の小溝である。幅 1.0 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。弥生時代後期末頃の遺物が出土した。

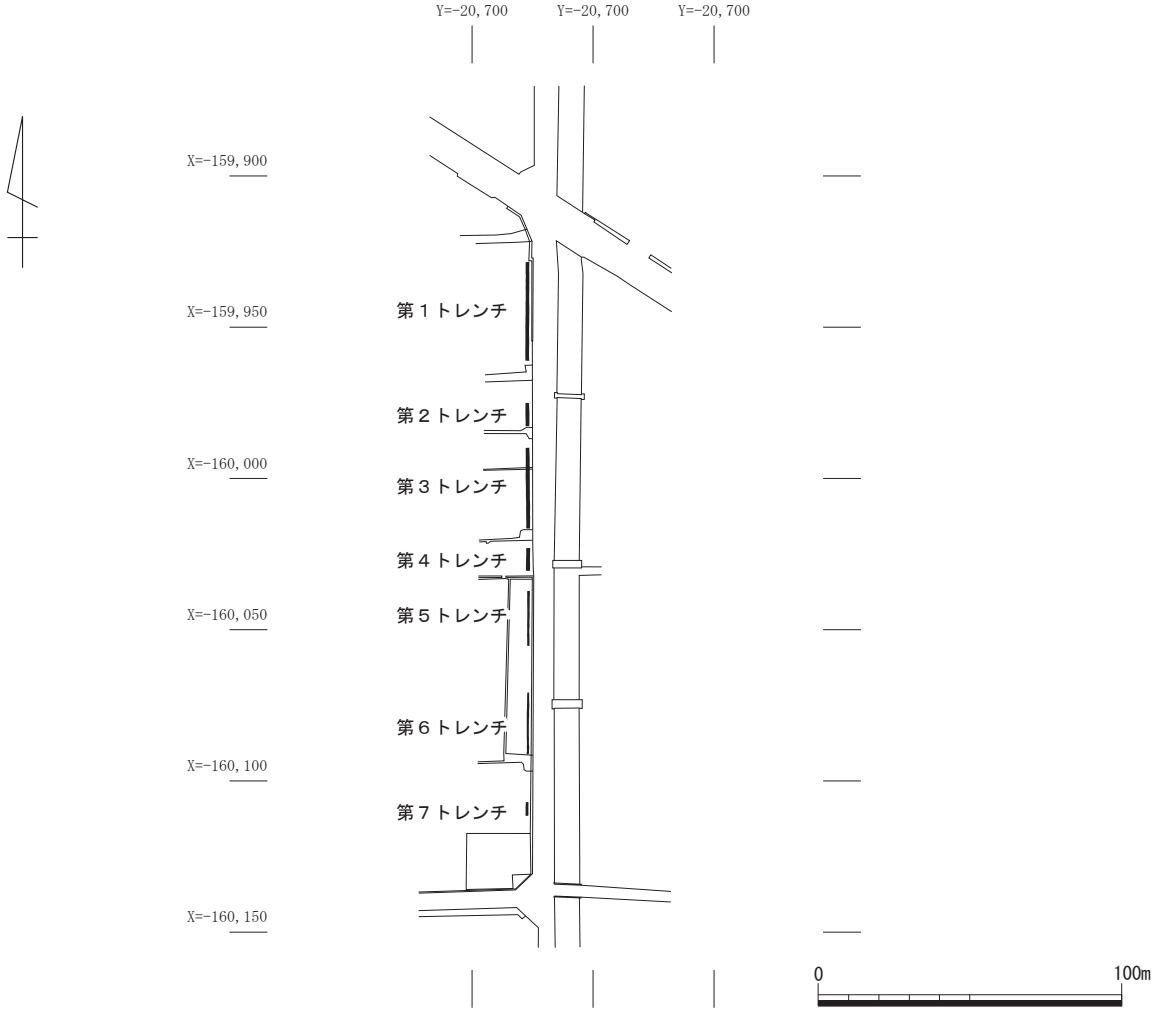
ＳＤ－1107　第１トレンチ北半で検出した東西方向の溝である。幅 1.3 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。弥生時代後期末頃の遺物が出土した。

ＳＲ－1101　第１トレンチ南端で検出した河跡である。調査区外に拡がるため幅は不明、深さ 0.7 ｍを測る。顕著な遺物は確認していない。遺構面より、弥生時代頃の遺構とみられる。

古代

ＳＫ－1101　調査区中央南で検出した土坑である。東半が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、推定直径 0.8 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。弥生時代後期頃の土器片が出土したのみで





第 8-1 図　調査地位置図（上：S＝1/5,000、下：S＝1/2,500）

詳細な時期は不明。

ＳＫ-1102　ＳＫ-1101の北側で検出した土坑である。東半が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、推定径1.2ｍ以上、深さ0.1ｍを測る。顕著な遺物が出土していないため、時期は不明である。

ＳＤ-1101　第１トレンチ南部で検出した東西方向の溝である。幅1.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。遺物は弥生時代後期の小片が出土した程度であり、詳細な時期は不明である。

ＳＤ-1102　第１トレンチ南部、ＳＤ-1101の北側で検出した、東西方向の小溝である。幅0.7ｍ、深さ0.1ｍを測る。

ＳＤ-1108　第１トレンチ南端で検出した東西方向の小溝である。幅0.8ｍ、深さ0.1ｍを測る。遺物を確認していないため詳細な時期は不明である。

ＳＤ-1109　SD-1108の南に隣接して検出した東西方向の小溝である。南肩が調査区外となるため幅は不明、深さ0.1ｍを測る。遺物を確認していないため詳細な時期は不明である。

中世

小溝群　調査区南花で東西方向を中心とする小溝群を確認した。主に中世の耕作に伴う遺構とみられる。

ＳＲ-1001　第１トレンチ北側1/3が河跡となっていた。最終埋没は中世頃とみられる。遺物が出土していないため時期は明らかでない。安全面から深さも確認していない。

（３）第２トレンチの遺構

北から２番目の畑地に設定した第２トレンチ（南北7.6ｍ、幅1.4ｍ）では、調査区全体で弥生時代後期～中世の遺構を検出した。なお、遺物包含層から弥生時代後期の甕が出土している（第8-7図１）。

弥生時代～古墳時代

ＳＫ-2101　調査区南端で検出した平面楕円形の土坑である。南半がＳＫ-2051に切られるため正確な規模は不明。長軸0.6ｍ以上、短軸0.3ｍ、深さ0.1ｍを測る。弥生時代後期頃の土器片が出土した。

Pit群　調査区中央～北半で４基の小穴を検出した。建物跡の可能性もあるが、いずれも残存が浅く遺構の性格は不明。弥生時代後期頃の遺構とみられる。

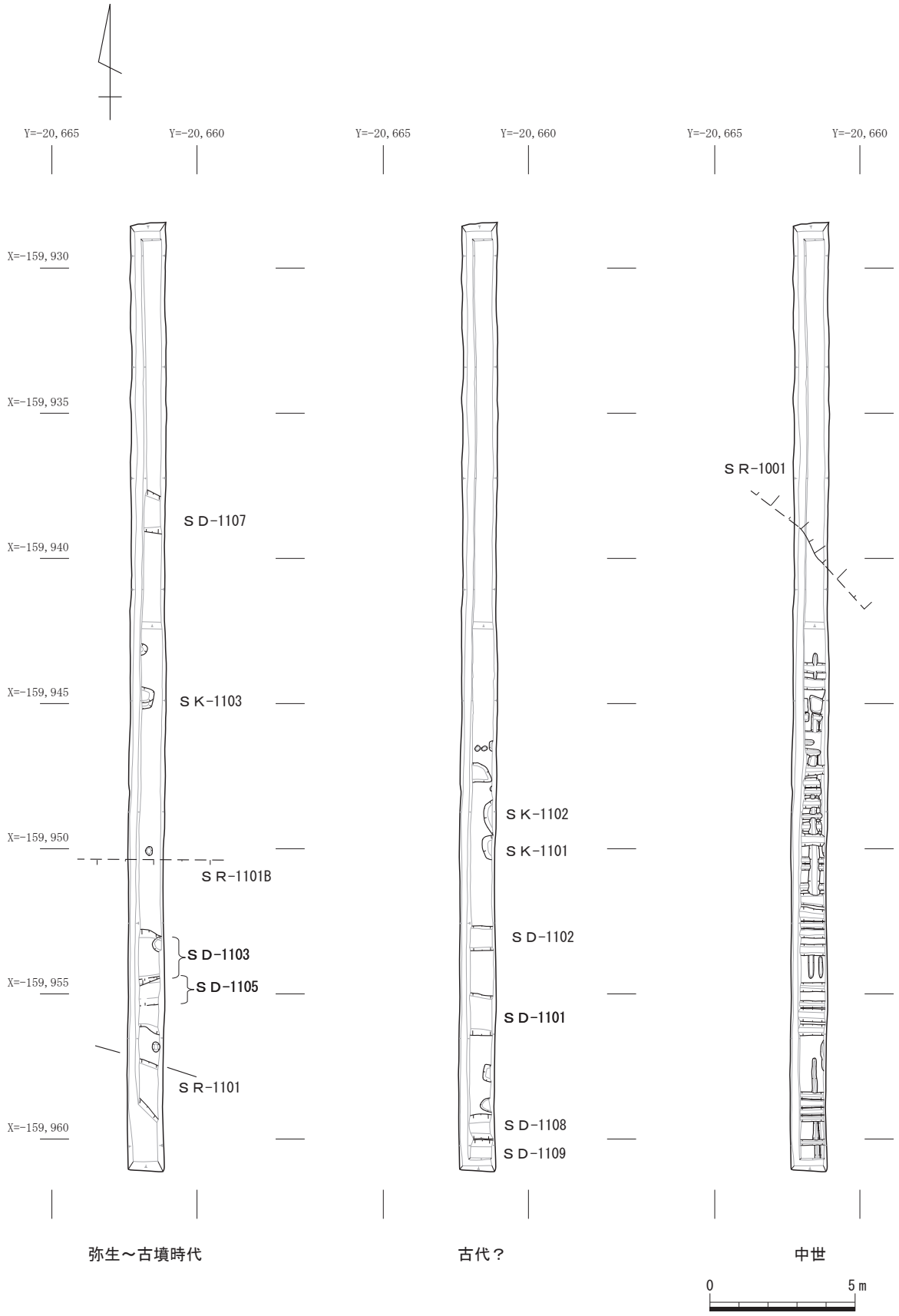
ＳＤ-2101　調査区南側で検出した東西方向の小溝である。幅0.6ｍ、深さ0.1ｍを測る。弥生時代後期末頃の土器片が出土した。

ＳＤ-2102　ＳＤ-2101の北側に隣接して検出した東西方向の小溝である。幅0.5ｍ、深さ0.05ｍを測る。弥生時代後期末頃の土器片が出土した。

ＳＤ-2103　ＳＤ-2102の北側に隣接して検出した東西方向の小溝である。幅0.7ｍ、深さ0.2ｍを測る。矢羽根状のタタキをもつ甕片をはじめとした弥生時代後期末頃の遺物が出土した。

中世・近現代

小溝群　調査区全体で東西方向の小溝を確認した。中世～近世の耕作に伴う遺構とみられる。



第 8-2 図　第１トレンチ平面図（Ｓ＝1/200）

ＳＫ-2051　調査区南端で検出した井戸である。層序から、近代～現代の遺構とみられるため、掘削はおこなっていない。調査区外に拡がるため規模不明。

（４）第３トレンチの遺構

北から３番目に設定した第３トレンチ（南北 27 m、幅 1.5 m）では、調査区全体で弥生時代～中世の遺構を確認した。

弥生時代～古墳時代

ＳＫ-3151　調査区南端で検出した土坑である。推定直径 0.8 m前後、深さ 0.3 mを測る。遺物が確認できなかったため時期不明である。堆積土等より弥生時代の遺構とみられる。

ＳＤ-3151　調査区南で検出した北北西－南南東方向の小溝である。幅 0.8 m、深さ 0.5 mを測る。ＳＤ-3152 に切られる。排水溝部分のみ掘り下げたため、詳細な時期は不明である。遺構面から、弥生時代前後の遺構と考えられる。

ＳＤ-3152　調査区南半で検出した東西方向の溝である。幅３m、深さ 0.7 mを測る。排水溝部分のみ掘り下げたため、詳細な時期は不明である。遺構面等から、弥生時代前後の遺構と考えられる。

ＳＤ-3153　調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅 1.8 m、深さ 0.2 mを測る。排水溝部分のみ掘り下げたため、詳細な時期は不明である。

ＳＤ-3154　ＳＤ-3153 の北側で確認した北西－南東方向の小溝である。幅 0.8 m、深さ 0.2 mを測る。

古墳時代

ＳＤ-3105　調査区南側で検出した東西方向の大溝である。幅 2.2 m、深さ 0.3 mを測る。顕著な遺物を確認していないため詳細な時期は不明であるが、遺構面から古墳時代頃の遺構と考えられる。

ＳＤ-3106　調査区北側で検出した東西方向の小溝である。幅 0.6 m、深さ 0.1 mを測る。

ＳＤ-3107　ＳＤ-3106 の南側で検出した東西方向の小溝である。幅 0.4 m、深さ 0.2 mを測る。

ＳＤ-3108　調査区中央北で検出した北東－南西方向の小溝である。幅 0.6 m、深さ 0.2 mを測る。

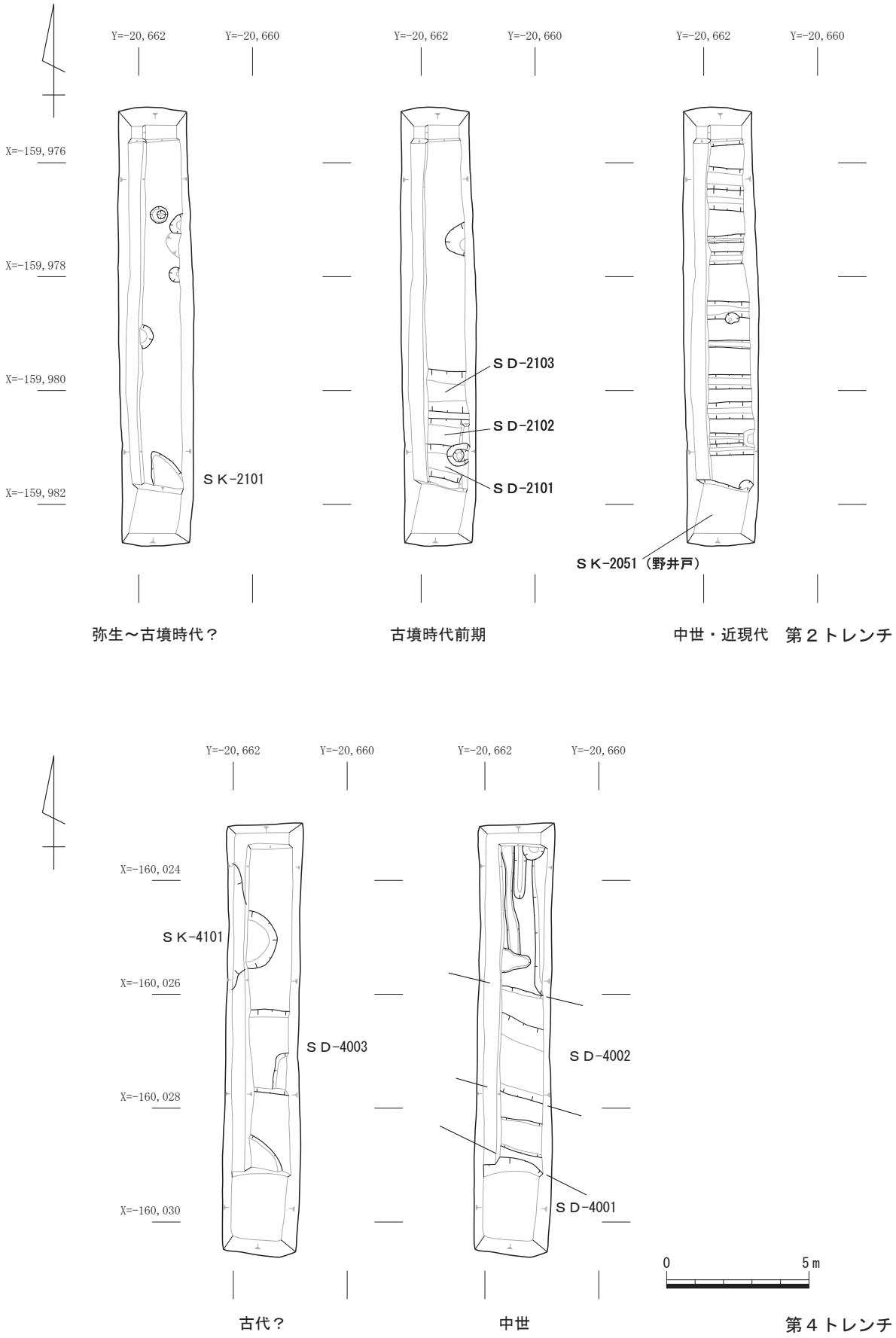
ＳＤ-3109　調査区中央南で検出した東西方向の小溝である。幅 0.4 m、深さ 0.1 mを測る。これら４条の小溝は、いずれも小規模で顕著な遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、遺構面から古墳時代頃の遺構と考えられる。

古代

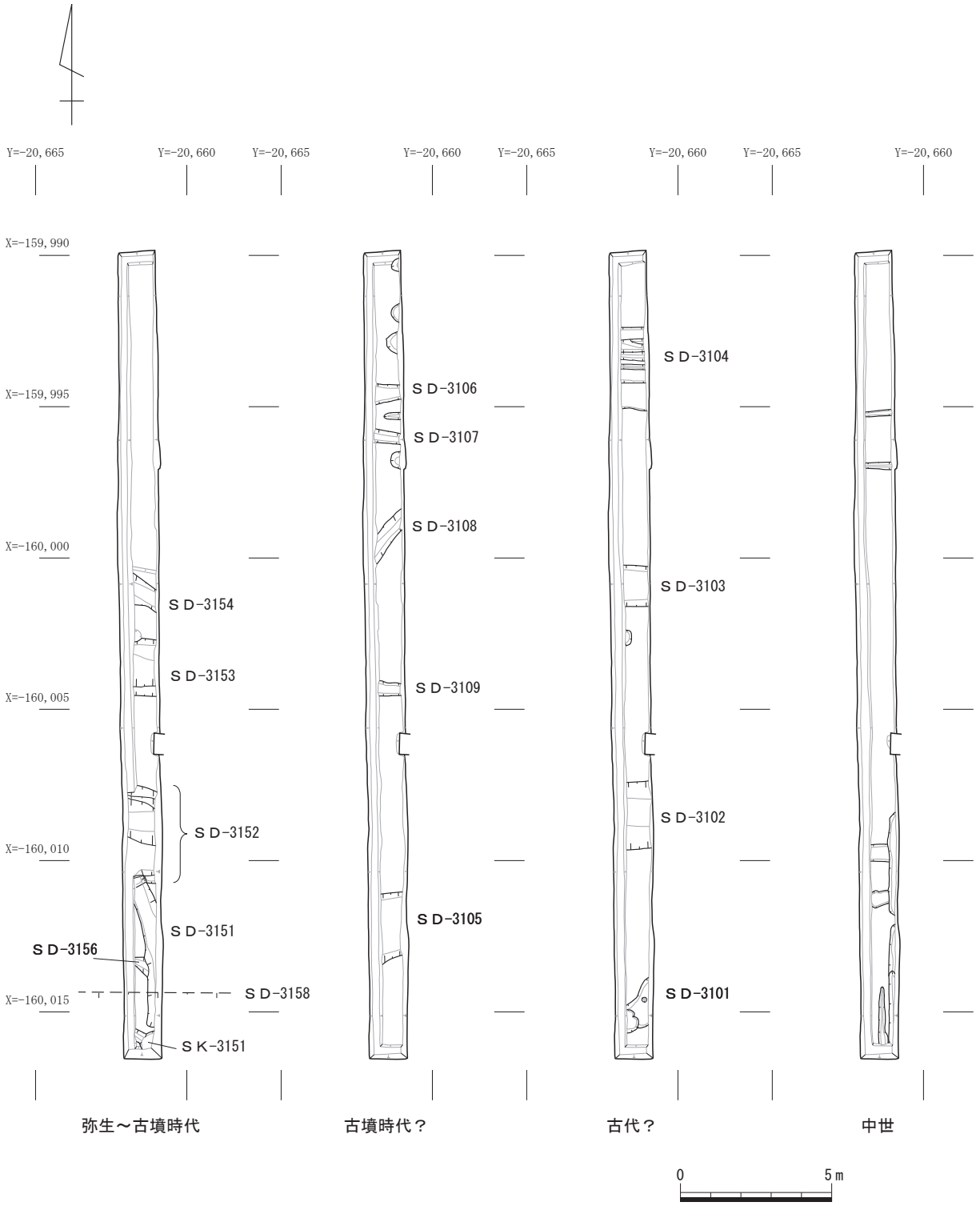
ＳＤ-3101　調査区南端で検出した北東－南西方向の溝である。幅１m、深さ 0.1 mを測る。遺物は僅少であるが、遺構面から古代頃の遺構とみられる。

ＳＤ-3102　調査区南半で検出した東西方向の溝である。幅 1.2 m、深さ 0.3 mを測る。遺物は僅少であるが、遺構面から古代頃の遺構とみられる。

ＳＤ-3103　調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅 1.3 m、深さ 0.3 mを測る。遺物



第8-3図　第２・４トレンチ平面図（Ｓ＝1/200）



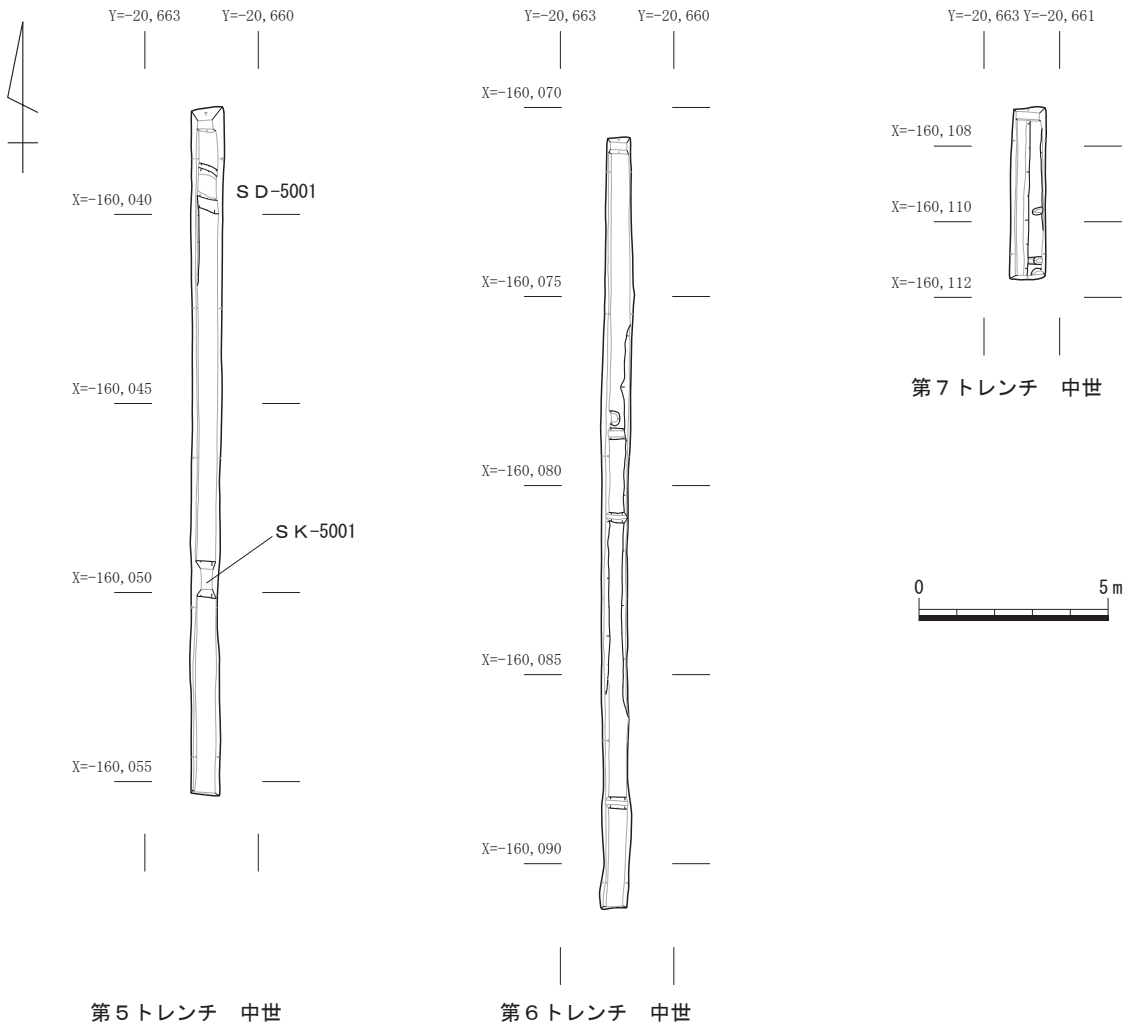
第 8-4 図　第３トレンチ平面図（Ｓ＝1/200）

が出土していないため遺構の時期は明らかでない。遺構面等から古代頃の遺構とみられる。

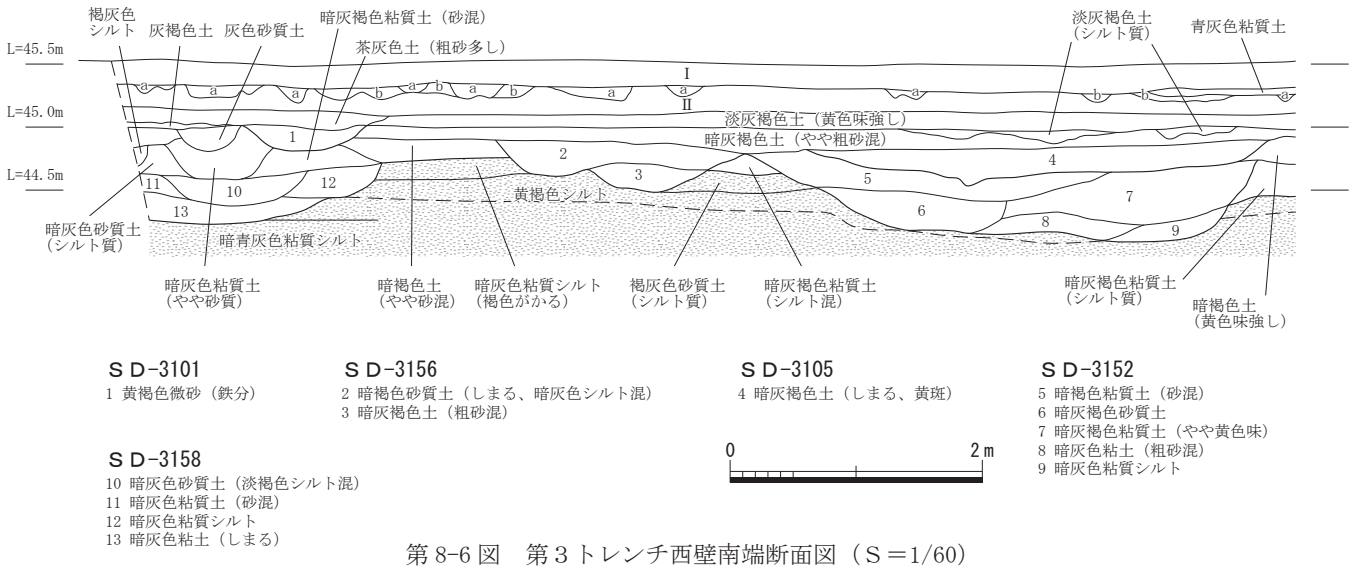
ＳＤ -3104　調査区北側で検出した東西方向の溝である。幅 1.8 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。少量の弥生土器片が出土したのみで時期は明らかでない。遺構面等から古代頃の遺構とみられる。

中世

小溝群　調査区全体で東西方向の小溝４条、南北方向の小溝２条を検出した。中世頃の耕作に



第 8-5 図　第５～７トレンチ平面図（Ｓ＝1/200）



第 8-6 図　第３トレンチ西壁南端断面図（Ｓ＝1/60）

伴うものとみられる。

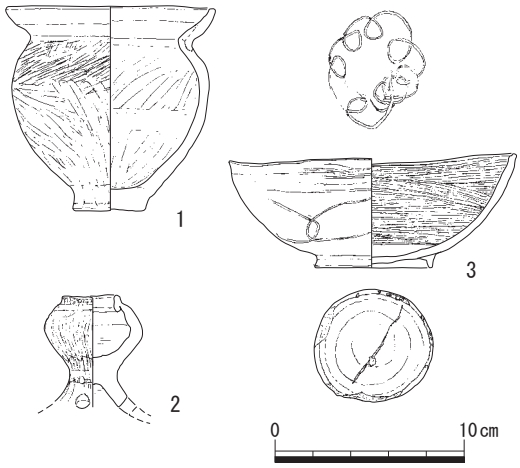
（５）第４トレンチの遺構

工区中央に設定した第４トレンチ（南北 7.8 m、幅 1.3 m）では、古代頃とみられる遺構を検出した。

古代？

ＳＫ -4101　調査区北半で検出した不定形の土坑である。西壁では南北 2.4 mお規模であることを確認した。深さ 0.3 m。顕著な遺物が出土していないため時期は不明。古代頃の遺構となる可能性がある。

ＳＤ -4003　調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅 1.5 m、深さ 0.2 mを測る。遺物が出土していないため時期は明らかでない。



1：弥生土器甕（第２トレンチ　暗褐色土）
2：ミニチュア台付無頸壷（ＳＤ-1103）
3：瓦器埦（ＳＫ-5001）

第 8-7 図　出土した遺物（S=1/4）

中世

ＳＤ -4001　調査区南端で検出した、西北西－東南東方向の溝である。南肩が調査区外となるため正確な規模は明らかでないが、幅２m以上、深さ 0.5 mを測る。遺物は僅少で詳細な時期は明らかでないが、堆積土等から中世の遺構とみられる。

ＳＤ -4002　調査区中央で検出した、西北西―東南東方向の溝である。幅 1.8 m、深さ 0.2 mを測る。弥生土器小片が出土したのみで、詳細な時期は不明である。堆積土等から中世の遺構とみられる。

（６）第５トレンチの遺構

工区中央南に設定した第５トレンチ（南北 18.5 m、幅１m）では、中世の井戸とみられる土坑１基などを検出した。

中世

ＳＤ -5001　調査区北側で検出した、西北西－東南東方向の溝である。幅 1.2 m、深さ 0.1 mを測る。顕著な遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、堆積土より中世の遺構とみられる。

ＳＫ -5001　調査区中央南で検出した、直径 0.7 mの井戸である。深さ 0.8 mまで確認したが、調査区が狭小であることもあり完掘することができなかった。12 世紀頃の瓦器１点が完形で出土した（第 8-7 図３）。

（７）第６トレンチの遺構

工区南側の第６トレンチ（南北 21 m、幅１m）では、中世小溝と Pit １基以外の顕著な遺構は確認できなかった。

小溝群　調査区全体で東西方向の小溝３条、南北方向の小溝２条を検出した。

Pit-6051　調査区中央北でPit １基を確認した。直径0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。遺構の性格は明らかでない。遺物が出土していないため時期も不明である。

（８）第７トレンチの遺構

工区南端に設定した第７トレンチ（南北4.5ｍ、幅１ｍ）では、小溝群以外に顕著な遺構を確認することができなかった。

小溝群　調査区全体で南北方向の小溝１条、東西方向の小溝３条を検出した。東西方向の小溝はいずれも浅く、規模が小さい。いずれも中世頃の耕作に伴うものとみられる。

３．まとめ

調査の結果、第１トレンチ北半より北側に河跡による大きな落ち込みが拡がることを確認した。北側隣接地で実施した十六面・薬王寺遺跡第31次調査では、弥生時代後期末～古墳時代中期の集落域の南側が河川状の落ち込み地形となっていたが、この地形的な窪地の南端に相当する可能性がある。

第１トレンチ南半～第３トレンチでは、弥生時代中・後期頃の遺物包含層と溝を中心とする遺構群を確認した。ただし、遺構・遺物とも出土量はやや少ないことから、集落の周縁部に相当する可能性がある。

一方、第６トレンチ以南には顕著な遺構が拡がらないことを確認した。南側隣接地の第16次調査や過去の周辺の試掘調査結果でも顕著な遺構を確認していないことから、遺跡範囲について改めて検討する必要がある。

写真 8-1　第１トレンチ全景（南から）

写真 8-2　第２トレンチ全景（北から）

写真 8-3　第３トレンチ全景（南から）

写真 8-4　第４トレンチ全景（北から）

写真 8-5　第５トレンチ全景（北から）

写真 8-6　第６トレンチ全景（南から）

９.十六面・薬王寺遺跡　第 43 次調査

１．遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、弥生時代～古墳時代の集落および墓、古代の集落・耕地、中世の在地有力者の城館跡などからなる複合遺跡である。遺跡中央の大字保津字ホツノマエ、大字十六面字親垣内などには中世の城館跡「保津氏居館跡推定地」が拡がる。十六面・薬王寺遺跡第１次調査で多数の井戸と屋敷地を囲む大溝を検出しており、鎌倉時代から中世末にかけて集落構造が変遷していく様子が確認されている。その後の第 10・15 次調査などで集落を囲む溝などを確認している。

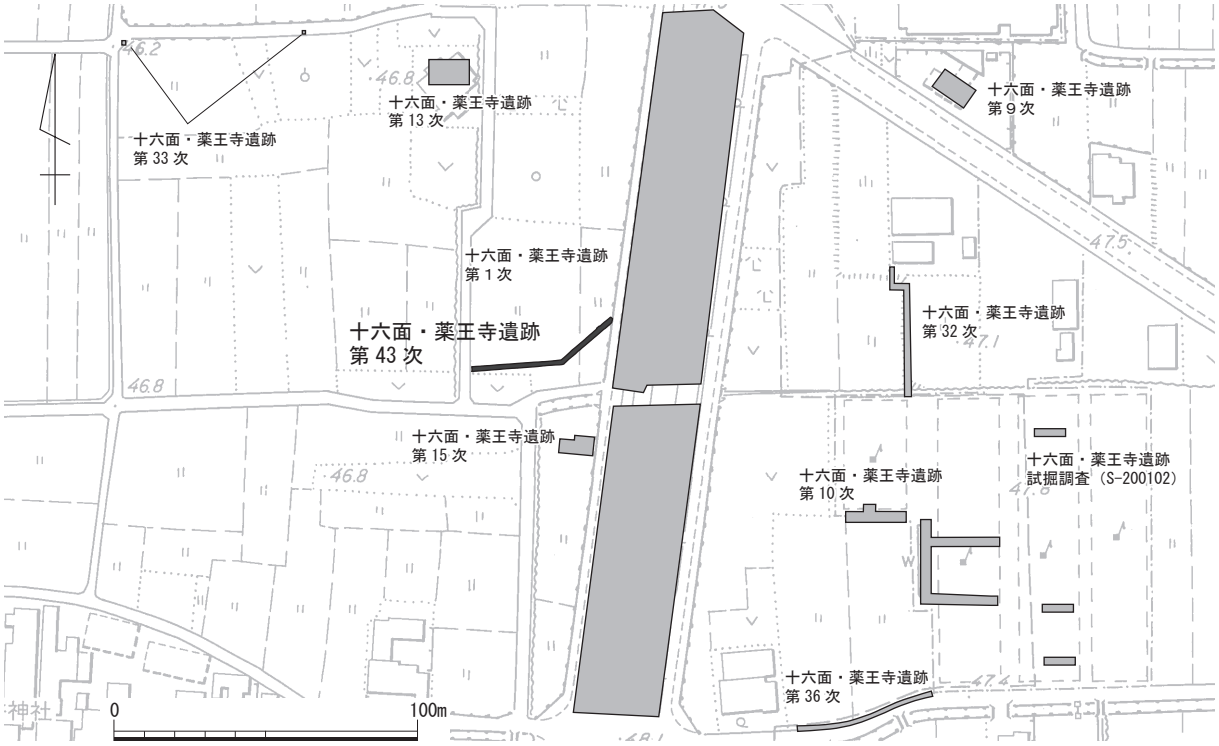
今回の調査は、町道の拡幅に伴って保津氏居館跡推定地の中央西端付近で実施した。これまでの調査から、中世の城館を囲む溝や城館内部の井戸などが確認されることが予想された。

２．調査の成果

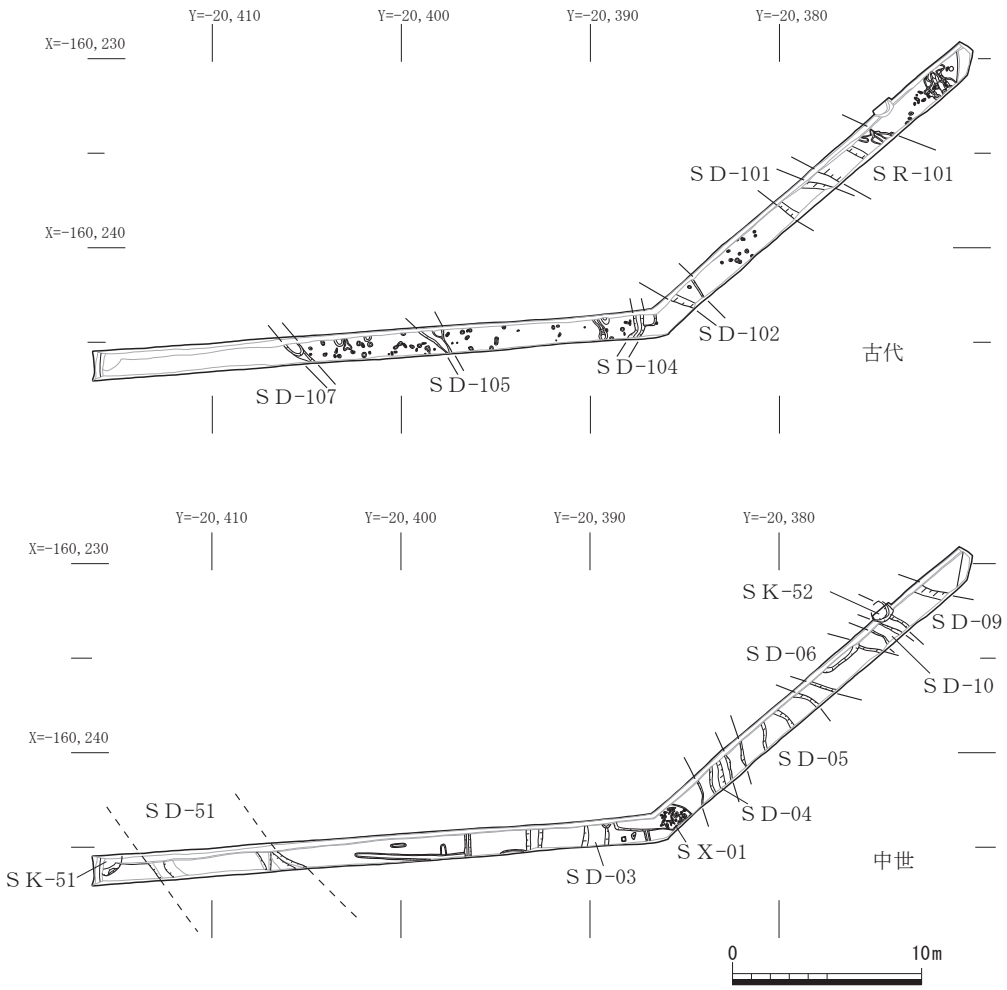
（１）層序

調査地の現状は水田であった。調査ではくの字形に屈曲する延長 50 m、幅２ｍの調査区を設定した。ここでは、調査区中央付近の層序を示す。

Ⅰ：灰褐色土〔検出標高 46.3 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：褐灰色土〔46.2 m〕、Ⅲ：淡青灰色土〔46.1 m〕、Ⅳ：暗褐灰色土〔45.9 m〕、Ⅴ：暗褐色土〔45.8 m〕、Ⅵ：暗灰色粘土〔45.7 m〕、Ⅶ：黒灰色粘土〔45.3 m〕



第 9-1 図　調査地の位置（S=1/2,500）



第 9-2 図　遺構平面図（S=1/400）

第Ⅰ・Ⅱ層は現水田耕土、第Ⅲ層は水田床土、第Ⅳ層は中世遺物包含層、第Ⅴ層は古墳時代～古代の遺物包含層とみられる。Ⅵ層以下はベースである。

（２）遺構と遺物

古代

ＳＤ-101　調査区東半で検出した、北西－南東方向の溝である。幅２ｍ、深さ 0.6 ｍを測る。古代頃の遺構とみられる。

ＳＤ-102　調査区中央付近で検出した北西－南東方向の溝である。幅 1.5 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。古代頃の遺構とみられる。

ＳＤ-104　ＳＤ-102 の西側に隣接して検出した南北方向の小溝である。南半は南西方向に屈曲する。幅 0.5 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。古代頃の遺構とみられる。

ＳＤ-105　調査区西半で検出した北西－南東方向の小溝である。幅 0. ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。古代頃の遺構とみられる。

ＳＤ-107　調査区西側で検出した北西－南東方向の小溝である。幅 0.6 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。古代頃の遺構とみられる。

ＳＲ-101　調査区東端で検出した、西北西－東南東方向の河跡である。幅 3.6 ｍ、深さ 0.2

mを測る。古代頃の遺構とみられる。

足跡群　調査区全体で、古代頃の足跡状の遺構を確認した。周辺の調査では、古代頃の水田とみられる畦畔跡や足跡を確認しており、今回の遺構も古代頃の水田に関連する遺構である可能性がある。

中世

ＳＫ-51　調査区西端で検出した、直径1.5ｍ前後、深さ0.6ｍの土坑である。遺物から、中世の遺構と考えられる。

ＳＫ-52　調査区東側で検出した、直径１ｍ前後の土坑である。深さ１ｍまで確認したが、安全面から完掘していない。中・下層から完形品を含む多数の瓦器・土師器・白磁碗等が出土した（第9-4図）。また、上層から長軸20cm前後の礫数点が出土した（写真9-4）。出土遺物から、13世紀前半頃の遺構と考えられる。

ＳＤ-51　調査区西半で検出した北西－南東方向の大溝である。幅６ｍ、深さ0.8ｍを測る。出土遺物から、12世紀後半頃の遺構と考えられる。

ＳＸ-01　調査区中央で検出した東西方向の落ち込み状の堆積である。幅1.5ｍ、深さ0.1ｍで、遺構下面に多数の足跡状の窪みを確認した。

ＳＤ-03　調査区中央で検出した南北方向の溝である。幅1.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。耕作に伴う複数の小溝である可能性がある。

ＳＤ-04　調査区東半で検出した南北方向の溝である。幅1.8ｍ、深さ0.4ｍを測る。中世頃の遺構とみられる。

ＳＤ-05　調査区東半で検出した北西－南東方向の溝である。幅５ｍ、深さ0.2ｍを測る。中世頃の遺構とみられる。

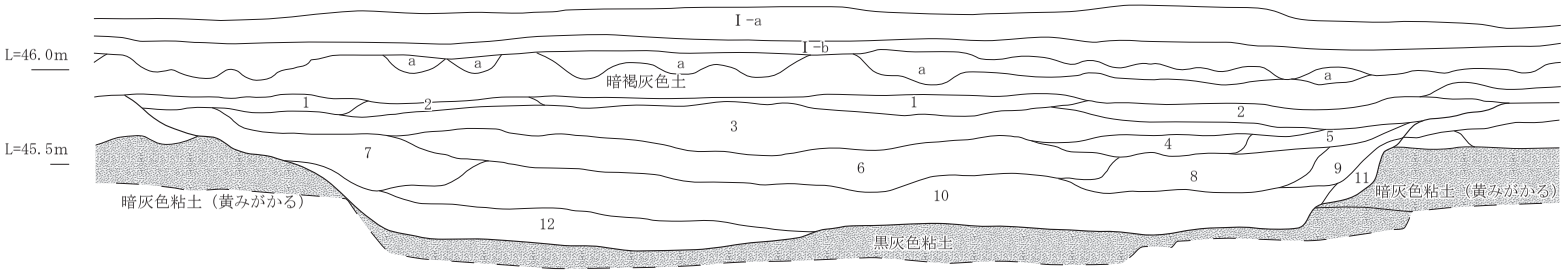
ＳＤ-06　調査区東端で検出した西北西－東南東方向の溝である。幅2.8ｍ、深さ0.1ｍを測る。中世頃の遺構とみられる。

ＳＤ-09　調査区東端で検出した西北西－東南東方向の溝である。幅2.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。中世頃の遺構とみられる。

３．まとめ

調査の結果、12世紀後半～13世紀前半の中世集落関連遺構、古代頃の耕地に伴う可能性がある足跡・小溝等の遺構を確認した。前者は、14世紀に保津氏居館跡として環濠を持つ以前の遺構と考えられる。12世紀後半～13世紀の在地有力者層の屋敷地関連遺構としての位置付けと全体像の復元が求められる。

古代頃の遺構としては、畦畔を含む水田関連遺構を隣接する第13・15次調査等で確認していることから、本調査区で検出した足跡状の遺構も一連のものと考えられる。古代の耕地が本遺跡北部に拡がっていたのであろう。



Ⅰ-a 灰褐色土（耕土）
Ⅰ-b 褐灰色土（耕土）
a 淡青灰色土

ＳＤ-51

1 淡黄灰色土
2 淡黄灰色土（暗褐色粘質土ブロック）
3 淡褐色土（暗褐色粘質土ブロック）
4 暗灰色土（褐色がかる）
5 暗灰色粘質土
6 暗青灰色土（黄味がかる・やや粘質）
7 暗灰色粘質土
8 暗灰色粘質土（やや砂混）
9 暗灰色砂（やや粘質）
10 暗青灰色粘土
11 淡黄褐色砂
12 暗灰色粘土

写真 9-1　ＳＤ-51 完掘及び北壁断面（南から）

第 9-3 図　SD-51 北壁断面図 (S=1/40)

写真 9-2　調査区全景（北東から）

写真 9-3　調査区全景（西から）

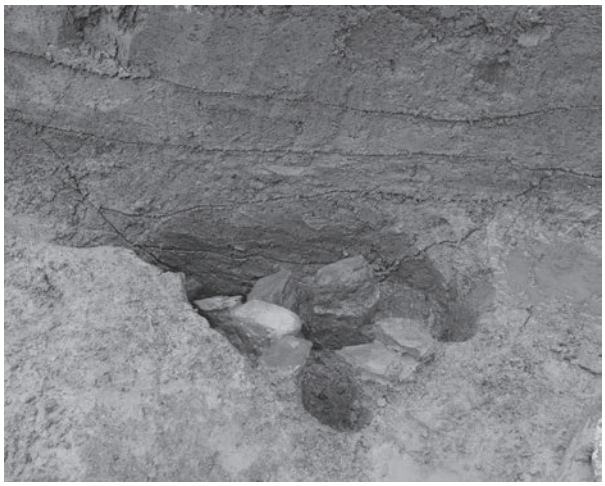
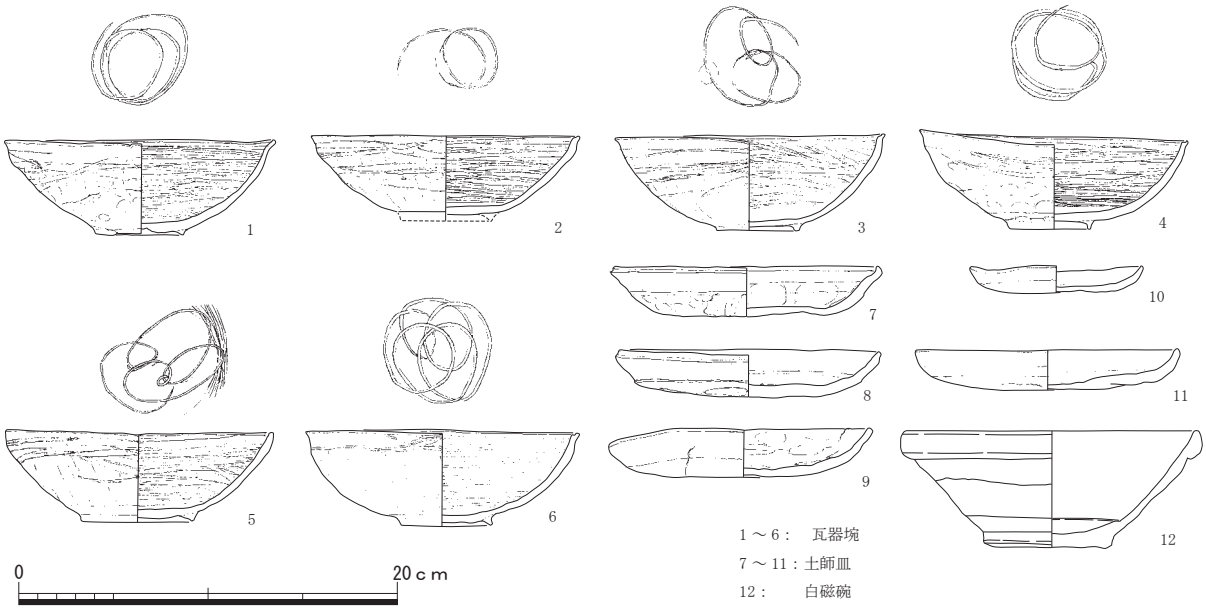


写真 9-4　ＳＫ -52 上層出土状況

写真 9-5　ＳＫ -52 下層出土状況



第 9-4 図　ＳＫ-52 から出土した遺物（S=1/4）

10. 阪手遺跡　第６次調査（試掘調査 S-201901）

１．遺跡・既調査の概要

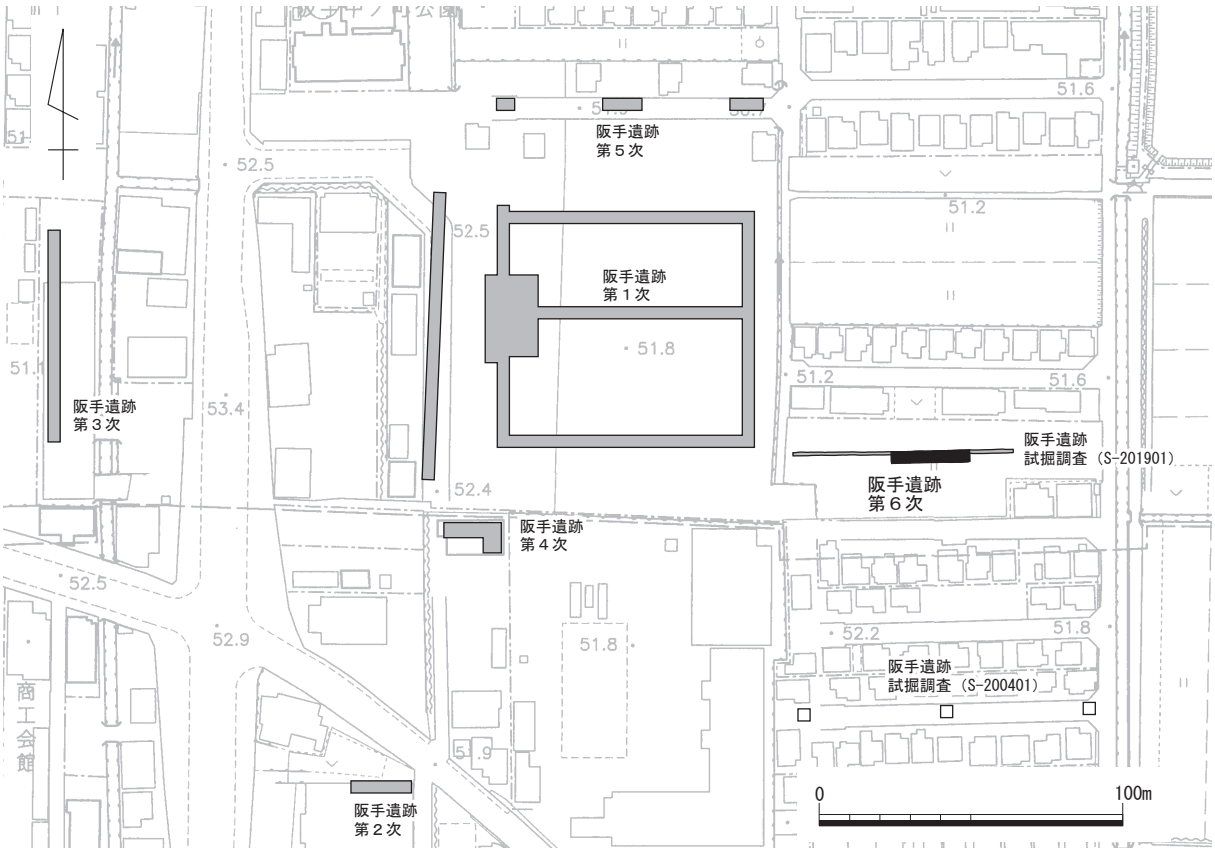
阪手遺跡は、奈良盆地の中央、標高 47 m前後の沖積地に立地する、弥生時代、中世の複合遺跡である。第１次調査では、弥生時代後期の井堰及び水路が検出されている。第５次調査では杭で護岸した南南東―北北西方向の溝を検出しており、これらの調査成果から、弥生時代の生産域であったと考えられる。

本調査地は遺跡南東端に位置することから、遺跡範囲と遺構の有無を確認するため、まずは試掘調査をおこなった。

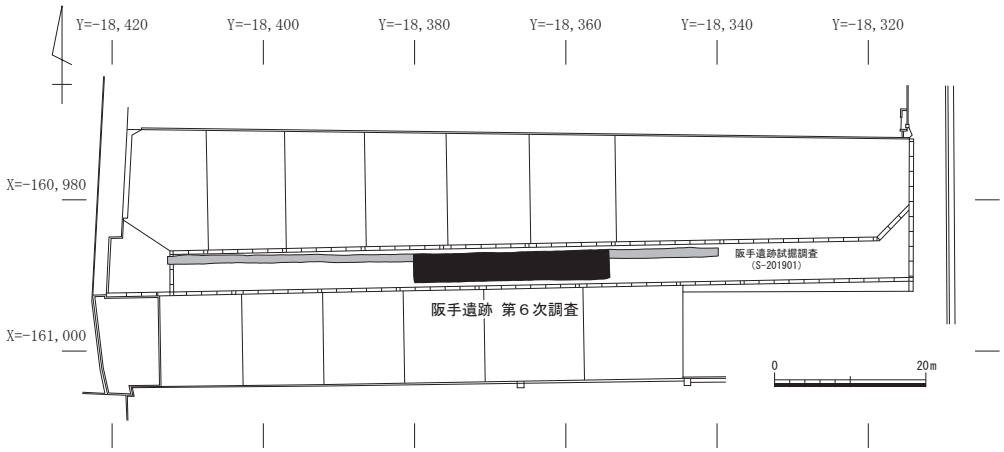
２．調査の成果

（１）層序

調査地は、近年まで水田であったが、直近の造成により約 0.5 mの造成がおこなわれていた。Ⅰ：現代造成土〔検出標高 51.7 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗青灰色粘土（水田耕土）〔51.2 m〕、Ⅲ:褐色土（青味がかる）（床土）〔51.0 m〕、Ⅳ:灰褐色土（近代造成土）〔50.9 m〕、Ⅴ:灰褐色粘土（黄斑）（中世遺物包含層）〔50.7 m〕、Ⅵ:黒色粘土（黄斑）〔50.6 m、以下地山〕、Ⅶ：灰黒色粘土〔50.5 m〕、Ⅷ：緑灰色粘土〔50.4 m〕



第 10-1 図　調査地の位置（Ｓ＝1/2,500）



第 10-2 図　調査区の設定（Ｓ＝1/1,000）

試掘調査および本調査では、第Ｉ～Ｖ層までを重機で掘削し、第Ⅵ層上面で古墳時代～中世の遺構検出をおこなった。

（２）試掘調査（S-201901）の成果

敷地内の共用道路設置予定部分に 1.1 × 73 ｍの調査区を設定した。調査の結果、調査区中央付近で弥生時代～古墳時代頃とみられる４条の溝を確認した。調査の結果を受け、遺構を確認した部分について本調査を実施することとなった（第６次調査）。

（３）第６次調査の成果

試掘調査の結果に基づき、４× 26 ｍの調査区を設定した。

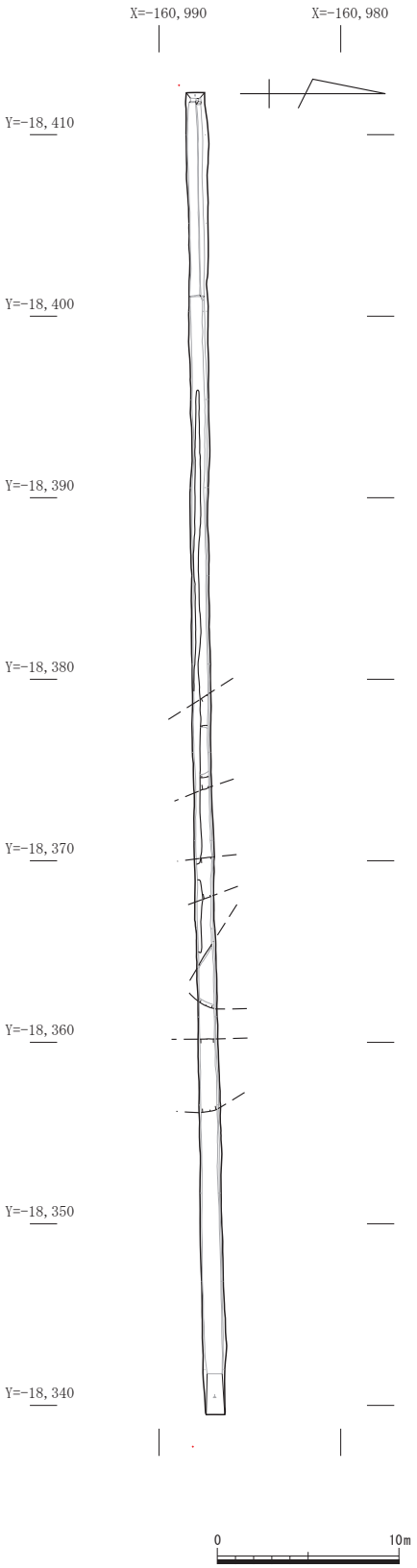
弥生時代？

ＳＤ -101　調査区西半で検出した北西－南東方向の溝である。東肩をＳＤ -102 に切られるものの、幅３ｍ前後とみられる。未完掘のため、規模の詳細は不明である。遺物が出土していないため時期は不明であるが、ＳＤ -102 に切られることから古墳時代以前の溝と考えられる。

ＳＤ -102　調査区中央で検出した北西－南東方向の溝である。東肩の一部をＳＤ -103 に切られるものの、幅約７ｍ前後とみられる。未完掘のため、規模の詳細は不明である。遺物が出土していないため時期は不明であるが、ＳＤ -103 に切られることから古墳時代以前の溝と考えられる。

古墳時代前期

ＳＤ -103　調査区東半で検出した、北西―南東方向の大溝である。幅は８～９ｍを測り、深さは未完掘のため不明であるが、0.9 ｍ以上を測る。土器の出土量は僅少であるが、木製品の出土が目立つ遺構である。時期は、布留式の土器片（第 10-9 図 4）が出土していることから、古墳時代前期頃と考えられる。水の流れに垂直になるように杭が５列打たれており、その杭列間に横材が組まれていたことから、しがらみを構成していたと思われる。杭は角杭、丸太杭、板杭といった様々なものが使われていた。出土した杭すべてを取り上げることはできなかったが、取り上げた杭から、長さ２ｍにまでおよぶものもあることがわかった。また、丸太杭として利用されたものの中には､他の用途で使われていたものを転用したとみられるものもあった。



第 10-3 図　試掘調査区平面図（Ｓ＝1/400）

さらに、杭列とは別に、田下駄や不明建築部材等も出土した（第 10-10 図）。

ＳＤ -104　調査区東端で検出した、北東－南西方向の溝である。南肩を検出したが、北肩はトレンチ外に出るため、規模は不明である。方向から、ＳＤ -103 に取り付く可能性も考えられる。

中世

小溝群　東西方向の小溝を検出した。中世の耕作に伴う小溝群とみられる。

（４）出土した遺物

第 10-9 図１～３は弥生時代後期後半～庄内期の甕片である。１・３は角閃石を多く含み、生駒山西麓産の可能性がある。中層（第３層）から出土した。第 10-9 図４は上層出土の布留型甕である。小片であるが、布留式新段階の特徴を示す。しがらみがある程度埋没した段階の遺物とみられる。

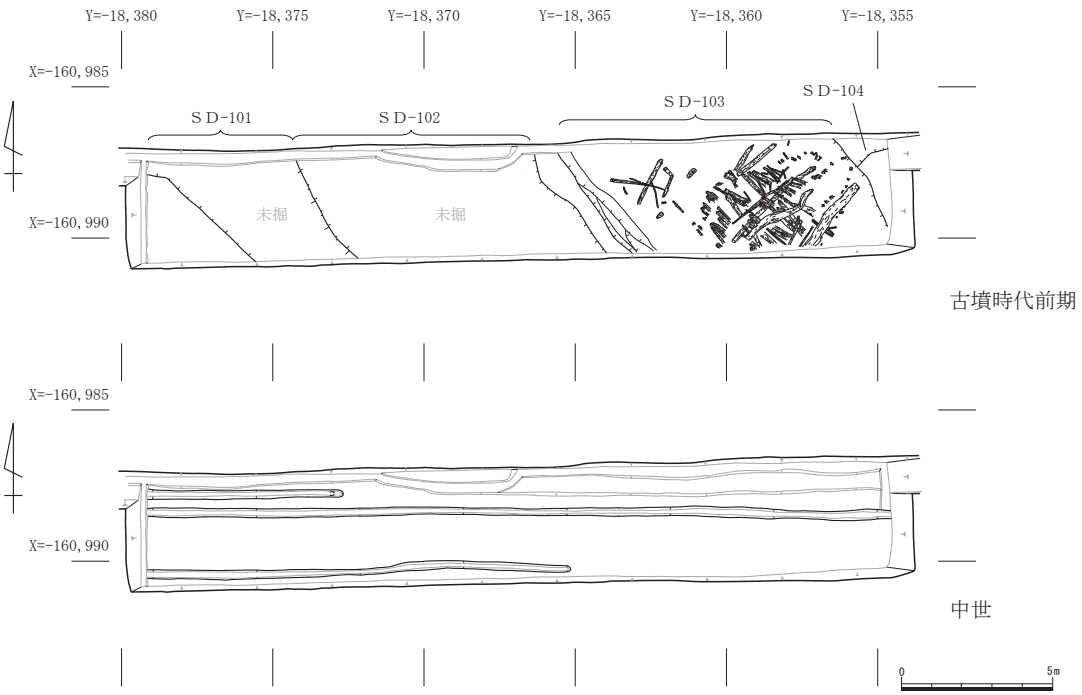
第 10-10 図１～２は田下駄である。共にヒノキ材で、１には別材との組み合わせのためとみられる窪みを持つ。足に固定するための紐穴がそれぞれ３ヶ所ある。１については上端と下端の中央にも穴を持つ。これも別材との組み合わせに用いるものであろう。

第 10-10 図３は有頭棒で、材質はコナラ属アカガシ亜属である。全長 83cm で上端付近に抉りがある。何らかの建築部材をしがらみに転用したものであろう。

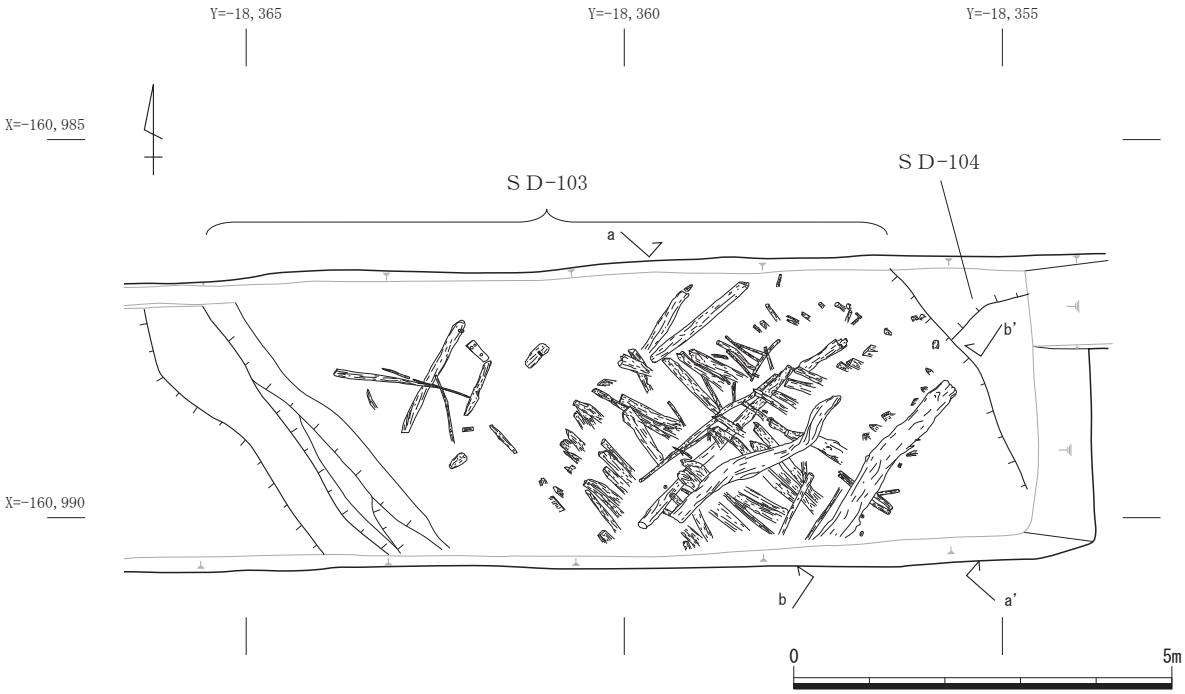
第 10-10 図５は不明建築材である。側面などに複数の抉りがあり、下端は斜めに切断されている。建築部材を転用して杭状に使用した可能性がある。材質はヒノキ科ヒノキ属である。

第 10-11 図１～６は板杭である。材質は大半がコナラ属クヌギ節で、樫系の堅牢な素材を荒くミカン割りして先端を尖らせただけの簡素なつくりである。

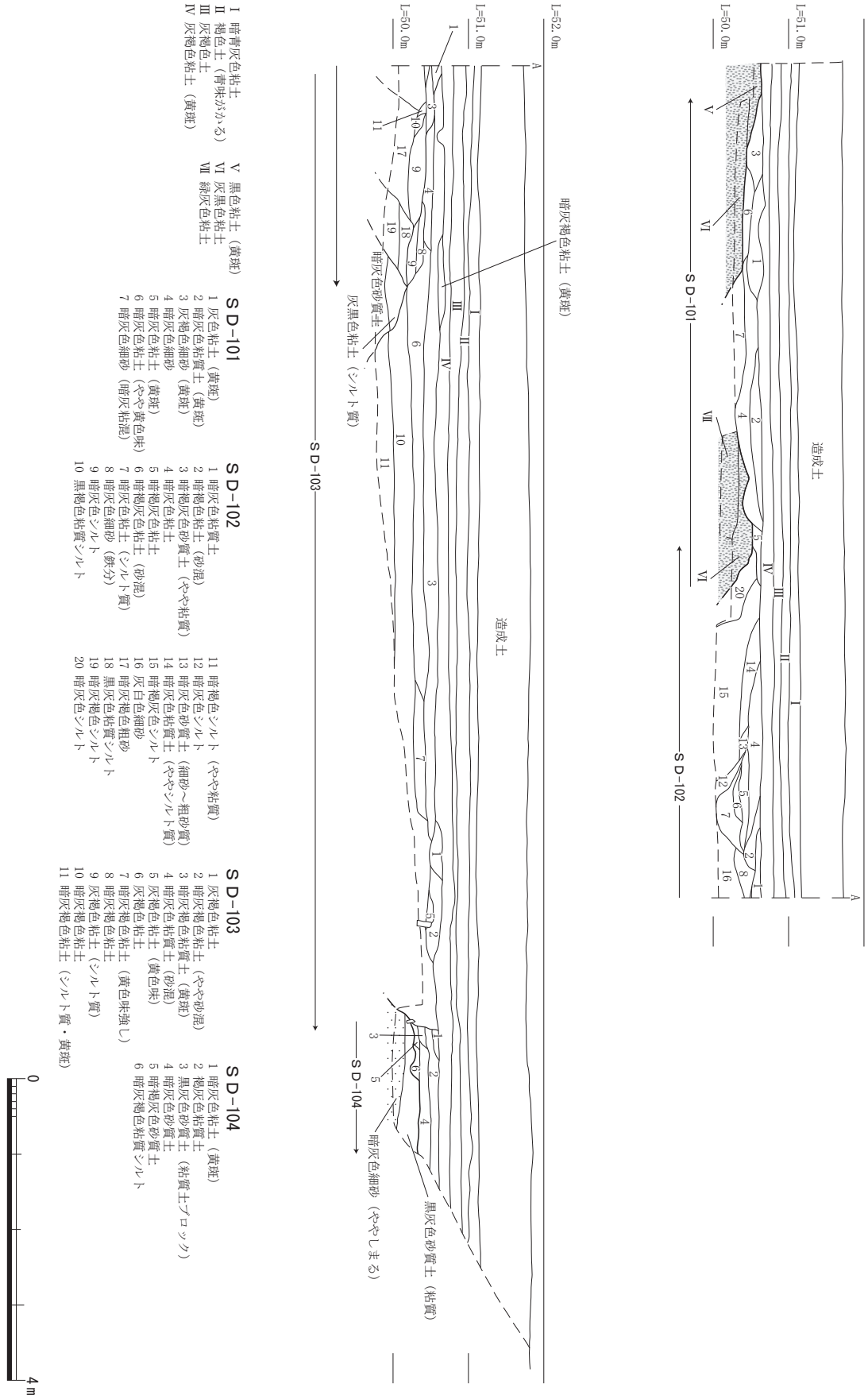
第 10-12 図１は丸太杭である。第 10-12 図３はしがらみの横材として設置されていた丸太材である。全長 103cm、太さ 20.6cm で、材質はコナラ属コナラ節である。



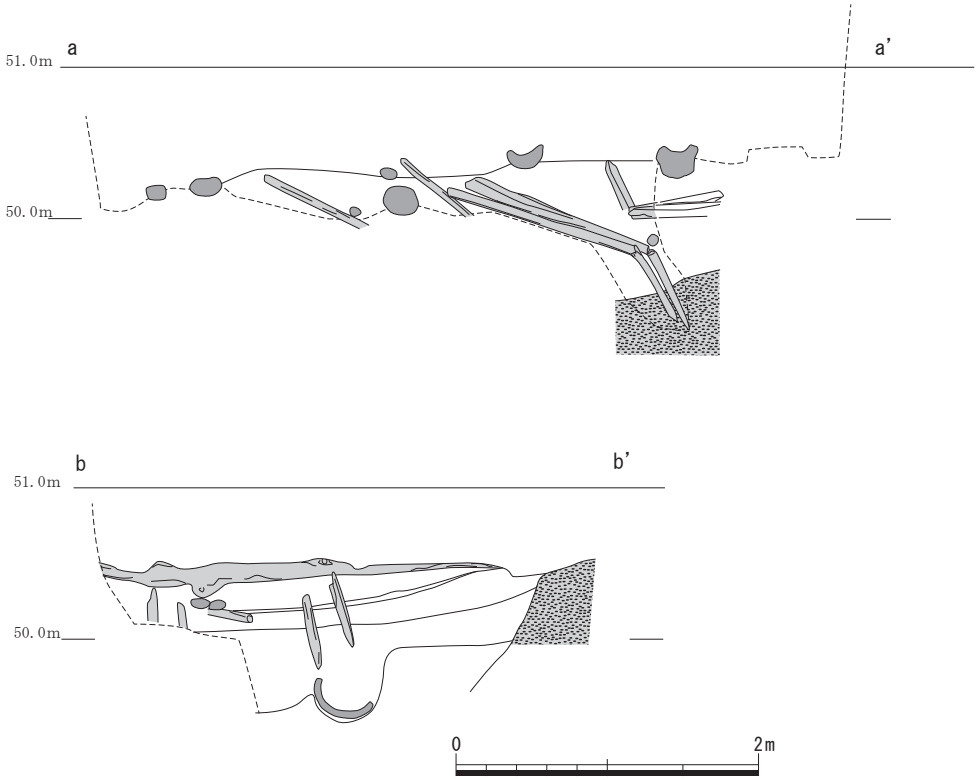
第 10-4 図　本調査区平面図（Ｓ＝1/250）



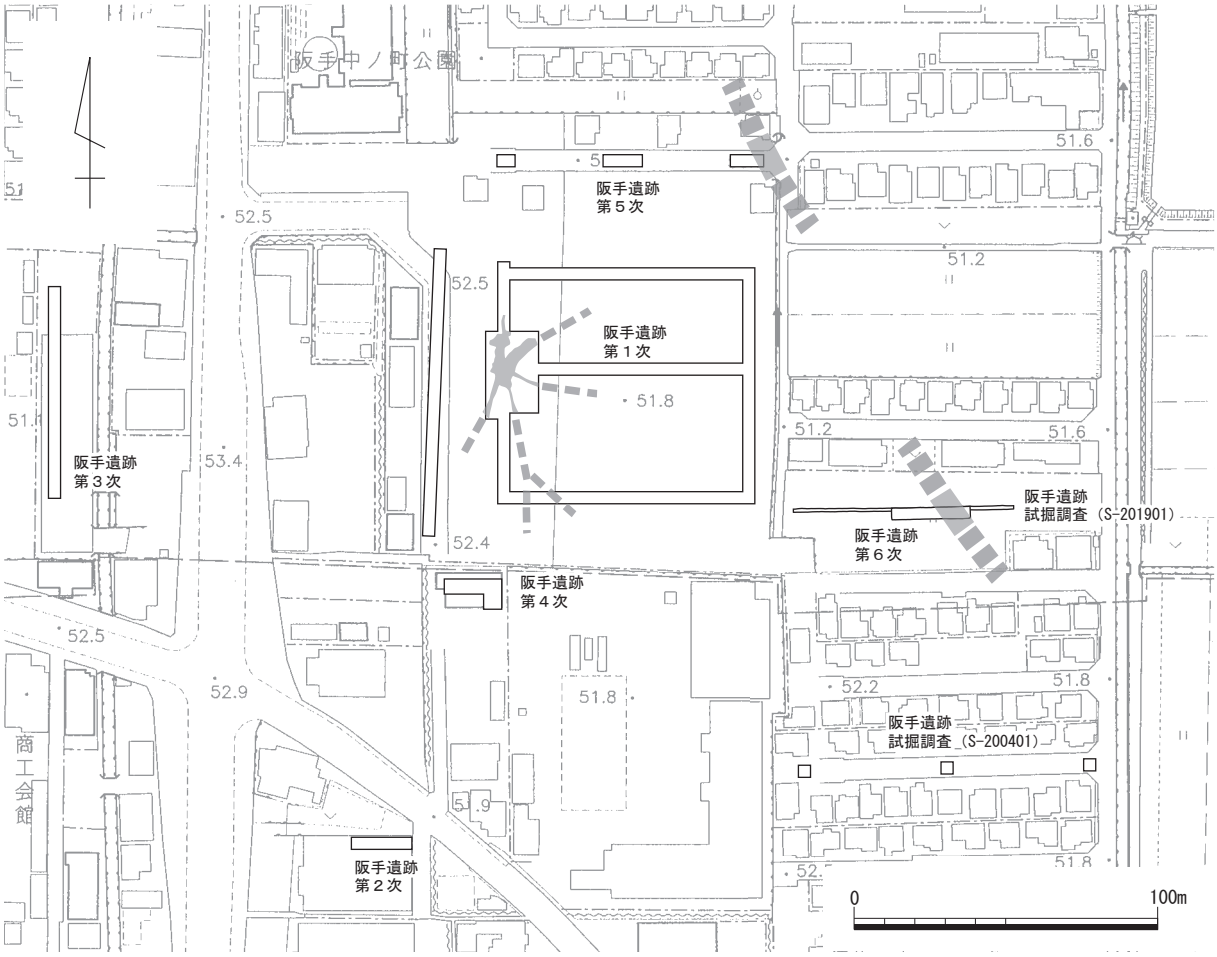
第 10-5 図　ＳＤ-103 及びＳＤ-104 平面図（Ｓ＝1/100）



第 10-6 図　北壁断面図（S＝1/80）



第 10-7 図　しがらみ断面模式図（S=1/50）



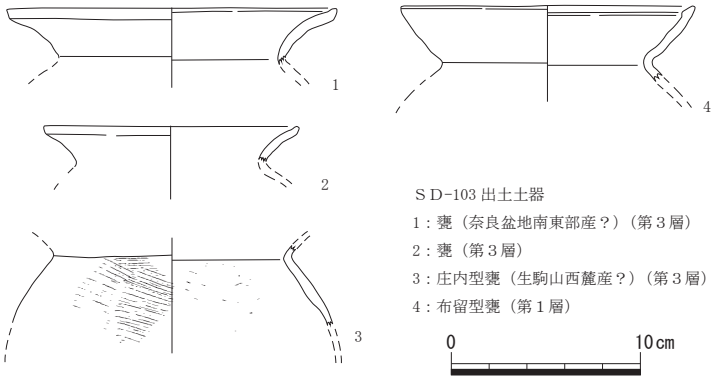
第 10-8 図　流路図（S＝1/2,500）

写真 10-1　中世完掘状況（東から）

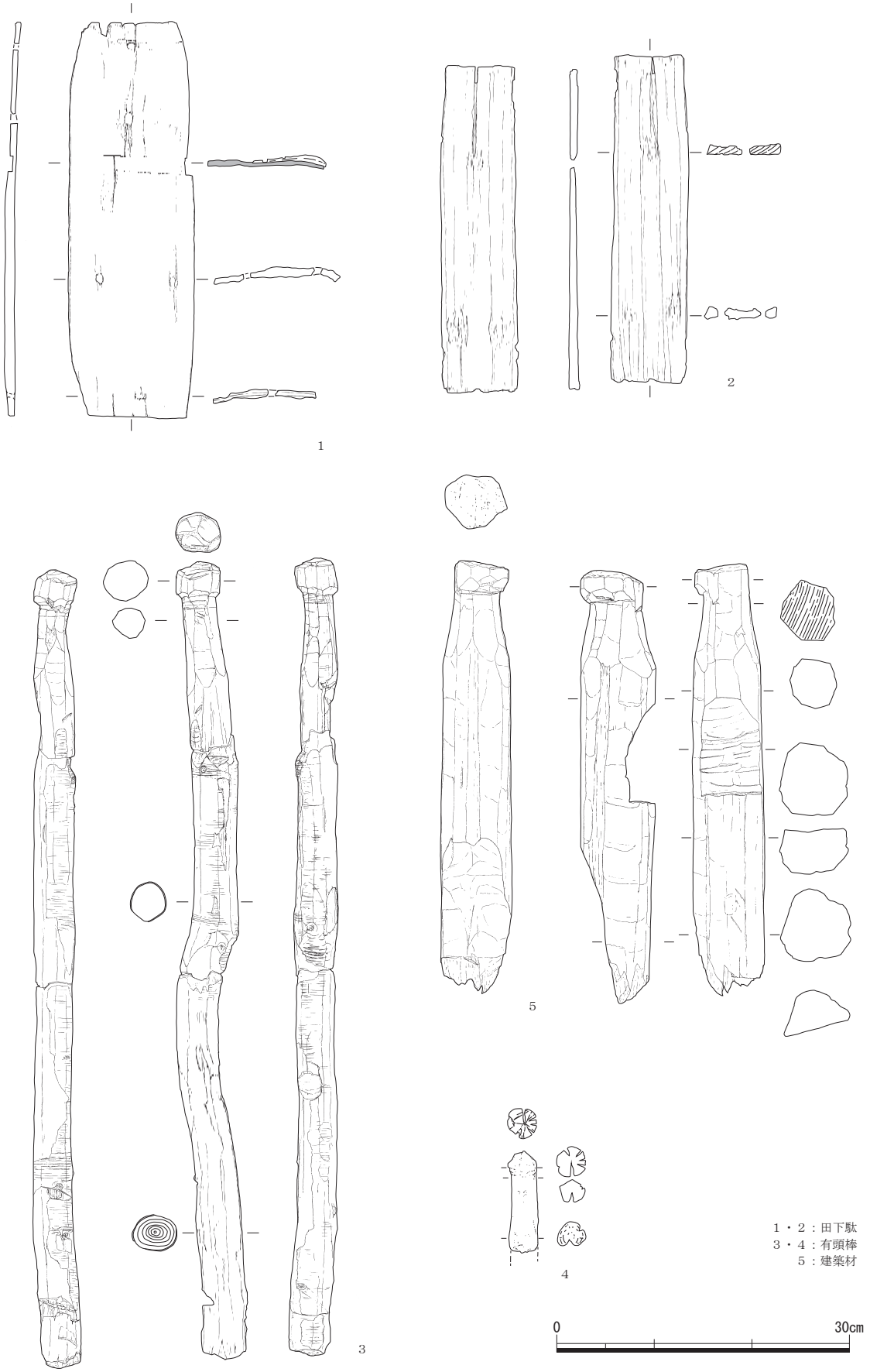
写真 10-2　ＳＤ -103 全景（東から）

写真 10-3　杭列検出状況（南東から）

写真 10-4　杭出土状況（東から）

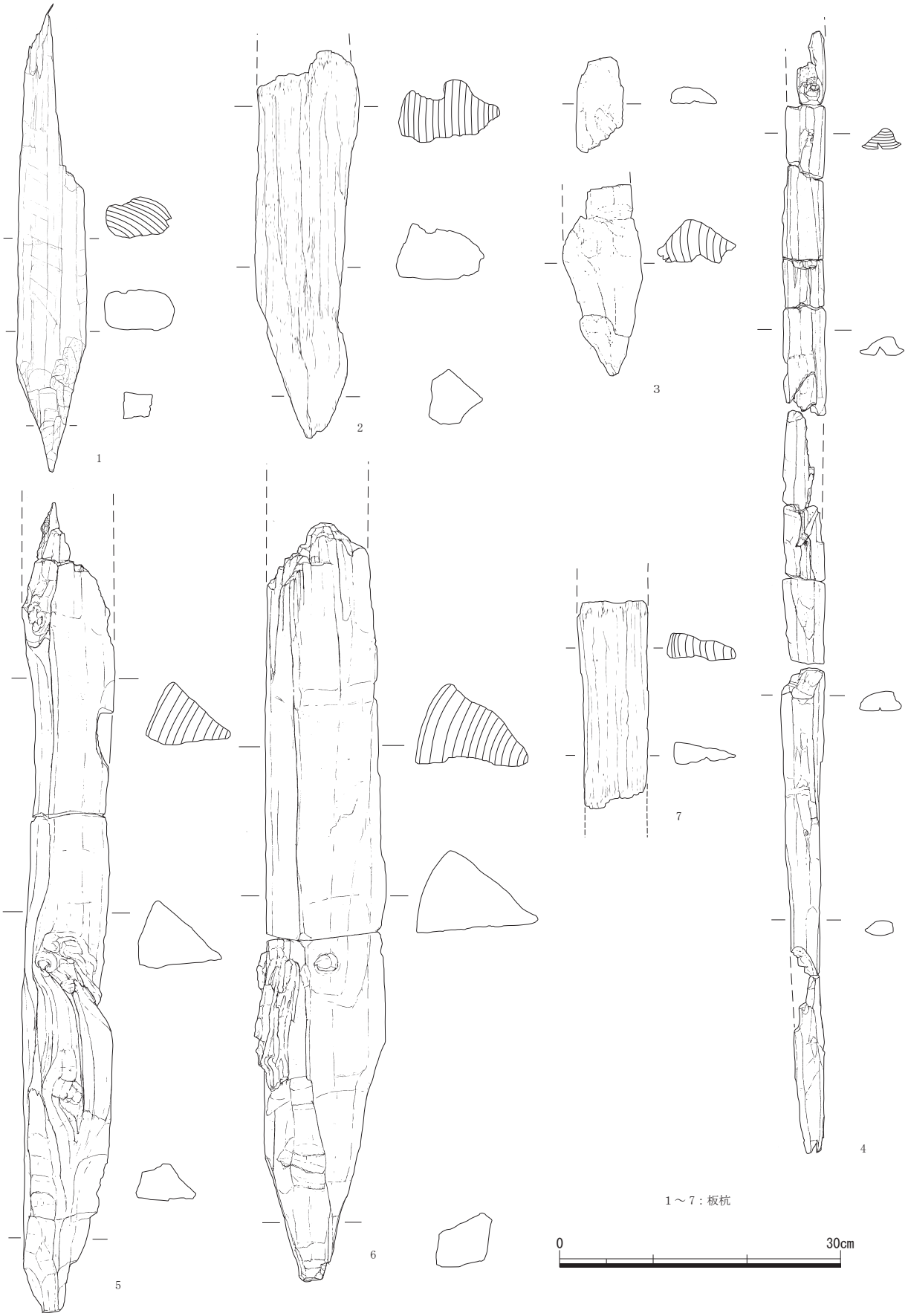


第 10-9 図　出土した土器（S=1/4）



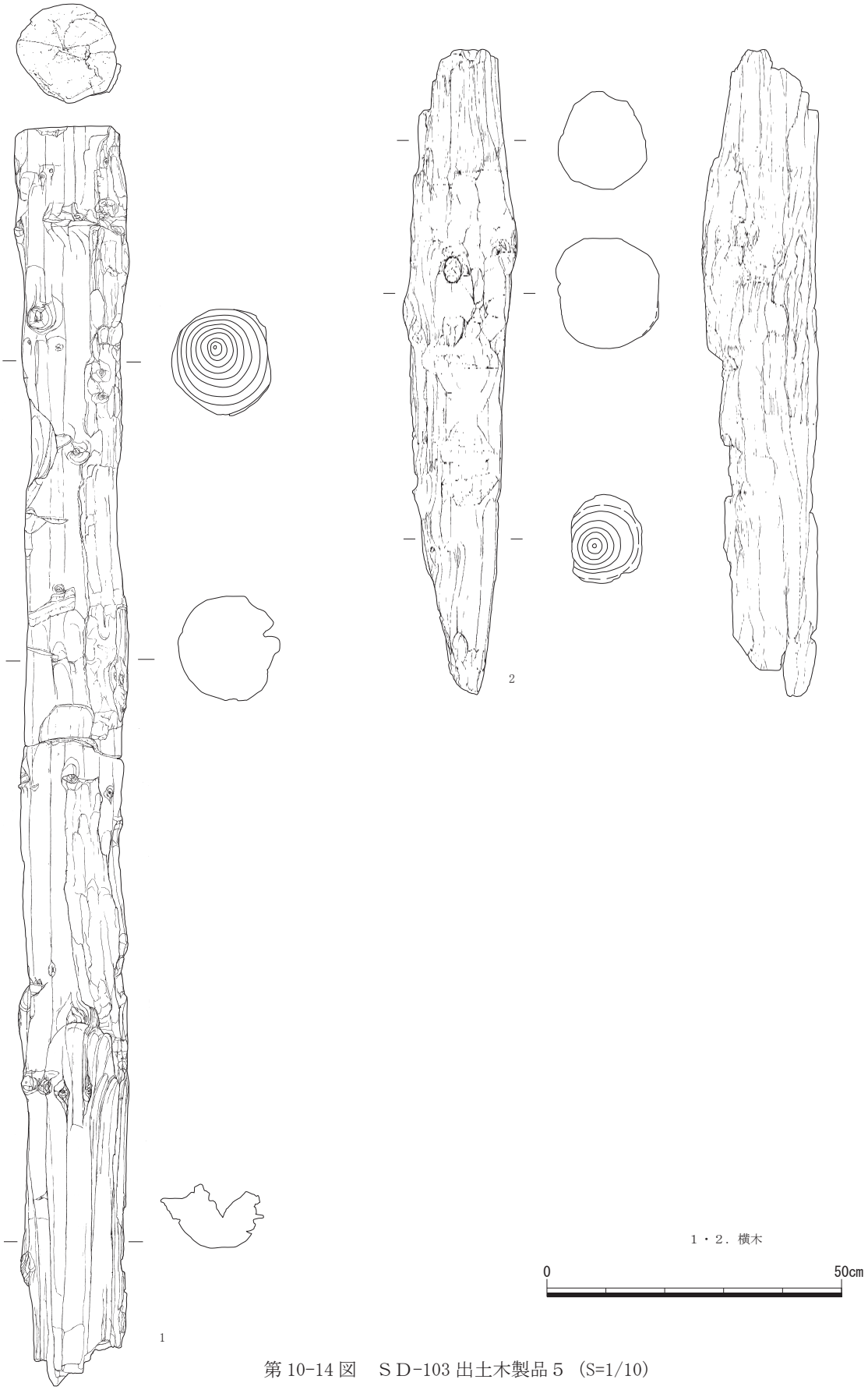
第 10-10 図　ＳＤ-103 出土木製品１（S=1/6）

第 10-11 図　ＳＤ-103 出土木製品２（S=1/6）



第 10-12 図　ＳＤ-103 出土木製品３（S=1/6）

第 10-13 図　ＳＤ-103 出土木製品４（S=1/10）



第 10-14 図　ＳＤ-103 出土木製品５（S=1/10）

３．まとめ

今回の調査で、しがらみを構成する溝が見つかった。水量調節のためか、ＳＤ-104 に水を引き込むためのものか検討が必要である。

また、ＳＤ-103 は第５次調査で検出した溝ＳＤ-3101（北西－南東方向、規模・時期不明）と同一遺構の可能性が考えられる。このＳＤ-3101 は、西肩の上段と中段の境に 30 ～ 40cm の間隔で杭を一列に打ち込み、護岸をおこなっている。

第１・５次調査で検出した溝は水路と考えられ、当地周辺が弥生時代の生産域であった可能性を示す。今回の調査でもしがらみを構成する溝を検出したことから、これを裏付ける新たな根拠が見つかったといえるだろう。

【木製品の樹種一覧】

図番号	製品名	樹　　種	製品コード	法　　量
図 10-10- 1	田下駄	ヒノキ科ヒノキ属	SKT-006-0001W	全長 40.6cm
図 10-10- 2	田下駄	ヒノキ科ヒノキ属	SKT-006-0002W	全長 33.8cm
図 10-10- 3	有頭棒	ヒノキ科ヒノキ属	SKT-006-0013W	残存長 82.0cm
図 10-10- 4	有頭棒	ブナ科シイ属	SKT-006-0039W	残存長 10.5cm
図 10-10- 5	建築材	ヒノキ科ヒノキ属	SKT-006-0003W	全長 44.4cm
図 10-11- 1	丸太杭	ヒノキ科ヒノキ属	SKT-006-0007W	全長 126.5cm
図 10-11- 2	丸太杭	ツバキ科サカキ属サカキ	SKT-006-0021W	残存長 67.7cm
図 10-11- 3	丸太杭	スダジイ	SKT-006-0011W	残存長 66.3cm
図 10-11- 4	丸太杭	ウルシ科ウルシ属	SKT-006-0019W	残存長 49.0cm
図 10-11- 5	丸太杭	ツバキ科サカキ属サカキ	SKT-006-0023W	残存長 38.8cm
図 10-11- 6	丸太杭	ヤナギ科ヤナギ属	SKT-006-0026W	残存長 21.2cm
図 10-11- 7	丸太杭	ブナ科シイ属	SKT-006-0017W	残存長 33.6cm
図 10-11- 8	丸太杭	ツバキ科サカキ属サカキ	SKT-006-0024W	残存長 33.3cm
図 10-11- 9	丸太杭	ブナ科コナラ属コナラ節	SKT-006-0044W	残存長 80.8cm
図 10-12- 1	板杭	ヒノキ科ヒノキ属	SKT-006-0020W	残存長 50.0cm
図 10-12- 2	板杭	ツバキ科サカキ属サカキ	SKT-006-0034W	残存長 41.5cm
図 10-12- 3	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0032W	残存長 20.3cm
図 10-12- 4	板杭	ブナ科シイ属	SKT-006-0028W	残存長 120.0cm
図 10-12- 5	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0030W	残存長 87.0cm
図 10-12- 6	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0035W	残存長 81.2cm
図 10-12- 7	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0029W	残存長 22.3cm
図 10-13- 1	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0005W	残存長 140.8cm
図 10-13- 2	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0006W	残存長 123.4cm
図 10-13- 3	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0010W	残存長 75.8cm
図 10-13- 4	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0012W	残存長 85.0cm
図 10-13- 5	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0008W	残存長 183.9cm
図 10-13- 6	板杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0009W	残存長 198.0cm
図 10-14- 1	横木	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	SKT-006-0040W	残存長 214.5cm
図 10-14- 2	横木	ブナ科コナラ属コナラ節	SKT-006-0041W	残存長 110.2cm

11. 秦庄遺跡　第８次調査

１．遺跡・既調査の概要

秦庄遺跡は、田原本町南部の大字秦庄および宮森に所在する、弥生時代～古墳時代の集落跡である。遺跡北西部の県教育センター建設に伴う発掘調査では、古墳時代の集落遺跡を確認したほか、縄文時代後期の土器も出土している。また、遺跡南部では弥生時代後期～古墳時代頃の落ち込みを確認している。

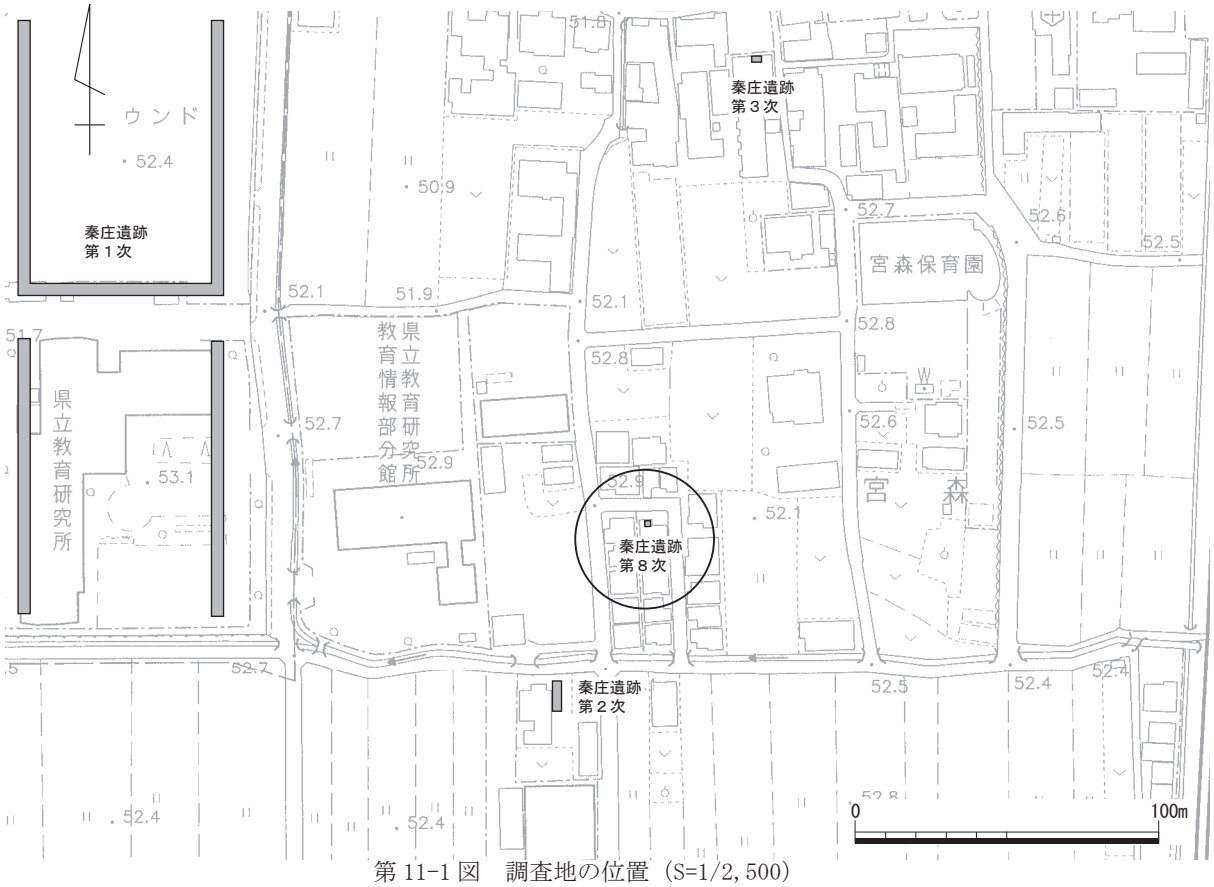
今回の調査地は、遺跡中央付近での個人住宅建築に伴って実施した。建物部分に２ｍ四方の調査区を設定して調査をおこなった。

２．調査の成果

（１）層序

Ⅰ：茶灰色砂礫土〔検出標高 52.6 ｍ、以下数値のみ記す〕、 Ⅱ：暗青灰色土〔52.15 ｍ〕、Ⅲ：淡褐色土〔51.95 ｍ〕、Ⅳ：茶灰色土〔51.9 ｍ〕、Ⅴ：暗灰褐色粘質土〔51.7 ｍ〕、Ⅵ：暗褐色土〔51.4 ｍ〕、Ⅶ：暗灰色細砂〔51.1 ｍ〕

調査地の現状は宅地である。第Ⅰ層は造成土、第Ⅱ層は旧水田耕土、第Ⅴ層は古代頃の遺物包含層、第Ⅵ層以下は地山とみられる。調査では、第Ⅴ層上面まで重機により除去して近世遺



第 11-1 図　調査地の位置（S=1/2,500）

構面を調査し、また第Ⅵ層上面まで人力で掘り下げ、古代頃とみられる第２遺構面を調査した。

（２）遺構と遺物

弥生時代～古墳時代

ＳＤ－101　調査区中央で検出した東西方向の小溝である。幅 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。布留式新段階の甕などが出土した。

ＳＤ－102　ＳＤ－101 の南側で検出した東西方向の小溝である。調査区西側で延長 0.6 m程度を検出した。幅 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。土師器小片が出土したのみで、詳細な時期は明らかでない。古墳時代前期～中期頃の遺構とみられる。

ＳＤ－103　調査区南端で検出した東西方向の小溝である。調査区外に拡がるため正確な幅は不明、深さ 0.1 mを測る。顕著な遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでない。堆積土等がＳＤ－101・102 と共通であることから、同時期の遺構である可能性が考えられる。

ＳＫ－101　調査区北西部で検出した土坑である。推定直径１m前後、深さ 0.2 m前後を測る。布留式の土器片等が出土しているが、須恵器坏の小片が出土していることから、古墳時代後期の遺構となる可能性がある。

ＳＫ－102　調査区中央で検出した、長辺 0.9 m、短辺 0.7 mの方形の土坑である。深さ 0.2 mを測る。弥生時代後期の高坏等が出土した。出土した遺物から、弥生時代後期頃の遺構と考えられる。

中世

素掘小溝群　調査区全体で４条の小溝を検出した。出土遺物は平安時代～鎌倉時代頃の土師器・瓦器等で、中世の耕作に伴う遺構とみられる。

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期・後期の遺構および中世の小溝群を確認した。周囲の調査成果をみると、調査地北側 150 mで実施した第３次調査などでは古墳時代前期の集落遺構を確認しており、また、西側 150 mで実施した第１次調査では古墳時代後期の集落を確

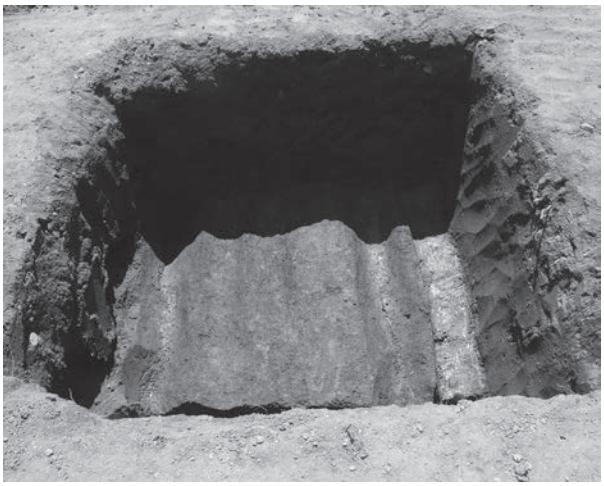
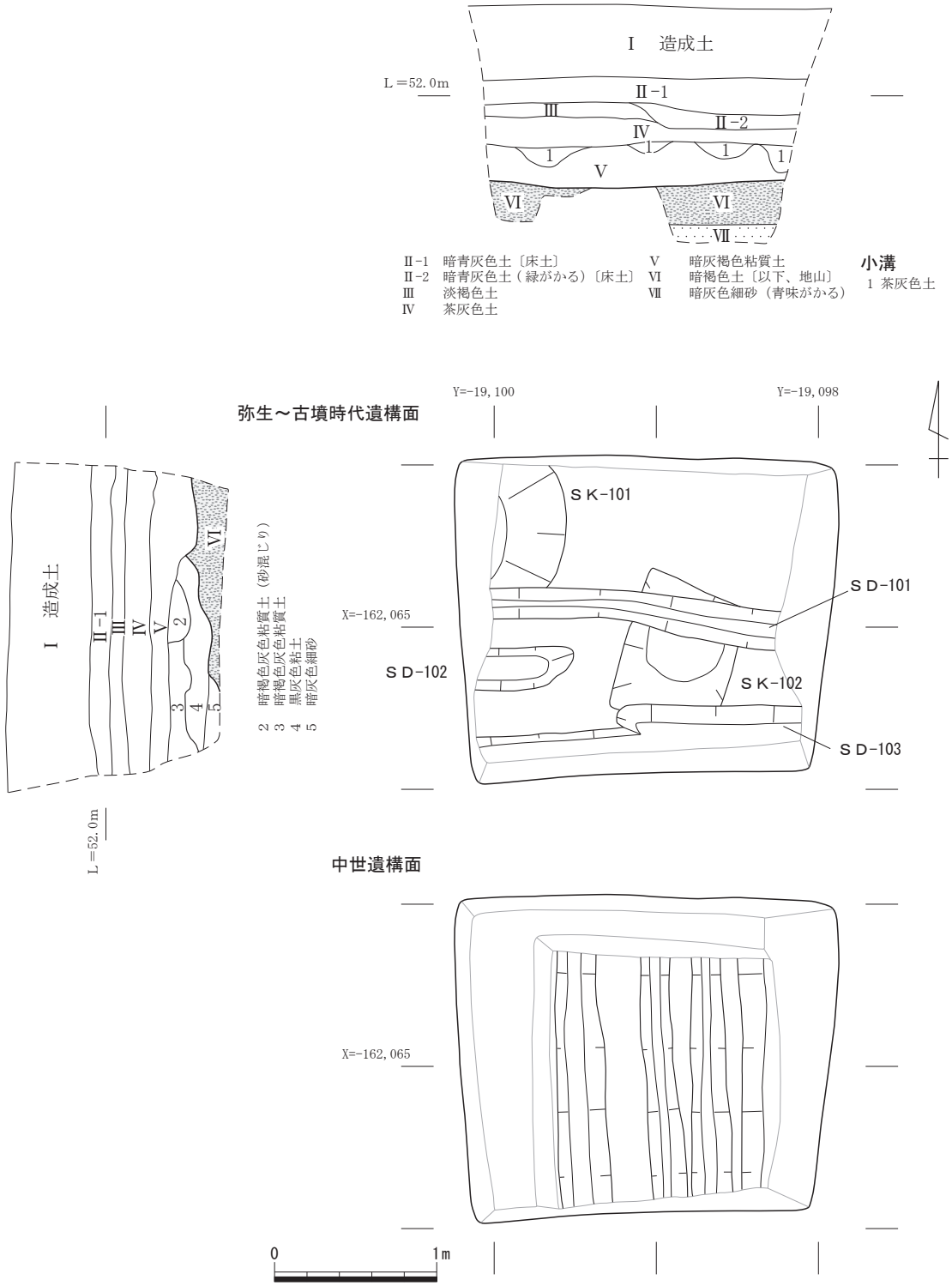


写真 11-1　中世の遺構（北から）

写真 11-2　古墳時代前後の遺構（南から）

認している。一方、南側 50 mで実施した第２次調査では、中世以前の河跡が拡がる状況を確認している。これらの状況から、本調査地は弥生時代後期～古墳時代前期の集落域の一部となる可能性が考えられ、その拡がりの中心は現宮森集落付近とみられる。ただし、この地区の調査は小規模な個人住宅建築に伴うものが数件おこなわれているのみであるため、今後の調査により確認を進める必要がある。



第 11-2 図　検出した遺構と層序（S=1/40）

12. 黒田遺跡　第４次調査

１．遺跡・既調査の概要

黒田遺跡は、田原本町北部の大字黒田に所在する弥生時代～近世の集落・寺院からなる複合遺跡である。また、遺跡中央には古墳時代後期の前方後円墳「黒田大塚古墳」があり、墳丘周辺が県史跡として整備されている。遺跡西部には法楽寺があり、中世には多くの伽藍をもつ大寺院であったことが板絵などから知ることができる。

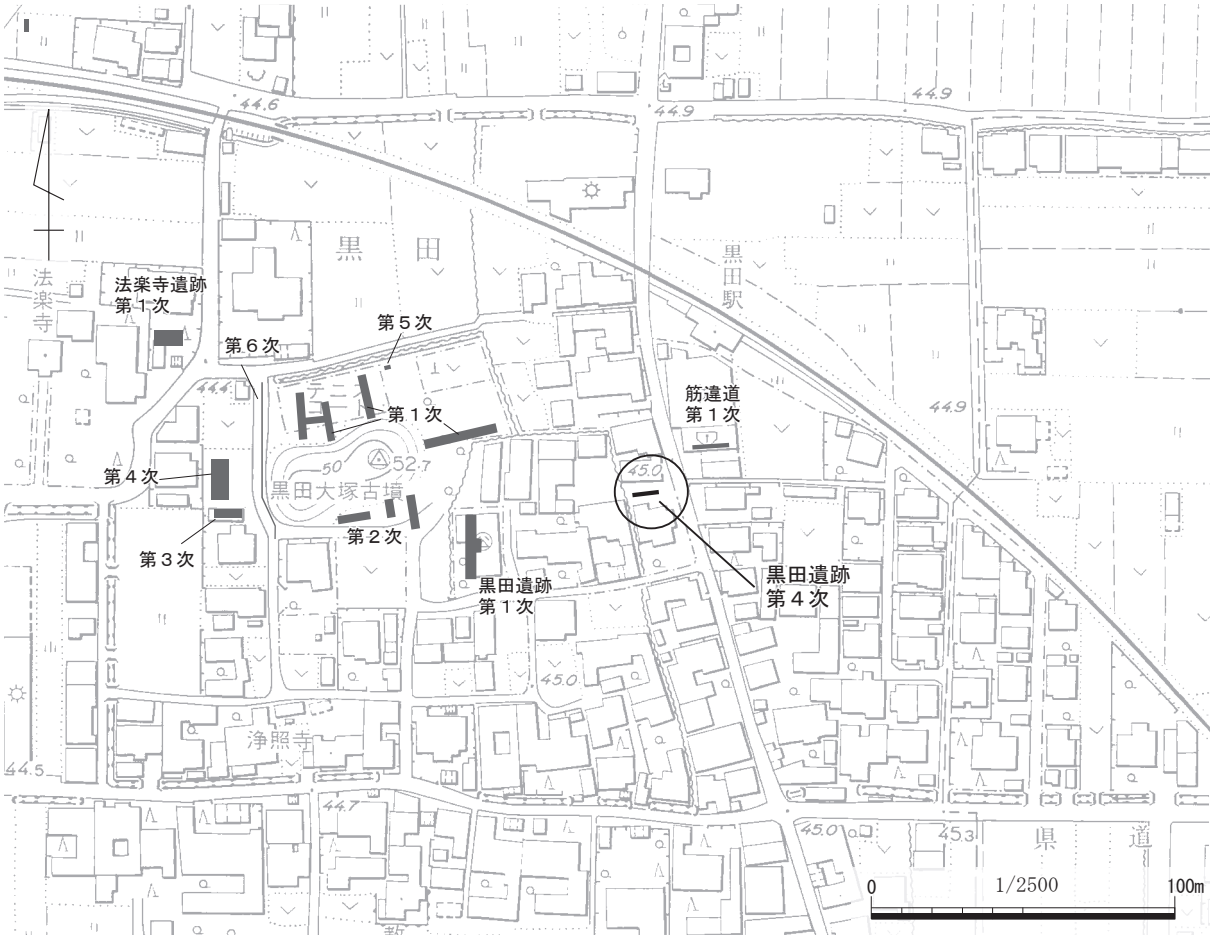
また､本遺跡の東端を通る北北西－南南東方向の道路は､飛鳥と斑鳩を結ぶ古代の道路跡「筋違道」の痕跡とされ、周辺の発掘調査で筋違道の側溝とみられる古代の溝を確認している。

今回の調査は、遺跡東端、筋違道西側での個人住宅建築に先立って実施した。幅１ｍ、東西６ｍの調査区を建物予定部分の南端に設定した。

２．調査の成果

（１）層序

調査地の現状は宅地である。



第 12-1 図　調査地の位置

Ⅰ：茶灰色砂礫土〔検出標高 45.0 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗緑灰色粘土〔44.1 m〕、Ⅲ：緑灰色粘土〔44.0 m〕、Ⅳ：灰褐色粘土〔43.75 m〕、Ⅴ：黄灰色粘質土〔43.6 m〕、Ⅵ：灰白色粘土〔43.5 m〕

調査地の現状は宅地である。第Ⅰ層は現代造成土、第Ⅱ層は水田耕土、第Ⅲ層は水田床土、第Ⅳ層は中世遺物包含層、第Ⅴ層以下はベースとみられる。調査では、第Ⅴ層上面まで重機により除去し、以下を人力で調査した。

（2）遺構と遺物

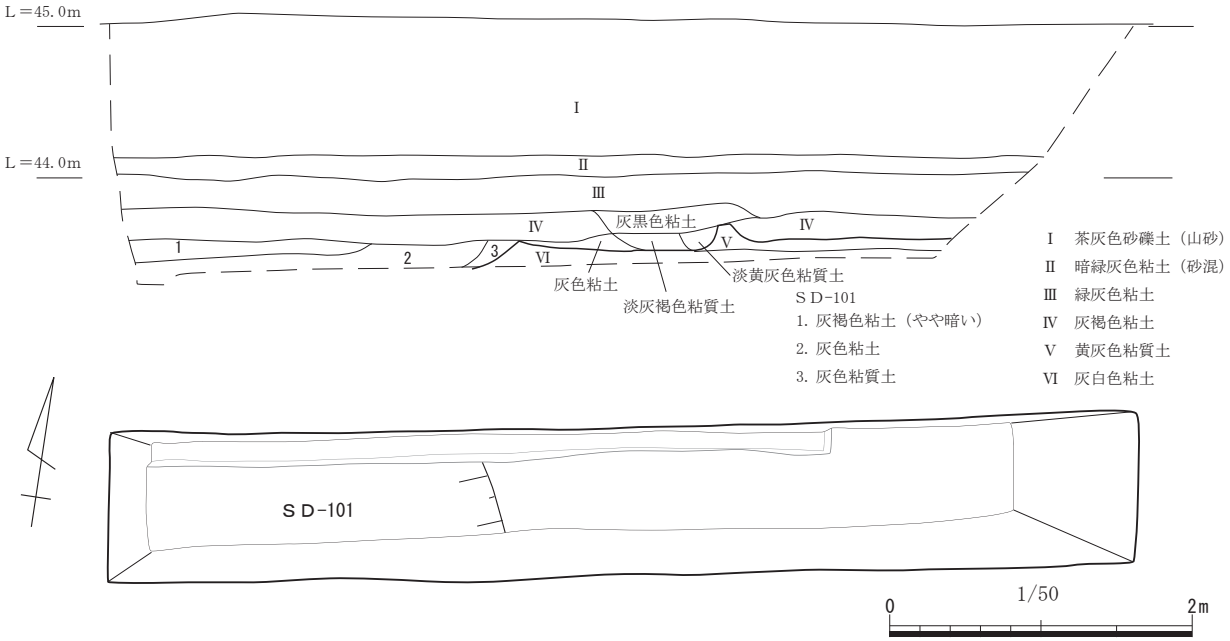
古墳時代～古代

ＳＤ-101　調査区西側で確認した北北西－南南東方向の溝状遺構である。上部の堆積を確認したのみであり、遺構の深さは確認していない。また、東肩のみの検出であり、調査区内で幅 2.5 m分を確認したが、溝幅を明らかにすることができなかった。層序から中世よりは古い遺構とみられるが、遺物が出土していないため時期は明らかでない。検出した位置から、筋違道の西側側溝となる可能性がある。

写真 12-1　調査区全景（西から）

３．まとめ

今回の調査は狭小な面積であるため、筋違道西側側溝とみられる遺構の位置と層序を確認したのみである。筋違道の側溝については、今回のような断片的な情報を積み重ねることで全体像を復元していく必要がある。



第12-2図　北壁断面図・遺構平面図（S=1/50）

13. 筋違道　第５次調査

１．遺跡・既調査の概要

筋違道は、奈良盆地中央の斑鳩と、盆地南端の飛鳥を結ぶ古代の直線道路跡である。聖徳太子が飛鳥と斑鳩を往復するのに通ったという伝承から、太子道とも呼ばれる。田原本町大字宮古ではこの道を踏襲したとみられる北北西－南南東方向の斜行道路が現在も残る。これまでの発掘調査では、この道の側溝とみられる遺構を複数地点で確認している。

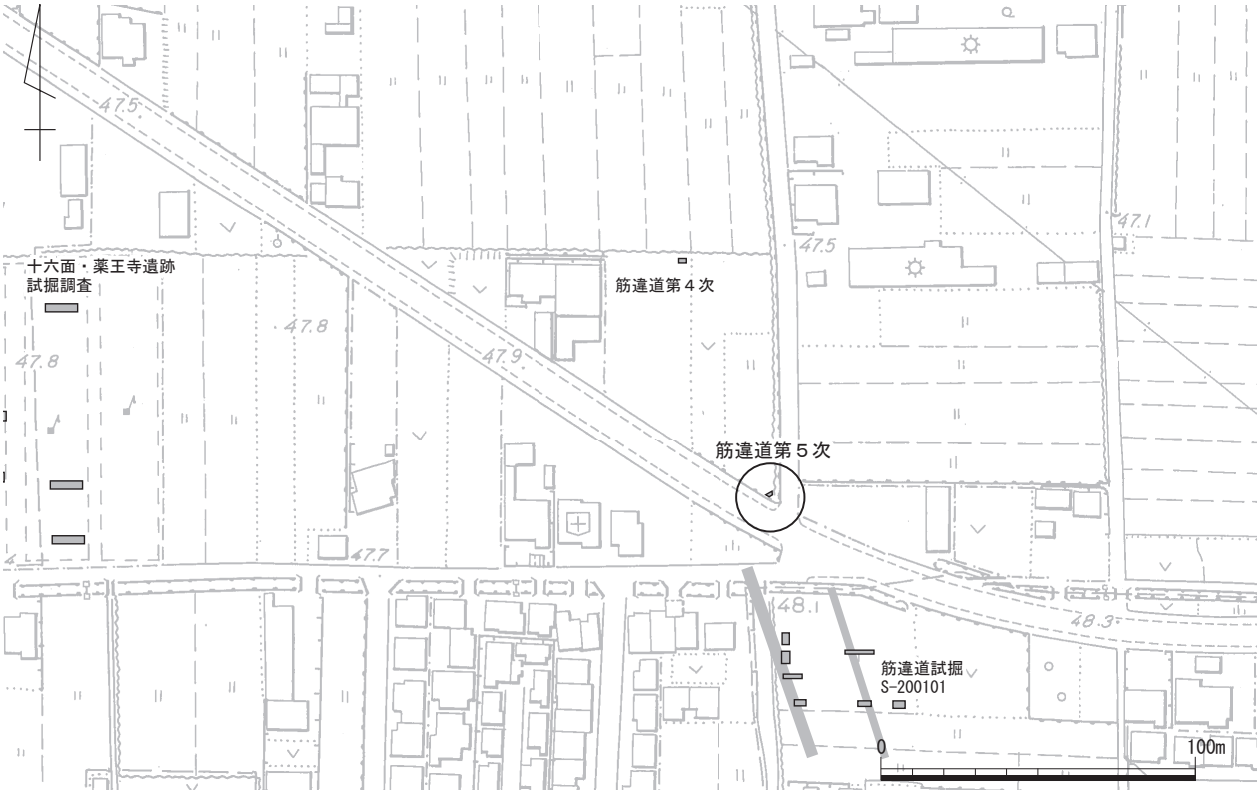
今回の調査は、大字保津地内で計画された歩道整備事業に先立ち、延長 2.2 m・幅 1.2 mの調査区を設定した。

写真 13-1　調査区全景（南東から）

２．調査の成果

（1）層序

Ⅰ：暗褐色土〔検出標高 47.1　m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：青褐色土〔47.0　m〕、Ⅲ：茶灰



色土〔46.95 m〕、Ⅳ：茶灰色粘質土（中世小溝）〔46.8 m〕、Ⅴ：暗褐色土・黄灰色シルトのブロック土（時期不明落ち込み上層）〔46.75 m〕、Ⅵ:暗褐色土（時期不明落ち込み下層）〔46.55 m〕、Ⅶ：緑灰色シルト（ベース？）〔46.4 m〕

第Ⅰ層は水田耕土、第Ⅱ層は水田床土層、第Ⅲ層は中世遺物包含層である。調査では、第Ⅲ層までを人力で除去し、中世の遺構検出をおこなった。

（２）遺構と遺物

古墳時代～古代

落ち込み１　調査区全体で確認した暗褐色土と黄灰色シルトのブロック土堆積を落ち込み１とした。古墳時代～古代頃の整地層となる可能性があるが、遺物僅少のため時期と性格は不明。

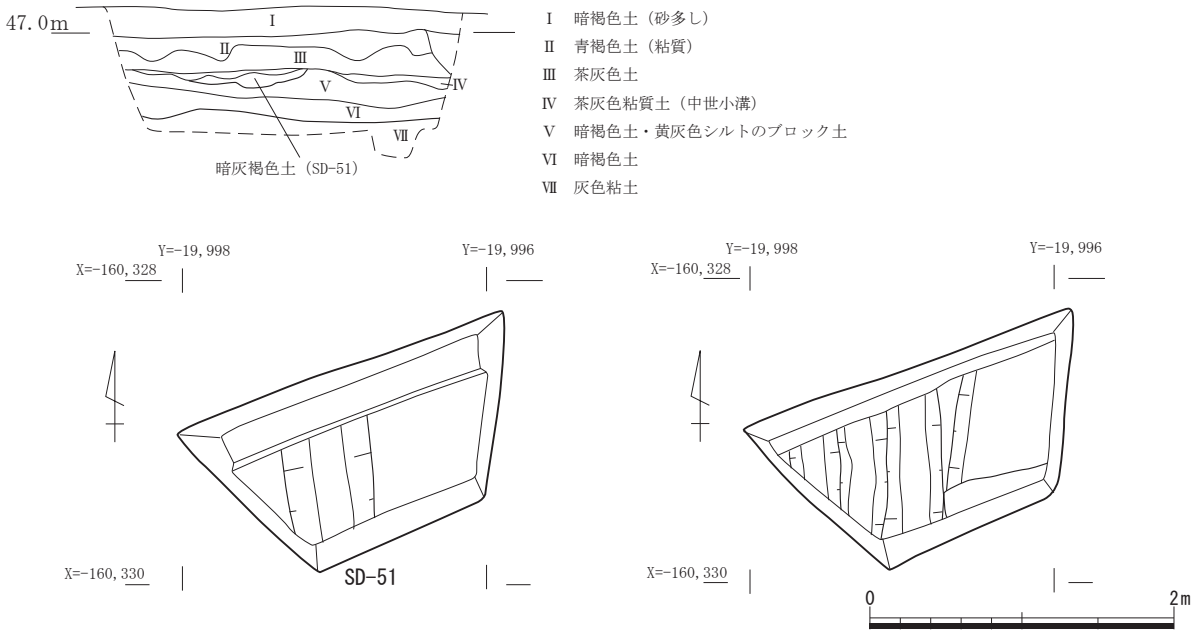
中世～近世

ＳＤ-51　調査区西半で検出した、幅 0.6 m、深さ 0.2 mの南北方向の小溝である。主軸は筋違道の影響か、若干北北西－南南西方向に傾く。遺物が僅少であるため詳細な時期は不明。

小溝群　調査区全体で、幅 0.3 m前後、深さ 0.1 m前後の南北方向の小溝４条を確認した。遺物が僅少であるため詳細な時期は明らかでないが、中世～近世の遺構と考えられる。

３．まとめ

今回の調査は狭小な面積であるため、筋違道に直接関連する遺構は確認できなかった。なお、検出した小溝に筋違道の地割りが影響した形跡があり、現状では筋違道の痕跡が全く確認できない地点でも中世頃までは筋違道の痕跡が残っていたことが考えられる。



第 13-2 図　検出した遺構と層序（S=1/50）

14. 宮森遺跡　第２次調査

１．遺跡・既調査の概要

宮森遺跡は、田原本町南端の飛鳥川沿い、標高 50 m前後の沖積地に位置する。今回の調査は、宮森遺跡の西端、大字矢部地内の農道拡幅工事に伴って実施した。工事は南北 200 mに亘るものであったが、平成 30 年度の試掘調査で遺構を確認した工区北部で南北 45 mの調査区を設け、発掘調査を実施した。

２．調査の成果

（１）層序

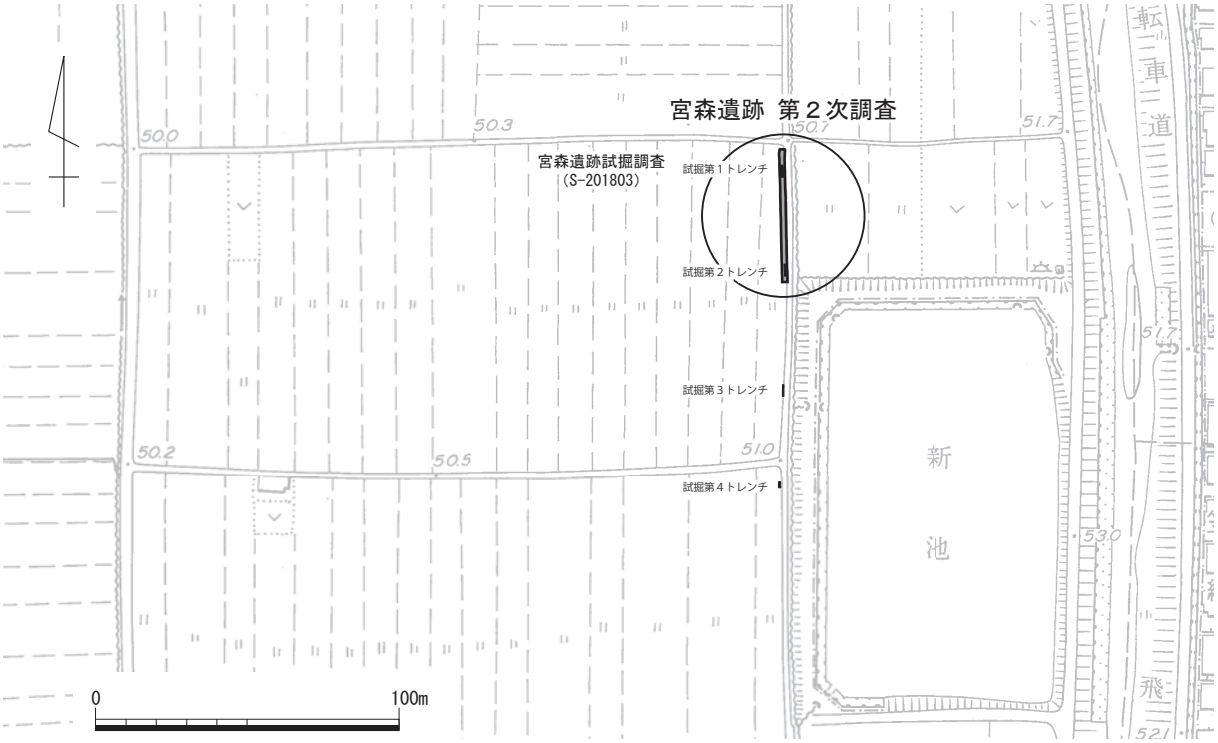
Ⅰ:暗青灰色粘土〔検出標高 50.6 m、以下数値のみ記す〕、Ⅱa:淡茶灰色土〔50.5 m〕、Ⅱb:茶灰色土〔50.3 m〕、Ⅲ：淡茶灰色粘質土〔50.2 m〕、Ⅳ：暗灰色粘土〔50.15 m〕、Ⅴ：黄褐色粘質土〔50.1 m〕、Ⅵ：黒褐色土（ハード）〔50.0 m〕

第Ⅰ層は水田耕土、第Ⅱ層は水田床土層、第Ⅳ層は中世遺物包含層、第Ⅵ層はベースである。調査では、第Ⅳ層までを重機で除去し、中世の遺構検出をおこなった。

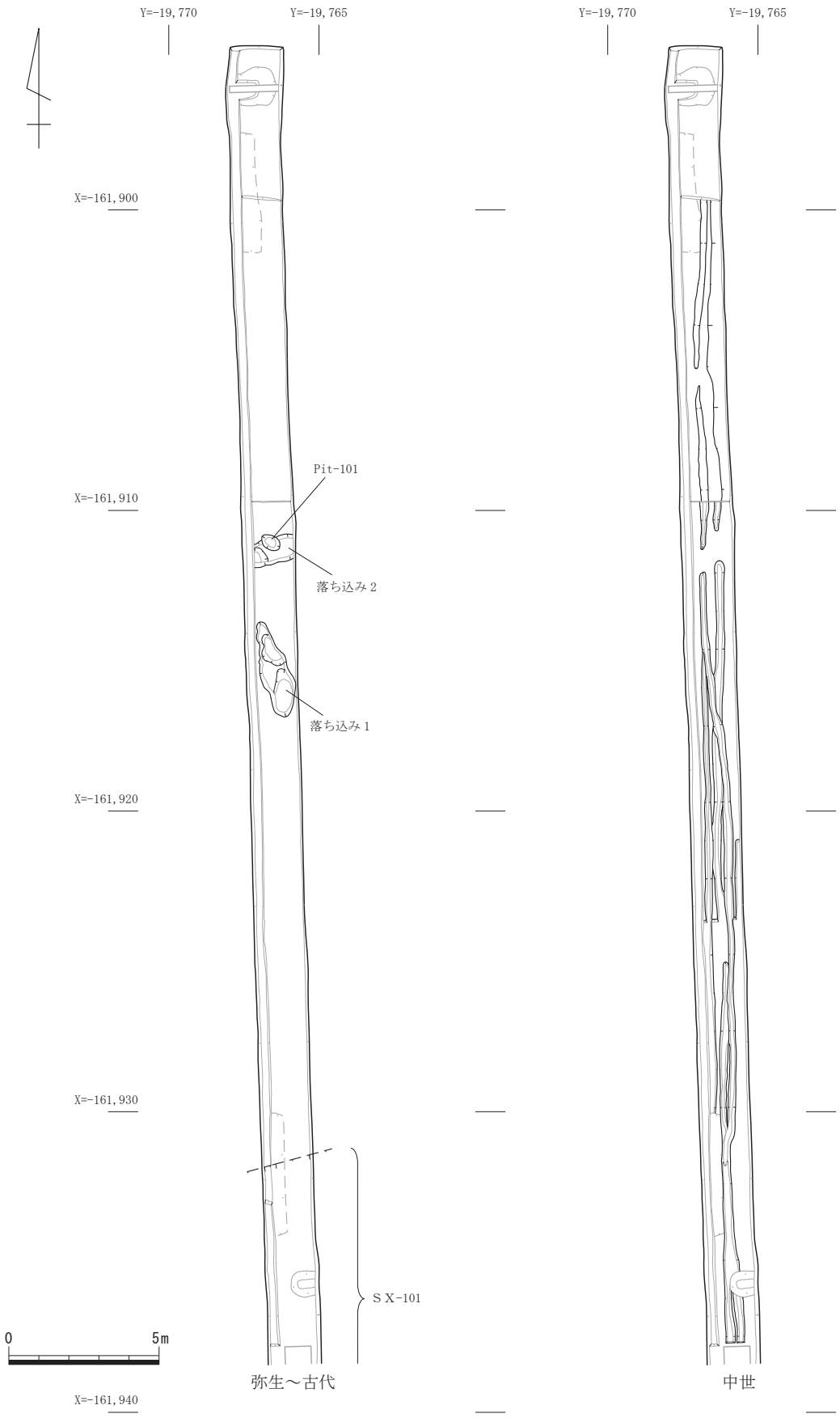
（２）遺構と遺物

弥生時代～古代

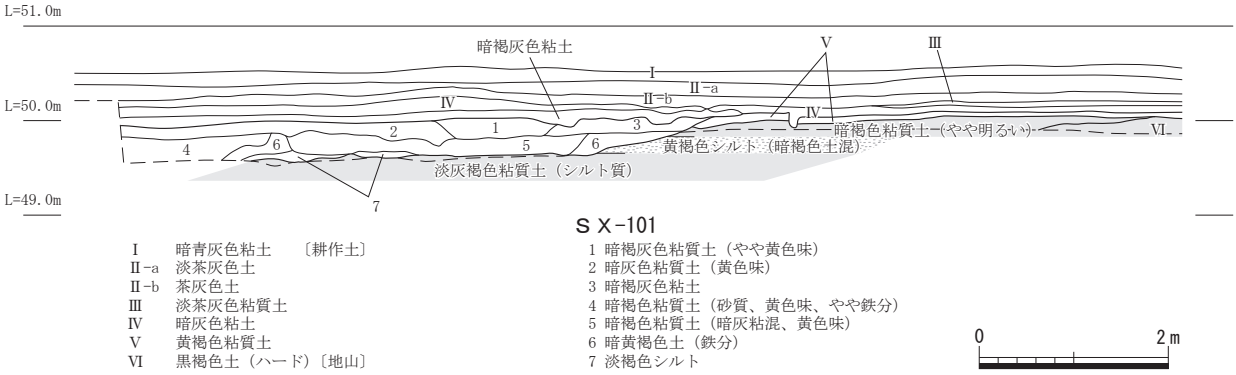
ＳＸ -101　調査区南端で確認した落ち込み状の遺構である。最下層から弥生土器片が出土しているが、小片のため詳細な時期は明らかでない。調査区外に拡がるため遺構の規模は明らか



第 14-1 図　調査地の位置（S=1/2,500）



第 14-2 図　遺構平面図（S＝1/200）



第 14-3 図　調査区南端西壁断面図（Ｓ＝1/80）

でない。

Pit-101　調査区中央、落ち込み２と重複する形で検出した小規模な土坑である。直径 0.6 m、深さ 0.2 mを測る。

落ち込み１　調査区中央、落ち込み２の南側で確認した不整形の土坑状遺構である。北北西－南南東方向の主軸を持つ溝となる可能性もある。長軸 3.3 m、短軸１m、深さ 0.2 mを測る。

落ち込み２　調査区中央で確認した不整形の遺構である。東北東－西南西方向の溝となる可能性もある。幅 0.8 m、深さ 0.1 mを測る。顕著な遺物が出土していないため時期の特定は困難である。落ち込み１との位置関係から、方形周溝墓となる可能性も考えらえる。

中世

小溝群　調査区全体で南北方向の小溝群を確認した。中世頃の耕作に伴う遺構とみられる。

３．まとめ

今回の調査では、全体として遺構密度・遺物量ともに少なく、遺跡辺縁部の様相を呈することを確認した。なお、遺物は出土していないが、今回落ち込みとしている遺構は方形周溝墓の可能性も残る。近接する矢部南遺跡で弥生時代中期中頃の方形周溝墓群を確認していることから、同種の遺構の拡がりについて今後とも注意する必要がある。

写真 14-1　調査区全景（北から）

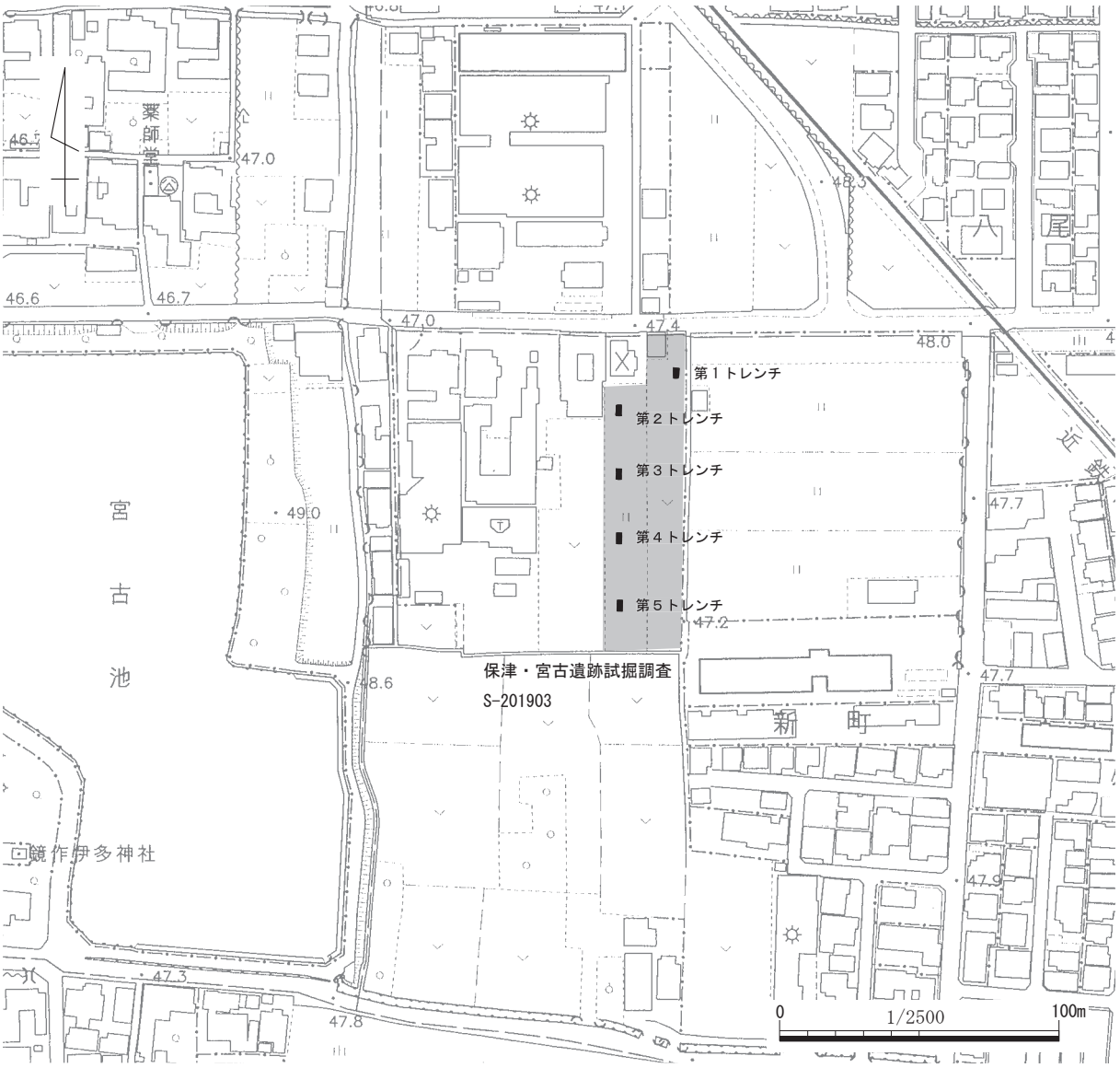
写真 14-2　落ち込み１（南西から）

15. 保津・宮古遺跡試掘調査（S-201903）

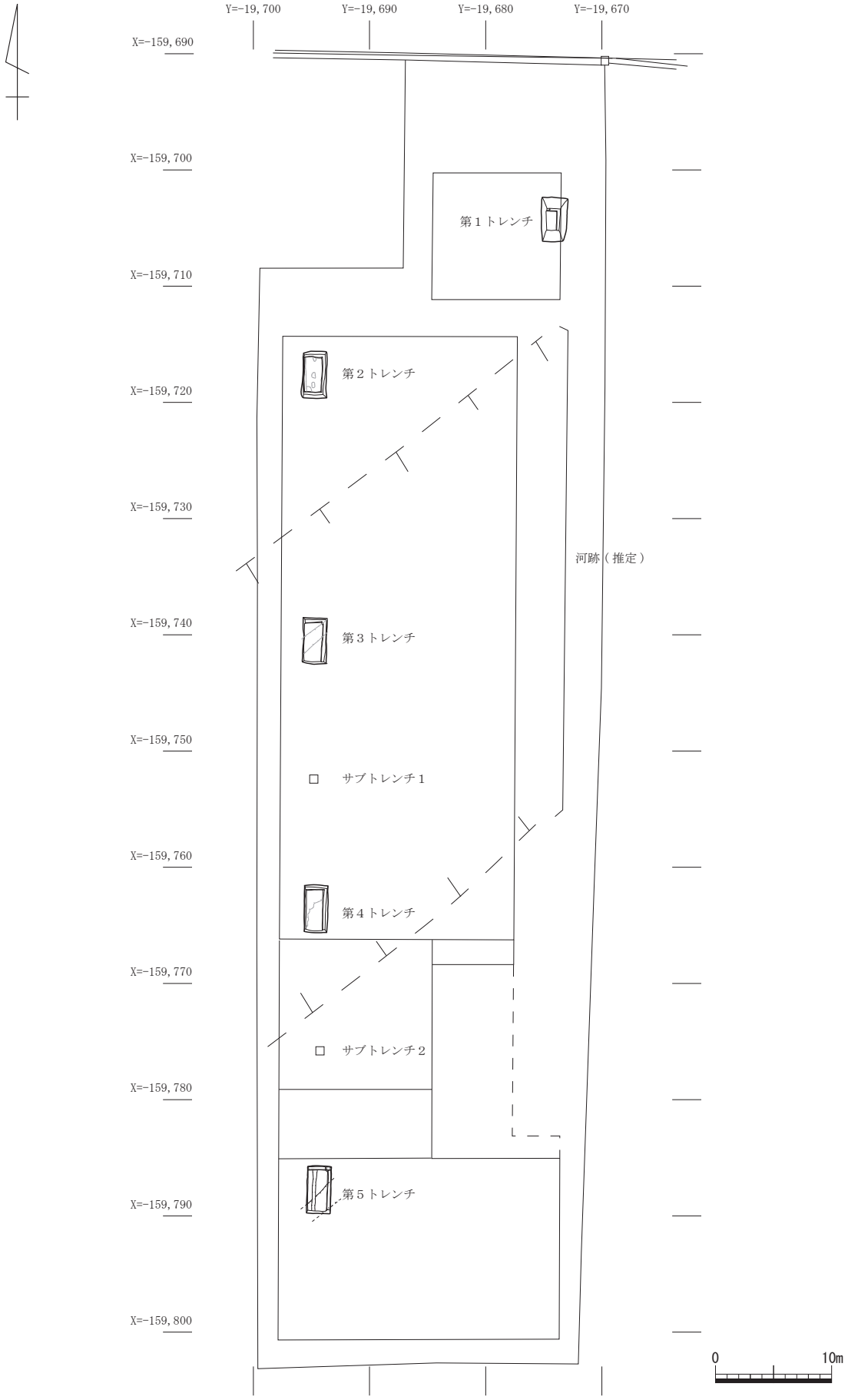
１．遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、田原本町中央の大字宮古および保津に所在する弥生時代～中世の複合遺跡である。これまでの発掘調査で、遺跡全体に弥生時代前後の遺構が点在する状況が確認されているほか、現宮古集落と保津集落の地区に鎌倉時代～室町時代頃の遺構が濃密に分布することも判明している。また、遺跡北東部の宮古池周辺には「寺東」「大門」等の寺院関連の小字名が残り、中世の史料にみられる「常楽寺」が所在したと推定される。遺跡北東部の調査では、第 44 次調査で平安時代頃の井戸を検出しており、古代の遺構が拡がることも判明している。

今回の試掘調査は、遺跡東端での工場建設に先立つもので、遺構の分布状況等を確認するために実施した。



第 15-1 図　調査地の位置（S=1/2,500）



第 15-2 図　調査区の設定（S=1/500）

２．調査の成果

（１）基本層序

調査地の現状は畑地である。調査は、開発範囲内の５ヶ所に南北４ｍ、東西２ｍの調査区を設定しておこなった。調査区ごとに堆積状況が異なるが、ここでは遺構を検出した第５トレンチの層序を示す。

Ⅰ：暗青灰色粘土（畑耕土）〔検出標高 47.2 ｍ、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：茶灰色土（近世遺物包含層）〔47.0〕、Ⅲ：灰褐色土（黄褐色土混）（中世遺物包含層）〔46.7 ｍ〕、Ⅳ：黄褐色粘質土（以下ベース）〔46.6 ｍ〕、Ⅴ：黒褐色粘土〔46.4 ｍ〕、Ⅵ：黒褐色土（砂混）〔46.3 ｍ〕

第Ⅳ層以下がベースとみられ、中世以前の遺構は第Ⅳ層上面で検出される。なお、第３・４トレンチでは第Ⅳ層に相当する部分が淡褐色粗砂層の旧河道堆積となっていた。また、調査地東半は過去の造成により１ｍ前後の造成がおこなわれて一段高くなっていた。

（２）遺構と遺物

第１トレンチ

造成の厚い地点であったため遺構検出範囲は狭小となった。重機によりベース面以下まで掘削したものの、顕著な遺構を確認することができなかった。また、顕著な遺物もみられなかった。

第２トレンチ

調査区中央および西端で南北方向の中世の耕作に伴うとみられる小溝２条を確認したが、それ以外に顕著な遺構は確認できなかった。

第３トレンチ

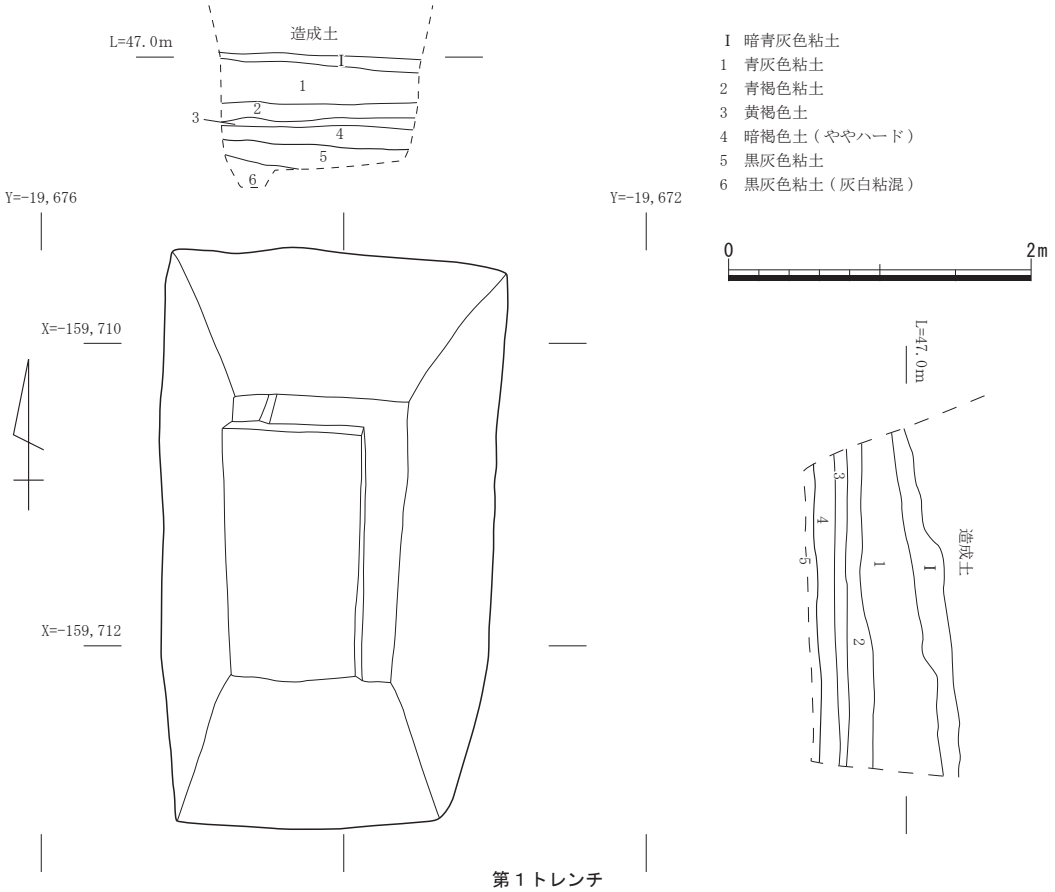
調査区全体に淡褐色粗砂層が拡がることを確認した。最終堆積段階とみられる灰黒色粗砂層が北東－南西方向であることから、全体の自然河道の流れもこの方向となる可能性が考えられる。遺物が出土していないため、今回検出した自然河道の時期は明らかでない。

第４トレンチ

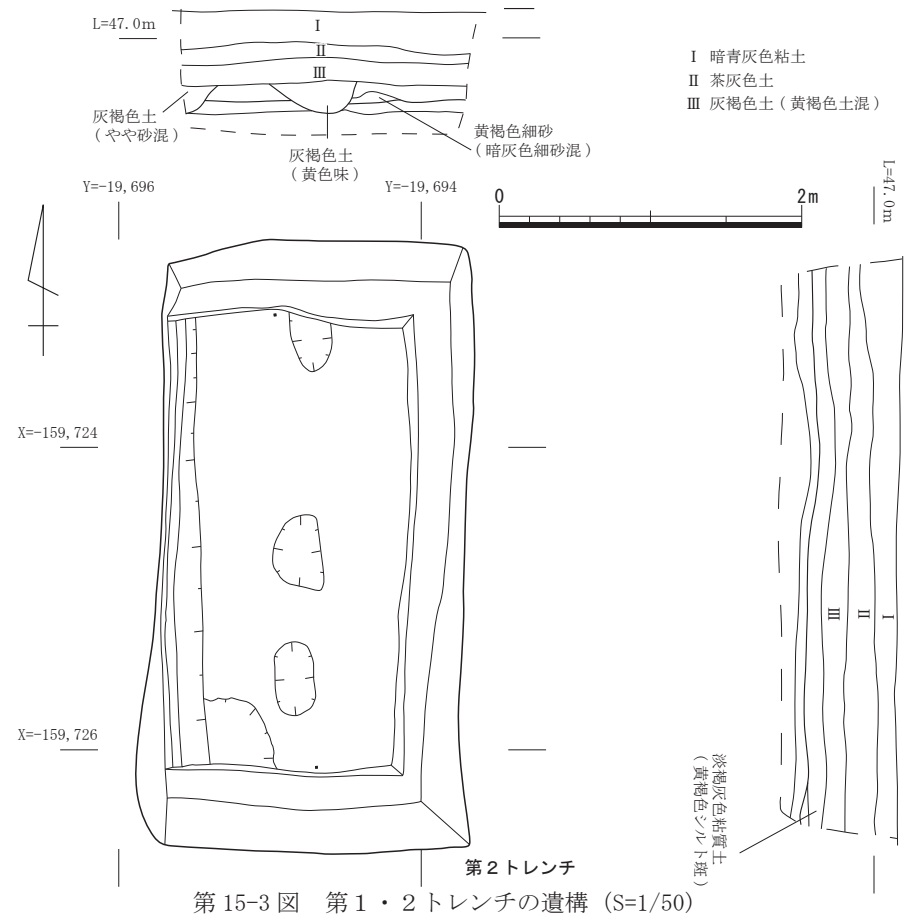
調査区全体に淡褐灰色砂層が拡がることを確認した。このトレンチでも北東－南西方向の最終堆積層（暗灰褐色土）を調査区北半で確認した。第３トレンチとは一連の遺構とみられるが、遺物が出土していないため時期は明らかでない。なお、第３トレンチと第４トレンチの間にサブトレンチを設定し、土層の簡易的な観察をおこなったが、同様に砂層が拡がることを確認している。

第５トレンチ

調査区南半で北東－南西方向の溝１条を検出した。幅 1.6 ｍ、深さ 0.3 ｍ前後を測る。顕著な遺物が確認できなかったため詳細な時期は明らかでない。また、これを切る南北方向の耕作に伴う小溝１条を検出した。中世頃の遺構とみられる。なお、第４トレンチと第５トレンチの間にサブトレンチを設定し、土層の簡易的な観察をおこなったが、こちらでは第４トレンチと同様の砂層堆積が拡がることを確認した。

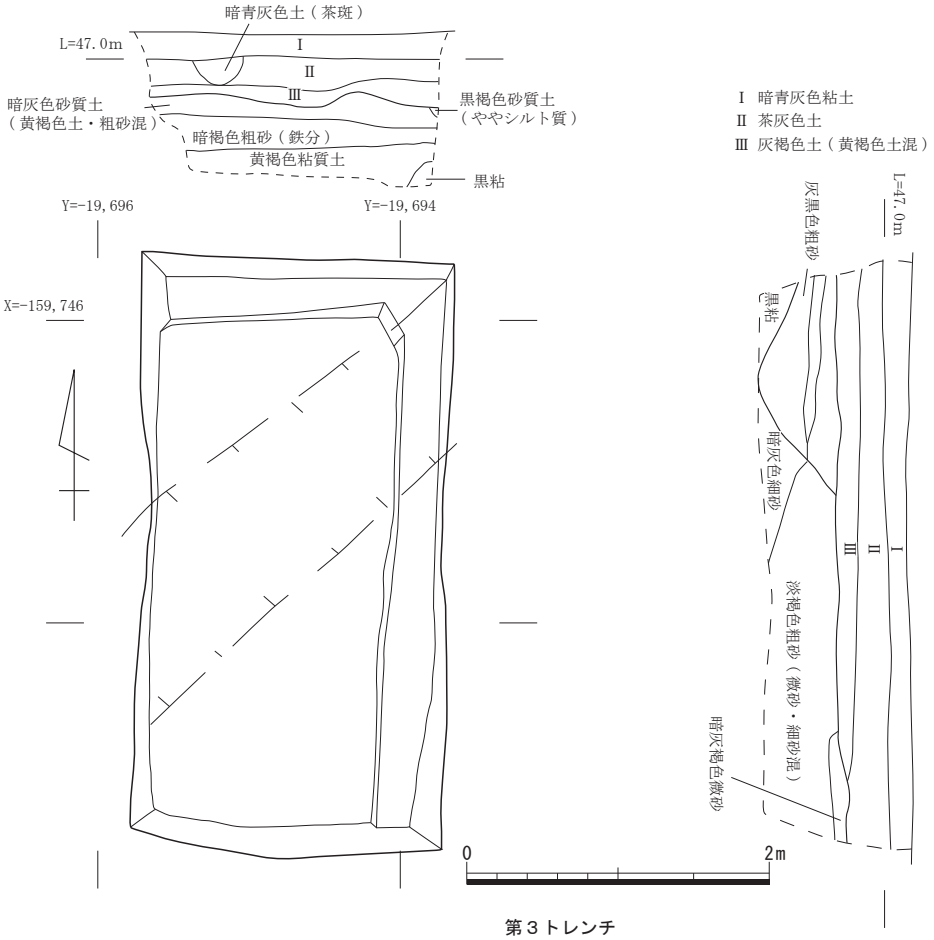


第１トレンチ

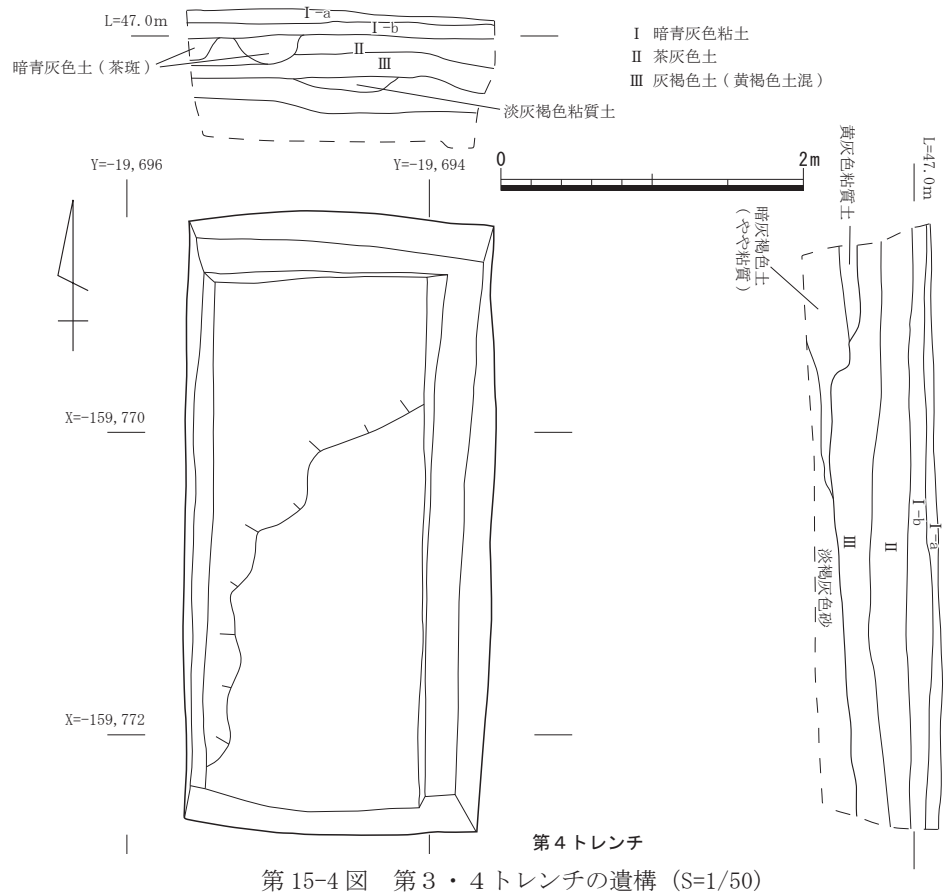


第２トレンチ

第 15-3 図　第１・２トレンチの遺構（S=1/50）

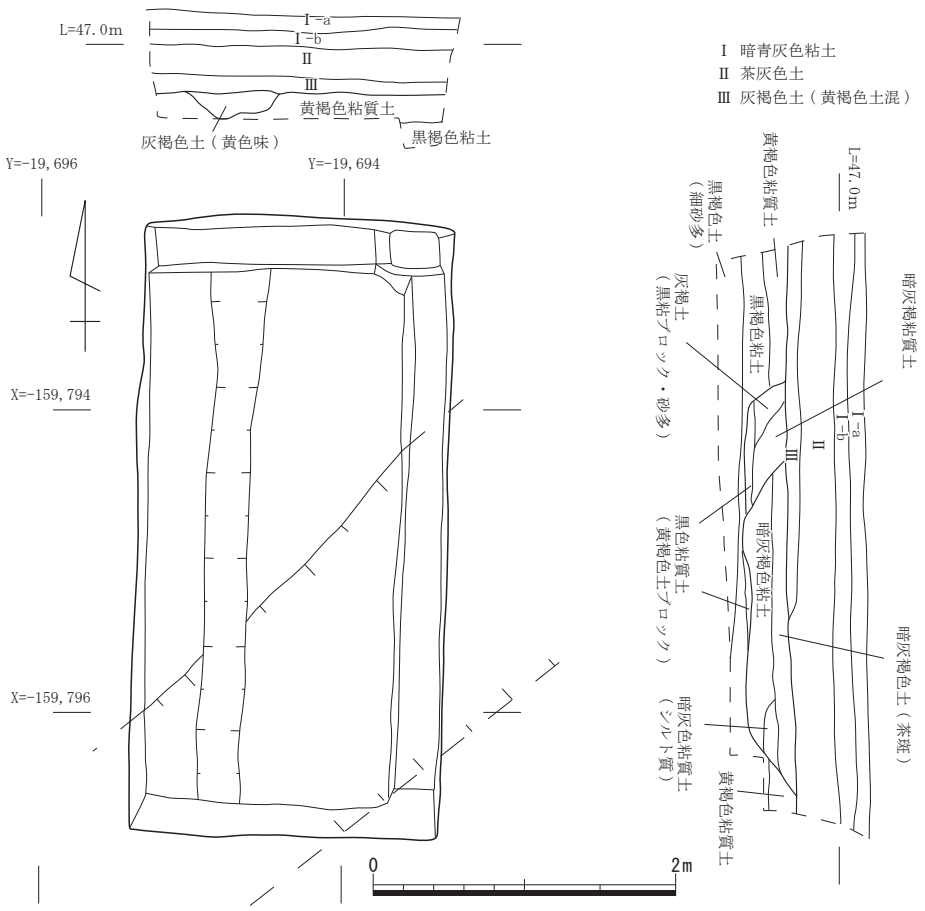


第３トレンチ



第４トレンチ

第 15-4 図　第３・４トレンチの遺構（S=1/50）



第 15-5 図　第５トレンチの遺構（S=1/50）

３．まとめ

今回の試掘調査では、建物予定範囲の南西端に設定した第５トレンチで溝１条を検出した以外に顕著な遺構を検出することができなかった。第３・４トレンチについては自然河道が拡がるとみられ、この河道以北は基本的に遺構の拡がりがみられない地区となるようである。

今回の試掘調査の結果を受け、第５トレンチの周辺に本調査区範囲を設定する対応が必要となると考えられる（令和２年度に第 54 次調査として実施）。

写真 15-1　調査区全景（南から）

写真 15-2　第１トレンチ（南から）

写真 15-3　第２トレンチ（北から）

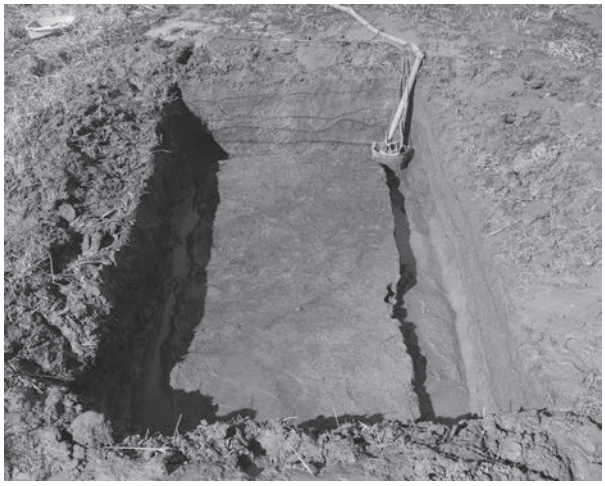


写真 15-4　第３トレンチ（南から）

写真 15-5　第４トレンチ（南から）

写真 15-6　第５トレンチ（南から）

16. 十六面・薬王寺遺跡試掘調査（S-201904）

１．遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、弥生時代から中世の複合遺跡である。

今回の調査は、遺跡中央東付近での宅地分譲地の開発計画に先立って試掘調査を実施したものである。保津氏居館跡推定地の東側隣接地での開発であり、過去の試掘調査では本開発地まで中世城館跡が拡がらない可能性が考えられた。このため、まずは開発面積4,000㎡のうち、南北各50ｍの２条の計画道路定部分に東西４×南北２ｍの試掘調査区を６ヶ所設定した。

２．調査の成果

（１）基本層序

調査地は、最近まで水田であったが、調査着手前には砕石等による約0.7ｍ前後の造成がおこなわれていた。調査では、東側計画道路の北側を第１トレンチ、中央を第２トレンチ、南側を第３トレンチ、西側計画道路の北側を第４トレンチ、中央を第５トレンチ、南側を第６トレンチとした。このうち、遺構の存在が想定された第３トレンチの層序を示す。

Ⅰ:淡灰色砂礫土(クラッシャー)〔検出標高47.0ｍ、以下数値のみ記す〕、Ⅱ:暗灰色粘質土〔46.3ｍ〕、Ⅲ：暗青灰色粘質土〔46.2ｍ〕、Ⅳ：淡褐灰色土〔46.1ｍ〕、Ⅴ：暗褐色粗砂〔46.0ｍ〕、Ⅵ：暗褐色微砂〔45.9ｍ〕

第Ⅰ層は現代造成土、第Ⅱ・Ⅲ層が旧水田耕土、第Ⅳ層が床土、第Ⅴ層以下が古い河跡またはベースとみられる。また、第４トレンチ等ではⅣ層下に中世遺物包含層とみられる薄い灰色粘質土層がみられる。調査では、第Ⅴ層上面まで重機により除去し、以下は人力により掘削をおこなった。

（２）調査の成果

中世以前

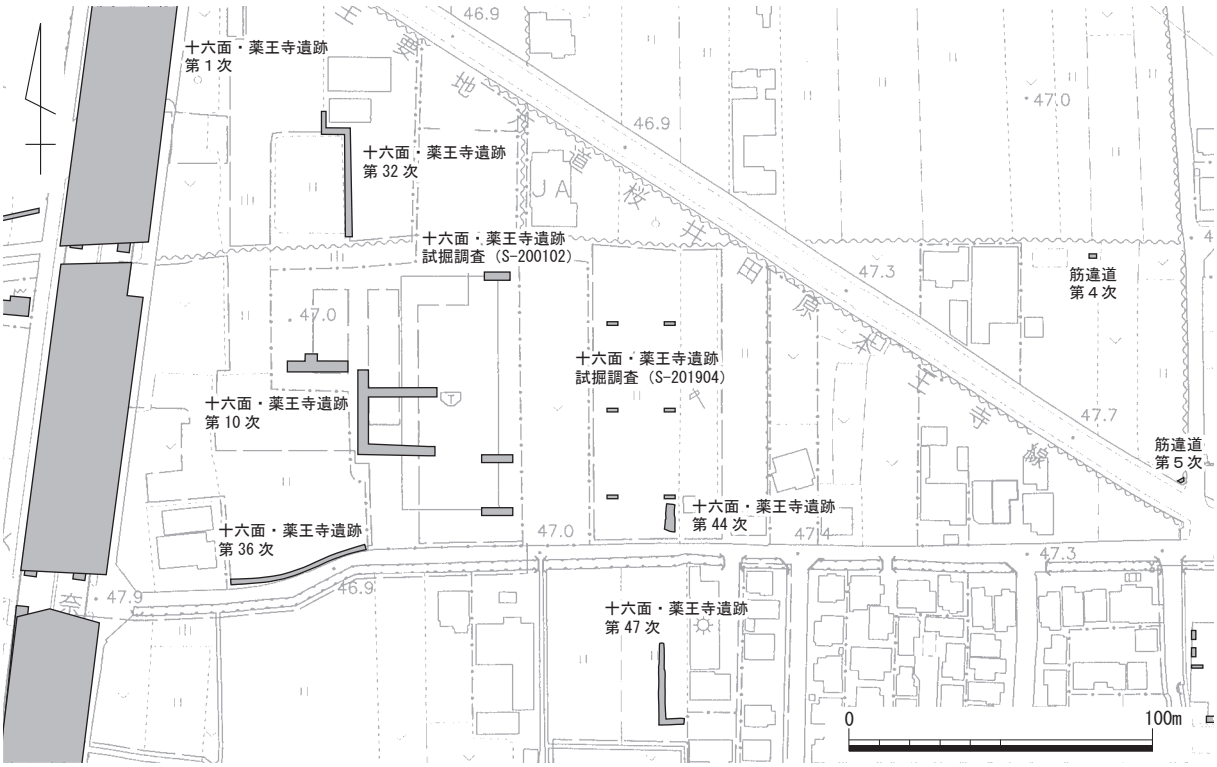
Pit-3101　第３トレンチ東半で検出した直径0.2ｍの小穴である。遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでない。

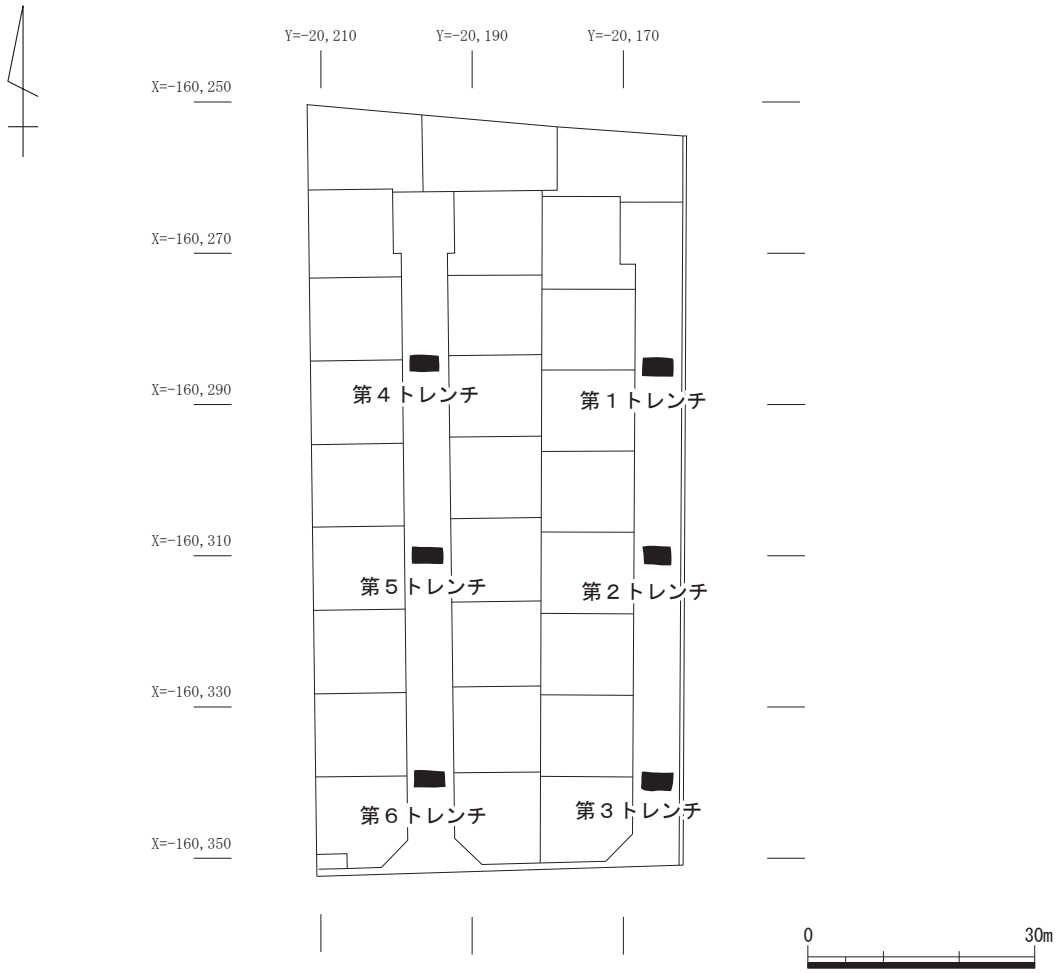
ＳＤ-3101～3104　第３トレンチで検出した東西方向の小溝である。幅0.2ｍ前後、深さ0.2ｍ前後を測る。堆積土は灰黒色粘質土（粗砂混）で、中世の小溝群と異なるが、遺物を確認していないため、時期は明らかでない。

中世

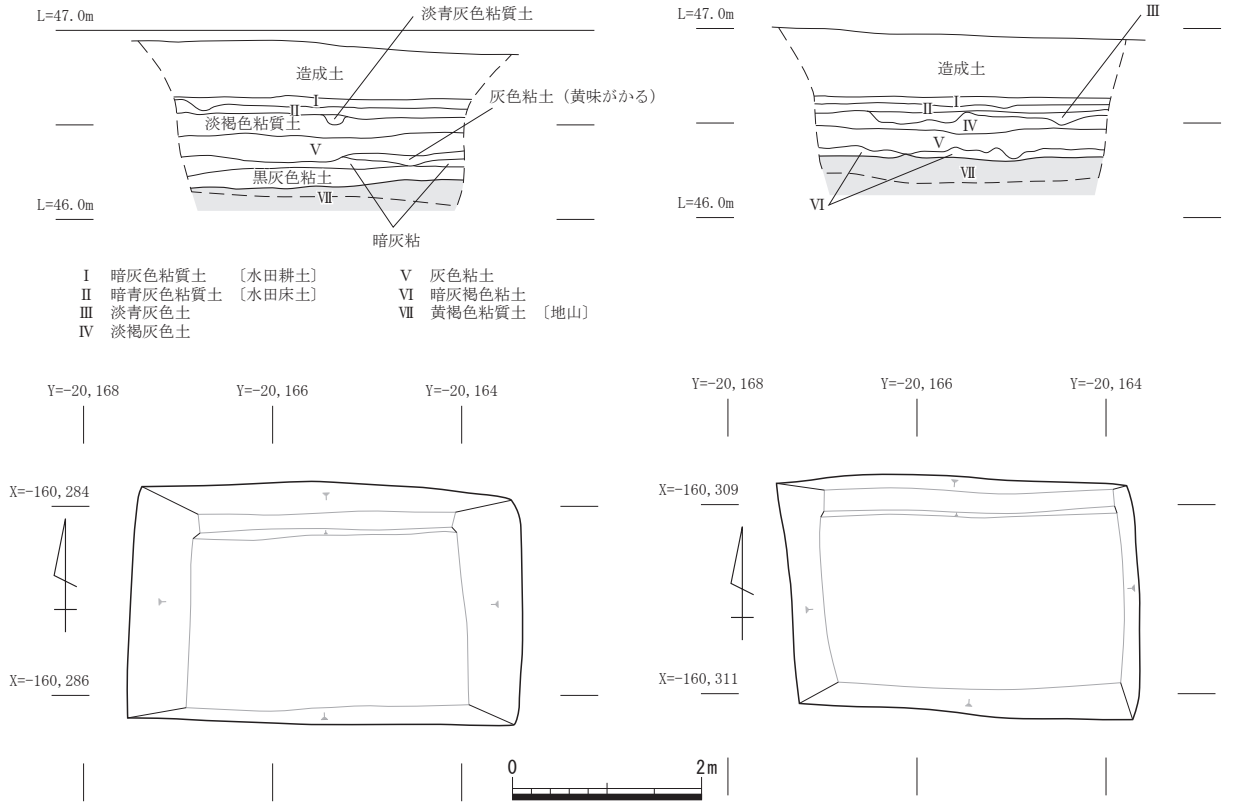
ＳＤ-3001～3005　第３トレンチで検出した南北方向の小溝である。幅0.3ｍ前後、深さ0.1ｍ前後を測る。堆積土は暗灰色粘土で、中世の耕作に伴う遺構と考えられる。

ＳＤ-5001　第５トレンチ中央で検出した南北方向の溝である。幅0.5ｍ、深さ0.3ｍ前後を測る。層序から、時期は現代とみられる。

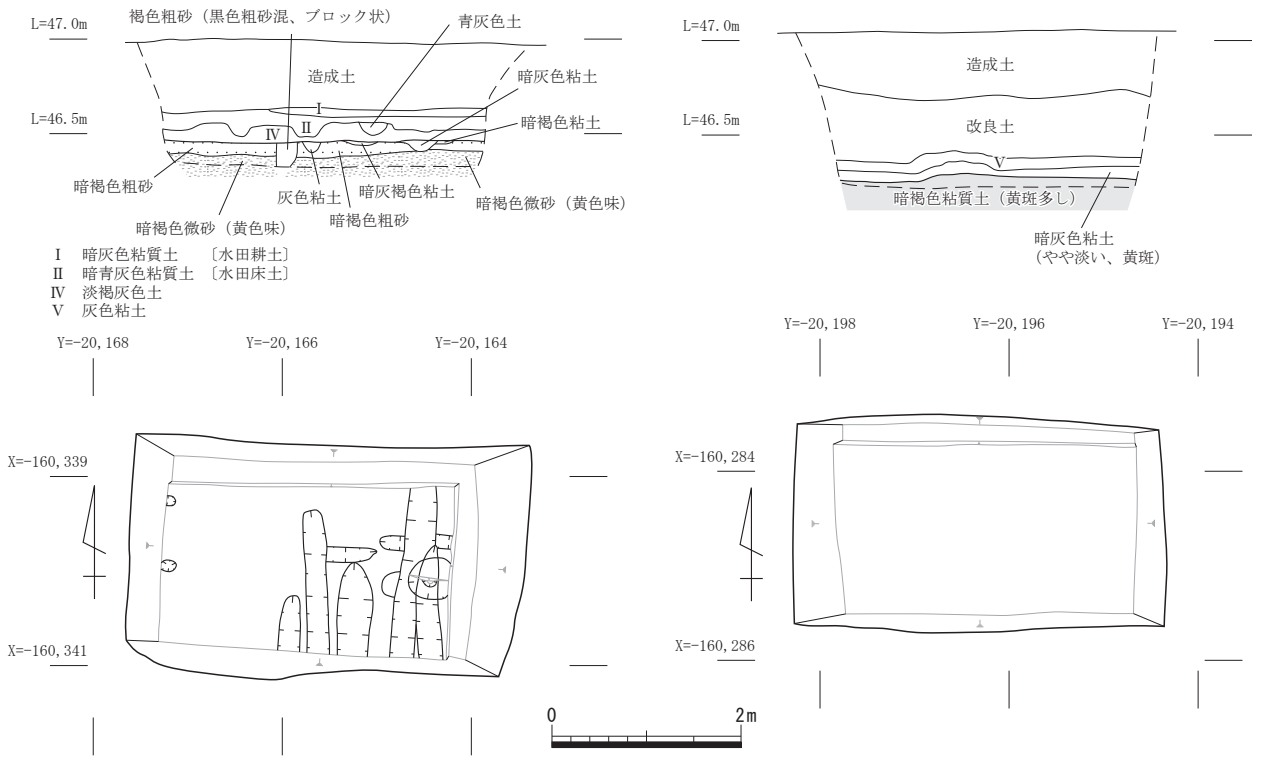




第 16-1 図　調査地の位置（上：S＝1/2,500、下：S＝1/1,000）

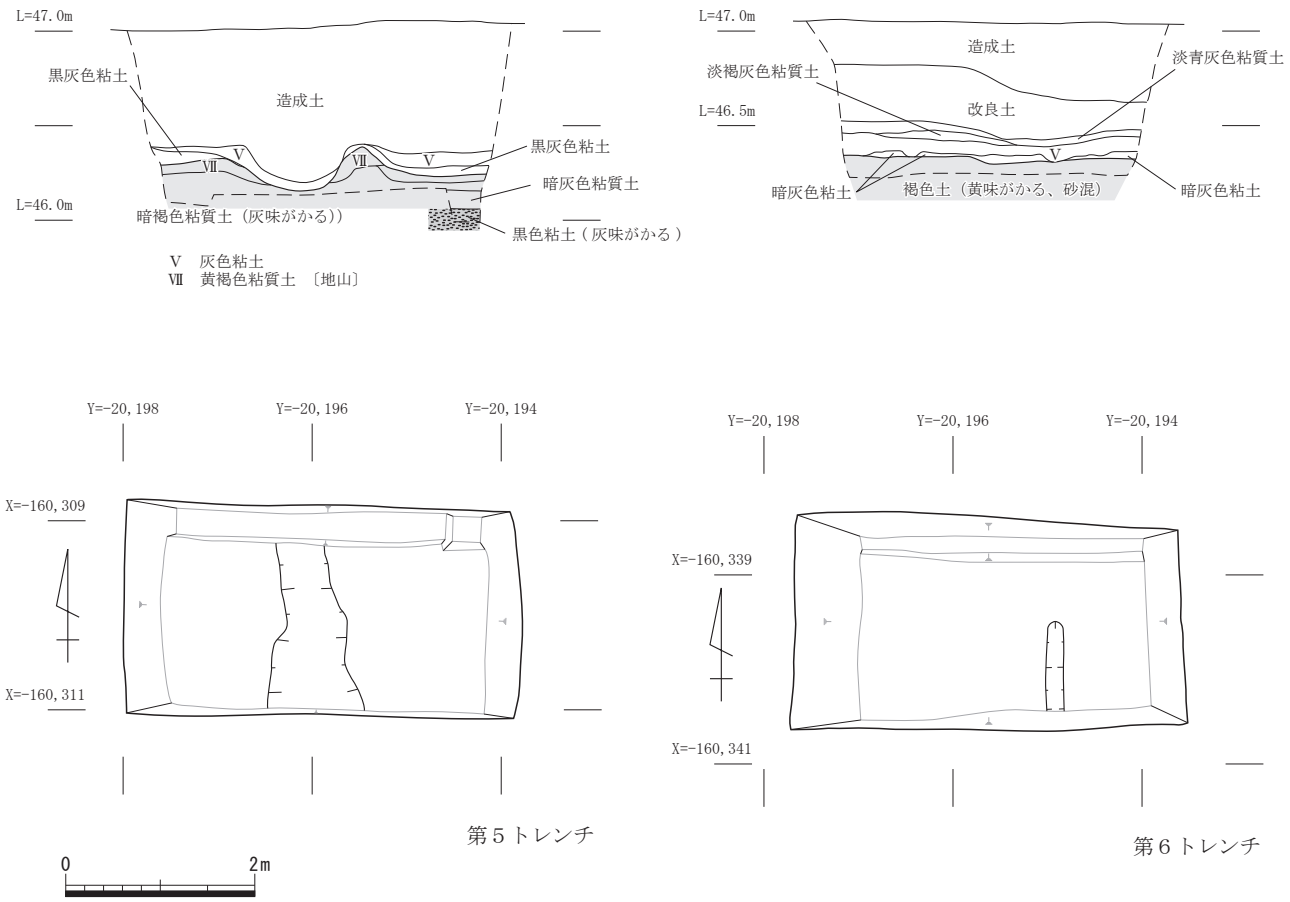


第１トレンチ　　第２トレンチ



第３トレンチ　　第４トレンチ

第 16-2 図　検出した遺構（第１～４トレンチ）（S=1/80）



第 16-2 図　検出した遺構（第５・６トレンチ）（S=1/80）

３．まとめ

今回の試掘調査の結果、敷地南東端の第３トレンチで小規模ながら遺構の存在を確認したものの、他の調査区では顕著な遺構を確認することができなかった。

十六面・薬王寺遺跡の中心に所在する保津氏居館推定地関連の中世遺構の拡がりは、北側隣接地で平成 15 年に実施した試掘調査でも確認できなかったが、本調査地も基本的に中世集落関連遺構の分布範囲外であるとみられる。

一方、十六面・薬王寺遺跡南半では弥生時代～古墳時代前期頃の包含層の拡がりを確認している。今回の試掘調査の結果から、敷地南東端の第３トレンチ周辺にはこの時期の遺構が拡がる可能性が考えられた。したがって、第３トレンチ周辺について本調査で対応することとなった（第 44 次調査）。

写真 16-1　第１トレンチ（西から）

写真 16-2　第２トレンチ（西から）

写真 16-3　第３トレンチ（西から）

写真 16-4　第４トレンチ（西から）

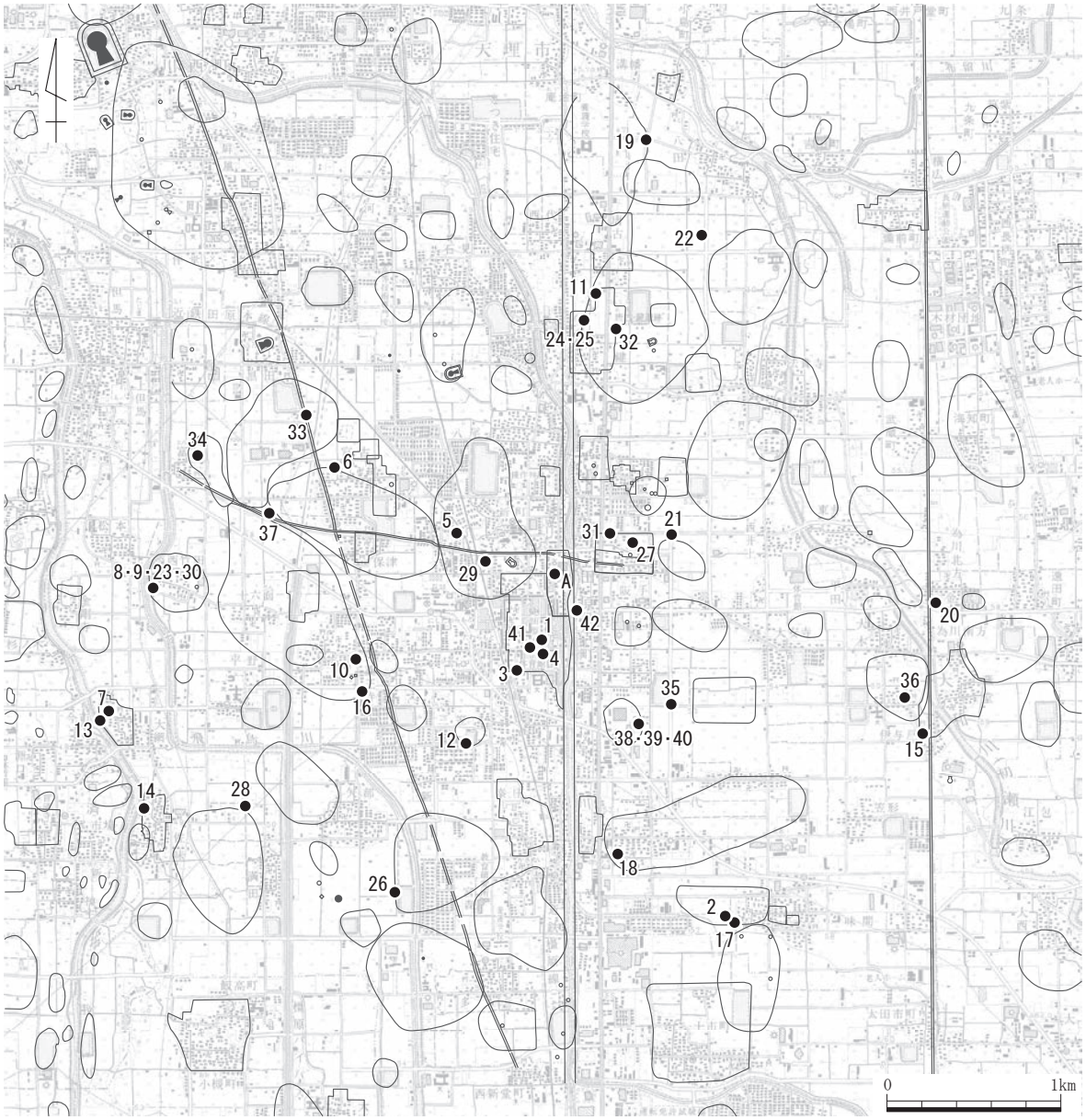
写真 16-5　第４トレンチ（西から）

写真 16-6　第５トレンチ（西から）

（２）工事立会の概要

2019 年度に実施した立会調査は 42 件である。清水風遺跡から阪手東遺跡にかけて、町を縦断する形のガス管埋設工事が実施されたため、これに伴う工事立会を５件実施した。また、住宅建築に伴う柱状改良時に寺内町遺跡で４件、阪手遺跡で３件などの工事立会を実施した。阪手遺跡は第６次調査後の分譲に伴うもので、造成土上からの湿式柱状改良であるため地下の状況は確認できなかった。なお、未届けでの工事や地盤調査の結果柱状改良が追加されたものの変更手続きがないまま着工した事案が４件あり、文化財保護法に基づく手続きの必要性を周知していく必要がある。

このほか、平野氏陣屋跡地内（下図Ａ）で近世家屋の解体に伴う立会をおこない、建築物の記録を作成した。



田原本町の遺跡と工事立会地点（Ｓ＝1/40,000）

2019年度　工事立会一覧

	遺 跡 名	調　査　地	原　因　者	工事の目的	立会者	調査日	内　容
1	寺内町遺跡 (R-201901)	田原本町534番１	合同会社Alice	共同住宅建築	柴田	2019. 4. 9	基礎掘削時に立会。GL-0.4mの掘削であるが既存建物解体の攪乱内にとどまる。
2	味間西遺跡 (R-201902)	田原本町大字味間881番1、 881番２	個人	個人住宅建築	渡瀬	2019. 4 11	湿式柱状改良工事時に立会。遺構・遺物は確認できなかった。
3	寺内町遺跡 (R-201903)	田原本町大字114番１	個人	個人住宅建築	柴田	2019. 4.13	遺跡内で柱状改良工事を実施していたため急遽立会。顛末書を添えて発掘届の提出を得た。
4	寺内町遺跡 (R-201904)	田原本町61番	一建設（株）	分譲住宅建築	渡瀬	2019. 4.18	ベタ基礎の予定が先行して柱状改良を追加して施工した旨連絡あり。現地を確認したが遺構・遺物は確認できず。顛末書を添えて一部変更願いの提出を得た。
5	羽子田遺跡 (R-201905)	田原本町大字新町84番31	個人	個人住宅建築	柴田	2019. 5. 8	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
6	保津・宮古遺跡 (R-201906)	田原本町大字宮古327番5	個人	個人住宅建築	渡瀬 西岡	2019. 5.27	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
7	大網遺跡 (R-201907)	田原本町大字大網282番	個人	個人住宅建築	渡瀬	2019. 6. 7	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
8	西竹田遺跡 (R-201908)	田原本町大字西竹田182番7	個人	個人住宅建築	清水	2019. 6.24	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
9	西竹田遺跡 (R-201909)	田原本町大字西竹田182番5	個人	個人住宅建築	清水	2019. 6.28	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
10	十六面・薬王寺遺跡 (R-201910)	田原本町大字薬王寺 68番１外西側道路	田原本町 （農政土木課）	道路舗装	清水	2019. 7.24	道路舗装に伴い既存暗渠排水溝の改修を実施。掘削は基本的に-0.5m。-0.4m以下は近世～近代頃の里道整地層とみられる。遺物なし。
11	唐古・鍵遺跡 (R-201911)	田原本町大字唐古67番5外	一建設（株）	分譲住宅建築	清水 渡瀬	2019. 7.27 ・ 7.29	第124次調査後の分譲住宅建築時に立会。全11棟中２棟の基礎工事を確認。直径20cmの改良孔にH鋼を埋め込む工事で、遺構・遺物ともに確認できなかった。
12	三笠遺跡 (R-201912)	田原本町大字三笠241番51	個人	個人住宅建築	渡瀬	2019. 7.29	施工直前に柱状改良追加の連絡あり。改良工事時に立会したが遺構・遺物ともに確認できなかった。一部変更願いの提出が事後となったため顛末書の添付となった。
13	大網遺跡 (R-201913)	田原本町大字大網269番１、 270番の各一部	個人	個人住宅建築	渡瀬	2019. 7.30	柱状改良後に着手連絡あり。遺構・遺物ともに確認できず。事前の連絡を徹底するよう口頭で注意した。
14	佐味垣内遺跡 (R-201914)	田原本町大字佐味667番	個人	個人住宅建築	渡瀬	2019. 8. 3	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
15	伊与戸遺跡 (R-201915)	田原本町大字蔵堂426番	村屋坐 弥冨都比売神社	倉庫建築	柴田	2019. 8. 9	倉庫建築自体は基礎が浅いものであるが、県指定天然記念物村屋坐弥冨都比売神社社社叢に影響がないよう現地確認をおこなった。一部で根を切る必要が生じたが、県文化財担当者に現地で確認していただき、枯死した木の根であることから切断可能である旨判定を得た。
16	十六面・薬王寺屋跡 (R-201916)	田原本町大字薬王寺 122番１外	（株）ティーズコーポレーション	宅地造成	清水	2019. 8. 9	第39次調査後の開発に伴う県道南側の水路工事時に立会。水田面から0.3m程度の掘削で遺構の有無等は不明。遺物なし。
17	味間西遺跡 (R-201917)	田原本町大字味間884番	味間自治会	寺院改修	清水	2019. 8.20	味間西福寺の庫裏解体とブロック積み擁壁の工事が行われていたため立会。掘削が浅いため遺構の有無不明。顕著な遺物なし。
18	千代遺跡（勝楽寺跡） (R-201918)	田原本町大字千代 1105番6、1105番9	（株）一条工務店	分譲住宅建築	柴田	2019. 8.30	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
19	清水風遺跡・八田遺跡 (R-201919)	田原本町大字八田 373番東側道路外	大阪ガス（株） ﾈｯﾄﾜｰｸｶﾝﾊﾟﾆｰ	ガス管埋設	清水 柴田	2019. 9.11 ～ 9.14	ガス管埋設に伴い、一部深くなる地点４ヶ所の掘削時に立会。北端の地点では古代の遺物を含む粘土堆積を確認。中央の地点では弥生時代頃の土器を含む包含層を確認。南端の地点では比較的新しいとみられる青灰色粘土の落ち込み地形を確認。
20	中ツ道 (R-201920)	田原本町大字為川北方 119番１	社会福祉法人 なら桜桃会	介護施設建築	西岡 清水	2019. 9.17 ～ 9.27	鋼管杭打設時及び布基礎掘削時に立会。布基礎は深さ1mの掘削で、うち過去の造成土が0.6m、旧水田層および床土層の暗青灰色粘質土層が0.4m以上であり、包含層まで掘削は及ばないとみられる。
21	阪手東遺跡 (R-201921)	田原本町大字阪手233番１ 西側道路外	大阪ガス（株） ﾈｯﾄﾜｰｸｶﾝﾊﾟﾆｰ	ガス管埋設	清水	2019.10. 2 ～10. 5	開削工事に先立つ試掘時に立会。遺跡北西の地点では道路下1.2mで遺構面に相当する褐色シルト層を検出。顕著な遺構・遺物なし。また、遺跡北東の地点では近世の溝状遺構の堆積土とみられる青褐色粘質土層を確認。遺物なし。
22	（遺跡外） (R-201922)	田原本町大字八田 38番１東側道路	大阪ガス（株） ﾈｯﾄﾜｰｸｶﾝﾊﾟﾆｰ	ガス管埋設	清水	2019.10. 2	法貴寺北遺跡西側隣接地での試掘時に立会。道路下1.2m程度でベース相当の褐色土層を検出。管埋設工事自体は深さ0.8mであり、道路造成土内となることを確認。

	遺 跡 名	調 査 地	原 因 者	工事の目的	立会者	調査日	内 容
23	西竹田遺跡 （R-201923）	田原本町西竹田182番9	個人	個人住宅建築	渡瀬	2019. 10. 24	湿式柱状改良工事時に立会。遺構・遺物は確認できなかった。
24	唐古・鍵遺跡 唐古南氏居館跡推定地 （R-201924）	田原本町大字鍵395番7	個人	個人住宅建築	柴田	2019. 11. 1	湿式柱状改良工事時に立会。遺構・遺物は確認できなかった。
25	唐古・鍵遺跡 唐古南氏居館跡推定地 （R-201925）	田原本町大字鍵395番11	個人	分譲住宅建築	柴田	2019. 11. 18	湿式柱状改良工事時に立会。遺構・遺物は確認できなかった。
26	宮森遺跡 （R-201926）	田原本町大字矢部 437番1東側道路	田原本町 （農政土木課）	道路整備	清水 柴田 渡瀬 西岡	2019. 11. 22 ・11. 25	試掘時に遺構希薄と判断した工区南半での工事時に立会。掘削は水田面-0.5mで一部遺構検出面に及ぶ。希薄ながらピット・小溝等を確認した。弥生土器等が少量出土した。工区北半は第２次調査として発掘。
27	阪手北遺跡 （R-201927）	田原本町大字阪手208番7	個人	個人住宅建築	西岡	2019. 11. 27	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
28	（遺跡外） （R-201928）	田原本町大字満田 213番1外西側道路	田原本町 （農政土木課）	農道整備	西岡	2019. 12. 12 ・12. 13	佐味遺跡第５次調査後に、遺跡外の工区を工事立会対応。地形的に落ち込む状況を確認した。
29	羽子田遺跡 （R-201929）	田原本町392番5	個人	個人住宅建築	渡瀬	2019. 12. 27	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
30	西竹田遺跡 （R-201930）	田原本町大字西竹田182番1	個人	個人住宅建築	渡瀬	2020. 1. 10	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
31	阪手北遺跡 （R-201931）	田原本町大字阪手地内	大阪ガス（株） ﾈｯﾄﾜｰｸｶﾝﾊﾟﾆｰ	ガス管埋設	柴田	2020. 2. 1	遺跡北端部でのガス管埋設に伴う試掘時に立会。掘削は1.9m程度であるが、既存水路工事時の埋め戻し土内にとどまる。
32	唐古・鍵遺跡 （R-201932）	田原本町大字唐古50番２外	田原本町 （文化財保存課）	枯木植替	奥谷	2020. 2. 5	史跡公園植栽の枯木植え替え時に立会。掘削は0.6mで、公園造成土内にとどまる。
33	宮古北遺跡 （R-201933）	田原本町大字宮古546番1	（株）エターナル 住宅流通	宅地造成	清水 西岡	2020. 2. 6	造成に伴う東側擁壁工事の掘削時に立会。掘削0.2m程度で旧水田床土にとどまる。
34	富本遺跡 （R-201934）	田原本町大字富本90番1 の一部	個人	農業用倉庫建築	渡瀬	2020. 2. 10	擁壁基礎掘削時に立会。深さ0.3mの掘削で造成土内にとどまる。
35	（遺跡外） （R-201935）	田原本町大字阪手 415番１西側道路	大阪ガス（株） ﾈｯﾄﾜｰｸｶﾝﾊﾟﾆｰ	ガス管埋設	渡瀬	2020. 2. 13 ・ 2. 14	柿森遺跡西側隣接地でのガス管埋設工事時に立会。立会箇所は現道路面から２mの掘削で、過去の工事による攪乱により遺構の有無不明。遺物なし。
36	伊与戸遺跡 （R-201936）	田原本町大字伊与戸 170番、171番	個人	建築物改修	渡瀬	2020. 2. 27	リフォーム工事に伴う立会。配管工事に伴う掘削は0.5m程度であったとのこと。未届工事であるため顛末書を添付しての発掘届が提出された。
37	保津・阪手道 （R-201937）	田原本町大字宮古 1番1、2番5、3番2	（株）岡西商店	倉庫建築	渡瀬	2020. 3. 3	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
38	阪手遺跡 （R-201938）	田原本町大字阪手756番11	個人	個人住宅建築	渡瀬	2020. 3. 9	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
39	阪手遺跡 （R-201939）	田原本町大字阪手756番7	個人	個人住宅建築	渡瀬	2020. 3. 10	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
40	阪手遺跡 （R-201940）	田原本町大字阪手754番11	個人	個人住宅建築	渡瀬	2020. 3. 13	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
41	寺内町遺跡 （R-201941）	田原本町545番1、545番2、 546番	個人	個人住宅建築	清水	2020. 3. 23	湿式柱状改良時に立会。遺構・遺物ともに確認できなかった。
42	中ツ道 （R-201942）	田原本町大字阪手526番7	個人	個人住宅建築	清水	2020. 3. 23	既に着工している旨連絡あり。基礎まで完成していたため地下の状況不明。着工前の連絡を徹底するよう指導。

（３）その他の調査

松村邸の調査について

近世の田原本を治めた平野氏は､現在の田原本町役場周辺とその南側にかけての南北 200 m、東西 100 mの範囲に陣屋を造成した。陣屋の構造は、中央東寄りに領主屋敷と政庁機能が置かれ、南西部に門屋が、中央西に重臣を中心とする家臣屋敷が、北部に一般家臣の屋敷地が配されたことが知られる。

今回、家臣屋敷の配されていた陣屋北西寄りで、近世建築とみられる民家が解体されることとなったため、記録保存のための調査をおこなった。構造を略測により図化、平面図と西側側面図、南北断面図を作成した。併せて、建物所有者から聞き取りもおこなった。調査は、令和元年６月 14 日・17 日の２日間でおこなった。

建物の所有者である松村豊氏によると、松村家は近世に平野家の祐筆を務めた家柄であるとのことである。また、慶応二年の「諸士席順手控」（吉村卓文書）には松村姓の家臣として中小姓「御広間添番　松村弥司馬」、大□「御番方助　松村軍治」、同「御徒士目付助役・御茶道方　松村岩二」の３名が記されるほか、明治二年の「改正藩士席順名前書」（吉村卓文書）には八等「鞠獄司　会計兼　松村岩次」の１名が記される。

建物は平屋建ての切妻造りで、屋根は茅葺の表面をトタンで覆っていた。勾配の急な典型的な大和棟である。後世の増築部分を除く建物規模は、東西 18 m、南北 6.2 mを測る。

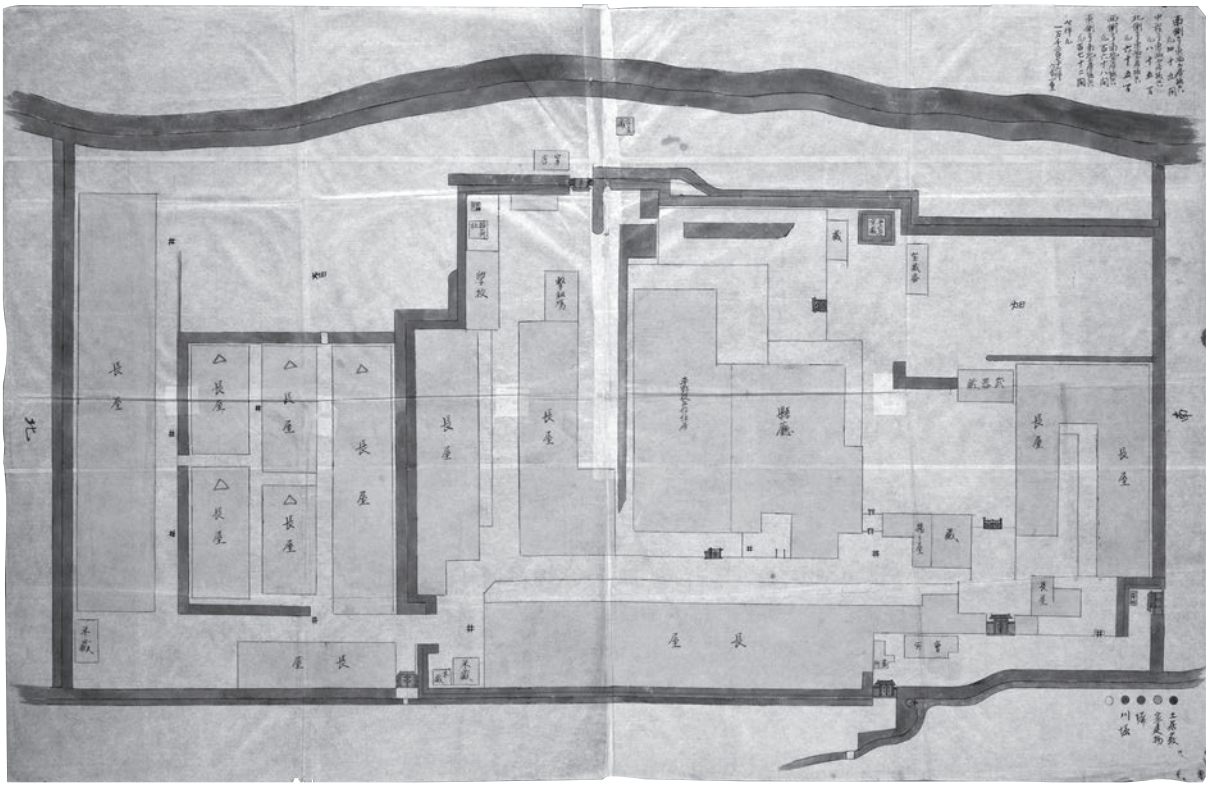
建物の東半はかなり改築により手が入っていた。東端の台所はもと土間だったとのこと。北側の東３部屋は廊下を潰して北に拡張しているとみられる。南側の東２部屋も南に拡張している。さらに風呂・トイレを増設している。台所周りの天井は、本来の天井の下にもう１枚天井を設定していた。

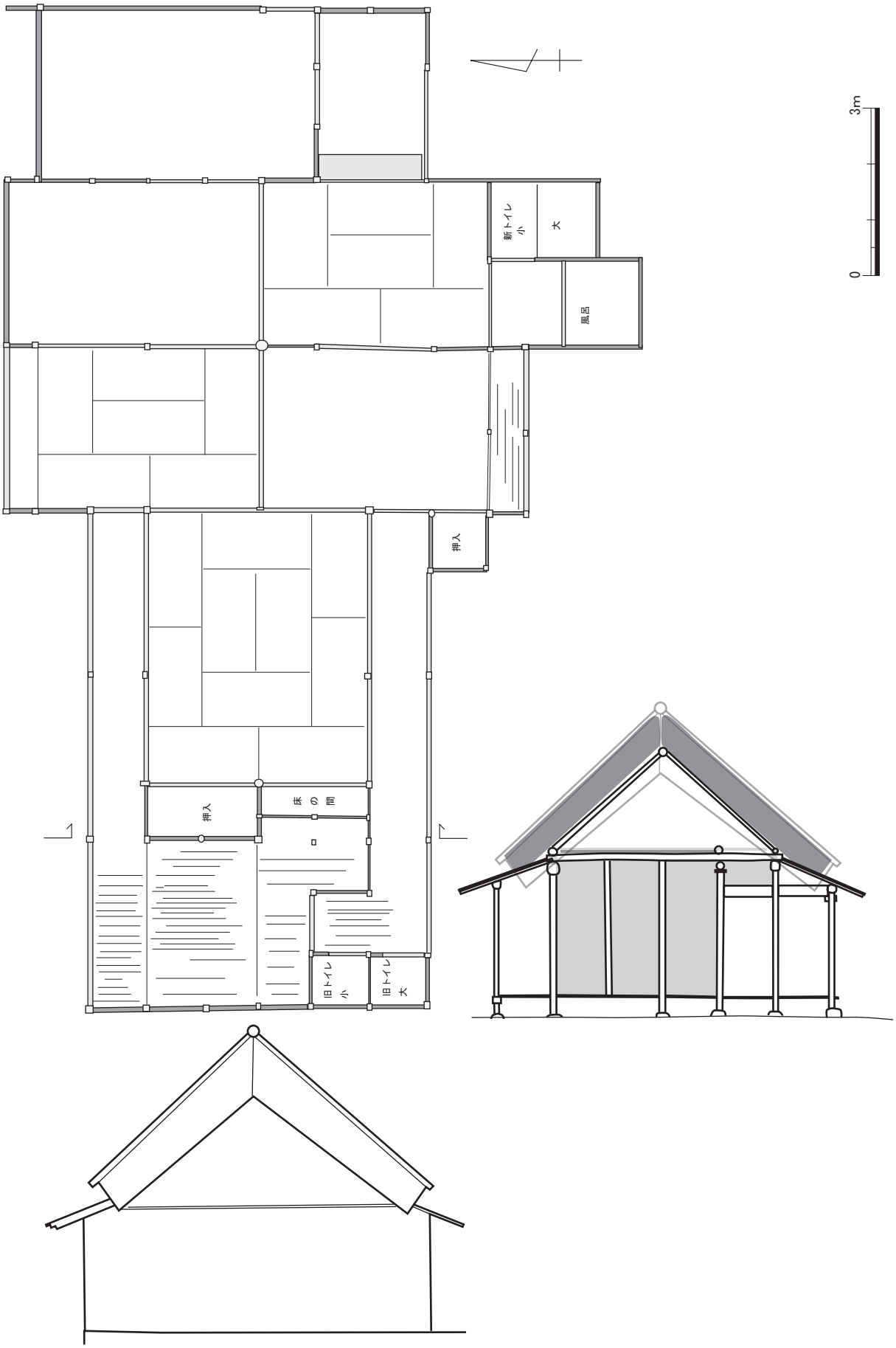
床の間のある中央の 10 畳間は、比較的当初の形を残すとみられる。その西側の部屋は納戸のような使い方となっていた模様。西壁に貼ってある新聞が昭和 10 年代で、当初は西側に大日堂の祠が建物と一体化して祀られていたのをこの頃に分離し、棟も切断したとのこと。西側の棟持柱は他の部材と比較してかなり新しい角材が使われていた。

屋根構造は、棟木を支える柱がほとんどなく、床下からの通し柱とはなっていない模様。屋根構造が変形して西側に傾斜しているのはこの構造のためとみられる。棟木は、南北の壁側からのびる斜め方向の柱で支持している。縄で結束して格子状に組んだ屋根裏の骨材の上に藁を厚さ 0.5 mほど乗せ、さらにトタンで覆っている。なお、屋根裏の床構造は、半裁の竹と藁を敷いた上を漆喰で覆っていた。

調査の結果として、建物東半が増築等により大きく改変されていること、建物西半が基本的に当初の構造をよく残すこと、建物西端が戦前に切り詰められたことが確認できた。

なお、調査時に平野氏当主が旧家臣に配ったという家族写真の寄贈を受けた。明治初期に男爵として貴族院で活躍された平野長祥氏とその家族が写っていることが写真とともに保管されていた板に記されており、明治維新後の旧平野藩主家の動向を知る上で貴重な資料である。


長屋
長屋
長屋

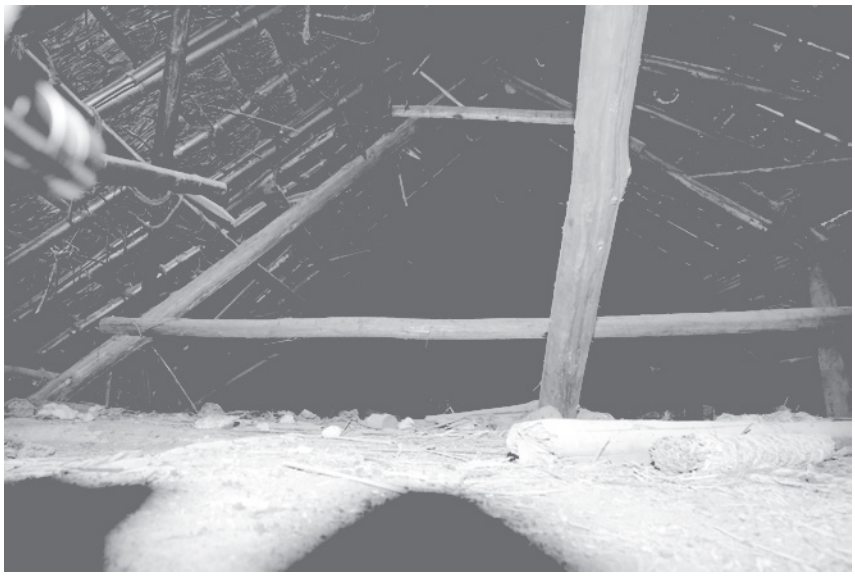


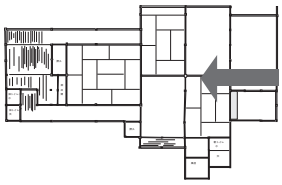
松村邸平面図と西側面図・断面図（S=1/100）

南西から

西から

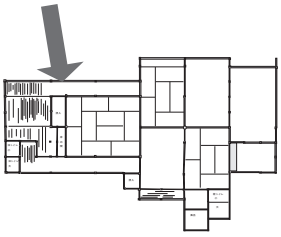
北西から





屋根裏（東から）

屋根裏（西から）



西半の床下（北から）

松村様寄贈　平野氏家族写真
附　墨書板

３．文化財資料の整理・保管

（１）発掘調査に伴う埋蔵文化財の整理・保管

平成 31（令和元）年度の発掘調査と試掘調査、工事立会に伴い保管した埋蔵文化財は、遺物コンテナ 121 箱とナイロン袋 11 袋である。このうち、阪手遺跡第６次調査では、古墳時代前期のしがらみ遺構から多数の杭材が出土した。また、保津・宮古遺跡第 53 次調査では、筋違道沿いで長さ２ｍ前後の橋脚２点などが出土した。十六面・薬王寺遺跡第 40 次調査では、弥生時代後期・古墳時代後期の遺構から多数の土器が出土したほか、十六面・薬王寺遺跡第 41 次調査では古墳時代中・後期の遺構から製塩土器を含む多数の遺物が出土した。

【埋蔵文化財保管数】

調査番号	遺跡名	調査次数	遺物明細	遺物量
H31-01	秦庄遺跡	第８次	土師器、須恵器、瓦器等	１箱
R01-01	清水風遺跡	第７次	弥生土器、石器等	20 箱
R01-02	阪手遺跡	第６次	土師器、須恵器、瓦、石器、木製品等	17 箱
R01-03	黒田遺跡	第４次	（遺物なし）	
R01-04	保津・宮古遺跡	第 52 次	土師器、須恵器等	小袋３
R01-05	十六面・薬王寺遺跡	第 40 次	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器、銭貨等	13 箱
R01-06	筋違道	第５次	土師器、須恵器、瓦器　等	小袋５
R01-07	唐古・鍵遺跡	第 127 次	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、瓦、木製品、石器、土製品、獣骨等	３箱
R01-08	唐古・鍵遺跡	第 128 次	弥生土器、土師器、瓦器等	１箱
R01-09	保津・宮古遺跡	第 53 次	土器、木製品	27 箱
R01-10	宮森遺跡	第２次	土器	１箱
R01-11	十六面・薬王寺遺跡	第 41 次	弥生土器、土師器、須恵器、木製品、玉製品、製塩土器	28 箱
R01-12	十六面・薬王寺遺跡	第 42 次	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器	３箱
R01-13	十六面・薬王寺遺跡	第 43 次	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入磁器、中世陶器、木製品	５箱
S-201901	阪手遺跡	試掘	土師器、須恵器等	１箱
S-201902	十六面・薬王寺遺跡	試掘	弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等	１箱
S-201903	保津・宮古遺跡	試掘	土師器、須恵器等	中袋１
S-201904	十六面・薬王寺遺跡	試掘	土器	小袋２
R-201919	清水風遺跡	工事立会	弥生土器、瓦等	小袋１
R-201926	宮森遺跡	工事立会	弥生土器	小袋１

【Pick upした土器・形象埴輪類の数量（該当次数のみ）】

調査番号	遺跡名	次数	編年土器	搬入土器	絵画土器	記号土器	文様土器	特殊土器	土器製作使用痕	縄文土器	古墳時代土器	古代土器	中世土器	近世土器	形象埴輪	軒瓦・特殊瓦
R01-01	清水風遺跡	第７次		8	24		6	18	5							
R01-05	十六面・薬王寺遺跡	第40次		1		1	1	2								
R01-07	唐古・鍵遺跡	第127次		1				2								
R01-09	保津・宮古遺跡	第53次						6	2	1						1
R01-11	十六面・薬王寺遺跡	第41次		3		1		98								1
R01-12	十六面・薬王寺遺跡	第42次					1	2								
R01-13	十六面・薬王寺遺跡	第43次							1							

【土器以外の遺物とサンプルの保管数量（該当次数のみ）】

調査番号	遺跡名	次数	土製品	焼土塊	木製品	石製品	骨製品	金属器・鉱滓	銭貨	ガラス	木・樹皮	石	獣骨・貝類	種子	炭化米・籾
H31-01	秦庄遺跡	第８次		1								1			
R01-01	清水風遺跡	第７次	4		13	30					9	68	虫3	219+③	77
R01-02	阪手遺跡	第６次			85						6	1		37	
R01-05	十六面・薬王寺遺跡	第40次		4	1	32+①			1			12		1	
R01-06	筋違道	第５次				2									
R01-07	唐古・鍵遺跡	第127次	2		10	50		3				1	4	64	15
R01-08	唐古・鍵遺跡	第128次				1									
R01-09	保津・宮古遺跡	第53次	3	10	40	24		3			2	9	貝1	21	
R01-10	宮森遺跡	第２次				1									
R01-12	十六面・薬王寺遺跡	第41次	1	89	62	111		2		7	316+⑫	5	34・虫3	489+㉗	126+①
R01-12	十六面・薬王寺遺跡	第42次	1			9						4		1	
R01-13	十六面・薬王寺遺跡	第43次	1	3	7	11					2	39		29	
S-201901	阪手遺跡	試掘調査												1	
S-201904	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査				1									

※　点数のアラビア数字＋〇数字は、20点以上を１件としてカウントしたものである。

（２）唐古・鍵遺跡出土遺物の再整理

再整理事業では、既に収納している土器を再整理し、重要と思われる遺物を Pickup するとともに、再収納することにより遺物箱を減らすことを目的におこなっている。再整理は、唐古・鍵遺跡分を継続的に進めており、今回は第 49 次調査の 80 箱分をおこなった。また、清水風遺跡第２次調査の再整理もおこなったが、これは清水風遺跡第７次調査に伴う企画展に反映させるためのもので、元年度と２年度にまたがり実施したのでその成果は次回年報で報告する。

唐古・鍵遺跡第 49 次調査の全体的な傾向として、弥生時代後期初頭（大和第Ｖ様式）と後期後半（大和第Ⅵ－３様式）期の土器が多いことで、区画溝や土坑から多くの土器が出土したことによるものである。特に大和第Ⅵ－３様式のＳＤ-101 やＳＫ-104・ＳＫ-111 からは多量の搬入土器が確認された。搬入土器は、奈良盆地東南部産と思われるものが多く、このほか伊勢湾岸系も多い。搬入元は特定できていないが、赤色斑粒を含む淡赤褐色を呈する土器も多く、唐古・鍵遺跡の弥生時代後期後半の様相を如実に表している。また、後期後半の土器量の多さは、隣接する第 33 次・第 69 次調査とも同様で唐古・鍵遺跡南地区の全体的傾向を示すものである。このほか、大和第Ｖ様式の高坏（結合形／指定 104）やスッポン・鳥等が描かれた絵画土器（無頸壷／指定 306）は特筆すべき資料である。この高坏は、第 33 次調査でも同様なものが出土しており、同一作者の可能性がある。

【再整理事業に伴いPickupした遺物数量（該当次数のみ）】

遺跡名	次数	弥生土器等	搬入土器	絵画土器	記号土器	文様土器	異形土器	ミニチュア土器	その他特殊土器	赤色顔料等内蔵土器	土器製作使用痕等	土製品	紡錘車等	鋳造関連品	形象埴輪	製塩土器	焼土塊
唐古・鍵遺跡	第49次	9	79	3	1	6	8	7	3	1	25	0	7	0	0	0	0

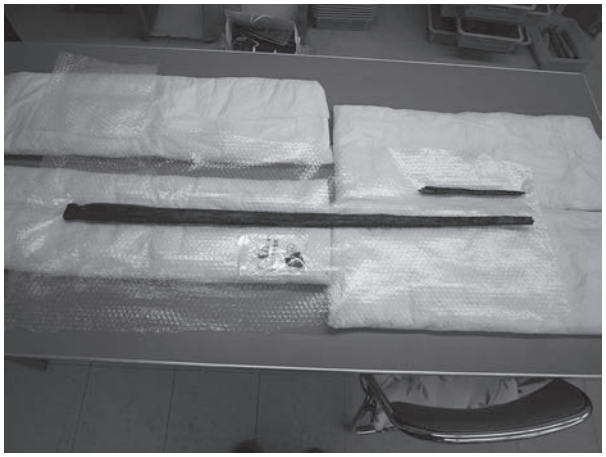
（３）木製品の樹種同定と保存処理

平成 31（令和元）年度の樹種同定は、公益社団法人保存科学研究所に委託し、唐古・鍵遺跡ほか出土木製品 27 点について樹種同定をおこなった。また、唐古・鍵遺跡ほか出土木製品 26 点を株式会社イビソクに委託して保存処理をおこない、10 点について町直営で保存処理をおこなった。

【樹種同定一覧表】

No.	遺跡名	次数		製品名	遺構名	層位	結果（学名／和名）	
1	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10010W	板A	SK-113	第１層	*Castanopsis*	シイ属
2	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10011W	板A	SK-113	第２層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
3	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10012W	板A	SK-113	第２層	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
4	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10013W	板A	SK-113	第２層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
5	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10015W	板A	SK-113	第３層	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
6	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10016W	板A	SK-113	第３層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
7	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10017W	板A	SK-113	第３層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
8	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10018W	板A	SK-113	第３層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
9	唐古・鍵遺跡	第23次	KRK-023-10019W	板A	SK-113	第４層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
10	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00013W	有頭棒	SD-103-2	第４層	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
11	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00001W	用途不明品	SD-103	第３層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
12	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00002W	板A	SD-103	第３層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
13	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00003W	棒A（横材）	SD-103-05	第３層	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
14	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00004W	棒A（横材）	SD-103-05	第３層	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
15	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00005W	杭	SD-103-05	第３層	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
16	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00006W	杭	SD-103-05	第３層	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
17	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00007W	丸太杭	SD-103-02	第３層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
18	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00008W	杭	SD-103-03	第３層	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
19	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00009W	杭	SD-103-03	第３層	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
20	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00010W	杭	SD-103-03	第３層	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
21	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00011W	杭	SD-103-01	第３層	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
22	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00012W	杭	SD-103-02	第３層	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節
23	阪手遺跡	第６次	SKT-006-00014W	棒A（横材）	SD-103	第３層	*Quercus* sect. *Prinus*	コナラ属コナラ節
24	十六面・薬王寺遺跡	第39次	JRY-039-00001W	柱	Pit-2107	第１層	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ
25	保津・宮古遺跡	第53次	HDM-053-00001W	杭（橋脚）	SR-101	―	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
26	保津・宮古遺跡	第53次	HDM-053-00002W	杭（橋脚）	SR-101	―	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
27	保津・宮古遺跡	第19次	HDM-019-00002W	下駄	SD-51	第６層	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ

保存処理業務竣工状況（１）



保存処理業務竣工状況（２）

【保存処理木製品一覧表】

No.	遺跡名	次数		製品名	遺構名	層位		樹種	保存処理機関	保存処理方法
1	唐古・鍵遺跡	第13次	KRK-013-00089W	用途不明品	SD-102	植物層		モミ属	町直営	PEG含浸法
2	唐古・鍵遺跡	第69次	KRK-069-0042W	柱	SD-1110	第３層	W-302	クワ科クワ属	(株) イビソク	PEG含浸法
3	唐古・鍵遺跡	第72次	KRK-072-0001W	盾	SD-105	第２層	W-238・239	ヒノキ科ヒノキ属	町直営	PEG含浸法
4	唐古・鍵遺跡	第74次	KRK-074-00045W	柱	Pit-130			ブナ科コナラ属アカガシ亜属	(株) イビソク	PEG含浸法
5	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00026W	丸太杭	SD-70	第４層		カヤノキ科カヤノキ属	(株) イビソク	PEG含浸法
6	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00030W	丸太杭	SD-71	第４層	W-403	ニレ科ムクノキ属ムクノキ	(株) イビソク	PEG含浸法
7	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00034W	用途不明品	SD-71	第４層	W-401	ヒノキ	(株) イビソク	PEG含浸法
8	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00046W	曲物底板	SK-27	第６層		スギ	(株) イビソク	PEG含浸法
9	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00047W	曲物底板	SK-27	第６層		コウヤマキ	(株) イビソク	PEG含浸法
10	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00051W	曲物底板	SK-27	第６(下)層		ヒノキ	(株) イビソク	PEG含浸法
11	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00064W	丸太杭	SD-71	第３層		ヤマグワ	(株) イビソク	PEG含浸法
12	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00070W	杭	廃土			ヒノキ	(株) イビソク	PEG含浸法
13	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00071W	桶底板	SK-27	第７(下)層	W-754	ヒノキ	(株) イビソク	PEG含浸法
14	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00072W	用途不明品	SK-27	第７(下)層	W-752	ヒノキ	(株) イビソク	PEG含浸法
15	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-00073W	桶側板	SK-27	第７(下)層	W-761	スギ	(株) イビソク	PEG含浸法
16	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-10001W	板A	SK-27	第７(下)層	W-757	スギ科スギ属スギ	(株) イビソク	PEG含浸法
17	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-10002W	板A	SK-27	第７(下)層	W-758	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	(株) イビソク	PEG含浸法
18	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-10003W	板A	SK-27	第５層		ヒノキ科ヒノキ属	(株) イビソク	PEG含浸法
19	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-10004W	板A	SK-27	第５層		スギ科スギ属スギ	(株) イビソク	PEG含浸法
20	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-10005W	板A	SD-70	第６層		マツ科マツ属[二葉松類]	(株) イビソク	PEG含浸法
21	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-10006W	板A	SD-70	第６層		スギ科スギ属スギ	(株) イビソク	PEG含浸法
22	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-10008W	板A	SD-71	第４層	W-406	スギ	(株) イビソク	PEG含浸法
23	唐古・鍵遺跡	第118次	KRK-118-10023W	板A	SD-71	第6-b層	W-651	ヒノキ	(株) イビソク	PEG含浸法
24	唐古・鍵遺跡	第119次	KRK-119-00001W	農具柄	SD-1101C	第14層		ムクノキ	(株) イビソク	PEG含浸法
25	佐味遺跡	第4次	SAM-004-00001W	鋤	SD-2152	第３層	W-301	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	(株) イビソク	PEG含浸法
26	小阪里中遺跡	第１次	KSS-001-00003W	用途不明品	SD-102		W-201	モミ属	町直営	PEG含浸法
27	小阪里中遺跡	第１次	KSS-001-00005W	用途不明品	古墳周濠		W-01	コウヤマキ	(株) イビソク	PEG含浸法
28	小阪里中遺跡	第１次	KSS-001-10001W	棒A	SK-03	第２層	C区	スギ	町直営	PEG含浸法
29	小阪里中遺跡	第１次	KSS-001-10002W	棒B	SD-102	第１層	W-102	コウヤマキ	町直営	PEG含浸法
30	小阪里中遺跡	第１次	KSS-001-10003W	棒B	SD-102		G-Hアゼ	マキ	町直営	PEG含浸法
31	笹鉾山古墳	第１次	SHK-001-00012W	用途不明品	SD-102S	第３-b層	W-314	コウヤマキ	町直営	PEG含浸法
32	笹鉾山古墳	第１次	SHK-001-00021W	用途不明品	SD-102S	第３-b層	W-313	ヒノキ	町直営	PEG含浸法
33	笹鉾山古墳	第１次	SHK-001-10002W	板B	SD-102S	第３層	W-323	ヒノキ	町直営	PEG含浸法
34	黒田大塚古墳	第１次	KDO-001-10001W	板A	SD-1101	第５層	W-505	コウヤマキ	町直営	PEG含浸法
35	黒田大塚古墳	第２次	KDO-002-10001W	板A	３トレ		W-1	サワラ	(株) イビソク	PEG含浸法
36	黒田大塚古墳	第３次	KDO-003-00001W	用途不明品	周濠			ヒノキ	(株) イビソク	PEG含浸法

（４）写真撮影・デジタル化と写真の保管

平成 31（令和元）年度の撮影業務委託では、清水風遺跡第７次調査で出土した絵画土器等を報告作成用・企画展開催用に撮影した。また、過去に撮影した唐古・鍵遺跡出土遺物の写真について、鋳造関連遺物写真のデジタル化をおこなった。

【写真撮影一覧】

種 類	資 料 名	内 容	委 託 先	備 考
考古資料	清水風遺跡第７次調査出土土器等	デジタル 645　９カット	アートフォト右文	発掘調査受託事業
	清水風遺跡第７次調査出土遺物	デジタル 645　９カット	アートフォト右文	令和２年度春季企画展用
	清水風遺跡ほか出土遺物	デジタル 645　42 カット	アートフォト右文	令和２年度春季企画展用

【デジタル化一覧】

種 類	資 料 名	内 容	委 託 先
考古資料	唐古・鍵遺跡出土 土製武器・不明鋳型外枠	カラーポジフィルム 4×5　13 枚、6×6 37 枚　計 50 枚	株式会社堀内カラー
	唐古・鍵遺跡出土　高坏形土製品	カラーポジフィルム 4×5　25 枚、6×6　8 枚　計 33 枚	株式会社堀内カラー

発掘調査と試掘調査に伴う現場写真は上記のとおりで、基本的にフルサイズ相当のデジタル一眼レフカメラをメインに撮影し、データは外付けHDDとDVD-Rの２系統で保存している。なお、データ破損時に備えたバックアップとして、カラーポジまたはモノクロフィルムでの撮影も併用している。

【発掘調査現場図面枚数と撮影写真一覧】

	遺跡名	次数	現場図面	写真カット数		デジタル写真	使用機器　フルサイズ：Nikon D610・750 APS-Cサイズ：Canon Eos-Kiss
				カラー	モノクロ		
H31-01	秦庄遺跡	第８次	3枚	0	26	56カット	Canon Eos-Kiss
R01-01	清水風遺跡	第７次	5枚	0	67	58カット	Nikon D610
R01-02	阪手遺跡	第６次	13枚	0	50	129カット	Canon Eos-Kiss
R01-03	黒田遺跡	第４次	2枚	0	24	19カット	Canon Eos-Kiss
R01-04	保津・宮古遺跡	第52次	3枚	0	24	25カット	Nikon D610
R01-05	十六面・薬王寺遺跡	第40次	25枚	55	108	420カット	Nikon D610
R01-06	筋違道	第５次	2枚	0	16	16カット	Canon Eos-Kiss
R01-07	唐古・鍵遺跡	第127次	4枚	35	0	42カット	Canon Eos-Kiss
R01-08	唐古・鍵遺跡	第128次	4枚	44	0	52カット	Nikon D610
R01-09	保津・宮古遺跡	第53次	25枚	109	0	214カット	Nikon D610
R01-10	宮森遺跡	第２次	7枚	4	0	57カット	Canon Eos-Kiss
R01-11	十六面・薬王寺遺跡	第41次	16枚	0	238	471カット	Nikon D610
R01-12	十六面・薬王寺遺跡	第42次	26枚	0	163	968カット	Nikon D750×946カット、Eos-Kiss×20カット
R01-13	十六面・薬王寺遺跡	第43次	13枚	0	105	148カット	Nikon D610
S-201901	阪手遺跡	試掘調査	10枚	0	75	110カット	Canon Eos-kiss
S-201902	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	8枚	34	23	41カット	Nikon D610
S-201903	保津・宮古遺跡	試掘調査	7枚	74	0	108カット	Canon Eos-Kiss
S-201904	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	9枚	36	0	67カット	Canon Eos-Kiss

Ⅱ．唐古・鍵考古学ミュージアムと唐古・鍵遺跡史跡公園

１．唐古・鍵考古学ミュージアム

平成 31・令和元年度はミュージアムがリニューアルして２年度目にあたる。平成 31 年４月１日、ミュージアムのより一層の活用を図っていくため、文化財保存課事務所をミュージアムがある田原本青垣生涯学習センター内に移転させた。

田原本町教育委員会事務局　文化財保存課事務所	
旧住所	〒636-0247　奈良県磯城郡田原本町大字阪手 347-1
新住所	〒636-0247　奈良県磯城郡田原本町大字阪手 233-1

（１）入館者

入館者数に関しての詳細は下記表のとおりで、常設展の開館日あたりの人数は 32.6 人／日で、リニューアル直後と比べて低下したものの、引き続き多くの方に来館していただいた。

なお、令和２年３月 31 日から、新型コロナウイルスによる状況を鑑み休館措置をとった。

【常設展月別入館者数】

月	開館日数	有料入館者					無料入館者						合計	
		一般	うち団体	高大生	うち団体	小計	中学生以下	うち団体	身障者	招待者	その他	小計		うち団体
4月	26	447	146	9	0	456	100	0	9	0	388	497	953	146
5月	27	525	226	10	0	535	222	148	10	5	472	709	1,244	374
6月	26	350	138	16	0	366	78	40	23	2	159	262	628	178
7月	26	0	0	0	0	0	149	0	0	0	817	966	966	0
8月	27	0	0	0	0	0	242	0	0	0	869	1,111	1,111	0
9月	25	831	545	12	0	843	42	0	4	0	172	218	1,061	545
10月	27	762	266	10	0	772	15	0	22	4	220	261	1,033	266
11月	26	445	150	4	0	449	104	0	7	3	762	876	1,325	150
12月	23	27	0	3	0	30	56	0	1	0	439	496	526	0
1月	23	0	0	0	0	0	63	0	0	0	490	553	553	0
2月	25	197	0	13	0	210	52	0	15	0	112	179	389	0
3月	25	104	0	8	0	112	18	0	2	0	48	68	180	0
合計	306	3,688	1,471	85	0	3,773	1,141	188	93	14	4,948	6,196	9,969	1,659

【企画展入館者】

	開館日数	有料入館者					無料入館者						合計	
		一般	うち団体	高大生	うち団体	小計	中学生以下	うち団体	身障者	招待者	その他	小計		
春季	33	458	137	14	0	472	122	0	9	10	693	834	1,306	137
秋季	55	974	275	17	0	991	103	47	26	6	877	1,012	2,003	322
合計	88	1,432	412	31	0	1,463	225	47	35	16	1,570	1,846	3,309	459

【無料入館日に伴う入館者数】

内容	開始日	終了日	日数	人数		
				常設展	企画展	計
ｺﾞｰﾙﾃﾞﾝｳｨｰｸ	4月27日	5月6日	10	744	681	1,425
夏季	7月1日	8月31日	53	2,077	－	2,077
即位礼正殿の儀	10月22日		1	38	36	74
田原本町文化祭	11月2日	11月4日	3	545	508	1,053
関西文化の日	11月16日	11月17日	2	192	185	377
冬季	12月3日	1月31日	45	1,010	－	1,010
合計			114	4,606	1,410	6,016

（2）田原本ギャラリー　今回の逸品

第3室の一部を「田原本ギャラリー」として、町内の遺跡から出土した埋蔵文化財や、その他有形文化財を不定期に入れ替えながら展示公開している。第13回は当該年度に発掘された清水風遺跡の人物絵画土器（女性シャーマン？）を展示した。

この展示品の解説パネルは、唐古・鍵考古学ミュージアムのホームページでPDFファイルとして公開し、バックナンバーも同じページで公開している。

	展示タイトル	展示期間
第13回	弥生時代の人物絵画～豊作を祈るマツリ	令和2年2月18日～3月29日

（3）企画展

春期・秋期の2回企画展を開催した。

● 春期企画展「たわらもと2019発掘速報展」

内　容：平成28年度下半期から30年度上半期にかけて実施した唐古・鍵遺跡や佐味遺跡など7遺跡12件の調査成果を展示した。また、大和まほろば広域定住自立圏の協定に基づき、天理市が調査した平等坊・岩室遺跡の遺物を展示した。

期　間：4月20日～5月26日（33日間）

入館者：1,306名（企画展のみ）

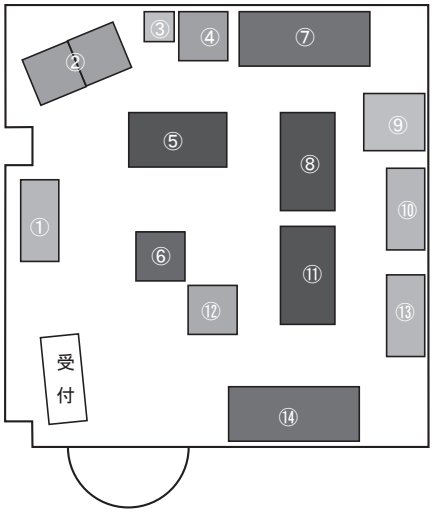
【展示構成と主要展示品】

（Ⅰ）唐古・鍵遺跡（展示ケース①～⑥）

（Ⅱ）佐味遺跡・宮古北遺跡（展示ケース⑦・⑧）

（Ⅲ）西竹田遺跡（展示ケース⑨）

【展示ケースの配置】



（Ⅳ）保津・宮古遺跡（展示ケース⑩）

（Ⅴ）小阪細長遺跡ほか（展示ケース⑪）

（Ⅵ）平野氏陣屋跡・寺内町遺跡（展示ケース⑫・⑬）

（Ⅶ）天理市の成果（展示ケース⑭）

【春季企画展チラシ】

【展示風景】

【春季企画展展示品一覧】

	遺跡名	遺物名（数字は点数、数字なしは１点）		
①	唐古・鍵遺跡第 121・122・124 次	ミニチュア土器、弥生土器２、土師器、須恵器３	7	田原本町教育委員会
②	唐古・鍵遺跡第 121 次	木製品	1	
③	唐古・鍵遺跡第 122 次	須恵器甕	1	
④	唐古・鍵遺跡第 118 次	井戸枠（桶）	1	
⑤	唐古・鍵遺跡第 118 次	木製品等 12	12	
⑥	唐古・鍵遺跡第 121 次	土器棺１組（壺２）	2	
⑦	宮古北遺跡第 23 次 ・佐味遺跡遺跡第４次	弥生土器 14（宮古北７、佐味７）	14	
⑧	佐味遺跡第４・５次	縄文土器、弥生土器３、石器 19、硯、銃弾、中世土器２	27	
⑨	西竹田遺跡第５次	土師器４	4	
⑩	保津・宮古遺跡第 47 次 ・保津阪手道第４次	弥生土器４、革袋形土器、土師器３、須恵器３、瓦２	13	
⑪	小阪細長遺跡第３次ほか	東海系壷、土師器７、瓦器 12、埴輪２	22	
⑫	寺内町遺跡第 15 次	大型土製品	1	
⑬	平野氏陣屋跡第３次ほか	木製品 11	11	
⑭	平等坊・岩室遺跡第 36 次	弥生土器 10、須恵器４、石器２	16	天理市教育委員会
10 遺跡		展示点数	132	

【関連報告会】

日時	内容	報告者	参加人数
４月 28 日	平等坊・岩室遺跡第 36 次調査	村下博美（天理市教育委員会文化財課　主査）	66 名
	唐古・鍵遺跡第 121 次調査	渡瀬加奈子	
	小阪細長遺跡第３次調査	西岡成晃	

●秋季企画展「ならの史跡に行こう（縄文－古墳時代）」

内　容：平成 31・令和元年度は文化財保護法の基となった「史蹟名勝天然記念物保存法」制定 100 年及び唐古・鍵遺跡史跡指定 20 周年にあたる。また、第 54 回全国史跡整備市町村協議大会が奈良県で開催された。

これらの記念事業として、本企画展では奈良県内の縄文～古墳時代の国・県指定史跡を紹介し、より多くの来館者に県内史跡の保存・活用状況の周知を目的として実施した。また、橿原市の「歴史に憩う橿原市博物館」と連携して、同テーマの「ならの史跡に行こう（飛鳥－江戸時代）」を同時期開催した。

期　間：9 月 29 日～ 12 月 1 日（55 日間）

入館者：2,003 名（企画展のみ）

【展示構成と主要展示品】

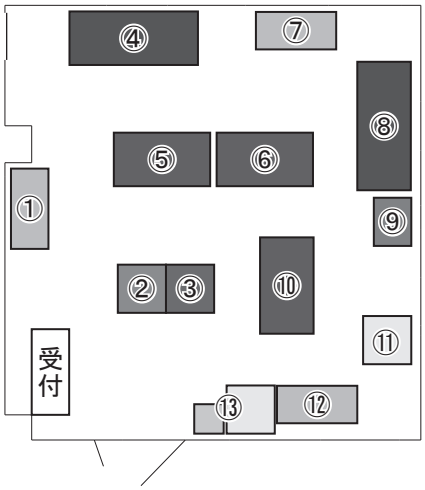
（Ⅰ）縄文時代の史跡：大川遺跡（展示ケース①）

（Ⅱ）弥生時代の史跡:宮滝遺跡、唐古・鍵遺跡（展示ケース②～④）

（Ⅲ）古墳時代の史跡（集落）:纒向遺跡（展示ケース⑤、⑥）

（Ⅳ）古墳時代の史跡（古墳）:纒向石塚古墳、箸墓古墳、黒塚古墳、赤土山古墳、佐味田宝塚古墳、乙女塚古墳、大塚山古墳、ナガレ山古墳、巣山古墳、宮山古墳、黒田大塚古墳（展示ケース⑦～⑬）

【展示ケースの配置】



【展示風景】

【秋季企画展チラシ】

【秋季企画展展示品一覧】

遺跡名	遺物名（数字は点数、数字なしは１点）	点数	所蔵
大川遺跡	縄文土器５、スクレイパー２、敲石、磨石	9	奈良県立橿原考古学研究所
宮滝遺跡	縄文土器２、石鏃５、打製石斧３、石皿、敲石、弥生土器、石蓋、磨製石斧、巻貝	16	吉野町
唐古・鍵遺跡	弥生土器、大型建物柱	2	田原本町教育委員会
纒向遺跡	韓式系土器、木製仮面（複製）、木製鎌柄（〃）、木製盾（〃）、巴形石製品未成品、銅鐸片、桃核一式	6	桜井市教育委員会
纒向石塚古墳	木製鋤、横槌、鋤身、有孔板状木製品	4	
箸墓古墳	刀形木製品、曲柄又鋤身	2	
黒塚古墳	三角縁神獣鏡（複製）、小札４、鉄鏃２	7	天理市教育委員会
赤土山古墳	形象埴輪（家形、短甲形、冠帽形）、石製品（筒形２、突起状、玉杖、刀子形３）	10	
佐味田宝塚古墳	三角縁神獣鏡、車輪石	2	河合町教育委員会
乙女山古墳	円筒埴輪、小形丸底壷６、土製円板７、棒状土製品３	17	
大塚山古墳	円筒埴輪、人物埴輪（腕）	2	
ナガレ山古墳	管玉２、勾玉５、石製品（刀子形３、斧形、鉋形２、紡錘車形、刀形）、鋤先型鉄製品、小形土製模造品	28	
巣山古墳	水鳥形埴輪	1	広陵町教育委員会
宮山古墳	陶質土器、船形陶質土器、緑色凝灰岩片13、白色円礫一式	19	御所市教育委員会
黒田大塚古墳	円筒埴輪２、滑石製玉類２	4	田原本町教育委員会
15遺跡	展示点数計	129	

【関連講演会】

回	開催日	内容	講師	参加人数
1	11月９日	ヤマトの夜明け～縄文時代の奈良	平岩欣太氏（橿原市教育委員会事務局文化財課　統括調整員）	42名
2	11月23日	ヤマト国形成と倭国の成立と確立	岸本直文氏（大阪市立大学大学院　文学研究科　教授）	78名
3	12月１日	５世紀のヤマト	坂靖氏（奈良県　地域振興部文化財保存課　主幹）	83名

（４）講座・イベント

下表のとおり、一般向け講座「ヤマト弥生時代研究」、夏季イベントを開催した。

【一般向け講座「ヤマト弥生時代研究〕】

回	開催日	内容	講師	参加人数
1	7月21日	弥生時代における青銅器の原料金属の流通と交易	難波洋三氏（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 客員研究員）	89名
2	9月15日	土器文様をやめた弥生人たち	深澤芳樹 氏（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 客員研究員）	94名
3	10月６日	発見された弥生分銅－計量と文明	中尾智行 氏（大阪府立弥生文化博物館総括学芸員）	54名
4	12月８日	弥生絵画を読む	藤田三郎	78名
5	1月19日	唐古･鍵前夜～ヤマト弥生社会前史	岡田憲一 氏（奈良県立橿原考古学研究所指導研究員）	96名

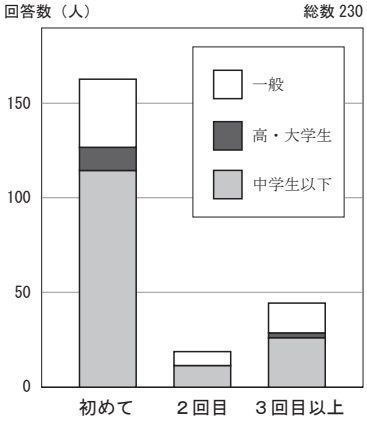
【夏季イベント一覧】

	開催日	内容	参加人数
1	7月24日・８月23日	キミも考古探偵！	のべ６名
2	８月16日ほか３日	弥生土器をつくってみませんか	のべ25名

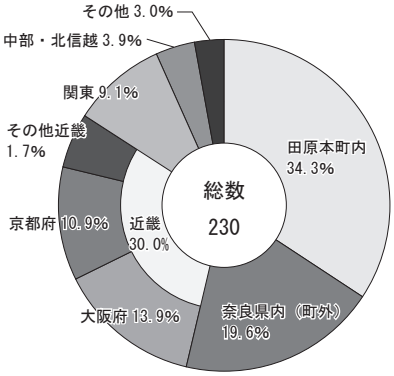
（5）入館者アンケート

常設展の入館者に対するアンケートの詳細は次のとおりである。回答いただいた内容の比率は前年度とほぼ変動がない。

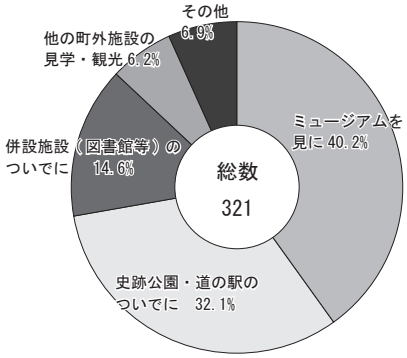
【アンケート結果】



【来館回数】



【入館者の居住地別内訳】



【来館目的】

（6）視察・研修・学校等からの利用

下記のとおり視察・学校利用があった。

【視察・学校利用一覧】

視察

来館日	来館者(団体)	人数
6月20日	内閣官房	1
7月5日	鳥取県	2
8月20日	新任教員研修	5
9月20日	国土交通省近畿運輸局	3
11月29日	田原本町健康福祉課	19
12月11日	田原本町観光協会 ボランティアガイドの会	11
1月26日	内閣官房	5
2月12日	外務省	1
2月24日	在グアテマラ日本国大使館	1
合計		48

学校

来館日	来館者(団体)	人数
5月30日	曽爾小学校	4
6月4日	穎明館中学校	42
6月8日	天理大学	15
7月4日	高田学苑　高田中・高等学校社会科	15
7月7日	同志社大学	7
7月26日	西宮市中学校社会科研究会	12
8月23日	東北大学	14
3月15日	金沢大学	1
合計		110

（7）ホームページ

平成29年度にホームページを刷新し、「唐古・鍵総合サイト」において唐古・鍵遺跡の概要、唐古・鍵遺跡史跡公園と唐古・鍵考古学ミュージアムの情報を掲載することとした。平成31・令和元年度の唐古・鍵考古学ミュージアムのホームページへのアクセス数は23,522件で、前年度比9,979件の減であった。

２．唐古・鍵遺跡史跡公園

（１）来園者数

遺構展示情報館の来館者数、午前 10 時･午後２時に園内の来園者数と駐車場台数を計測した。

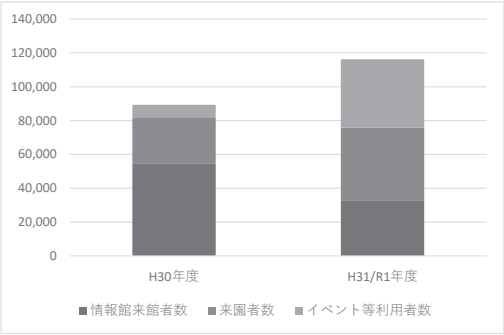
【史跡公園来園者数】

来園者一覧

平成31／令和元年度	遺構展示情報館来館者（人）	来園者（人）	駐車場台数（台）
４月	3,750	5,900	1,040
５月	3,451	3,004	425
６月	2,386	2,020	270
７月	2,324	1,616	182
８月	2,423	1,733	254
９月	3,599	3,836	658
１０月	3,392	3,812	299
１１月	4,097	11,581	1,149
１２月	1,454	2,138	304
１月	1,584	1,515	246
２月	1,629	1,844	302
３月	2,760	3,931	635
計	32,849	42,930	5,764

	H30年度	H31/R1年度
情報館来館者数	54,422	32,849
来園者数	27,128	42,930
イベント等利用者数	7,805	40,355
公園総来訪者数	89,355	116,134

【年度別推移】



（２）公園利用・イベント

平成 31・令和元年度に史跡公園及び道の駅で実施されたイベントは下記一覧のとおりで、このうち一般向けのものは 37 件であった。これらは町・ボランティア・指定管理者、民間会社の主催・共催による。また、学校の遠足等による利用は 13 件であった。

なお、新型コロナウィルス拡大により、中止や一部内容変更となったのは６件であった。

・弥生のムラまつり　In　唐古・鍵

史跡公園における秋の主要イベントとして、「第２回弥生のムラまつり　In　唐古・鍵」を開催した。飲食ブースを伴う「THE WAY CARNIVAL 奈良・田原本」の一部と位置付け、近隣市町やボランティア等による体験ものづくりワークショップ、コンサート等を実施した。また、第１回に引き続き「弥生わらアートコンテスト」「弥生土器コンテスト」も実施した。このイベントには２日間で延べ 19,032 人の来場があった。

イベント名：第２回　弥生のムラまつり　In　唐古・鍵（THE WAY CARNIVAL 奈良・田原本）

共　　催：田原本町、田原本町教育委員会、田原本町農業振興推進協議会、京阪園芸（株）

後　　援：橿原市教育委員会、桜井市教育委員会、天理市教育委員会、大和高田市教育委員会、香芝市教育委員会、葛城市教育委員会、広陵町教育委員会、川西町教育委員会、三宅町教育委員会

協　　賛：奈良交通（株）

開 催 日：令和元年 11 月 16・17 日

【イベント一覧】

実施日	内容	種別	一般参加者	開催場所	備考
3/26 ～ 4/7	サクラまつり	自主事業	3,000 人	公園	
4/1	花見	イベント	30 人	公園	
4/13	銅鐸づくり	自主事業 / 行政	12 人	道の駅	
4/13・4/14	タワラモトンマラソン	イベント	500 人	公園	
4/17	狂犬病予防注射	行政	40 人	公園	
4/27	春の寄せ植え	自主事業	8 人	道の駅	
4/28	カブミーティング	自主事業	1,635 人	公園	
5/4・5/5	子供の日まつり	自主事業	547 人	公園	
5/10	大和郡山市立治道小学校　遠足	学校	708 人	公園	
5/14	ドローン撮影	その他	－	公園	
5/30	田原本町立北小学校　総合学習	学校	98 人	公園	
6/4	穎明館中学校（八王子市）　ガイド	学校	42 人	公園	
6/8	勾玉づくり	自主事業	0 人	公園	
6/11・6/18	田原本立田原本小学校　総合学習	学校	98 人	公園	
6/13	ヨガ教室	イベント	12 人	公園	
6/15	考古学セミナー	自主事業	13 人	道の駅	
6/29	樹木セミナー	自主事業	5 人	道の駅	
7/4	学校法人高田学苑（津市）　ガイド	学校	15 人	公園	
7/6	植物寄せ植え	自主事業	6 人	道の駅	
7/21	夏まつり	自主事業	25 人	公園	
7/27・8/3	土器づくり	自主事業 / 行政	14 人	道の駅	
8/8・8/9	感謝祭	自主事業	19 人	公園	
8/10	親子で星を見る会	行政	50 人	公園	
8/18	虫と遊ぼう	自主事業	25 人	公園	
8/25	野外音楽祭	イベント	500 人	公園	
8/25	バラの育て方	自主事業	18 人	道の駅	
8/30	ラジオ体操	行政	－	公園	雨天中止
8/30	県立香芝高校　ガイド	学校	6 人	公園	
9/14	考古学セミナー	自主事業	14 人	道の駅	
9/14	ドングリ細工	自主事業 / 行政	10 人	道の駅	
9/21・9/22	警察犬訓練競技大会	イベント	120 人	公園	
10/5	植物寄せ植え	自主事業	6 人	道の駅	
10/10	田原本町立南小学校　総合学習	学校	55 人	公園	
10/12	勾玉づくり	自主事業	－	公園	台風中止
10/21	田原本町立東小学校　総合学習	学校	14 人	公園	
10/23	奈良市立幼稚園（富雄第３・三碓）遠足	学校	61 人	公園	
10/26	植物寄せ植え	自主事業	5 人	道の駅	
10/31	田原本町立北小学校　総合学習	学校	36 人	公園	
11/3	カブミーティング	自主事業	2,136 人	公園	
11/6・11/20	芝刈り体験	自主事業	110 人	公園	
11/12	田原本町立平野小学校　総合学習	学校	59 人	公園	
11/16・11/17	THE WAY CARNIVAL ／弥生のムラまつり	行政	19,032 人	公園	
11/21	田原本町立北小学校　マラソン大会	学校	230 人	公園	
11/23	多肉植物寄せ植えワークショップ	自主事業	25 人	公園	
11/23・11/24	音楽イベント「Nara Sonic」	イベント	755 人	公園	
12/1	田原本やぶさめ祭り	行政	10,000 人	公園	
12/10	田原本町立北幼稚園　かけっこ大会	学校	120 人	公園	
12/14	粘土勾玉づくり	自主事業 / 行政	20 人	道の駅	
12/21	凧づくり	自主事業	11 人	道の駅	
1/11	ひょうたんアート	自主事業 / 行政	12 人	道の駅	
1/12	凧揚げ大会	自主事業	19 人	公園	
2/1	親子で星を見る会	行政	－	公園	コロナ中止
2/8	キャンドルイベント	自主事業	30 人	公園	
2/8	マグネットクリップづくり	自主事業 / 行政	－	道の駅	コロナ中止
2/15	バラセミナー	自主事業	12 人	道の駅	
3/1	親子で星を見る会	行政	－	公園	コロナ中止
3/14	網代編みコースターづくり	自主事業 / 行政	－	道の駅	コロナ中止
3/22	犬の協議会	イベント	－	公園	コロナ中止
3/28 ～	サクラまつり	自主事業	708 人	公園	一部中止

【弥生のムラまつりＩｎ唐古・鍵　イベントチラシ】

【コンテスト一覧】

コンテスト名	応募作品数	受賞作品数	審査員	共催・協賛
弥生わらアートコンテスト	4	4	寺澤薫　氏（桜井市纒向学研究センター） 井原縁　氏（奈良県立大学）	京阪園芸（株） 奈良交通（株）
弥生土器コンテスト	14	6	深澤芳樹　氏（元奈良文化財研究所） 平井明　氏（陶芸家）	

３．ボランティア活動

（１）史跡公園ボランティア

平成 30 年度に開園した史跡公園で活躍していただいている。平成 31・令和元年度は計 31 人にご登録いただき、以下の３グループに分かれて活動した。

・ガイドグループ（11 人）

史跡公園内をガイドするグループ。

・ものづくりグループ（12 人）

各種ものづくり体験イベントを開催する。

・自然観察グループ（８人）

園内の樹木に銘板を作成・貼り付けや、昆虫観察イベント開催などをおこなう。

（２）唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

唐古・鍵遺跡を総合的に支援する任意ボランティア団体として、平成 16 年に設立された。主な活動は、史跡公園とミュージアムをまたぐ総括的な説明ガイドや、町内小学校の総合的な学習の支援とその教材整備、町文化祭などでのブース運営をとおした唐古・鍵遺跡のアピールなどがある。また、自主的な学びの場として「弥生勉強会」の実施、各地遺跡の現地見学などをおこなっている。

（３）ミュージアムボランティア

・ガイドボランティア

展示品解説ボランティアとして、平成 31・令和元年度には 36 人にご登録いただいている。基本的に月２回の午前 10 時から午後４時（冬季の 12 月～２月は午前 10 時 30 分から午後３時 30 分）までとし、常駐２人体制とした。また、団体客等の多数来館の場合には臨時的に応援ガイドで対応することとしている。

・企画展受付ボランティア

企画展開催中は、ボランティアにより受付をおこなっていただいた。春季企画展は 33 日間の会期中に延べ 62 人、秋季企画展は 55 日間に延べ 99 人に参加いただいた。

Ⅲ．文化財の保護と活用

１．文化財の保護と活用

（１）町指定文化財

下記の文化財が町指定文化財に指定された。９件目の町指定文化財である。

種　　別　　有形文化財（彫刻）

名称及び員数　　木造太安萬侶神像　一軀

所　　在　　磯城郡田原本町大字多 570 番地　多神社収蔵庫

所有者の住所　　磯城郡田原本町大字多 569 番地

所有者の名称　　多坐弥志理都比古神社

法　　量　　像高 47.5 ㎝　（一尺五寸八分）

形　　状　　本体　俗形

左折烏帽子を被る。背面には被り物の付属品を取り付けたかとみられる方形の釘孔痕がある。眉をつりあげ、二重瞼とし、開目。口を閉じ、顎髭をあらわす。耳朶不貫。下衣二枚を着け、袍を着け、表袴を穿き、襪を履き、両袖を左右に広げ、両足裏を合わせて畳座の上に坐す（楽坐）。腰帯を腹前に二重に垂らし、背面で下襲の裾を三段に畳む。両手屈臂、腹前で左手は笏の下端を握り、右手は笏の頂に掌を添える。

品 質 構 造　　本体　檜材　寄木造　彩色

頭部は前後に三材を矧ぎ、首枘を体部に挿す（挿首）。体幹部は前後三列に材を寄せ、前面部は左右三材、背面部は一材、中間は肩部で前後各二材をそれぞれ矧ぐ。両肩から地付きにいたる体側部に各一材を寄せる。両脚部は両袖の主要部を含んで横木一材を寄せ、背面に左右二材を矧ぐ。左袖先端部に一材、腹部に薄板二材を矧ぐ。左手前膊、右手袖部、同前膊に各一材を矧ぎ、両手差し込み矧ぎ、左袖口小材矧付け。なお袍中央左寄り、左足脛前方、右臂、両袖前方等に埋木がある。

修補損傷等　　本体背面右袖部付根周辺、朽損。本体の白土地彩色は後補。

像底蓋板（後方）、畳座、以上各後補。

寸 法 細 目　　本体　　（単位センチメートル）

像高 47.5　烏帽子下際高 40.0　烏帽子頂～顎髭 17.3　烏帽子下際下～顎髭下　10.0　面幅 9.0　面奥 11.5　耳張 11.1　胸厚 15.4　腹厚 17.5　肘張 37.5　膝張 36.2　坐奥 30.6　袖張 65.5　膝高（左）6.7　同（右）6.4

畳座

幅 55.2　同奥 34.5　同高 6.0

時　　代　　室町時代

伝　　来　(1) 本像は当社本殿四棟のうち、向かって右二番目の第二殿に祀られ、後年社殿から出たと伝える。本殿は四棟ともに大型の春日造で、第一殿および第二殿は享保 20 年（1735）の建立である。

(2)『田原本町の佛像』（昭和 59 年刊）によると、本像を納める箱厨子の蓋表に「明和四年」（1767）の墨書銘があり、「多朝臣安麻呂御神像」を開扉した旨を記す、と報告しているが、該当の厨子はすでに廃棄されており、銘記の内容は今日確認できない。

説　　明　本像はかつて当社第二殿に祀られていた太安萬侶の神像と伝え、左手は笏の下端を握り、右手は笏の頂に掌を添え、両足裏を合わせて畳座に坐る姿である。左折烏帽子を被り、衣服は袍、表袴、襪、帯、下襲を着ける。衣服の形式は平安時代以降の朝廷男子の正服であった束帯に近似しているが、この束帯風の衣服と左折烏帽子との組合せについては、いまのところ、類例が知られず、異色である。

太安萬侶は『古事記』（和銅 5 年／ 712）の編纂者であり、多氏の氏長にもなった歴史上著名な奈良時代の官人である。後世、彼が多氏の祖先神として神格化される段階で、左折烏帽子および束帯の衣服が参考とされて本像が造られ、かつ尊名比定された可能性が高いと考えられる。

檜材を用いた寄木造で、頭部は前後三材、体幹部は前後四列に材を寄せるなど、総じて細かい木寄せであり、また彫刻表面には薄板を貼り付ける箇所もある。彩色は後補であり、当初の色および文様は判定できない。

吊り上がった眉、やや垂れた二重の瞼、丸く膨らんだ頬、閉じた口、短い顎髭などの顔つきは精彩があり、肩口の簡潔で深い彫り口は神像としての趣がある。体奥は厚みと張りがあり、袍の質感表現は簡素である。畳座に垂れた両袖の先端は強く跳ね上がらず、近世の束帯姿の肖像彫刻のそれとは異なる。このような表現や前述した構造技法の特色から考えると、製作は室町時代（15 ～ 16 世紀）と推測される。

神像彫刻の歴史は全国的な視野からみても、その実態は不明なところが多く、奈良県下においても所在調査はあまり進んでいない。そのような中で、本像は神格化された太安萬侶の神像として中世美術史の展開を考える上で重要であり、また地域史の視点からも注目すべきものである。

備　　考　(1) 当社の正称は多坐弥志理都比古神社であり、多神社と通称される。当地は神八井耳命（神武天皇の長子）を祖先神とする古代豪族多氏の本貫地であり、祭神四柱を奉祀する。第一殿は神倭磐余彦尊（神武天皇）、第二殿は神八井耳命。第三殿は神淳名川耳命（神八井耳命の弟、綏靖天皇）、四殿は姫御命（神八井耳命の祖母）である。社殿四棟には今日、70 軀を越

える多種の神像が合祀され、製作は平安から江戸時代にまで及ぶという。

(2) 太安萬侶は和銅５年（712）成立の『古事記』の編纂者。霊亀２年（716）多氏の氏長となる。養老７年（723）７月６日卒去（墓誌銘）。位と勲等は従四位下勲五等。

(3) 本像が着用する左折烏帽子は、烏帽子の峰に沿って上部を左に折り曲げている。一般に烏帽子は公家や仕える人の日常の被り物で、袋状を呈し、平安時代は丈が高く、鎌倉以降は高さが低くなる。本像のように烏帽子の上方を折ったものを風折烏帽子と呼び、狩衣を着る時に使われることが多い。右折りは上皇が着用し、左折りは後に官位の低い、六位以下の地下が用いたといわれる。

(4) 奈良時代の官人の正服は朝服、平安時代以降のそれは束帯であり、衣冠は束帯の略装であり、いずれも冠を被る。本像にみる左折烏帽子と束帯風の衣服との組み合わせについては、さらに有職故実などからの歴史考証が必要である。

【木造太安萬侶神像 1】

【木造太安萬侶神像 2】

【町指定文化財一覧】

台帳番号	種別	名称　及び　員数	所有者	時代	指定年月日
欠番	有形文化財（考古資料）	「楼閣」が描かれた土器片３点	田原本町	弥生時代（中期）	平成20年３月24日 平成30年10月31日「奈良県唐古・鍵遺跡出土品」として国指定重要文化財に一括指定されたことを受け、町条例第６条第４項により解除
欠番	有形文化財（考古資料）	翡翠製勾玉と鳴石容器（蓋付）一式 １．翡翠製勾玉　２点 １．鳴石容器　１点 １．容器蓋（土器甕片）１点	田原本町	弥生時代（中期）	
3	有形文化財（彫刻）	木造十一面観音立像　一躯	法貴寺自治会	室町時代（天文10年／1541年）	平成20年３月24日
4	有形文化財（古文書）	平野権平(長泰)宛豊臣秀吉感状 １．平野権平宛羽柴秀吉判物（天正十一年六月五日）折紙１通 ２．平野権平宛豊臣秀吉朱印状（文禄四年八月十七日）折紙１通 附　収納箱　内箱・外箱　包紙（２は２枚有り）	福岡洋介	１．安土桃山時代（天正11／1583年） ２．安土桃山時代（文禄４／1595年）	平成20年12月17日
5	有形文化財（古文書）	寶陀山補巌禅寺納帳 １．寶陀山補巌禅寺納帳　その１ ２．寶陀山補巌禅寺納帳　その２ ３．寶陀山補巌禅寺納帳　その３ ４．寶陀山補巌禅寺納帳　その４ 附　補巌禅寺開山支派	補巌寺	１．室町時代（明応７／1498年） ２．室町時代（大永末年頃） ３．室町時代（永禄末年頃） ４．室町時代（元亀３／1572年） 附　江戸時代	平成22年12月22日
6	有形文化財（古文書）	小林家文書　1,132点 附　諸書物入木箱　１点	小林敏良	桃山～江戸時代 附　江戸時代（天保８／1837年）	平成24年９月27日
7	無形文化財（民俗）	矢部の「綱掛」	矢部自治会	明治以前～現代	平成27年11月27日
8	有形文化財（古文書）	寺川筋今里問屋場絵図　１鋪	今里自治会	江戸時代（天保10／1839年）	平成30年１月12日
9	有形文化財（彫刻）	木造太安萬侶神像　一軀	多坐弥志理都比古神社	室町時代	平成24年９月30日

（２）刊行物

平成 31・令和元年度は、以下の書籍を刊行した。

【刊行物一覧】

書籍名	発行日	部数	内容
唐古・鍵遺跡リーフレット	令和元年７月	20,000部	史跡公園が開園したことを追記した遺跡紹介リーフレット
唐古・鍵考古学ミュージアム秋季企画展図録『ならの史跡に行こう（縄文－古墳時代）』	令和元年９月	2,000部	令和元年度秋季企画展図録
唐古・鍵考古学ミュージアム企画展図録『よみがえる弥生の祭場―唐古・鍵遺跡と清水風遺跡―』	令和２年３月	2,000部	令和２年度企画展図録
田原本の遺跡６『弥生の王都　唐古・鍵』	令和２年３月	2,000部	平成19年度秋季企画展図録を再編集・再発行
『田原本町文化財調査年報26』	令和２年３月	600部	平成28・29年度の文化財事業の報告
『唐古・鍵考古学ミュージアム常設図録』	令和２年３月	1,000部	地方創生推進交付金を活用し、一部多言語化して再発行

（３）資料の貸出

平成 31・令和元年度は、以下の資料を貸出しした。

【貸出資料一覧１】

貸出先／目的	貸出期間	遺跡名	資料名	点数
歴史に憩う橿原市博物館 2019年度春季特別展「オトコとオンナ」	平成31年４月９日～令和元年６月10日	笹鉾山２号墳	１号人物埴輪 １号馬形埴輪	2
東京国立博物館 日本書紀成立1300年特別展「出雲と大和」	令和元年12月９日～令和２年３月10日	笹鉾山２号墳	１号人物埴輪 １号馬形埴輪	2

【貸出資料一覧２】

（継続貸出）

貸出先／目的	貸出期間	遺跡名	資料名	点数
香芝市二上山博物館 常設展	平成31年４月１日～ 令和２年３月31日	唐古・鍵遺跡	壷・甕・高坏・槍先形石器	4
大阪府立弥生文化博物館 常設展	平成31年４月１日～ 令和２年３月31日	唐古・鍵遺跡	土弾	2
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 常設展示	平成31年４月１日～ 令和２年３月31日	唐古・鍵遺跡	土製品・木製品・石製品	80
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 常設展示	平成31年４月１日～ 令和２年３月31日	唐古・鍵遺跡	土製銅鐸鋳型外枠ほか	9

（４）資料特別利用

資料の掲載許可申請は 40 件あった。また、特別利用許可件数は以下のとおりであった。

【資料特別利用】

調査日	調査者	資料名
令和元年5月2日(木)	個人	唐古・鍵遺跡　石製鋳型 送風管 石製鋳型の可能性のある砥石 鉄滓 真土
令和元年7月8日(月)～令和元年7月12日(金)	個人	唐古・鍵遺跡　木製品(12点) 磨製石器(８点)
令和元年7月15日(月)	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	唐古・鍵遺跡　木製高杯(２点)
令和元年8月1日(木)	個人	唐古・鍵遺跡　石器(123点)
令和元年8月26日(月)～令和元年8月30日(金)	個人	唐古・鍵遺跡　石器(144点)
令和元年8月17日(土)	個人	唐古・鍵遺跡　石器(６点)
令和元年9月3日(火)～令和元年9月6日(金)	個人	唐古・鍵遺跡　石器(144点)
令和元年9月9日(月)	個人	唐古・鍵遺跡　土器(11点)
令和元年9月24日(火)～令和元年9月25日(水)	個人	唐古・鍵遺跡　絵画土器(15点)
令和元年11月15日(金)	個人	小林家文書(18点)
令和元年12月21日(土)	個人	唐古・鍵遺跡　石器(７点)
令和2年1月28日(火)	個人	秦楽寺遺跡　琥珀玉一式
承諾日～令和3年3月31日(水)	個人	唐古・鍵遺跡　第58次出土　ニワトリ大腿骨
令和2年2月19日(水)	個人	唐古・鍵遺跡　鹿角ハンマー(２点) 石器一式

（５）総合的な学習の時間及び展示会

町内小学校からの依頼を受け、総合的な学習の時間に以下内容の出前事業をおこなっている。この児童の作品や新聞・感想文を１月 31 日から２月５日の６日間展示し、175 人の来場があった。

【総合学習出前事業一覧】

<table>
<tr><td>学校名</td><td>東小学校</td><td>北小学校</td><td>田原本小学校</td><td>南小学校</td><td>平野小学校</td></tr>
<tr><td>クラス数-児童数</td><td>1-14</td><td>2-36</td><td>4-98</td><td>2-55</td><td>2-59</td></tr>
<tr><td>ミュージアム見学</td><td>5/29</td><td>5/16</td><td>5/21</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>勾玉づくり</td><td>7/4</td><td>5/16</td><td>5/27</td><td>5/23</td><td>5/10</td></tr>
<tr><td>土器づくり</td><td>10/3</td><td>6/27</td><td>6/24
6/25</td><td>6/7</td><td>6/6</td></tr>
<tr><td>土器野焼き</td><td>11/5</td><td>10/31</td><td>10/2</td><td rowspan="3">10/11</td><td>11/14</td></tr>
<tr><td>火熾し</td><td rowspan="3">10/21</td><td rowspan="3">5/30</td><td rowspan="3">6/11
6/18</td><td rowspan="3">11/12</td></tr>
<tr><td>炊　飯</td></tr>
<tr><td>脱　穀</td></tr>
</table>

【土器焼き体験】

【展示会の状況】

（６）中学生職場体験学習

町内中学生の職場体験学習のため、田原本中学校・北中学校の生徒を受け入れた。

【職場体験一覧】

受入日	学校名	人数	内容
11 月５日～７日	田原本中学校	３人	土器洗浄・遺物整理・土器拓本 ミュージアム受付
11 月 12 日～14 日	北中学校	３人	
延べ　６日	２校	６人	

Ⅳ．資料の報告

唐古・鍵遺跡出土の板状鉄斧

田原本町教育委員会
藤田 三郎
奈良県立橿原考古学研究所
奥山 誠義・小倉頌子

１．はじめに

今回新たに資料紹介する鉄斧は、1986 年の唐古・鍵遺跡第 24 次調査で出土したものである。本鉄斧は小片で表面は暗褐色を呈し、リン酸鉄が付着するなど一見動物骨のように見えたため、誤って動物骨コンテナの中に収納されていたものであった。唐古・鍵遺跡の動物骨については、総量が多くその全体把握が困難であったが、丸山真史氏によって継続的に再整理が進められてきた。また、宮崎泰史氏も加わりほぼ全体把握ができるような状況になりつつある。このような動物骨の整理過程において、宮崎氏によって見つけ出されたのである。

さて、唐古・鍵遺跡の鉄製品は、これまで板状鉄斧と鉋、鉄鏃と思われるものが出土している程度であり、今回の資料はその意味において重要な資料を追加することになる。これまでの鉄製品は報告後に確認したため報告できていないもので、図録での紹介程度である。したがって、本稿では今回見つかった板状鉄斧を報告するとともに、これまでに出土した唐古・鍵遺跡の鉄製品をも紹介し、唐古・鍵遺跡の鉄製品の状況を考えるものである。

２．唐古・鍵遺跡の鉄製品が出土した遺構

唐古・鍵遺跡から出土した弥生時代から古墳時代の鉄製品は第１表のとおりで、第 24 次・第 40 次調査出土の板状鉄斧各１点、第 74 次調査の鉋１点、第 48 次・第 59 次調査の鉄鏃各１点の計５点である。

No.1　板状鉄斧（KRK-024-00001M）

第 24 次調査の概要[1)]　　唐古・鍵遺跡の北東部の調査である。弥生時代中期（大和第Ⅱ-3-b

第１表　唐古・鍵遺跡出土鉄製品一覧表

	製品名	調査次数	遺　構	層　位	取上番号／地区	出土年月日	遺物台帳番号	製品コード 博物館コード
1	板状鉄斧	第24次調査	ＳＤ-107	第３(下)層	Ｇ-Ｃ北半	860318	180	KRK-024-00001M MM-弥生-0038
2	板状鉄斧	第40次調査	ＳＤ-101	第５層	ＩＲ-501	900709	226	KRK-040-00001M MM-弥生-0008
3	鉋	第74次調査	ＳＫ-110	第３層		990823	230	KRK-074-00001M MM-古墳-0003
4	鉄鏃	第48次調査	ＳＫ-1111	第３・４層	土ｻﾝﾌﾟﾙその７	920110	360	KRK-048-00001M MM-古墳-0005
5	鉄鏃	第59次調査	ＳＤ-1101	第１層	8019-8022	951211	149	KRK-059-00003M

様式掘削～第Ⅲ-3・4様式、第Ⅴ様式）の大溝（SD-201）とその内側に掘削された弥生時代後期（大和第Ⅴ様式～第Ⅵ-3様式）の大溝（SD-107）２条をメインとする調査であった。このほか、古墳時代前期（布留０式）の大型土坑（SK-103）も存在する。南東から北西方向に走行するSD-107を境にして南西側では柱穴群が多数検出される一方、北東側では遺構は疎らとなり、調査区北端では弥生時代中期後半の北方砂層を検出するなどムラの内外が明確であることから、大溝が環濠であったと推定される。

板状鉄斧は、前述環濠のSD-107の下層（(第３(下)層)）から出土した。この環濠の規模は幅２ｍ、深さ1.2ｍで、堆積は大きく４層（最下層・下層・中層・上層）に分けられ、下層から上層にかけて多くの完形土器・半完形土器が出土した。それらに混在する形で板状鉄斧は出土した。鉄斧の時期は、共伴土器から大和第Ⅵ－２様式を主体とする時期である。

No.2　板状鉄斧（KRK-040-00001M）

第40次調査の概要[2)]　唐古・鍵遺跡の南東部の調査で、環濠帯にあたる部分になる。弥生時代中期の北東から南西方向にほぼ並行して走行する３条の大溝（調査区北端からＳＤ-104B／大和第Ⅱ-1-b様式～第Ⅳ-1様式、ＳＤ-102B／大和第Ⅱ-1様式～第Ⅲ様式、ＳＤ-103B／大和第Ⅳ様式）を検出した。これらの大溝は中期段階に埋没し、その後、後期初頭と古墳時代初頭の再掘削（ＳＤ-104／庄内式、ＳＤ-101／大和第Ⅴ・Ⅵ-3・4様式・庄内式・布留式、ＳＤ-102／大和第Ⅴ様式・Ⅵ-4様式、ＳＤ-103／大和第Ⅴ様式・布留式）によって維持された。古墳時代初頭前期（庄内式）の井戸（ＳＫ-101）も存在する。

板状鉄斧は、前述中期環濠のＳＤ-102B埋没後に再掘削されたＳＤ-101（ＳＤ-102から新たに分岐し、西北西方向に走行する）の下層から出土した。ＳＤ-101は大きく４層に分けることができ、最下層は大和第Ⅴ-1様式、下層は大和第Ⅵ-3様式であるが、大和第Ⅴ-2様式の土器を多く含んでおり、再掘削時に最下層土器を混在して形成されたものと考えられる。中層は大和第Ⅵ-4様式・庄内式、上層は布留式となる。したがって、板状鉄斧は基本的には大和第Ⅵ-3様式の可能性は高いが、大和第Ⅴ様式の可能性も残す。

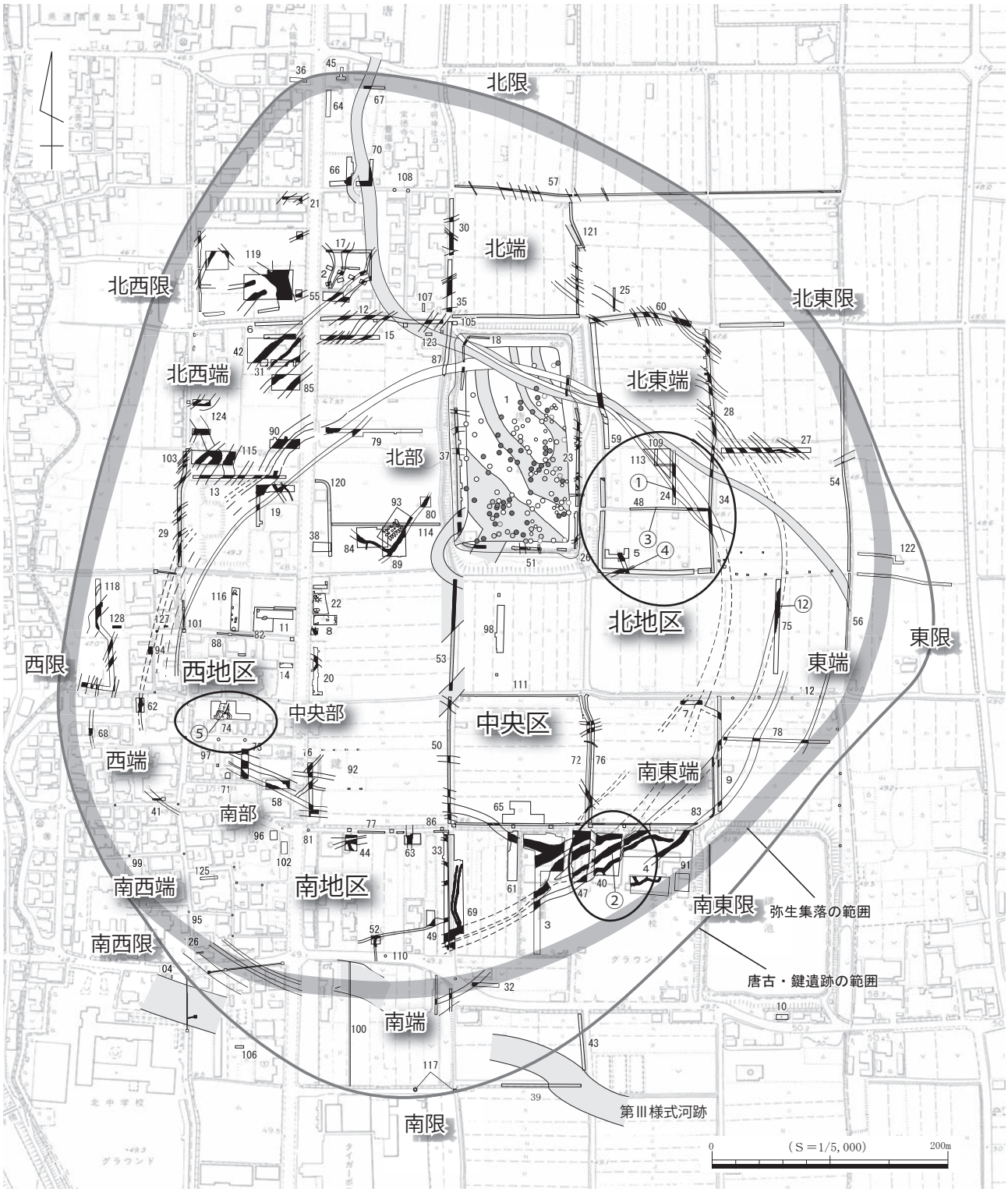
No.3　鉋（KRK-074-00001M）

第74次調査の概要[5)]　唐古・鍵遺跡の西部での調査で、弥生時代西地区の居住区にあたる。弥生時代中期初頭の第１号大型建物跡をはじめとする弥生時代前期から古墳時代初頭までの土坑・区画溝などが検出されている。このほか、古墳時代初頭（庄内式）の方形周溝墓もみつかっている。

鉋は、土坑ＳＫ-110の中層（第３層）から出土した。土坑の規模は長軸１ｍ、深さ1.3ｍで、堆積は大きく４層（最下層・下層・中層・上層）に分けられる。中層からは木錘14点が出土している。時期は、共伴土器から庄内式と考えられる。

No.4　鉄鏃（KRK-048-00001M）

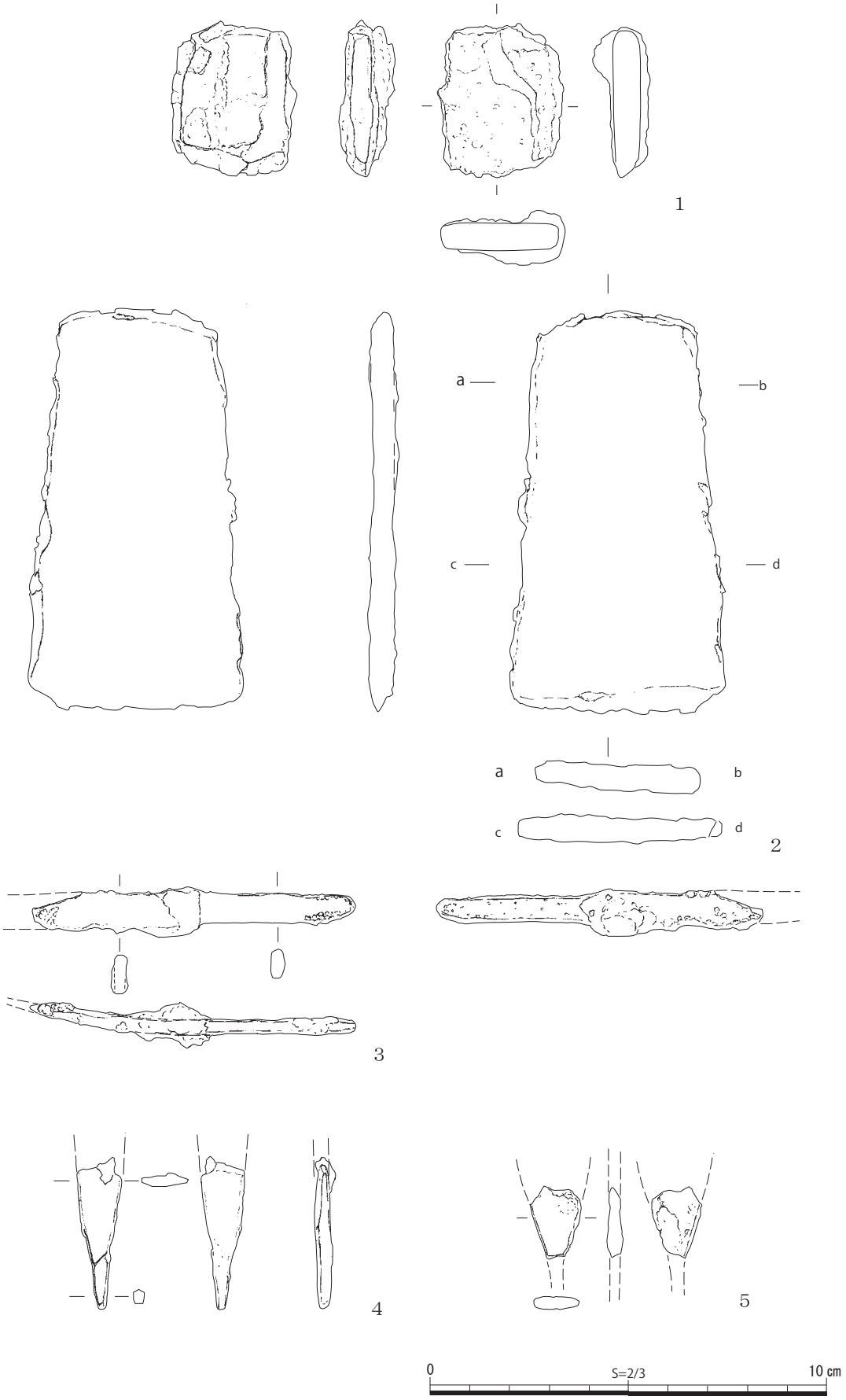
第48次調査の概要[3)]　唐古・鍵遺跡の北東部での調査で、前述第24次調査の南側隣接地にあたり板状鉄斧が出土した環濠ＳＤ-107の延長（ＳＤ-1107とする）を検出している。この



第１図　唐古・鍵遺跡鉄製品出土位置図（○番号は第１表に対応）

環濠から西側が主要な調査区であり、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての柱穴や土坑を多く検出し、居住区の様相を呈している。

鉄鏃は、前述土坑群の一つＳＫ-1111 から出土した。土坑の規模は長軸 1.3 m、深さ 1.5 m で、堆積は大きく４層（下層・中層・上層・最上層）に分けられる。土坑の形状から井戸と考えられ、下層には完形の広口壷が供献されていた。板状鉄斧は下・中層から出土した。鉄鏃の



第２図　唐古・鍵遺跡出土鉄製品

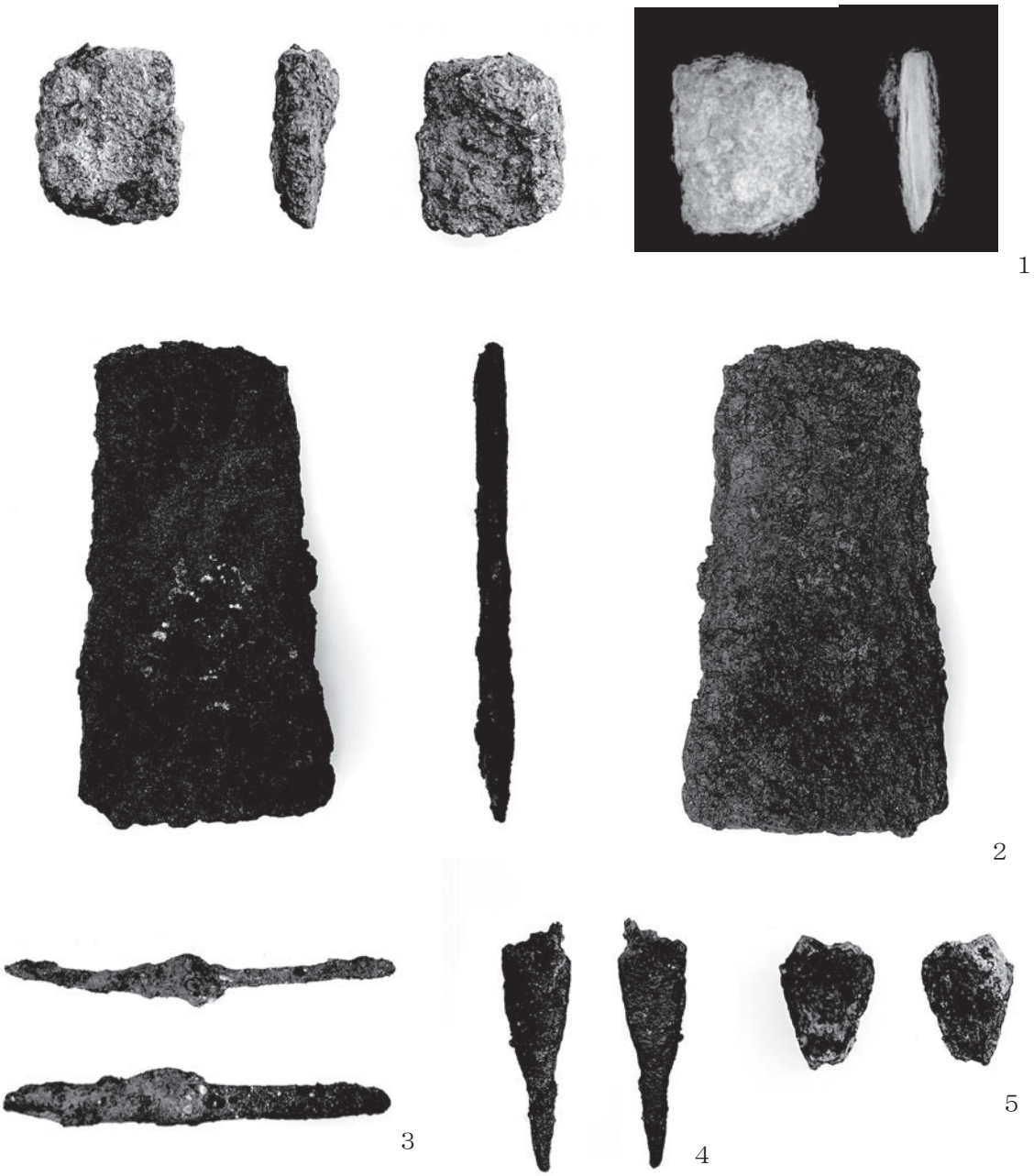


写真１　唐古・鍵遺跡出土鉄製品（１～３：S≒2/3、４・５：S≒1/1）

時期は、共伴土器から庄内式と考えられる。

No.5　鉄鏃（KRK-059-00003M）

第 59 次調査の概要[4)]　　唐古・鍵遺跡の北東部での調査で、唐古池の東側にあたり５つの調査区からなる。居住区（第１～３トレンチ）から環濠帯（第４・５トレンチ）部分にあたる。鉄鏃は、その第１トレンチ（前述第 48 次調査の南 100 mの地点）の大溝（ＳＤ -1101）の上層（第１層）から出土したもので、土坑や溝など居住遺構を確認している。ＳＤ -1101 は、幅 2.6 m、深さ 0.8 mで、堆積は大きく３層（下層・中層・上層）に分けられる。下層は大和第Ⅴ様式、中層は大和第Ⅵ -3 様式、上層は布留０式で大和第Ⅵ -3 様式･庄内式の土器を多く含んでいる。

したがって、鉄鏃は布留０式の可能性が高いが、大和第Ⅵ-3 様式・庄内式の余地も残す。

３．鉄製品の詳細

板状鉄斧（第２図－１・２）

１の小型の板状鉄斧は、全体に錆が厚く覆っており、表面の遺存状態は良くない。現状での大きさは長さ 3.9 ㎝、幅 3.2 ㎝、厚さ 1.4 ㎝である。錆が部分的に剝落した部分から本来の大きさをみると、長さ 3.6 ㎝、幅 2.9 ㎝、厚さ 0.6 ㎝で片刃である。

２の板状鉄斧も１と同様、全体が錆に覆われており、現状の大きさは長 10.1 ㎝、刃部幅 5.5 ㎝、基部幅 4.0 ㎝でやや刃部が広がる。刃部は片刃に仕上げられている。厚さ 0.7 ㎝でほぼ均一である。大きさ的には中型になるだろう。

鉋（第２図－３）

３の鉋は、土坑の粘土層からの出土のためか４の鉄鏃と同じように暗灰緑色を呈し遺存状態の良いものである。全体は錆で覆われるが薄く、中程が部分的に厚く覆う。切先部分は細身のままでわずかに欠損しているが、湾曲している。基部端はわずかに細くなる。残存長 8.3 ㎝、基部中央部の幅 0.7 ㎝で厚み 0.3 ㎝、基部ちかくの刃部幅は 1.2 ㎝である。

鉄鏃（第２図－４・５）

４は有茎の柳葉形の鉄鏃で、黒褐色を呈し比較的保存状態の良いものである。錆は全体に薄く覆うが、細身の形状でほぼ全形がわかるものである。鏃身の中程から先端部分は欠損している。鏃身の断面は扁平で薄い。中茎の断面形態は丸く、基部は尖る。残存長 3.9 ㎝、残存幅 1.1 ㎝、最大厚 0.4 ㎝である。

５は鉄鏃の鏃身の下半部分と推定でき、鏃身は柳葉形を呈する可能性がある。保存状態が悪く、褐色を呈し表面の錆が剝落し鉄地部分が残っている。残存部分での大きさは、長さ 1.8 ㎝、幅 1.3 ㎝、厚さ 0.4 ㎝で、鏃身は扁平で薄い。（藤田）

４．唐古・鍵遺跡出土品の蛍光Ｘ線分析

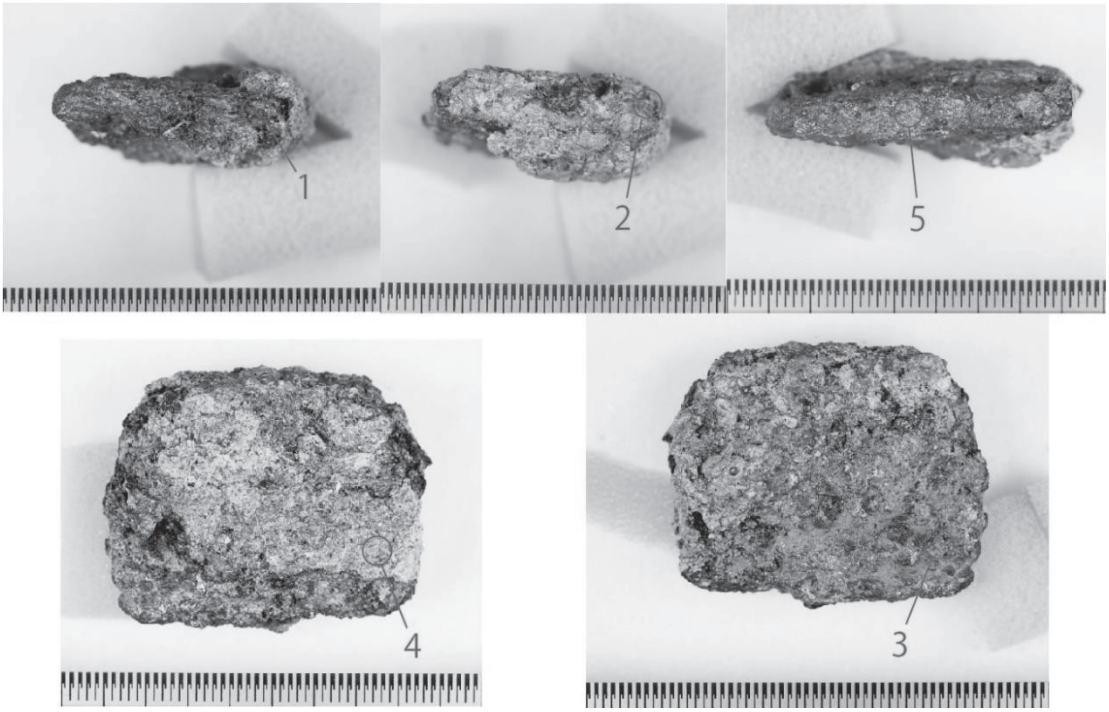
試料と分析方法

試料は唐古・鍵遺跡第 24 次調査時に出土した斧１点と同第 50 次調査時に出土した土器片１点を分析した。斧は全体的に錆に覆われていたため、はじめにＸ線透過撮影による構造調査を行い、形状を確認した後に、蛍光Ｘ線分析法による元素分析を行った。分析に用いた機器は、日本電子製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 JSX-3100R Ⅱである。本装置のＸ線管球はロジウム（Rh）である。測定は以下の条件でおこなった。なお、斧は５ヶ所、土器片は胎土５ヶ所と外面付着物１ヶ所を対象に、非破壊により分析をおこなった。

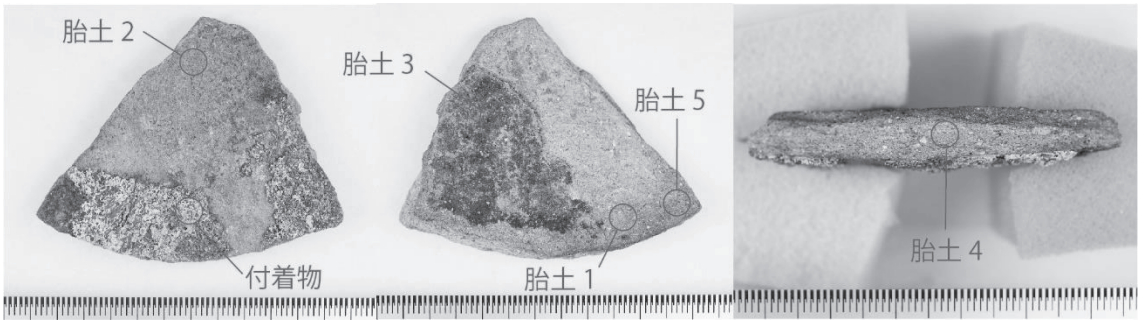
分析結果

斧の分析結果を表１に、土器の分析結果を表２に示した。各元素の含有量は、全定量元素の含有量の合計を 100% とするファンダメンタル・パラメータ法（FP 法）により評価した半定量

	斧	土器片
管電圧	50 kV	30 kV
管電流	蛍光Ｘ線の計数率が最適となるよう自動調整	
Ｘ線照射径	1 mm	3 mm
測定時間（1ヶ所あたり）	100 秒	300 秒
雰囲気	真　空	



斧の測定箇所



土器の測定箇所

値である。表中の n.d. は今回の測定条件における検出限界値以下、－は検出されなかった元素である。

斧について

5 箇所すべての測定箇所で、鉄 (Fe) の含有量が全体の 75% 以上を占めることから、本試料は鉄製品であることが判明した。その他、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al)、カリウム (K)、チタン (Ti) など、土壌に由来すると考えられる元素も検出された。また、全体的な傾向として

表1. 唐古・鍵遺跡第24次調査出土斧　蛍光Ｘ線分析結果（wt.%）

測定箇所	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Rb	Sr
1	−	−	5.46	−	−	4.35	0.197	1.90	85.5	2.22	0.112	−	0.0122	0.266
2	−	3.44	5.57	0.419	0.363	1.04	0.215	1.84	86.9	−	−	−	−	0.177
3	2.34	9.16	4.11	3.82	0.512	1.13	0.210	2.12	76.4	0.114	0.0659	0.0501	−	−
4	0.948	4.70	6.71	0.424	0.680	3.00	0.334	1.85	81.1	−	−	−	−	0.262
5	1.62	10.4	2.24	3.17	1.23	3.03	0.636	1.99	75.6	−	−	−	−	0.0571

※－：不検出
※定量値はFP法により算出

表2. 唐古・鍵遺跡第50次調査出土土器No.148　蛍光Ｘ線分析結果（wt.%）

測定箇所	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	ZnO	As_2O_3	Rb_2O	SrO	ZrO_2
胎土_1	0.00260	0.539	22.2	58.5	3.08	1.86	2.99	2.08	0.0892	8.40	0.0370	0.0250	0.0127	0.112	0.0505
胎土_2	n.d.	0.588	18.9	65.2	0.691	2.67	2.29	1.77	0.0591	7.55	0.0519	0.0186	0.0152	0.0730	0.0595
胎土_3	n.d.	0.262	22.7	59.9	1.29	1.85	2.86	2.04	0.0457	8.84	0.0385	0.0163	0.0133	0.108	0.0628
胎土_4	n.d.	0.121	21.3	61.4	1.53	2.24	2.56	2.16	0.0759	8.37	0.0332	0.0212	0.0182	0.105	0.0746
胎土_5	n.d.	0.0533	22.0	58.4	3.34	2.09	2.07	2.07	0.0850	8.67	0.0542	0.0277	0.0160	0.147	0.0754
付着物	−	−	3.54	92.2	−	0.617	0.915	0.121	0.0673	1.67	0.0566	−	0.0167	0.0431	0.0283

※n.d.：検出限界値以下　－：不検出
※定量値は酸化物として評価し、FP法により算出

リン（P）が多いという特徴が見られた。唐古・鍵遺跡では動物の骨の出土が報告されている。本試料と近接した地点から骨が出土していたとすれば、骨の成分が溶け出しＰ分が高くなった、あるいは微細な骨の欠片を含んだ周辺土壌を銹着したなどの可能性が考えられる。なお、測定箇所１からは銅（Cu）がやや多く検出されたが、他の箇所でほとんど検出されなかったため、斧本体の成分ではないと考えられる。

土器との比較

斧の分析ではＰが多く検出されたが、土器胎土の P_2O_5 は最も多い箇所で 3.34% であり、斧ほど多くはなかった。このことからも、斧に見られた高濃度のＰは、元ある土壌のみに由来するものではないと考えられる。胎土の組成は、ケイ素（SiO_2）とアルミニウム（Al_2O_3）を主成分とし、次いで鉄（Fe_2O_3）を多く含む。その他の特徴として、ヒ素（As_2O_3）が 0.02% 前後であり、自然土壌由来とするには高い数値であった[6)]。なお、土器外面の付着物は SiO_2 が 92.2% であったことから、ガラス質の物質であると考えられる。（奥山・小倉）

５．まとめ

唐古・鍵遺跡から出土した弥生時代から古墳時代前期にかけての鉄製品５点を紹介した。このほか、土器包含層中などの形状不明、所在時期不明の鉄片数点がある。さて、これら５点のうち、最も古いものは第 24 次調査の板状鉄斧（１）で弥生時代後期前半（大和第Ⅵ-2 様式）、次いで弥生時代後期後半（大和第Ⅵ-3 様式）の第 40 次調査の板状鉄斧（２）になる。残り３点は、庄内式から布留０式頃のものになる。このようにみると数は少ないが、唐古・鍵遺跡では継続的に工具・武器類の鉄製品が供給されていたとみなして良いであろう。唐古・鍵遺跡における鉄器化の進行が弥生時代後期でも前半以降であった可能性がある。唐古・鍵遺跡の低地部での鉄器の残存状況という難点が残るが、上記の鉄器について言えば、土坑や溝内からの出土であり、水浸状態の粘土層内でいかに安定した状態であったかが問題であるように思われる。

これまでの唐古・鍵遺跡立地の条件でいけば、弥生時代後期以前でも同じであると思われることから、鉄器が有れば存在したであろう。ただし、弥生時代中期における木器加工の痕跡からすれば、金属器の使用は想定されるところであり、弥生時代中期初頭（大和第Ⅱ-2様式）の細形銅矛（第33次調査ＳＤ-120）を転用した鑿[7]はその一例といえる。また、弥生時代中期末から後期初頭においては、青銅器鋳造をおこなっており、青銅器はもちろんのこと鉄器についてもその存在を否定するものでない。ただし、青銅器が優位であったことは間違いなく、武器である銅鏃が約25点存在するのに対し、鉄鏃は２点なのである。

以上、唐古・鍵遺跡における鉄器の紹介からその全体についてまとめた。唐古・鍵遺跡は、これまでの調査成果である遺構遺物から大和において弥生時代を通じての拠点集落を位置づけられるが、その中にあって実用的な金属器については多量の石器類が物語るようにその主体を占めていない。鉄器においては、それも弥生時代後期以降のことであって列島全体での流れの中にあり、特別に優位に立つような存在感を示すものではないであろう。

なお、奥山・小倉氏には青銅器鋳造に関連する土器片との推定のもと、土器片付着物の分析も同時におこなってもらった。この土器片は、第50次調査のＳＤ-102第3層から出土したもので、青銅器工房跡が推定されている第65次調査地の西30mの地点で、この工房跡の南隣接地の第61次調査ではその工房を区画する溝（ＳＤ-101・ＳＤ-102）を検出し、この溝の延長にあたるのが今回の出土遺構である。土器片は、甕と思われる胴部片で、外面に灰状を呈する鉱滓が、内面は一部剥落するが炭化物状の黒色物が付着する。土器の所属時期は大和第Ⅳ様式あるいはⅤ様式頃のものと思われる。その結果､付着物がガラス質の物質であることが判明し、青銅器鋳造とともにガラス関係の鋳造もおこなっていたことが追認された。（藤田）

註

1）田原本町教育委員会1986「昭和60年度　唐古・鍵遺跡第22･24･25次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要４』

2）田原本町教育委員会1991「唐古・鍵遺跡第40次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報２』

3）田原本町教育委員会1992「唐古・鍵遺跡第48次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報３』

4）田原本町教育委員会1996「唐古・鍵遺跡第59次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報５』

5）田原本町教育委員会2000「唐古・鍵遺跡第74次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報９』

6）環境省の土壌環境基準によると、「検液１Ｌにつき0.01mg以下であり、かつ、農用地（田に限る。）においては、土壌１kgにつき15mg未満であること」とされている。

7）田原本町教育委員会1989「昭和62･63年度　唐古・鍵遺跡第32･33次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要11』

唐古・鍵遺跡第３次・第５次調査出土の動物遺存体

総合研究大学院大学
青野　圭
東海大学
丸山真史

１．概要

唐古・鍵遺跡では、第１次調査から動物遺存体の出土が相次ぎ、これらは弥生時代の拠点集落における動物利用を明らかにできる絶好の資料である。奈良県立橿原考古学研究所による第３次調査・第５次調査・第８次調査、第 11 次調査でも動物遺存体が出土しており、近年、奈良県立橿原考古学研究所より田原本町埋蔵文化財センターにそれらが移管された。筆者の丸山は、田原本町埋蔵文化財センターの協力を得て、唐古・鍵遺跡の動物遺存体の総合的な調査、分析に着手していたため、それらの資料を実見する機会を得た。

その際に、第３次調査で出土した動物遺存体の保存状態が良くないことが判明し、早急に強化処理する必要性を、田原本町埋蔵文化財センターの藤田三郎氏とともに確認した。これを契機として、発掘調査担当者であった寺澤薫氏との相談を経て、それらの再整理を実施することとなった。それぞれ調査概報で発掘調査の成果として主要な遺構、遺物は報告されており、そのなかには動物遺存体の出土に関する記載もあるが、詳細は不明のままとなっていた（奈良県立橿原考古学研究所編 1978、1979、1980、1981）。

まず、早急に強化処理が必要な第３次調査の動物遺存体の再整理をはじめることにした。第３次調査時には、動物遺存体の強化処理は一般的なことではなかったが、弥生時代の動物利用を明らかにする重要な資料として、先進的に強化処理が試みられていた。それでも、現在までに劣化が進行しており、保存状態に恵まれないものも含まれているため、今回の資料整理でパラロイド B-72 をアセトンで５～ 10％に希釈した溶液を用いて、改めて強化処理を施した。これらの資料には、木棒に懸架されたイノシシ（ブタ）の下顎骨が含まれており、その分析も待たれるところであった。また、第５次調査の動物遺存体は少なく、第３次調査と同時に再整理を開始した。

第３次調査では破片数にして 225 点が出土しており、種類や部位などを同定したものは 149 点を数え（第１表）、それら以外に木棒に懸架されたイノシシあるいはブタの下顎骨 14 点がある（第２表）。以下では、イノシシとブタを区別せずに、すべてイノシシと記載し、飼育の可能性は考察で論じることにする。第５次調査では破片数にして 35 点が出土しており、種類や部位などを同定したものは 16 点である（第３表）。これらのほかに骨角器が第３次調査では２点、第５次調査では１点出土している。

第１表　動物遺存体集計表（第３次調査）

遺構	種　類	頭蓋骨			下顎骨			肩甲骨		上腕骨		橈　骨		尺　骨		寛　骨		大腿骨		脛　骨		その他	計
		左	右	ー	左	右	ー	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		
pit5	タイ科																					椎骨１	1
	イノシシ																				1	中手骨／中足骨（左右不明）1，指骨１	3
	シカ																					中手骨１	1
SD-01	シカ			1																			
SD-02	イノシシ	1	1	1								2	1							1		距骨（左）1，中手骨／中足骨（左右不明）1	9
	シカ	1		1		2	1				1		1							1		枝角４（左１不明３），椎骨４，足根骨（右）1，中足骨（左）1	18
SD-04	イノシシ																					遊離歯１	1
SD-04，SD-05	イノシシ																					指骨１	1
SD-05	イノシシ			1	1				1														3
	シカ						1															枝角１	2
SD-06	イヌ		2	1	3	3	1		1	2	1		1	1	2	1	1		1	1	3	遊離歯16，椎骨６，中手骨／中足骨（左右不明）1，脛骨（左右不明）1	49
	イノシシ	1	2	2	2	2	1	1		2	2					1		1		1		遊離歯１，椎骨２，上腕骨（左右不明）1	22
	シカ																					枝角２（右１不明１），椎骨３，肋骨２（右１不明１），中足骨（左右不明）1	8
	ノウサギ		1																				1
SD-07	イヌ				2	1														1	1		5
	イノシシ	3	2	2		1	1			1	2	1										椎骨１，上腕骨（左右不明）1	15
	シカ	1							1			1		1								枝角１，遊離歯１，踵骨（右）1	7
	ツキノワグマ?	1																					1
表採	イヌ						1									1							2
	イノシシ																			1			1
不明	イヌ					1															1		2
	イノシシ	1			2								1									遊離歯３，中手骨／中足骨（左右不明）１	8
	シカ							1		1													2
	タヌキ									1													1
計		13	12	12	16	14	9	2	3	7	8	4	4	2	2	3	1	1	2	5	6		164

２．種類別の特徴

１）第３次調査で出土した動物遺存体

ａ）魚類

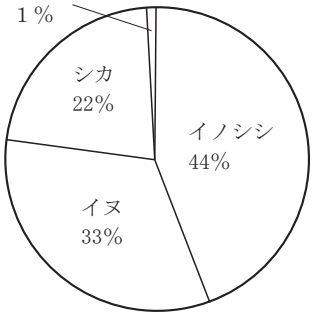
タイ科　pit5 から椎骨１点が出土しており、マダイに似るが種の特定には至らない。

ｂ）哺乳類

ノウサギ　SD-06 から、頭蓋骨（上顎骨・右）１点が出土している。

タヌキ　出土地点が不明の上腕骨（左）１点が出土している。

イヌ　計 59 点が出土しており、イノシシに続く出土量である。



第１図　哺乳類の組成
（第３次調査，N=176）

SD-06 から下顎骨（左３右３不明１）７点、椎骨６点、脛骨（左１右３不明１）５点など､計 49 点が出土している。下顎骨のうち２点に前臼歯が未萌出の幼獣が、上腕骨１点の遠位端が癒合していない若獣が含まれている。また、大腿骨の遠位端には解体痕がみられる。遊離歯 16 点うち、上顎 M1、M2 の左右、下顎 P2、P3、M2 の左右、上下左右が不明の犬歯が１点ずつ計 12 点、そのほか下顎左 P3、P4、M1、M2 が１点ずつ、計４点があり、これらはそれぞれが同一個体の可能性がある。

SD-07 から下顎骨（左２右１）３点、脛骨（左１右１）２点、計５点が出土している。これらのほかに、出土地点が不明あるいは表採資料もある。

イノシシ　散乱状態での出土破片数が計 63 点、木棒に懸架された複数の下顎骨が加わり、最も出土量が多い種である。SD-02 から頭蓋骨（左１右１不明１)､橈骨（左２右１）が３点ずつ、中手骨 / 中足骨（左右不明)、脛骨（左)、距骨（左）が１点ずつ、計９点が出土している。

SD-04 から、上顎あるいは下顎第３後臼歯と思われる小片が１点出土しており、咬耗は進行していない。SD-04・SD-05 から、指骨（末節骨）１点が出土している。SD-05 から頭蓋骨（左右不明)、下顎骨（左)、肩甲骨（右）が１点ずつ、計３点が出土している。下顎骨の第１後臼歯周辺の歯槽に深い凹みがみられ､歯周病の可能性がある。肩甲骨の遠位端は癒合しておらず、被熱して白色を呈する。

SD-06 から下顎骨（左２右２不明２）６点、頭蓋骨（左１右２不明２）５点、椎骨２点など計 22 点出土している。下顎骨のうち左の１点は第３後臼歯が萌出中であり、上腕骨は近位端が、大腿骨は遠位端が癒合しておらず、いずれも若獣と推定される。これらとは別に、複数の下顎骨が木棒と一括で出土している（写真１～３)。これら下顎骨について、概報では調査時の所見として、シカの下顎骨が 13 個体分と記載されるが（田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編 1978)、後にイノシシの下顎骨が 14 個体分と訂正されている（藤田 2012、2019)。これらのイノシシの下顎骨については後述する。

SD-07 から頭蓋骨（左３右２不明２）７点、上腕骨（左１右２不明１）４点、下顎骨（右１結合部１）２点など、計 15 点が出土している。頭蓋骨のうち右１点（上顎骨）は、被熱して白色を呈する。上腕骨のうち右の１点には、遠位部に浅い切傷がみられ、左右不明の１点は癒合していない近位端である。また、右下顎骨１点は小さく幼獣ないし若獣と推定される。

pit5 から脛骨（右)、中手骨 / 中足骨（左右不明)、指骨（末節骨）が１点ずつ、計３点が

出土している。脛骨の近位部には、イヌなどの肉食動物による咬痕がみられ、中手骨 / 中足骨は被熱して黒色を呈する。これらのほかに、出土地点が不明あるいは表採資料もある。

SD-06 出土の木棒に懸架されたイノシシの下顎骨

検出時の遺構平面図にはイノシシの下顎骨 13 個体が記入されており、その後に 1 個体が追加され、計 14 個体というのが現在の見解である。出土した後に薬品による強化処理を行っているが、現状では脆弱な状態となっており、完存するものはない。今回の整理作業前の収納状況は、平面図に記録された 13 個体に対応する番号が、一部の骨に注記されており、また収納された箱に番号が付されていた。確認できた個体番号は、No. １～３、No. ６～ 13 であり、No. ４と No. ５はなかった。収納箱別に破片化したものを接合する過程で、異なる箱に収納された個体と接合するものがあり、箱のなかに複数個体が混在していることが明らかになった。

第 2 表　イノシシ下顎骨（懸架）観察表

No.	左右	結合部	下顎体	下顎角	下顎枝	関節突起	成長段階	性別
1	左	○	○	○	○	○	Ｍ３萌出済	メス
	右		○	×	○	○		
2	左	×	○	×	○	×	幼／若	―
	右		×	×	×	×		
3	左	○	○	○	○	×	Ｍ３萌出済	メス
	右		○	○	○	○		
4※	左	×	×	×	×	×	幼／若	―
	右		×	×	×	○		
5※	左	○	×	×	×	×	幼／若	―
	右		×	×	×	×		
6	左	×	○	○	○	×	幼／若	―
	右		○	×	○	○		
7	左	○	○	○	○	○	Ｍ３未萌出	メス
	右		○	×	○	×		
8	左	○	○	○	○	○	Ｍ３萌出中	メス
	右		○	○	○	○		
9	左	○	○	○	×	○	Ｍ２萌出済	オス？
	右		○	○	×	○		
10	左	○	○	○	×	×	Ｍ３未萌出	メス
	右		○	○	×	×		
11	左	○	○	×	×	×	Ｍ３萌出済	メス
	右		○	○	○	○		
12	左	○	○	○	×	○	Ｍ３未萌出	メス
	右		○	○	×	×		
13	左	○	○	○	×	×	Ｍ３萌出済	メス
	右		○	×	×	×		
重複数	左	10	10	6	6	8		
	右		11	9	6	5		
個体数		10	11	9	6	8		

○残存している、× 残存していない

番号のついた箱は 11 箱：下顎体でみる最小個体数と一致

No. 4 の関節突起が、No. 1 ～ 13 と接合するかは不明

No. 4 の関節突起のどちらか 1 点が No. 5 と同一個体とすると、+2 で 13 個体

No. 4、No. 5 がそれぞれ別個体とすると、+3 で 14 個体

第３表　動物遺存体集計表（第５次調査）

遺構	種　類	頭蓋骨			下顎骨			肩甲骨		上腕骨		橈　骨		尺　骨		寛　骨		大腿骨		脛　骨		その他	計
		左	右	ー	左	右	ー	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		
SD-01	イノシシ		2				1																3
SD-03	イノシシ									1													1
	シカ									1	1												2
SK-03	イノシシ																			1			1
SK-09	エイ/サメ類																					椎骨１	1
	イノシシ	1	1			1	1																5
SK-10	イノシシ		1																				1
SE-01	ウシ																					肋骨（右）1	1

そのため、可能なかぎり接合しつつ、平面図の記録を参照しながら個体識別を試みた結果、No. ４と No. ５に該当しそうな２個体分を抽出した。ただし、それらは実測図と対応する個体であるかは不明である。また､重複する部分で個体数を確認するために残存部を記録しており、あわせて年齢および雌雄に関する観察事項を第２表に記す。

No. １　左右の結合部、左の下顎体、下顎角、下顎枝、右の下顎体、下顎枝、関節突起である。第３後臼歯は萌出しているが、咬耗は進行していていない。犬歯の歯槽が小さく、メスと考えられる。

No. ２　左の下顎体､下顎枝である。保存状態に恵まれず､植立する歯種の判定は困難であるが、小さな個体であり、幼獣あるいは若獣と推定される。犬歯および歯槽がないため、雌雄は判断できない。

No. ３　左右の結合部、左の下顎体、下顎角、下顎枝、右の下顎体、下顎角、下顎枝、関節突起である。第３後臼歯は萌出しており、咬耗はやや進行している。犬歯の歯槽が小さく、メスと考えられる。

No. ４　右の関節突起２点であり、２個体分である。いずれも小さな個体であり、骨化も未成熟であるため幼獣あるいは若獣と推定される。犬歯および歯槽がないため、雌雄は判断できない。

No. ５　左右の結合部である。小さな個体であり、骨化も未成熟であるため幼獣あるいは若獣と推定される。犬歯および歯槽がないため、雌雄は判断できない。

No. ６　左の下顎体、下顎角、下顎枝、右の下顎体、下顎角、下顎枝である。それぞれの破片を接合できないが、同一個体のものと考えられる。小さな個体であり、骨化も未成熟であるため幼獣あるいは若獣と推定される。犬歯および歯槽がないため、雌雄は判断できない。

No. ７　左右の結合部、左の下顎体、下顎角、下顎枝、関節突起、右の下顎体、下顎角、下顎枝である。第２後臼歯が萌出していない若獣である。犬歯が小さく、メスと考えられる。

No. ８　左右の結合部、左の下顎体、下顎角、下顎枝、関節突起、右の下顎体、下顎角、下顎枝、関節突起である。第２後臼歯が萌出中の若獣である。犬歯の歯槽が小さく､メスと考えられる。

No. ９　左右の結合部、左の下顎体、下顎角、関節突起、右の下顎体、下顎角、関節突起である。第３後臼歯は萌出しており、咬耗はやや進行している。犬歯の歯槽がやや大きく、オスの可能

性がある。

No.10　左右の結合部、左の下顎体、下顎角、右の下顎体、下顎角である。第３後臼歯は萌出していない若獣と推定される。犬歯は小さく、メスと考えられる。

No.11　左右の結合部、左の下顎体、右の下顎体、下顎角、関節突起である。第３後臼歯は萌出しており、咬耗はやや進行している。犬歯の歯槽が小さく、メスと考えられる。

No.12　左右の結合部、左の下顎体、関節突起、右の下顎体、下顎角である。第３後臼歯は萌出していない、若獣と推定される。犬歯の歯槽が小さく、メスと考えられる。

No.13　左右の結合部、左の結合部、下顎体、下顎角、右の下顎体である。第３後臼歯は萌出しており、一定の咬耗がみられる。犬歯は小さく、メスと考えられる。

以上は、実測図の記録を参照して個体の識別を試みながら、No. ４、No. ５に該当しそうな破片を抽出した所見である。No. ４、No. ５とした個体は下顎体がなく、その他の 11 点は下顎体が保存されており、最小個体数にして 11 個体となる。No. ４は右の関節突起が２点あり２個体、No. ５は結合部１点であり１個体である。下顎体でみた 11 個体と No. ４、No. ５が別個体とすれば、あわせて 14 個体となる。実測図に記録された 13 点と後に追加された１点の計 14 点と全て対応するものか確証は得られないが、14 個体に分類することはできたため、本稿でも懸架された下顎骨は 14 個体と認識する。

これらのうち、齢査定の指標となる歯牙の萌出と咬耗状況が観察できたもの、性別の指標となる犬歯あるいはその歯槽の大きさが観察できたものは９個体である。第３後臼歯まで萌出した５個体は成獣、第３後臼歯が未萌出の３個体、第２後臼歯が未萌出の１個体、大きさから幼獣あるいは若獣と考えられるもの５個体である。性別が判明あるいは推定される９個体のうち８個体は、犬歯あるいは犬歯の歯槽が小さく、メスと考えられるが、１個体のみオスと考えられるものがある。

シカ　計 39 点が出土しており、イノシシ、イヌに続く出土量である。SD-01 から、頭蓋骨（角座）１点が出土している。SD-02 から椎骨４点､枝角（左１不明３）４点､下顎骨（右２不明１）３点など､計 18 点が出土している。枝角４点のうち１点は切断されている。SD-05 から枝角(左右不明)と下顎骨(左右不明)が１点ずつ､計２点が出土している。SD-06 から椎骨３点､枝角(右１不明１)、肋骨（右１不明１）２点ずつ、中足骨（左右不明）１点、計８点が出土している。SD-07 から頭蓋骨（角突起、左)、肩甲骨（右)、橈骨（左）などが１点ずつ、計７点出土している。pit5 から、中手骨（左右不明）１点が出土している。これらのほかに、出土地点が不明あるいは表採資料もある。

イノシシ / シカ

上記のイノシシ、シカ以外に、大きさからイノシシあるいはシカと思われる破片が 23 点出土している。

ｃ）骨角器

SD-06 から円筒状の角製品と、斧様の工具によるハツリ痕がみられる角製品が１点ずつ出土し

ている。

２）第５次調査出土の動物遺存体

ａ）魚類

エイ・サメ類　SK-09 から椎骨１点が出土しており、直径 10mm 以下の小型の個体である。

ｂ）哺乳類

イノシシ　計 12 点が出土しており、最も出土量が多い。SD-01 から上顎骨（右）２点、下顎骨（左右結合）１点、計３点が出土している。上顎骨は接合しないが、同一個体の可能性もある。上顎 M3、下顎骨 M3 ともに萌出中であり、若獣から成獣と推定される。下顎骨は犬歯が小さくメスと考えられ、下顎体には複数の切傷がみられる。SD-03 から上腕骨（右）１点が出土している。SK-03 から脛骨１点が出土しており、螺旋状に剥離している。SK-09 から頭蓋骨（左１右１）２点、下顎骨（左右結合１右１）２点、遊離歯（上顎Ｐ１、左右不明）１点、計５点が出土している。頭蓋骨のうち、左は前頭骨で涙骨と未縫合、右は側頭骨の錐体である。下顎骨のうち左は、第２切歯が未萌出、第３後臼歯が萌出中の若齢個体であるが、犬歯が大きくオスと考えられる。また、第４前臼歯から第１後臼歯付近の下顎体に切傷、犬歯付近の歯槽が抉られている。SK-10 から頭蓋骨（側頭骨・右）１点が出土しており、未縫合の幼獣ないし若獣である。これらのほかに、出土地点が不明あるいは表採資料もある。

シカ　SD-03 から、上腕骨（左１右１）が２点出土しており、そのうち１点は螺旋状に剥離している。

ウシ　中世の井戸 SE-01 から、肋骨（右）１点が出土しており、近位端が癒合していない幼獣と推定される。

イノシシ／シカ　イノシシまたはシカと思われる大きさの破片が３点出土している。

ｃ）骨角器

SD-01 から、鹿角を素材とする箆状製品が１点出土している。鹿角の長軸方向に縦割したものであり、表面は研磨されている。

３．唐古・鍵遺跡第３次、第５次調査にみる動物利用

奈良盆地では、唐古・鍵遺跡のほかに動物遺存体が報告されている弥生時代の遺跡は、御所市の鴨都波遺跡、橿原市の坪井・大福遺跡があり、いずれでもイノシシとシカを主として、イノシシの比率が高い（松井・内山 1992、松井・宮路 2000）。唐古・鍵遺跡第３次、第５次調査で出土した動物遺存体で最も多く出土した動物種はイノシシであり、第３次調査ではそれにイヌとシカが続き（図１）、イヌの比率も高い。小型哺乳類や魚類は少数であり、両生・爬虫類、鳥類がみられないことは、遺跡土壌の水洗篩別を実施しておらず、微細な動物遺存体が見逃されている可能性があるためと考えられる。

前述のように鴨都波遺跡や坪井・大福遺跡に比べて、唐古・鍵遺跡第３次調査ではイヌが多

いことに特徴がある。同一個体の可能性がある遊離歯を多く含むが、重複する部位からみた個体数でもシカより多い。唐古・鍵遺跡第 23 次調査、第 37 次調査の、第 58 次調査でもイヌの出土は低調であり（東島 2010、江田ほか 2016）、当調査当地点の特徴と言えるであろう。イノシシ、シカの長管骨（上腕骨、橈骨、大腿骨、脛骨）には完存しているものはなく、螺旋状に剥離した割れ口がみられることから、骨髄を得るために割られたものと考えられる。また、イヌなどの肉食動物による咬痕もみられ、投棄後に野晒しの状態であった可能性がある。第５次調査の SK-09 から出土したイノシシの下顎骨には、犬歯付近の歯槽に抉られたような痕跡がみられ、犬歯を抜き取るための傷痕と推測される。

特筆されるのは、第３次調査で環濠の SD-06 から出土したイノシシの下顎骨と木棒の一括出土である。佐賀県菜畑遺跡の弥生時代前期初頭の出土例が最古と考えられ（唐津市教育委員会 1982）、弥生時代になってみられる習俗であり、稲作とともに渡来した農耕祭祀として考えられていた（金子 1984）。その後、春成秀爾は大陸の例や出土状況を考慮し、ブタの下顎骨を懸架する辟邪の習俗であるとした（春成 1993）。また、下顎骨を懸架する行為は、台湾パイワン民族を中心にみられる無穿孔の下顎骨懸架があり、それが狩猟活動のトロフィーとしての役割を指摘されている（野林 2002）。

第３次調査 SD-06 出土の下顎骨は、軟部組織の大部分を除去して、骨だけの状態で懸架していたと考えられる。穿孔はなく、結合部を木棒に掛けたと考えられるが、屋外での懸架と考えられることからトロフィーとしての意味は取りにくい。大きな亀裂や歪みが生じているため、計測値や肉眼観察によって形態の特徴を示し、飼育個体の存在を指摘することは困難である。近年、唐古・鍵遺跡の別地点で出土したイノシシの炭素・窒素安定同位体分析の成果によれば、窒素の値が高い集団と低い集団に分かれ、いずれかが飼育個体である可能性が指摘される（米田 2015）。この指摘と直接的には結びつけることはできないが、集落で一定数のイノシシを飼育しており、祭祀や儀礼において飼育個体を利用した可能性も考えられる。

４．まとめ

唐古・鍵遺跡第３次、第５次調査において出土した動物遺存体の分類、同定を行った。いずれでもイノシシやシカなどの哺乳類が主であり、なかでもイノシシの比率が高いことは奈良盆地の他の弥生時代の遺跡と共通しており、第３次調査ではイヌの比率が高いことも特徴的である。イノシシの中には飼育個体が含まれている可能性もあるが、本資料では形態のみで判断することは難しい。ただ、木棒に懸架された下顎骨 14 個体の成長段階や性別が明らかになったことは、儀礼におけるイノシシの利用の実相を解明する一助となるであろう。唐古・鍵遺跡では、他の調査地点でも動物遺存体が出土しており、今後も調査・分析を継続することで、解釈を深めていきたい。

なお、第５次調査のウシは、平安末期から鎌倉初期に構築された SE-01 からの出土であり（田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編 1979）、第８次、第 11 次調査でも多数のウ

シが出土しているため、別稿で検討する予定である。

参考文献

江田真毅・安部みき子・丸山真史・藤田三郎 2016「唐古・鍵遺跡第 58 次調査から出土した動物遺存体」『田原本町文化財調査年報 24　2014 年度』田原本町教育委員会 pp. 119-132

扇崎由・安川満 1995「岡山市南方（済生会）遺跡のイノシシ類下顎配列」『動物考古学』第５号 pp. 69-73

唐津市教育委員会編 1982『菜畑』

東島沙弥佳 2010「唐古・鍵遺跡北部地域出土の動物遺存体」『田原本町文化財調査年報 18　2008 年度』田原本町教育委員会 pp. 65-76

奈良県立橿原考古学研究所編 1978『昭和 52 年度　唐古・鍵遺跡　発掘調査概報』田原本町教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所編 1979『昭和 53 年度　唐古・鍵遺跡　第４・５次発掘調査概報』田原本町教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所編 1980『昭和 53 年度　唐古・鍵遺跡　第６・７・８・９次発掘調査概報』田原本町教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所編 1981『昭和 55 年度　唐古・鍵遺跡　第 10・11 次発掘調査概報』田原本町教育委員会

野林厚志 2002「台湾パイワンのイノシシ猟」『核としての周辺』（講座生態人類学 6）京都大学学術出版会 pp. 91-119

春成秀爾 1993「豚の下顎骨懸架－弥生時代における辟邪の習俗」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 50 集 pp. 71-130

藤田三郎 2012『唐古・鍵遺跡』日本の遺跡 45、同成社

藤田三郎 2019『ヤマト王権誕生の礎となったムラ　唐古・鍵遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」135、新泉社

松井章・内山純蔵 1992「鴨都波遺跡出土の動物遺存体」『奈良県御所市鴨都波 11 次発掘調査報告書　第 11 集』御所市教育委員会 pp. 67-74

松井章・宮路淳子 2000「坪井・大福遺跡から出土した動物遺存体」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 75 冊　坪井・大福遺跡』奈良県教育委員会 pp. 194-199

米田穣 2015「同位体分析からみた家畜化と日本人の食」『野生から家畜へ』食の文化フォーラム 33、松井章編、ドメス出版

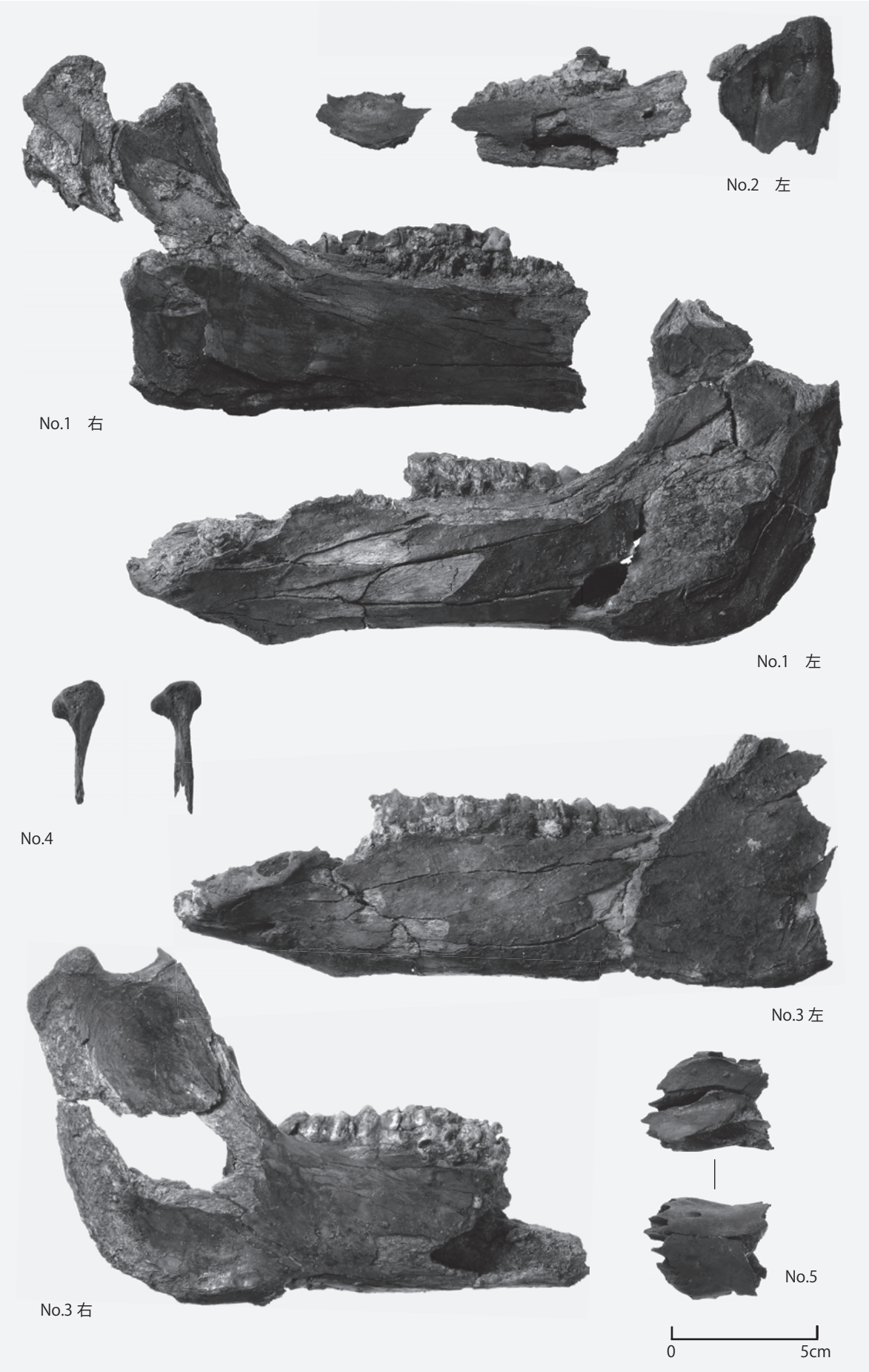


写真１　唐古・鍵遺跡第３次調査　イノシシ下顎骨（No.１～５）

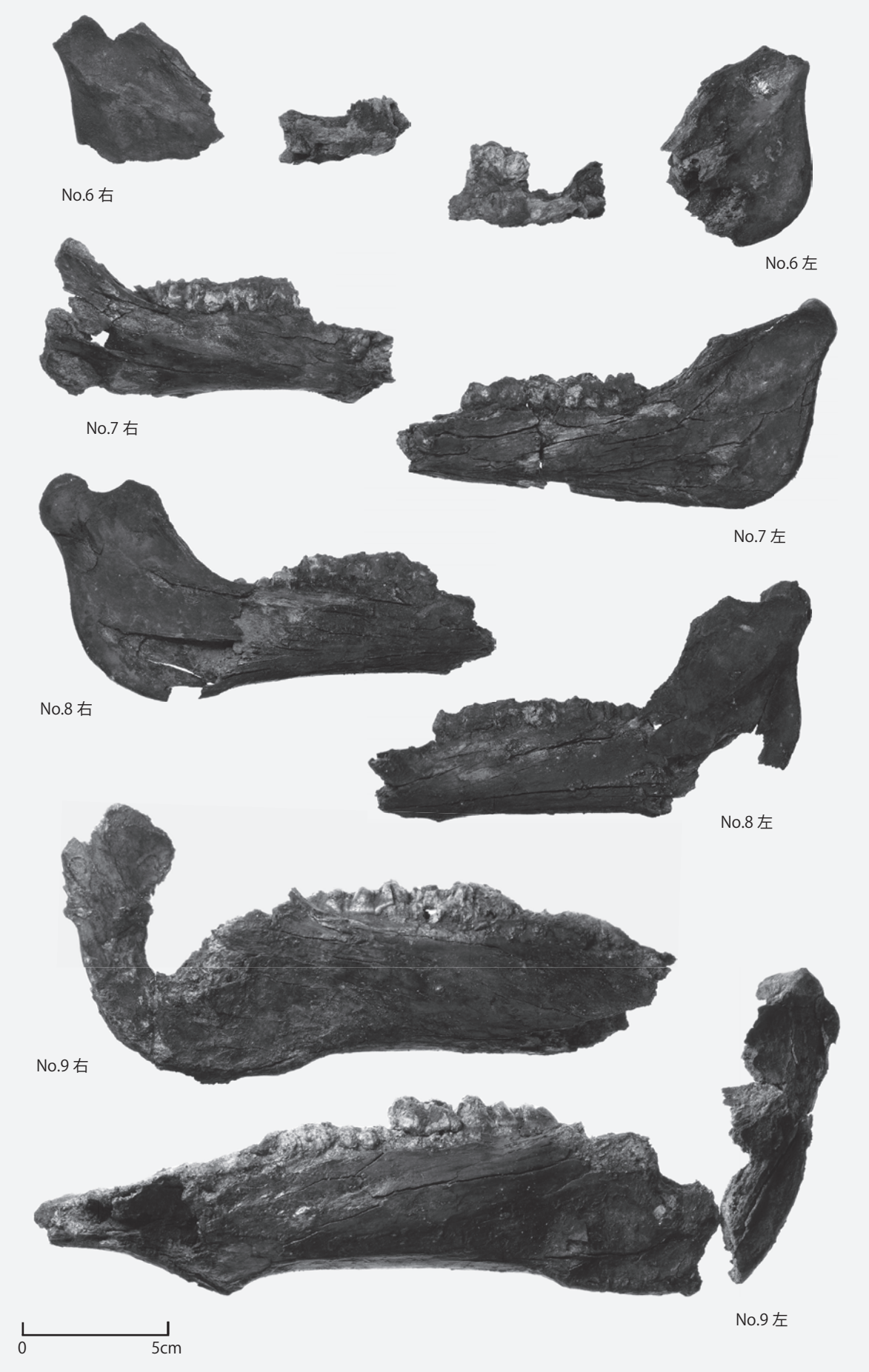


写真２　唐古・鍵遺跡第３次調査　イノシシ下顎骨（No.6～9）

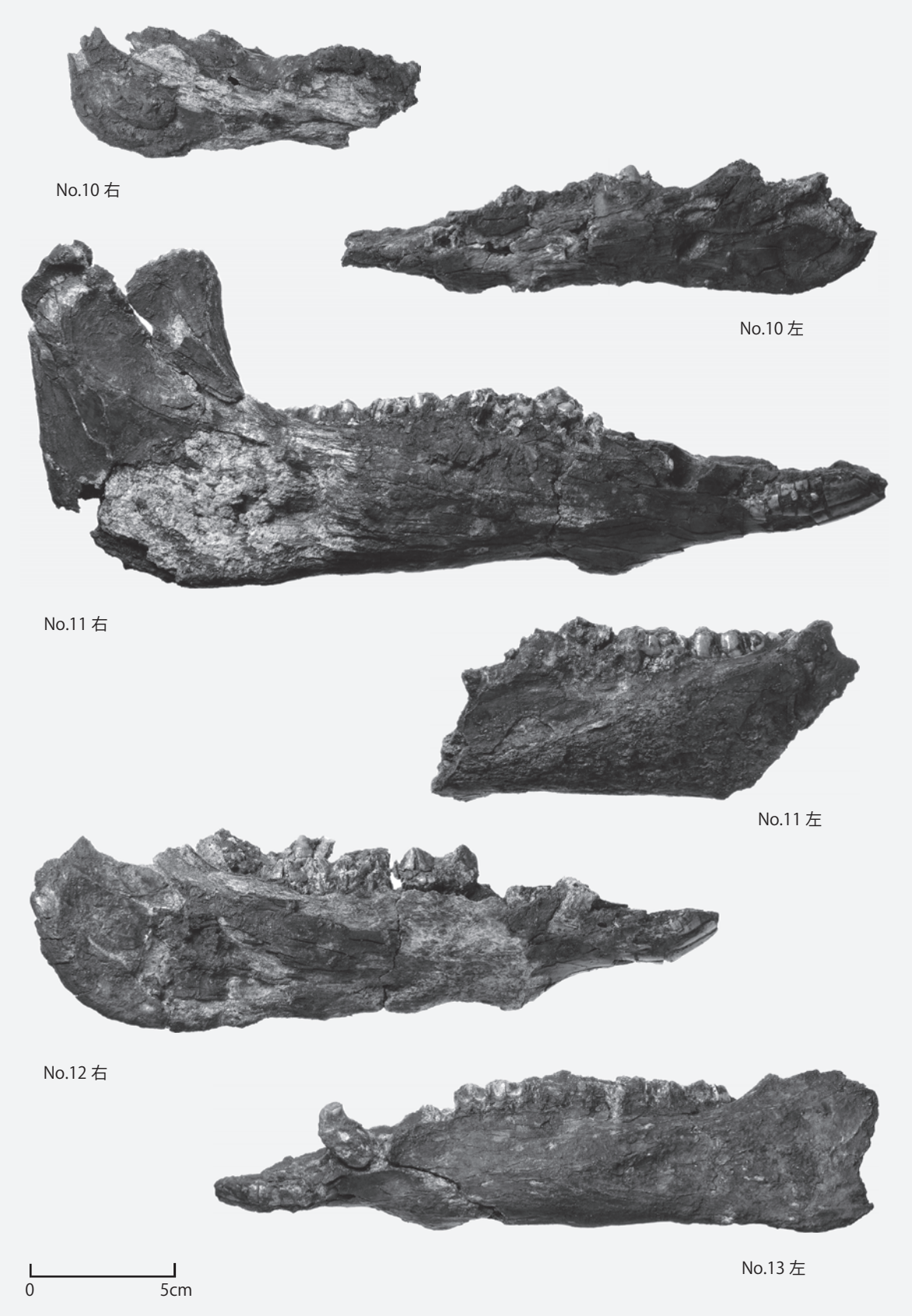
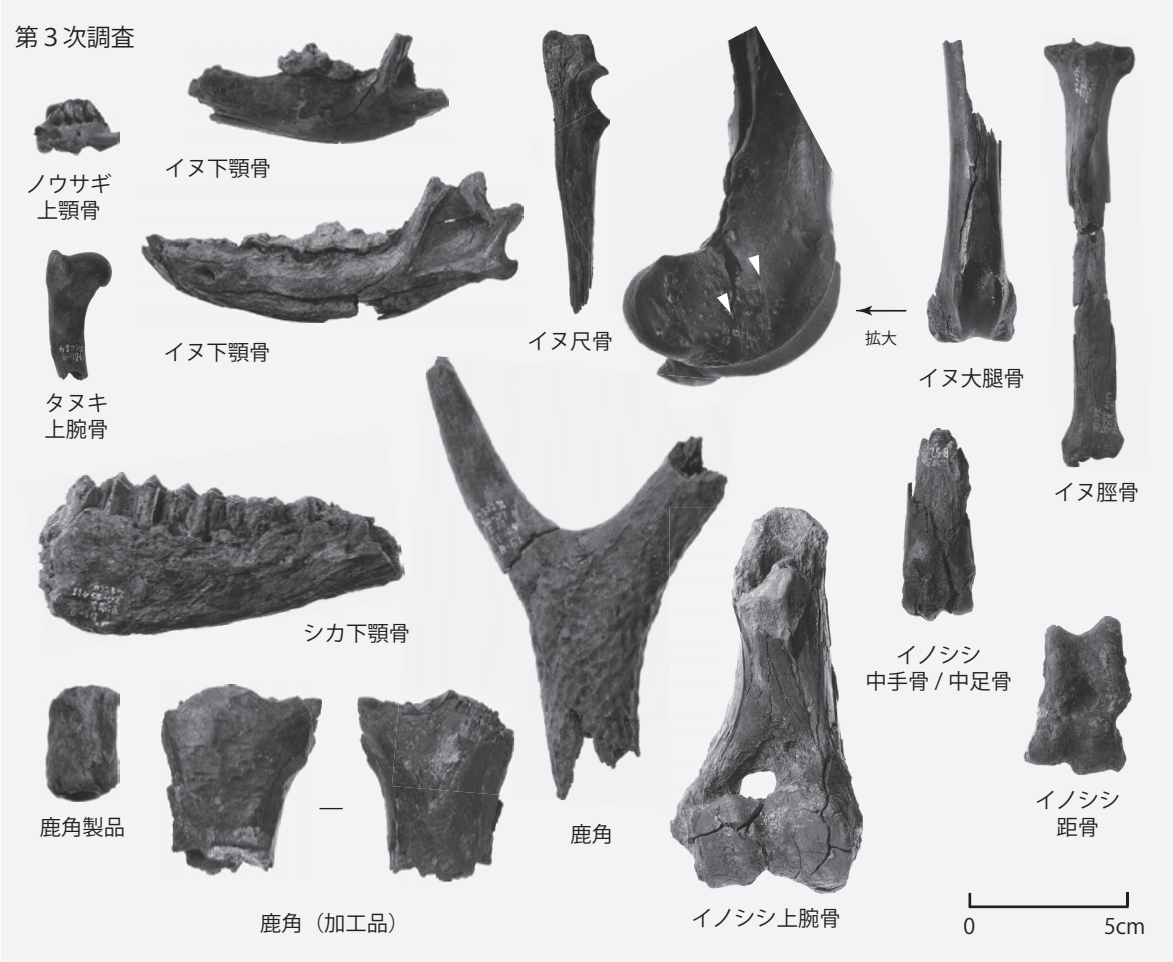


写真３　唐古・鍵遺跡第３次調査　イノシシ下顎骨（No.10～13）



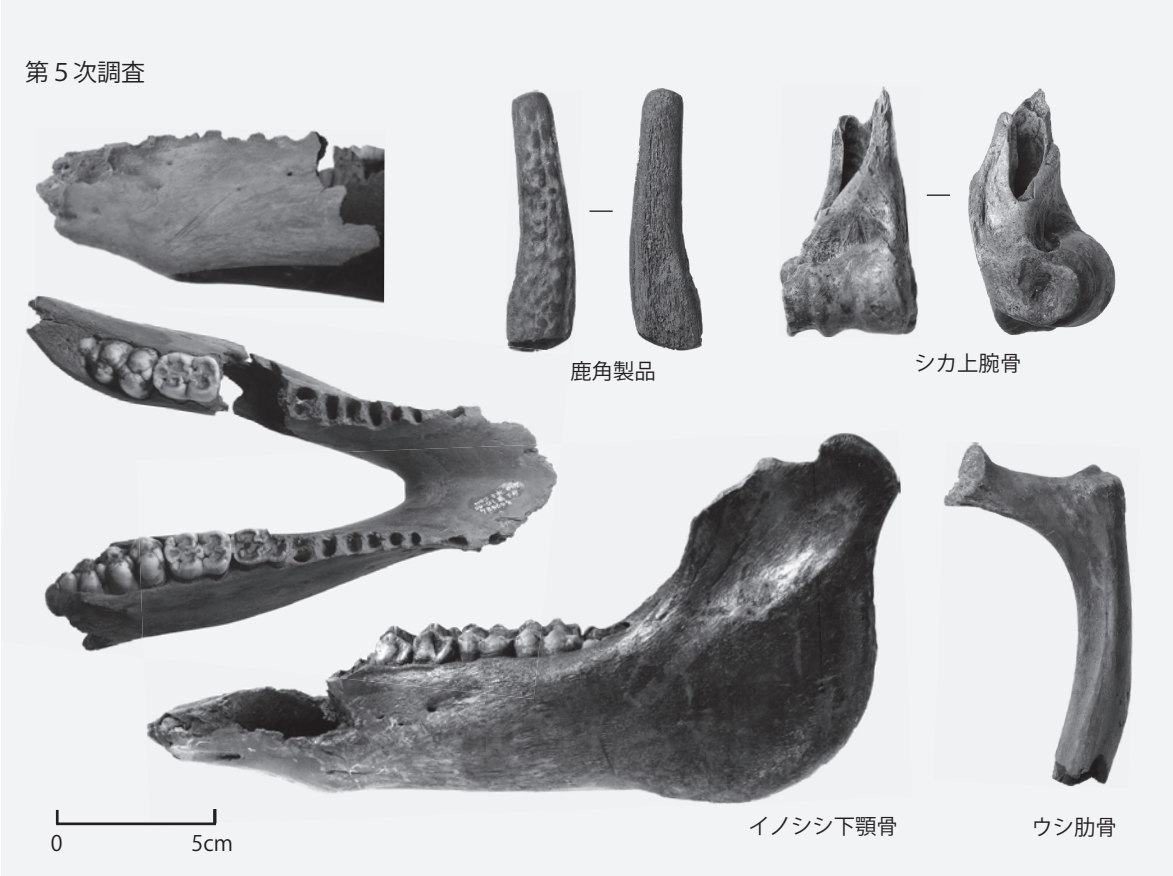


写真４　唐古・鍵遺跡第３次調査・第５次調査動物遺存体

田原本町文化財調査年報 28

2019 年度

令和５年３月 31 日

編集発行　田原本町教育委員会

印　　刷　株式会社アイプリコム